

---

# 可憐な王子の騒がしい恋の嵐

青柳朔

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

可憐な王子の騒がしい恋の嵐

### 【Zマーク】

Z8060D

### 【作者名】

青柳朔

### 【あらすじ】

女顔でチビで面倒」とに巻き込まれやすい王子様、アドルバード。彼の国ハウゼンランドにはたくさんの姫君がやつてきている。しかもその中には大国アヴィランテ帝国の第三皇女の姿まであって！？ヘタレ王子と美麗女騎士の恋の行方は？最強姫君と気の弱い騎士は進展するのか？陰謀やら策略やらの中であがこちから恋の予感が！可憐な王子のどたばたラブコメ第一弾です。

## 1：結婚相手へ「自分で決める」（前書き）

この物語は「可憐な王子の受難の日々」の続編になります。  
こちらだけでも読めるようになっていますが、よければ「受難の日々」もご覧下さい。

## 1：結婚相手くらい自分で決める！

ハウゼンランドのリノルアース姫は赤みがかつた金の髪に、青く澄んだ瞳、肌は新雪のように白く、十五歳でありながらも立派な淑女だといふ。

そう噂されている『リノルアース姫』の半分以上がその双子の兄にしてハウゼンランド第一王位継承者であるアドルバードが扮したものだと知っている人は数少ない。

「レイ！」

少し高めの、中性的な声が背後から聞こえ、呼ばれた騎士は振り返る。

銀色の髪は以前よりもほんの少し伸びて、肩に触れそうで触れない長さで揺れている。

知人でいなければ以前は間違いなく男性だと思うであろうしかし今はその少し伸びた髪のおかげだろうか、間違われる回数が少し減った。彼女にしてみればどうでもいいことなのだが、彼女の主であるアドルバードが激昂するのだ。

駆け寄って来たのは予想通り、ハウゼンランドの王子でありレイの主人である、アドルバードだった。

「……アドル様。確かに今は政治の講義を受けているはずだと思いましたが、私の記憶違いでしょうか？」

記憶違いではないことくらいは分かっている。送り届けたのは他ならぬレイなのだから。

「い、いや。おまえが正しい。それよりも話が……」

レイ的眼光に腰が引けながらも自分の主張をするのはアドルバー

ドの昔からの癖みたいなものだ。

「お話ならば後ほど。私は逃げ隠れもしませんので、ビツビツ安心ください。」

そう言いながらアドルバードの腕を掴み、教師がいるはずの部屋へと連行する。

いつもなら大人しくされるがままレイに連行されるアドルバードが、珍しく暴れまわった。

「嫌だ！ それどころじゃない！ 親父が俺を他国に売り渡すかもしれない！」

「何を親不孝なことをおっしゃってるんですか。国王陛下はきちんとアドル様のことを考えていらっしゃるじゃありませんか？」

「あのな！」

アドルバードが腕を振り解き、立ち止まる。

「あの親父は俺に縁談なんか持つてきやがったんだぞ！」

ほんの一瞬だけ、レイが息を呑んだ。

そのわずかな変化を捉えられるのはアドルバードくらいなものだろ。

「……確かに、アドル様くらいの年齢になれば婚約者を決めるのが普通でしようし」

といふよりは、十五歳になるまで婚約者の一人もいなかつた方が、変なくらいだ。曲がりなりにもアドルバードは一国の跡継ぎなのだから。

「結婚相手くらい自分で決める！ それに人数が半端じゃない！」

「……どういうことです？ ハウゼンランドは一夫多妻制ではありますよ。アドル様は法律でも変えるおつもりですか？」

「だから俺は関係ないし後宮なんていらないし妻は一人でいいしそれだつてつ」

と言つたところアドルバードが慌てて自分の手で口を塞いだ。

真っ赤になつた顔からその続きを簡単に推測できた。

「……私の身長を越してから、と条件をつけたのはあなたですから

ね。アドル様」

別に、そんなこと私は気にしていないのに。

「わわわわわ分かってる！ 別に俺は何も言つてないし結婚するの  
はおまえに決めてるなんて言つてないし！」

「言つてませんでしたけど、今言つてます」

冷静にレイが指摘すると、アドルバードはますます顔を赤く染め  
上げた。

「アドル様、もうどうせお互いに隠すのも意味ないことですから氣  
になさらなくて結構ですよ。それよりもきちんと現状を説明してく  
ださいませんか？」

「隠すのも意味ないって、口から出しているのは俺ばかりじゃない  
か、とアドルバードはぶつぶつと不満を呟く。

「身長を越してから」

「ああもう分かってる！ 条件つけたのは俺だよ！ それまで俺は  
おまえの主だし、おまえは俺の騎士だ！ それでいいだろ！」

怒ったように言い切つて、アドルバードは一度呼吸を整える。

「親父が、縁談を持ってきた」

「それは先ほど聞きました。人数が半端じゃないというのは？」

レイが質問すると、アドルバードは頭を抱えてしゃがみこんだ。

「……つまりは候補になつたあちこちのお姫様を何十人と集めるら  
しい」

「正確な人数は？」

「今のところ……にじゅうさんにな……」

最後のほうが力なく、弱々しくなつていつたのは精神的な問題だ  
らう。

「それは随分とかき集めましたね。弱小国のハウゼンランドが」

「……この間のアルシザスとの同盟で、一気に大陸中に知れ渡つた  
からな。今じゃリノルの名前と一緒に大陸中の噂の的」

数ヶ月前に、アドルバードは大陸屈指の大國であるアルシザスとの  
同盟を結んできた。その裏事情はいろいろあるのだが、まあそ

れはおいて置く。

「それで、姫君方はいつ？」

「来週から、続々と集まつてくる」

「よくここまで隠せましたね、陛下も」

アドルバードだけならまだしも、レイにも今の今まで隠し通したのだ。いつもの穏やかな国王からは想像できないような行動っぷりだ。

「アドル様も、嫌なら嫌だと陛下に申し上げればよいでしょう」

「……もし嫌だと言つても叶わなかつた時どうするんだよ」

まつたく、子供みたいなことを言つとレイはため息を吐き出す。

「その時は……そうですね」

駆け落ちでもしましちゃうか。

そんな冗談も思い浮かんだが、アドルバードだと実行に移しかねないでのレイは言わずにおいた。

「アドル様には女装癖があるので止めたほうがよいですよ、とお相手に進言します」

「趣味じゃないだろ！ あれはリノルの為にじょうがなくて……！」  
「では妹の為に女装するほどシスコンですとでも言いましちゃうか？」

「女装から離れろ！」

間髪入れずに怒鳴り返すアドルバードにレイは顔色一つ変えずに続ける。

「用は、相手全員にこんな王子との婚約は嫌だと思わせればいいんでしよう」

「なんだそれ！ 僕の評判ガタ落ちかー？」

それが一番簡単な方法だといつのにアドルバードは不満らしい。

「……大丈夫ですよ」

たとえ相手が誰であろうとも。

あなたを害するすべてから。

「私が、あなたを護りますから」

「…………」

ふて腐れたような、氣恥ずかしそうな、そんな顔でアドルバー  
ドがそっぽを向く。

「アドル様？」

「…………たまには俺にそのセリフを言わせろ、馬鹿」

くすり、とレイが思わず笑う。  
いじけていたのか、嬉しいのか、そのすべてが織り交ざったよう  
な表情で。

「駄目ですよ、私の特権ですから」

## 1：結婚相手へ「ひい自分で決めるー」（後書き）

こんにちわ、はじめまして、またはお久しぶりです。  
お久しぶりの方は大変お待たせしました。ちらほらと続編希望だと  
前作のコメントに書いてくださった皆様、どうにか続編始めます。  
番外編もちびちびと書こうと思つてるので見つけたら覗いてみてや  
つてください。

苦労人のアドルバーーの成長を皆様見守つてあげてください。  
感想、批評などありましたらい一言からでもお願ひします。

## 2：どうして俺はこんななんだ！？

「世の中物好きもいたもんねえ」

一枚の紙にすらりと並んだアドルバードの婚約者候補達の名前を眺めてリノルアースがしみじみと呟く。

切羽詰ったアドルバードとは違つてリノルアースは優雅に紅茶を飲んでいた。双子の兄の危機だというのに手を貸そうといふ素振りはない。

「……リノル。それはどういう意味だ？」

「アドルのことじやないわよ。こんな北の田舎国に嫁いりつてことが物好きって言つてるの。私ならごめんだわー。だってイルファンドの姫だったら選び放題だし、うわ、アドラスまで。凄いわねえ、ほんの数年前ならありえないようなお国からのお話よう」

リノルアースが上げたのはどれもハウゼンランドでは遠く及ばないような大国の名前だ。もちろんその分やつてくる姫君も第八王女とか第十五王女くらいなものだが。

「南の国のお姫様じや数ヶ月ともたないだろ。極寒の地だぞ」

イルファンドもアドラスも遠い南の国だ。山に行けば一年のほとんどで雪を見ることができる、雪国のハウゼンランドでは生きていけない。

「凍死するかしら？ それはそれで見ものよねえ」

恐ろしいことをせらりと吐きながらリノルアースは美味しそうにケーキをつつく。

それこそリノルアースは結婚相手など選び放題の状態だ。大陸中に知れ渡る美貌のおかげで何十もの縁談が飛び込んできている。その手紙を読まずに暖炉の火に放り込んでいるらしいが。曰く、「私の顔も見たことのない、性格も知らずに噂だけで縁談持つてくる男なんて信用できない」だそうな。本当の真意をアドルバードは知らない。

「……それにしても、縁談を持ち出すなんて陛下らしくもないですね。今まで随分と暢気にしていらっしゃったのに」

リノルアースの紅茶を繼ぎ足しながら、彼女の騎士でありレイの弟でもあるルイが呟く。

彼の呟つことも最もだ。野心のある国王ならば早々に大国ヘリノルアースを嫁がせるだろう。しかし手紙を焼き捨てているのを黙認している。アドルバードに関しても口つるせることの言わない、温厚な父だ。母親も同様に。

「知るか。リノルは放置なのに俺ばかりこんな目に遭わせやがって。理不尽だ」

「それは今更でしょう」  
アドルバードの婚約者候補についてまとめられた書類を持ってレイがやって来る。

両親は双子を分け隔てなく、平等に愛情を注いでくれたが 最近では女の子のリノルアースと男の子のアドルバードで違いが出てきた。簡単に言えば男の子だから多少の危険は平氣だろう、とそういうことだ。実際は多分リノルアースの方が上手く切り抜けると思うが。

「それに、アドル様は後継者でもありますし。婚約者がいないと王位争いで不利にもなりますし」

「王位争いつて……物騒なこと言つたな」

「暢気に構えてるのはアドルだけよ。ハドルスもルザードも皆腹の底では王座を狙ってるんだから」

「ふん、と面白くなさそうにリノルアースが言つ。ハドルスもルザードも一人の従兄弟だ。

「暢気について……一応分かつてるよ。でも第一王位継承者は俺だし、それは父上でない限り変えることは出来ない」

「変えさせるつもりもないわ、誰にも」

リノルアースのそこ宣言はそちらへんの男でも叶わないくらいに男らしかった。じついう一面を知っているのに女の子だからと甘や

かす両親が信じられない。

「私の計画ではレイにお義姉様になつていただくことになつてゐるし？ アドルにはちゃんと王様になつてもらうことになつてゐるんだから。ああ、そうだアドル。身長伸びるにはカルシウムよ。牛乳飲みなさい」

「つるさい、言われなくとも飲んでる」

「カリカリするのはカルシウム不足なのよ、足りてないわ」「何リットル飲めと！？」

なおも食らいついてくるアドルをまん丸の目で見つめ返してリノルアースが問う。

「あらやだ、あんた一斗どんだけ飲んでるの？」

「…………――リットル少々」

そりやあもう身長は最大のコンプレックスなので。

「バツカジやないの！？ あははははははは――――――」

「笑うな！」

無理、とリノルアースが目に涙を浮かべながら咳く。

「大丈夫よ、そんな小柄な家系じゃないもの。お父様も人並みにはあるし」

「それならどうして俺はこんななんなんだ！？」

「男性は総じて成長期が遅く現れますから。二十歳越えても身長は伸び続けるそうですし。アドル様の場合まだ成長期に入つてないんでしよう」

レイが冷静に説明する。

アドルは身長180cmを越えるレイをちらりと見て問う。

「おまえいつ頃から伸び始めた？ ていうか十五歳の頃は一体どんくらいあつた？」

「え、俺ですか？ 十五歳の時には165cmくらいはあつたかと」「レイ――」

氣休めを言うなとアドルバードがレイを睨みつける。

レイはそれを無視して書類を整理して机の上に並べていた。

「レイの家系は皆背が高いもの…ってルイは養子だったわね。それじゃあ当てはまらないか。どこの国の人かも覚えてないし」

リノルアースがじつとルイを観察し始め、ルイは居心地悪そうに後退する。

銀髪に碧眼、色白のレイとは似ても似つかず、ルイは黒髪に緑色の瞳、肌はハウゼンランドの人間よりも濃い目だ。

「それこそ……南の方の特徴よね？ それなら余計に体格は良いはずなもの。アドルじやあ足元にも及ばないでしよう」

「言われて見れば……そうですね。気になったことがなかつたので」

ルイがまじまじと自分の肌の色を見て呟く。

物心がつく前にバウアー家の一員となつて、当然のように成長したので自分の出身を気にしたことなどなかつた。ルイにとつてはハウゼンランドが故郷だし、バウナー家が育つた家だ。

「…………これは…………」

書類を並べていたレイが呟く。その響きが驚いたようであつたので、三人とも振り返つた。

「どうした？」

「……隨分と物好きな方が」

レイが一枚の紙を持ち上げる。

三人がそこに書かれている国の名前を見て目を丸くした。

「アヴィイラ！？ あのアヴィランテ帝国！？ なんでそんな大国のお姫様が来るのよ！？ しかも第三皇女だあ！？ 狂つてんじやないの！？」

「結婚でいうか侵略じやあ……」

アヴィランテ帝国 通称「アヴィイラ」は千年以上の長い歴史を持つ帝国で、南一帯の広大な国土を持つ。ハウゼンランドも使い物にならない雪山などで国土だけはそれなりに広いが、アヴィイラとは比べ物にもならない。

「シェリスネイア姫つて……あたしに並ぶ美貌の姫君じやないの！？」

「そこで自分を出せるあたりが凄いと思つぞ。俺」

アドルバードが呆れたようにリノルアースを見る。ルイも主人に

気づかれない程度に頷いて同意する。

「何よ！！ 南の姫、北の姫って大陸じゃ区別されてんのよ！？」

あたしの顔はそれだけの利用価値があるのよ！？」

「……それはつまり俺の顔でもあるわけだが

なんて言つても双子なわけで。

男と女という違いを除いてはそつくりなのだ。さすがに微々たる違いが見え始めてきたが、他人では区別できないほどの差だ。アドルバードが女装すれば見事にリノルアースだし、その逆もまた然りだ。

「…………少し、気にした方が良さそうですね」

今まで黙っていたレイが静かに呟く。

本気でアヴィラから縁談が出されれば、ハウゼンランドからは断りにくい　　というより、断れない。

「どういう目的があるのか図りかねるわ。まさか大事なお姫様をこんな国に渡す気はないでしょうし、うちと繋がりが出来てもアヴィラに特なんてないもの。利益のないことでは國は動かないわ。アルシザスの馬鹿な国王を例外として」

策略を見破ろうとするリノルアースの目つきは美しいだけの姫君などではない。獲物を狙う猛獸のごとく鋭い。

「なかなか面白い催しになりそうじゃない？」

相手の狙いを見抜き、さらにその上で自分に利益があるよう立ち振る舞う　　それはリノルアースには面白いものなのだろうが。

「…………気が重い」

策略も、謀略も、この際政治戦略も何もかもどうでもいい。穏やかで静かな日々を送りたいというアドルバードのせせやかな願いは当分叶いそうに無い。



### 3・ハウゼンランドの女は強い

随分と熱心にアドルバードの婚約者候補の資料を読みふけるレイを眺めて、アドルバードはため息を吐く。

「……何だつてそんなに真剣に読んでるんだ?」「

二十三人分も。

「いつ何時アドル様に近づかれるか分からぬ方々ですから。どういう方なのか頭に入れておくことは当然です。いざという時の優先順位の決定にも重要ですし」

「大国の姫なら俺を差し置いて助けると?」

おまえの主は俺だぞ、というアドルバードのセリフに、レイはため息を吐き出しながら「誰がそんなこと言いました」と呟く。

「私が守るべきはアドル様お一人です。それだけは世界が崩壊しうと揺るぎません」

きつぱりと言い切られると、後に続けない。

アドルバードは赤面して飛び出しそうになつていた文句をすべて消化しきつた。

「お熱い愛の言葉ね」

アドルバードの隣で呆れたようにリノルアースが呟く。

「う、あ、あいって……」

そんなんじゃない、レイはただ騎士として言つただけで そう

弁解したいのに口が上手く動かない。

「アドル様があまり氣づいてくださらないので悲しい限りです」

「鈍感な男つて駄目よねー」

世間話をするような気楽な会話にアドルバードは口をぱくぱくさせるだけで何も反論できない。

これはもう真意はどうでもいいとして、二人はアドルバードをからかうことを目的に会話している。

「くそう……」

ハウゼンラングで最強の一人が揃つてしまえば、たとえ王子であらうとアドルバードでは手も足も出ない。

「諦めた方がいいですよ。どうせ勝てませんから」

達観したようにルイがアドルバードの肩を叩く。

先ほどから給仕のようにお茶を注いでくれているのはルイだ。日ごろからリノルースの給仕もしているせいか様になつていて。

「勝てなくとも勝ちたいと思うのは男の本能じやないのか！？」

「そんな無駄な本能はとうの昔に捨てました。勝ち目がないのに突っ込んでいくのは馬鹿のことです」

きつぱりと男のプライドともこえる本能を捨て去ったルイは淡々としている。

「こういう時の物言いがレイに似ているのはやはり血のつながりがなくとも共に育つた姉弟だからだろうか。

「女を服従させたいなんて男は海の藻屑となつてしまいなさい。従うだけの古い女はハウゼンラングにはいなくてよ」

「ふ、服従っていうわけじゃあ……」

微妙にいやらしく響きに感じてアドルバードは口籠もる。そこに最後の一撃をレイが加える。

「形としては異なりますけど、私はアドル様に服従していることになるんですが」

剣を誓つた騎士ですから、という後半の言葉はアドルバードの耳には届いていない。

冷静にならうと紅茶を飲んでいたアドルバードが一気に吹き出す。

「お、おま、何を急に言い出すんだ！！！」

「主従関係なんですから間違いではありませんが」

「言ひ方があるだろ？　が言ひ方が！！　それとも何か！？　俺をからかつてそんなに楽しいか！？」

逆ギレとも言えるアドルバードの行動に冷静に無視しながらレイはアドルバードが吹き出したせいで濡れたテーブルを拭き取る。絨毯の方は既にルイが吹き始めているが、少し染みになるかもしれない

い。

「主従関係以外の変な想像をさせたのなら申し訳ありませんでした。  
そんな趣味があるとは思つてもみなかつたので」

「んな趣味無いわ！　ていうかそれ謝つてるつもりで俺を陥れよう  
としてないか！？」

「主人を陥れてどうするんですか。私が路頭に迷う破目になるじゃ  
ないですか」

「ああもうっ！　さつきから全然資料読んでないだろ！　そんなん  
で頭に入つてるのか！？　これは！？」

勝ち目は無いと悟つた論争から逃げるためにアドルバードは一枚  
の肖像画をとる。全員ではないが、余裕のある国では「丁寧に姫君  
の肖像画まで送つて寄越したのだ。

「ジエラス王国第八王女エリス・カタリア・リリアーナ・ジエラス  
様です。髪は亞麻色で瞳は緑。身長は大体154cmで体重は未発  
表、ご趣味は詩作や刺繡だそうです。ちなみにジエラスはハウゼン  
ランドより西にあるカナード山脈の向こう側にある温暖な気候の國  
で今回は姫君がいらっしゃるので山越えではなく遠回りですが海路  
を使つていらつしゃるそうです」

「じゃ、じゃあこれは！？」

「それはアルシザスの隣国であるルイザニア王国の第十一王女のリ  
エネスティーヤ・ロロイド・リア・ルイザニア様です。髪は南国特  
有の黒で瞳も同様に黒です。肌はアドル様よりも濃いでしょう。  
趣味は音楽鑑賞で身長は162cm、アドル様よりも高いです」

「余計なことは言わんでいい……」

身長とか。

完全な敗北にアドルバードはがっくりと肩を下ろす。

「だから勝てないって言つてるじゃないですか

呆れたようにルイが呟く。

勝てなくても勝ちたいんだよ、男としても主としても。さすがに

そう言う氣力はアドルバードには残つていなかつた。

「……どんだけ覚えてるんだよ」

「必要と思われる分だけです。どうせ皆様が帰国されれば予備知識として多少覚えていればいいだけですし」

「それでも覚えとくのか……」

レイの記憶力に半ば呆然とする。

「当然です。どんな時に役立つか分かりませんから」  
きつぱりと言い切つてるので、おそらく本気だろ？

その努力もすべて自分の為にやつてくれているのだと分かるから、余計に居たたまれない。アドルは勉強嫌いだし、記憶力もないのでいつもレイに頼りつきりだ。

それではやはり駄目だとアドルバードは自分を叱る。  
す、と何気なく一枚を引き抜き一読する。

「？ どうしたんですか、アドル様。好みの方でもいましたか？」

「……肖像画でもない文章だけの紙でどうやつたら好みだと分かるんだよ。ていうかどうでもいいし、正直」

どんな姫君が来ても、アドルバードの中で一番は随分と前から決まっていて、それは搖ぎ無い。

「おまえに頼つてばかりもいられないからな。俺も出来る範囲で覚えとく。長つたらしい名前と国くらいは、な

彼女が自分の為に努力を惜しまないのなら、自分も同じように努力すべきだ。彼女に相応しくある為に。

「少しさは成長したじゃない」

リノルアースが感心したように微笑む。

「双子のおまえにななこと言われたくない。成長してないのはおまえもだら」

「女と男じゃあの方が精神年齢は上よね」

精神年齢というよりも腹黒さだと思つが、それを口にすれば鉄拳が飛んでくるのは間違いない。

「どうせおまえには勝てないよ、レイにもな」

「男は須らく弱い生き物ですからねえ、ハウゼンランドでは」

ルイがしみじみと紅茶を飲みながら呟く。給仕は終わってやっと休憩できるようになったのか。

「バウアー家でもか」

「あの剣聖と称えられた父も母には敵いません」  
レイヒルイの父である『ティーケ・バウアー』は双子の母親である王妃の騎士を務め、剣の腕前を評価されて貴族の位からも別格の『剣聖』という称号を与えられた。だからこそ弱小貴族である姉弟が双子の騎士として側にいることが許されているのだ。

「ハウゼンランドの女は強い……」

アドルバードは肩を落とし、ため息と共に吐き出す。

それはもはや遺伝子にまで組み込まれた覆しようのない事実なのだろう。

### 3・ハウゼンハンドの女は強い（後書き）

とつあえず書を溜めた分だけ公開します。  
更新は早めに田標に最後まで走り抜けます。ここからはいつも暴走するので飼い主としては一苦労ですが。

アドルの苦惱の日々はまだまだ終わりません。  
皆様どうぞ見守ってあげてください。

#### 4・世間一般には「田舎」も存在しますから

「遠路はるばるおいでくださいました。あるのは雪くらいで珍しいものなど何も無い田舎ですが、どうぞ」「滞在ください」

張り付いた完璧な笑顔のまま、アドルバードは慣れた口調で田の前の姫君に言う。ついでに手の甲にキスまで送るサービスぶりだ。慣れるのも当然、あちらこちらの国から姫君はやって来て、国王への挨拶の後にはもちろん『婚約者になる予定』の王子にも挨拶する。今言葉を交わしているのはどこの国の第五王女だか何だかだ。「王子のお噂はかねがね聞いておりますわ。優秀でいらっしゃいますのね」

「どのような噂かは存じませんが、私は平凡な人間ですよ。」期待に添えなくて残念ですが」

社交モードなので『俺』ではなく『私』と使う。こうして挨拶する以上の交流は求めていない姫にはこれくらいで充分だった。

身長を気にしなければ、アドルバードは美少年だ。双子のリノルアースの美貌が大陸で噂的になつているのだから、それはある意味当然だつた。王子としての仮面を被つたアドルバードはどの姫君の目にも悪い印象なく映つているだろう。それも、数分の間のことだが。

「ご歓談中失礼します。アドルバード様、まもなく政治の講義のお時間です」

「ああ、もうそんな時間か」

タイミングを見計らつて、アドルバードの騎士は姿を現す。

すらりとした長身で、他の騎士とは一線を置いた王子専属の騎士服を着た彼女はどんな男よりも魅力的だつ。女性特有の身体の曲線を、わずかに大きい服で誤魔化している。

「……お、お忙しい中貴重なお時間をいただきましてありがとうございます」

ざいました」

一瞬レイに見惚れた姫君が慌ててアドルバードに退出の挨拶をする。

「いえ、じぶんが慌しくさせてしまい申し訳ありません。」滞在中不自由があればなんなりと」

につこりとアドルバードが微笑んでも、姫の目には麗しい騎士しか映つていなうに見える。

にこにこと愛想を振りまく王子よりも潔田そくな騎士の方が好みの姫が多いらしい。これと変わらぬ方法でレイは見事に姫君の関心を自分に集中させていた。女だとこりとはあえて言わずに。

「……嫌だとは思わないのか。おまえ」

政治の講義なんて本当はあまり受けたくないし受けている場合でもないのだが　姫君から逃れる口実に使つた建前上、アドルバードは大人しく教師の待つ部屋へと向かう。

隣を歩くレイを少し見上げながら問いかけた。

「何がですか？」

レイは分かつていてるのに時々こりてわざとアドルバードの口から言わせることがある。

それに少しむつとしながらも　たとえ同性なのだと分かつても惚れた相手に誰かが色皿を使うのは喜ばしくないことも重なり、アドルバードの機嫌はそれほどよくない。

「女なのに女に好かれることが。俺は女装してる間近づいてくる男どもが気持ち悪くてしかたなかつたぞ」

「特に嫌悪感はありませんね。熱心にアプローチされたわけでもあります。今回こうしている方がアドル様は後々楽でしょう？」下手にどこかの姫に本気で惚れられても困るので、関心がアドルではなくレイに向かうのは確かに好都合なのだが。

「たとえ私がどこかの国の姫に気に入られたとしても、引き抜かれ心配はありませんし」

レイは最近の騎士では珍しく、主人をただ一人と『剣の誓い』をたてている。

騎士は本来國に仕える者であり、個人に仕える者は特例だつた。普通の騎士は国王に忠誠を誓い、王家の為、國の為に剣を振るう。一方剣をただ一人に誓つた騎士は主人を生涯ただ一人と決め、いかなる時もただ一人の主人の為に剣を振るう。この國で剣の誓いをたてた騎士はおそらくレイだけだ。ルイもリノルアースの専属の騎士ではあるが、それは王宮騎士団の配属で決まつたことであつて誓いによる主従関係ではない。

大陸で、もはや風化しつつある風習であるとはいえその誓いは絶対だ。だからどこかの姫がレイが欲しいとアドルバードや国王に訴えたところでそれは叶わない。そもそもレイの性別を知れば諦めるだろうが。

「罪作りな奴……」

「気づかない相手が悪いんです。今の姫で十八人目ですね。あと五人ですか」

「増えなければな」

増えるでしょうね、というレイの言葉が呪いのように聞こえる。

「それで、良さそうな方はいらっしゃいました？」  
ガン。

と机に頭をぶつけたのはレイの一撃があまりにも強烈だったからだ。

だつてなんであつてそりやおまえ。

「おまえがソレを聞くか！？」

俺がおまえのことが好きでたぶんおまえもきっと俺のことを好きでいてくれてこんな面倒な縁談話早くなくなればいいのになーとか考えててやつぱり身長のことなんて気にしないでとつと親に宣言しておけば良かつたつて思つてるのに…！

「一応。そういう目的のものですし。もしもそういう方が見つかった場合私には何もできませんから」

それはなんだつま。

「俺が他の女に惚れるとでも思つてゐるのか！？」

「世間一般には一目惚れも存在しますから」

ああそうだらう。そうだらうとも。

でもそれって何だよ。そんなに俺は信用できないか。そんなに俺があまえのこと好きでいることは変か。ていつか俺が他の誰かに惚れてもおまえは平気なのか！？

言いたいことが頭の中で渦を巻く。

レイの表情はあまりにもいつもどおりで何を考えているかなんて読み取れない。

「…………無理だろ」

一目惚れなんてそんな。  
だつて。

「レイ以上に綺麗な人なんて見たことないし」

と、言つてしまつてからアドルバードは思わず自分の手で口を塞いだ。

何を口走つた俺！？

ちらりとレイを見るが、やはり彼女の顔色は変わらない。表情もまるで揺るがない。ああやつぱりほんとんがこつちの一方通行かと泣きたくなるのを堪える。

「…………ちょっとお一人さん」

親父臭いセリフを吐いたのは大陸中で注目されている美しい姫君のはずのリノルースだ。柱にもたれてこちらを呆れ顔で見ていた。

「リ、リノル！？」

今ももしかしてもしかしながらも聞かれていたか！？ あの恥ずかしいセリフを！？

「ちょっとレイを借りてもいいかしら。知恵が欲しくて。代わりに  
しちゃ少し情けないけど、レイを置いてくから」

するりと猫のように近寄り、リノルアースはレイと腕を組む。そ  
の様になる一人にため息を吐きたくなるのは男側の約一名だ。

拒否権など初めからないとアドルはただ頷く。どうせ講義の間は  
離れているから支障は無い。

「ああ、それとアドル」

ぐるりと首だけ振り返り、リノルアースはどこか冷めた表情で言  
う。

「色ボケは人に見えないとこりでやりなさい。正直見てるこっちが  
恥ずかしいわ」

「っ！」

やつぱり聞いていやがったのか！

あれはだつて口が勝手に、という弁解をリノルアースは聞くつも  
りはないらしい。すたすたとレイを連れて行ってしまった。

ああもう、結局レイは無反応か。

「…………レイ、そろそろ解凍してくれないかしら」

腕を組んだまま、きちんと歩いている騎士を見上げてリノルア  
ースは呟く。

無反応ではなかつたのだ。ただ、突然の言葉に驚いてすぐに反応  
は出来なかつたが。

「え、あ、すみません」

いつもよりもはつきりしない口調は、まだ衝撃から立ち直つてい  
ないのだろう。

「アドルも天然だからなあ……さらつとあんなこと言われた日にはイチコロよねえ。あの馬鹿にもそれくらいの攻撃性があればなあ」あまりにもヘタレ過ぎてつまらないわ、トリノルアースは愚痴る。その馬鹿の姉として申し訳なく思いながらも何も言えない。先ほどのアドルの一撃はかなり大きかった。

「……私はズルイですね」

ようやく回復し始めたレイが呟く。

うん？ と首を傾げながら見上げてくるリノルアースに苦笑しながら続ける。

「時々、こうして確認しないと不安なんです」

あの人行動を見ていればそれは一目瞭然なんだけれど。それでも時々、わざと仕向けることがある。

「仕方ないんじゃない？ 恋は人から自信を無くさせるものだから」その大人びたリノルアースのセリフに、レイは返す言葉がなかつた。

## 5・女が顔を使い分けるのは常識中の常識よ

他国の姫君が続々とハウゼンランドにやつて来るなか、例のアヴィラの姫君だけは遅れていた。遠い道のりの上に砂漠を越えてやってくるのだから、他よりも到着が遅れるのは当たり前と特に気にするものはない。

「よお、アドル。久しぶりだな」

城内の廊下で、そう気安く話しかけてきたのはハウゼンランドの西にある国・ネイガスの王子であるウィルザード・ディル・ネイガスだ。アドルバードやリノルースより一歳上の、アドルバードの遠い親戚だ。年も近いといつこともあって、幼い頃はそれなりに交流があった。

「久しぶり、ウィル」

ハウゼンランドに姫君がやつて来ている公的な理由はもちろんお見合いなどではなく、名目のパーティがある以上、近隣の王子も何人かは訪問する予定だ。ウィルザードはそのなかの一人というわけだ。

「随分面倒なことになつてるなあ、おまえ本気でどつかの姫さんと結婚するわけ？ そこの騎士さんはどうすんの？」

小さな頃からアドルバードの気持ちを知っているウィルザードは好奇心を隠そつとはせず不羨に聞いてくる。

「……関係ないだろ。どつかの姫君とどつかひつてつもつは全く無いけどな」

「そりや残念。もしも見合ひするなら騎士さんは俺が引き取らうかと思つたのに」

「女嫌いの王子に引き取られるような状況にはなってません  
きっとぱりとレイが切り捨てる。」

「ウィルザードは根っからの女嫌いで、唯一の例外がレイだつた。  
もちろんそれは単純にレイが普通の女性の枠から外れていて、見か  
けも中性的、暮らしへぶりは騎士そのもの、というのがおおよその原  
因だろ?」

「ていうか、いつの間にか女らしくなったな。何かあつたか? ア  
ドルに襲われたとか」

「ウィル! !」

黙れという意味を込めてアドルが怒鳴る。

もちろんそれは後ろ暗いことがあるからだが。

「とりあえずは何も、と答えておきます」

「でもその髪、伸ばし始めてるんだろ?」

「田代といな、とアドルバードは思つ。女嫌いのくせにそういうと  
ころにはよく気がつくのだ。

「アドル様が長い方が良いそうなので」

おまえの世界の中心は相変わらずだな、とウィルザードが呆れ果  
てる。レイが気になった様子は全く無く表情はまるで変化ない。

「ウィルこそよく來たな。おまえの嫌いな姫君がたくさん集まつて  
るのに」

「ウィルザードは典型的な『お姫様』が大嫌いなのだ。お淑やかに  
振る舞い、紳士のエスコートされ、そのくせ実は我儘で自分勝手で  
性格の悪い、お姫様らしいお姫様が。どうも女の陰湿さが嫌いらし  
い。」

「いいかげん俺も親がうるさくてな。相手を見つけるとつと結婚  
しきつて。三男だからもう少し自由にできるかと思つたんだけど」  
「おまえもおまえで大変だな。他に来る王子はほとんびりノル目當  
てみたいだし……」

連日の王子からのアプローチを上手く交わしながらストレスをた  
めていくリノルアースに、最終的にはハツ当たりされるんだろうな、

とアドルバードはため息を零す。

「アレのどこがいいんだか。顔だけだろうが。性格は極悪だ」

もちろんウィルザードとリノルアースは犬猿の仲だ。なんと言おうと、リノルアースはウィルザードの嫌いなタイプの代表例なのだ。

「他の人はリノルの外面しか知らないからさ……」

リノルアースの猫かぶりはもはや遺伝子のなせる業だ。それに騙される王子達をつい哀れに思つてしまつ。

「あら、ウィルザード。来ていたのね」

向こうからやって来るのは噂のリノルアースだ。

薄紅のドレスを着て、堂々と、そしてどこか優雅に歩く姿はまさに姫様だ。

「つるさい。近寄るなこの魔性の女め」

「相変わらず成長しないのね。罵倒する言葉にももう少し在庫を増やしたらどうなの？ 聞き飽きたわ。まあ増えたところであんたに何言われても何も感じないけど」

ぐう、とウィルザードが悔しげに唇を噛む。

「女嫌いなんて言つてただのトラウマじゃないの。しかも人のせいにしてくれちゃつて。氣づかない男が馬鹿なんでしょう」

ふん、と悪びれもなくリノルアースは追加攻撃をする。

二人の戦いはリノルアースがいつも一方的に勝利している。

「女がいろんな顔を使い分けるのは常識中の常識よ。それが理解できないならいつそ神様にでもお仕えすれば？ 一生女に近寄らなくてすむわよ」

「……私は使い分けてるつもりはありませんけど」

常識と言われた行為に覚えのないレイがぽつりと呟く。レイが、性格の裏表がないことは誰もが知つていることだ。

「レイはいいのよ。そのままで充分素敵だから」

リノルアースがにつこりとレイに笑顔を向けて言つ。

反論する余裕もなく黙り込んでいたウィルザードが、覚えていろ

よどありきたりなセリフを残して逃げていくのもいつものことだ。

「……ホント、成長しないわよね。あいつ

「あいつも昔はリノル信者だったんだけどな」

アドルバードが可哀想に、と呟く。

ウィルザードがリノルアースの本性を知る前 それでも八歳くらいだと思つ、それまではウィルザードはリノルアースにベタ惚れだったのだ。しかしある日リノルアースの腹黒で策略家で我儘で自分勝手な（アドルバード達にしてみればもはや慣れたことな）のが他人の目には傍若無人に見える様子に、今まで築き上げてきた理想がものの見事に砕け散つたらしい。

女がいくつもの顔を使い分けるのは確かに事実かもしれないが、まさかそれが七歳の少女にまで適用されるなんて考へないだろう。それ以来ウィルザードは女嫌い、または女性不信に陥り、現在にいたる。

「一方的に理想像を作り上げてそれが壊されたからつてぎやあぎやあうるさいのよ。器の小さい」

リノルアースに非がないというわけでもないと思つが、そんなことをあえて言うほどアドルバードは愚かではない。

「そういえば、ついさっきギルコニアの姫が到着したそうよ」

それを伝えに来たんだつたわ、とリノルアースが付け加える。

「それじゃあ……あとはアヴィランテのシェリスネイア姫だけか」

遅いな、とアドルバードが頭を搔く。

「一番気になる人がまだなんだもの、こっちも行動出来ないのよね」「今度は何を企んでるんだよ……」

チャンスがあれば何でも自分の利益になるように策略する妹を呆れたように見つめる。

「今は、まだ何も？」

につこりと微笑んだその笑顔が黒々しく見えるのはアドルバードの目が可笑しいのだろうか。

「……いいよもう。好きにしろ。国際問題だけは作るなよ  
やだ、私がそんなへマすると思うのー!？」

やつぱり何か企んでんじゃないか。

内心、そうツッコムが何も言わない。アドルバードが人生で学んだ教訓だ。

君子危うきに近寄りず。

口は災いの元。

## 6：俺のだ、触るなつてか

「珍しいな、一人か？」

廊下を一人歩いていたレイに、ウイルザードが後ろから話しかけた。

振り返り、レイは立ち止まる。苦笑交じりに「いつも一緒にいるわけじゃありませんよ」と答えた。誰のことかなんて聞くことない。寝る時は隣室ではあるが別だし、もちろん入浴だってそうだ。今はアドルバードが講義を受けてるのでレイが暇になつていて。他の誰よりも一緒にいることが多いといつだけで、朝から晩まで一緒になんてありえない。

「だいたいは一緒だろ、昔から」

遠い目をして過去を思い出しているだらうウイルザードは少し年寄り臭かった。

「いつつもレイレイレイって。リノルもだつたしなあ。あんたホントによくあの双子に合わせられるよなあ」

それはもう二人が物心つく前からの付き合いなので。そう答えるのも馬鹿馬鹿しく、レイは苦笑するだけで何も言わない。

「小さい頃からあんたにべつたりだつたもんな、アドルのやつ」大変だろ、という意味合いの込められた言葉に、レイは真顔になつた。

「……その逆とは思わないんですか？」

レイの問いに、ん？ とウイルザードは首を傾げる。

「私が、アドル様に執着しているとは思わないんですか？」

もう一度繰り返すと、ああ、と納得したように頷く。

「お互い様だろ、あんたらは。あんたもなんだかんだでアドルに甘いし、過保護だし。でもアドルだつてあんたに頼りすぎてるつて感じはあるし」

……いけないんでしょうか、というレイの呟きはらしくなかつた。お互いが、お互いに縛り付けているんだと言われたような気がした。

「いけなくないだろ。あんたちはそれが当然なんだ。アドルの隣にあんたがいて、あなたの隣にはアドルがいる。もう随分前からそうだから、あんたらのどっちかが一人でいるとなんか違和感あるんだよ」

「……そうですか」

レイはほつとしたように、一瞬だけ柔らかく微笑む。  
すっかり女らしくなつちまつたなあ、といつ呟きは口の中だけで声には出さない。

「つまり　あんた不安なのか？　アドルが他の女に靡くんじゃないかとか、そういうのが」

ぽんぽん、とレイの頭を軽く叩く。

ウイルザードはレイよりも一つ年下のはずだが　背はあまり変わらない。少しレイが高いかもしない。

年下に慰められるとはな、とレイは苦笑する。  
少し不安定だったかもしれないが、身内でもない人間に愚痴を零すなんて、自分らしくない。

「安心しろよ。あいつあんたにベタ惚れだから。今更他の女なんていって！」

ウイルザードの後頭部に分厚い本が見事にヒットする。

何しやがる、と怒鳴りつけようと本が飛んできた先を睨みつけると、そこにはアドルバードがいた。明らかに不機嫌で、ウイルザード以上の迫力を持つて睨んでいた。

「……俺のだ、触るなってか」

ホント相変わらずだな、とウイルザードが呆れたように呟く。右手で本があたつたところを撫でる。こぶになっていた。

アドルバードは無言のままつかつかと歩み寄り、レイとウイルザードの間に入る。

「アドル様、今は講義中では……」

「アヴィイラの姫が到着したそうだ。だから講義は中止で、今から会いに行く」

むすっとした表情を変えないままアドルバードが手短に説明する。行くぞ、とも言わずに歩き出したアドルバードに、レイはそれが当然のことのようについていく。

その一人の後ろ姿を見送りながらウィルザードはため息を吐く。

「あんたねえ、そのうち馬に蹴られて死ぬわよ」

呆れたような声が背後から聞こえて、ウィルザードは驚いて跳ねる。

「で、で、出たな魔性の女！」

後ろにいたのはやはりリノルアースで、今日はおまけにルイもついている。

「その言葉聞き飽きたって言ったでしょうが。馬鹿なのあんた」

「うるさい！ おまえの為に頭を働かせるのももつたいいわ！！」

と、文句を言ったその顔に短剣が突きつけられる。

「リノルアース様の悪口を言うのはこの口ですか？」

につこりと微笑みながらルイが短剣をさらにウィルザードの顔に近づける。

「ルイ、国際問題になっちゃうわ。見えないとここにやりなさい」

確かルイとウィルザードは同じ年のはずだが ルイは180cmを越えるほど背が高い。そんな男に短剣突きつけられて平気なはずがない。ましてリノルアースに負けるようなウィルザードではないから。

「ひ、ひきょうものおお

ウィルザードの声は負け犬のように悲しく響いた。

「……どうしてそんなに仮面なんですか？」

前を歩く俺の顔が見えるわけないだろ、と言い返そうとも思ったが事実仮面になつてゐるだらう。自分の顔をレイに見せたくなかつた。

「別に」

「別にじやありません」

「何でもない」

「何でもないなら機嫌を直してください」

他の男に触られていたから嫌だつたんだ。他の男の前で一瞬だけだつたけどおまえが笑つたのが腹が立つたんだ。俺はおまえの主でおまえは俺の騎士だからそういうことをとやかく言う資格はないつて分かつてゐるのに。

醜い嫉妬を、レイに見せたくない。

あんなふうにレイの頭を撫でようとしたつてアドルバードとレイは二十㌢の身長差がある。傍目から見てもかつて悪い光景にしかならない。

「……私は、身長なんて気にしませんよ」「俺は気にする」

絵にならないだろ、と呟く。

「アドル様がドレスを着てくだされば絵になると思ひますけど」

「ソレは何か。俺に男としてのプライドを捨てると?」

確かにアドルバードがドレスを着て、レイがいつものように騎士服を着ていればさぞ絵になる一人になれるだらう 性別は逆転してゐるが。

「そこまでは言つてませんよ、外見を気にするならそういう方法もあるつてだけです」

「却下だ。コルセットなんか拷問具だ」

「それは同感です」

即座に答えたレイと顔を見合させて、一人で笑う。

「俺が好きか、レイ」

ズルイだろうか、こんな質問。

そう思いながら聞かずにはいられなかつた。

「答えを知つてゐるのに聞いてくるのはあなたの悪いところですね」

だから、答えませんよ。

それだけで充分だつた。

## 7：女は女に騙されない

黒曜石の瞳。

夜の闇を集めて折り込んだような、艶やかな髪。  
その肌は南国の者の証のように濃く、それが独特の色氣を醸し出  
している。

それが、アヴィラのシェリスネイア姫。

赤い唇が微笑み、自分の美しさが最大限に出せる笑顔でアドルバードを見つめた。

「はじめまして、アドルバード王子。アヴィランテのシェリスネイア、ただ今到着いたしました」

それは小国の王子に対する挨拶としては最上のものだった。まして相手は大陸一といつても過言ではないほどの大國の姫だ。

男はこういう女の慎ましい態度に弱い。

使えるにしろ、使えないにしろ、利用するだけ利用して捨ててしまおう。こんな田舎の国の王子なんて。

初めからアドルバードと結婚するつもりなんてない。アドルバードがシェリスネイアに夢中になつて、自滅してくれればいい。王族は利用価値なんていくらもある。

そのためにこんな北国まで來た。

なのに。

「はじめて、シェリスネイア姫。遠路はるばる、こんな鄙びた国までようこそおいでくださいました」

完璧な笑顔のアドルバードは、シェリスネイアに見惚れた様子はない。

普通なら見惚れて動けないでいるはずなのに、アドルバードは優雅にシェリスネイアの手の甲にキスまで贈る。北の方での習慣だと「うことくらい、シェリスネイアの頭にもあった。

「何か不便な点がありましたらなんなりと。アヴィランテのような暮らし、とまではいかなくても、不自由のないよつて便宜を図りますので」

「い、ご親切に」

予想外の反応にシェリスネイアの方が困った。

どうしてどうしてどうしてどうしてどうして！

男なら私の美しさに見惚れるでしょう？ 自分のものにしたくなるはずでしょう？ どうしてそんな平然としてるのよ！－

内心は焦りと怒りでいっぱいだ。

今までシェリスネイアに見惚れない、心を動かされない男なんていなかつた。なのにこの田舎の王子ごときが、シェリスネイアを目見て、最高の笑顔を見せて、ぴくりとも揺るがないなんて。完璧な王子の笑顔の下に、一体何が隠されてるっていうの。

確かにアドルバードは美少年だった。おそらく、このまま遅しく成長すればあちこちの姫の興味を独り占めするだろう。赤みがかった金の髪も、白い肌も シェリスネイアが幼い頃に憧れてやまなかつた王子様そのものだ。

しかしこんな、自分と対して身長の変わらないような王子に心を動かされるシェリスネイアではない。今はそんなことよりもプライドを傷つけられた悔しさでいっぱいだ。

「……お兄様？ 今よろしいかしら？」

涼やかな声が扉の向こうから聞こえる。

アドルバードが返事をするよりも早く、ゆっくりと扉が開いて美しい少女が姿を現した。

緩く波打つ、アドルバードと同じ赤みがかつた金色の髪。陶器のように滑らかで白い肌。青く澄んだ大きな瞳。完璧な人形のような少女だった。

「あ、ごめんなさい。お客様がいらっしゃったのね」  
ぱ、と羞恥で頬を染める仕草さえも愛らしく、どれだけの男がこの姫に心奪われるのだろうとシェリスネイアは思つた。

これが 北の姫、リノルアースか。

小国の中姫があれほどまでに注目を集めるのか疑問だつたが、なるほどと、納得せざるを得ない。これほどに可憐な、美しい姫は大陸のどこを探してもいいだろ。

「妹が失礼しました、シェリスネイア姫。もし姫がよろしければ同席させたいのですが……男の私よりも、話が盛り上がるでしょうし」「……私は、かまいませんよ。リノルアース姫とおっしゃつたから? 噂はアヴィラまで届いておりましたわ。お会いでてきて光榮です」

お世辞を言つと、リノルアースはいやだ、と照れて赤くなつた。  
女だからこそ、そしてシェリスネイアだからこそ分かる。これは仮面だと。

女に計算はつきもの。このリノルアースの可憐さは全て計算されて演じられたものだ。女は女に騙されない。女の嘘を見抜くのは女だ。それも直感で。

「まさかあのシェリスネイア姫がこうしてハウゼンランドにいらしてくださるなんて、思つてもおりませんでしたの。私のお会いできて嬉しいです」

「あら、北には随分と興味がありましたのよ。アヴィラでは雪が降りませんから、ぜひ一度見てみたいものだと……」

「残念ですね、まだ雪が降る季節ではありませんの。降つたら他国の方々が吹雪で半年近く祖国に帰れなくなってしまいますもの」

「まあ、大変ですね」

「ハウゼンランドの者なら慣れておりますから、特に不自由はありませんよ。今も少し標高の高いところに行けば残雪が見れるでしょう。」滞在中に機会があれば、ぜひ「一緒に

「本当に? ゼひ見てみたいですわ」

「それにしてもシェリスネイア姫は本当にお綺麗ですね。髪の毛はどんな手入れをされてるんですか?」

「まあ……私なんて、そんな。リノルアース姫の金の髪の方が羨ましいです。白い肌も」

「そんな、私の髪なんてくせつ毛で……絡まりやすいし、枝毛もいっぱい。真っ直ぐなシェリスネイア姫の髪が羨ましいです」

「無いものねだりですわね、私達。どうぞ私のことはシェリーと呼びくださいな」

「では私のこともリノルと、シェリー様」

様なんていりませんわ、でしたら私も　と、仮面を被った女同士で馬鹿馬鹿しい会話が続けられる。

アドルバードはリノルアースの隣に座つたまま、優雅に紅茶を飲んでいて、会話にも混ざらない。時々相槌をする程度だ。

うふふ、おほほ、ヒシリスネイアからすればわざとらしくて会話がしばらく続いた。

ふう、とリノルアースが一息つく。

冷めてしまった紅茶一口飲んで、その笑顔ががらりと変わった。

「それで? いいかげんにこんなメンドクサイこと止めない? 疲れるのよねえ、猫被つた相手に猫被つて応対するの。お互い気づい

てんだし、無駄でしょ？」

今までの可憐なリノルアースはどこにいったのか。演技だと分かつていたショリスネイアでさえ愕然としそうになつた。

「見え透いたお世辞言い合つてもアドルが固まるだけだしさあ、さつさとカード見せあいましょいつよ。ショリー？」

「……それが本性ですか？ リノル。言葉遣いが随分と雑になりますのね」

「ふーん、そつちは綺麗なままなのね。」立派だこと。まあそんなふうでもいいでしょう？

リノルアースが微笑む。

その顔は決して可憐ではない。けれど 田が離せないほど、眩しい。

「目的は何かしら？ ショリスネイア」

艶やかに 大人の女性すら勝てそうにもない美しい笑顔で、リノルアースに見つめられる。

「も、目的なんて……」

リノルアースに威圧されて、シェリスネイアは口籠もる。このお姫様は、ただの可愛らしいだけの少女じゃない。そう感じ取らせるだけのものがあった。

「何の目的もなしにこんな田舎までいらしたの？ それは『苦労様』皮肉だとすぐに分かるセリフだつた。声の調子は先ほどとまるで変わらないのに、口調だけが丁寧になつていて。

そのリノルアースの様子にさすがに腹が立つたシェリスネイアも臨戦態勢になる。

「あつたとしてもそれを軽々しく言つほど愚かではないわ。どこかのお姫様と違つて！」

「あら、そんなことも言えるのね。素敵だわシェリー。だけどこつちはね、あえて腹の中を見せ合つてお互いに妥協できるところまで話し合いましょうつて提案してるのでよ？ 悪い話じゃないでしょ？」

？」

返された言葉は倍以上の攻撃力を持つていた。

大して年の変わらない少女に馬鹿にされたことがシェリスネイアをさらに腹立たせた。

黒曜石の瞳に明らかな怒りが宿る。大国で蝶よ花よと育てられた姫君が、同じ年頃の姫にこれほど馬鹿にされたことはないだろう。「妥協？ 話し合い？ 馬鹿馬鹿しいお話ね。それらはすべて対等の者同士だからこそある言葉でしょう？ こんな北の田舎の国とアヴィラでは雑草と薔薇以上の違いがありますわよ？」

「雑草結構。悪いけど雑草っていうのは踏まれても踏まれても生え

るんだから。薔薇なんて手入れが面倒だし繁殖も大変だしいいことないじゃないの。お高く振舞うだけしか芸の無いお姫様と一緒にしないでくださいない？」

「しつ失礼ね！！」

大して意味をなさないであらう言葉で抵抗するが、リノルアースの強い物言いに、シェリスネイアは泣きそうになつた。

「失礼なのもお互い様。言つてしまえば敵陣に乗り込んできたのはそちらでしょう？ 多少の向かい風は覚悟の上なんじゃないの？ それともお気楽な小旅行気分でこんなとこまで来たわけ？ いいわね、大国のお姫様は苦労知らずで」

勝てるわけ無い そう悟った時にはもう遅かつた。

シェリスネイアのプライドがここで負けを認めることが出来ない。泣きそうになりながら、唇を噛み締めることしか出来ない。

泣くものか。アヴィランテの姫として、こんな国の姫に言い負かされたくらいで泣いてたまるか。

「……リノル、少し言いすぎ」

そこで思わず援護が入つた。

涙を堪えようと唇を噛んだシェリスネイアに気がついたアドルバードがリノルアースの攻撃を止める。

「言いすぎ？ 自分の国を雑草呼ばわりされたんだもの、これくらい許されると思うけど？」

ふん、と文句を言いつつ続けて攻撃してこないので少しは反省しているということだろうか。

「すみません。シェリスネイア姫。リノルは強気なもんだから」  
そう言いながら苦笑するアドルバードは最初の印象よりもずっと素敵に見えた。

もともと容姿はそれなりに好みだったのだ。それでも興味はなかつた。こんな小国では自分とつりあわない 初めから対象外だったのだ。

でも今は それこそ結婚してもいいと思えるくらいに、シェリ

スネイアの瞳にはアドルバードが素敵に見える。

それは単純に危機を救われたために美化されているに過ぎないが、本人が気づくはずもない。

「……私、あなたと結婚してもよろしくてよ」「はあ！？」

突拍子もないシェリスネイアの言葉に声を上げたのはアドルバードだけではない。言い負かしたリノルアースもこれは予想外だ。「思っていた以上に素敵なもの。身長が低いのが少しアレだけど、そうね、それはもう少ししたら解決するでしょうし。アドルバード王子、アヴィラに婿入りするつもりはおあり？」

身を乗り出しながらアドルバードを見つめてくるシェリスネイアの熱い視線から逃れようとアドルバードは顔を引き攣らせて上体だけ下がる。

「む、婿つて……一応俺は跡継ぎなんで無理です。アヴィランテみたいに王子や姫がいっぱいいるわけじゃないから王子は俺だけだし」

「もちろん他にも王位継承者はいる。第一位がアドルバードただけで。

一方アヴィランテ帝国は一夫多妻制なので王子も姫も腐るほどいる。二桁は軽く越えるだろう。

「それって先に言うことかしら。ホントかつこ悪いんだから」

アドルバードの隣で平静を取り戻したリノルアースが紅茶を飲みながら呟いた。

「王位なんてそこの生意気な女に与えておしまいなさいな」

「ええと……ハウゼンランドでは一応よほどの場合じゃない限り、女性は王位を継げないんです。だからリノルにあげるのはちょっと過去に女王がいなかつたわけではないが、それは王家の血縁がただ一人で、それが女性だった時だけだ。アドルバードという男子が生まれている以上、リノルアースは王位につくことはない。

「アヴィラは本当に良いところですよ。ここよりずっと暖かいし」

「いやあ、暖かい通り越して暑すぎるんで北国育ちの俺には無理です」

「慣れれば平氣ですわ」

「慣れねばとかいう問題ではなくてですね」

ああもう人生でそんなにもてたことないから」「うう時にビリ」と  
たらしいのかさっぱり分からぬ！

軽くパニック状態に陥っているアドルバードに、ショリスネイア  
を撃退できる言葉はなかつた。

「ねえ、ショリー。人の兄を困らせないでもらえないかしら？」

ようやくやんわりとリノルアースが援護してくれる。

「黙りなさい。人の恋路を邪魔する人なんて毒沼にでも落ちればいいわ」

「それってアヴィラ風の言い回しなの？ 普通馬に蹴られるとか豆腐の角に頭ぶつけるとか」

「そんな品の無い言葉は使いませんの」

馬と豆腐は品の無いものか、とアドルバードはショリスネイアの矛先が変わったことに安堵してソファに深く腰を下ろす。

「毒沼ってそんなに高潔なお言葉だつたのねえ。じゃあそこのお姫様、ちょっとくら毒沼まで行つて頭まで浸かつてくれないかしら？」

リノルアースは相変わらずにいつと極上の笑顔で凄いことを言う。

「なつなんてことおつしゃいますの！？」

「んー。ちょっとといいかげんに鬱陶しいのよね、ショリーって」

「うつ鬱陶しい！」

いつの間にか立ち上がって言い争いを続ける二人を見上げながら、意外に気が合つんじやないだろうかと思つた。

口をつけた紅茶はもう冷め切つてしまつていて。

もう帰つてもいいだろうかと一人に聞くことは恐ろしく、アドルバードは静かに冷たい紅茶を飲み干した。



## 9・そういうお趣味でしたの？

30分くらい口喧嘩を続けたりノルアースとショリスネイアは息を切らしながら、一時休戦とソファにどさりと腰を下ろす。アドルバードが口を挟む余地もないほどに長々と言い争っていたのだ、喉は渴いているだろう。

「……新しい紅茶を頼んできますね」  
ぐつたりとしている二人を見て苦笑し、アドルバードは立ち上がる。「お菓子も追加してくれないかしら。甘いケーキがいい」リノルアースの甘えるような声に、兄馬鹿のアドルバードは素直にはいはい、と頷く。

「……羨ましい」

ぱたん、と扉が閉まる音がして、ショリスネイアの言葉は上手く聞き取れなった。リノルアースは首を傾げて何？と聞き返す。「羨ましいと言ったのよ。あなた達は仲が良いのね」

「そりや、双子だもの。生まれた時から一緒だし。ショリーだつてたくさん兄弟がいるじゃない」

あんな兄なんて要らないだろう、とリノルアースが笑う。  
しかしショリスネイアは冷たい紅茶を見つめて、悲しげに微笑んだ。

「血の繋がっているだけの他人よ。ほとんど母親は違うんですけど。アヴィラの王宮はいつも戦場よ。いかに勝ち上がるか、いかに陛下に取り入るか そんなことしか考えていない人間ばかり」  
リノルアースは黙つた。

それは、彼女には理解できない世界だ。

幼い頃からアドルバードと共に、両親からありつたけの愛情を受けて育つた。争いごとといえばアドルバードをおやつを取り合つごくらい。必ず夕食には家族全員が揃つた。仕事の多くない日だと

父でも中庭で一緒に過ごした。双子が成長して、城下町まで抜け出しても怒らない、温厚な両親だ。

「私の母はね、それほど優遇されてないの。母の子供は私だけだから。アヴィラの後宮で地位を得るには皇子を産むしかない。でも何十人もいる側室の中で、陛下の目にかかることなんてそうないわ。まして、母はもう美しかった頃とは変わってしまった。あとは影へ影へ、追いやられるだけ」

ショリスネイアの瞳は、唯一の家族を察じる優しい色だった。

「……なんだ。この雰囲気」

部屋を出た時とは打って変わって静かな様子に、アドルバードは訝しげにリノルアースを見る。

「何もないわよ、別に」

「ええ、何もありませんわ」

一人の姫は口をそろえて同じことを言つ。こうこうつ時だけ息が合いつてどうじうことだ。

「ところで王子。お返事はどうなりますの？ ハウゼンラントとしてもアヴィラと結びつくのは悪いことでは

ああ畜生、それがまだ残っていたか。忘れてくれると助かつたのに。

世の中そう上手くいくはずもなく、ショリスネイアは熱い目でアドルバードを見つめてくる。

普通の男なら簡単にくらうときてしまいそうな美しい姫に、アドルバードはあまりときめかない。理由は簡単　目が慣れてるのだ。双子の妹のリノルアースに始まり、騎士のレイやら　アドルバードの周囲には、種類は違うが最悪でも二人ほど絶世の美女がいる。まして片方は自分と同じ顔で、もう一方は世間を知るよりも早く、

幼い頃から見慣れた人だ。

基準がもともと高いのだ。じつなると生まれながらの面食いと言  
われても可笑しくない。

「王子！」

詰め寄るシェリスネイアから顔を逸らし、あーとかえーとか言い  
ながらアドルバードは頬を搔く。

なんか上手く断る常套句があつただろ？と頭の中を引っ搔き回し  
ああ、そうだアレだ。

「俺、好きな人がいますから…」

それを言うのが先でしょ、といつ眩きが隣から聞こえてくる。だ  
つたら教えてくれよ…！

シーリスネイアが目を大きく開いてアドルバードを凝視する。  
や、やめてほしい。何か吸い取られそうで正直怖い。

「……でしたら、どうしてこんな茶番を？ 本当はそんな方いらつ  
しゃらないんでしょ？」「う？」

「ちゃ、茶番って……確かに矛盾しますけどそれは父親命令で仕  
方なく…」

「都合の良いように物事を解釈する女って愚かよね」

すました表情のまま、リノルアースはアドルバードが運んできた  
新しい紅茶を飲む。

「たくさんの中を誑かしている女もどうかと思いますわ」

「失礼ね、求婚の手紙を全部暖房に使つてた私が男を誑かしてた  
すつて？『冗談じゃないわ』

男が勝手に騒いでるだけじゃないの、とリノルアースは心底迷惑  
そうに眉を顰めた。

再び矛先が変わつてほつと一息ついていたアドルバードをシェリ  
スネイアはその大きな瞳でもう一度見つめる。

「王子、私の…」

「アドルバード様、失礼します」

シェリスネイアの声を遮ったのは、涼しげな声。

それが誰なのか アドルバードは考へるまでもない。

「レイ」

助かつた、という響きがその一言に込められていた。  
控えの間でずっと待つっていたレイがいすれ救いの手を差し出して  
くれるだろうとは思つていたが 予想よりも随分遅い登場だ。  
いつもの決まり文句でアドルバードをこの部屋から連れ出していく  
れるだらうと、レイを見上げる。

「…………」

その視線に熱い何かを感じ取つたのか、はたまた女の勘か。  
シェリスネイアはその美しい眉をひどく歪めて、恋人同士のよう  
に見つめあう（ようには見えている）一人を穴が開くほど凝  
視する。

「……そういうお趣味でしたの？」

「違う！… ていうかどんな趣味だ！！」

明らかに誤解されているのでアドルバードは即座に否定した。

そういう趣味つて何だ。男色か！？<sup>アレ</sup>

別に私は気になませんわよ。女の方が相手だと間違いがあつては  
困りますけど、ええまあ男の方ならば大目に見て差し上げます。で  
も世継ぎが必要なら女の相手もしなくてはなりませんでしょ？」「  
だから違う！！ 僕は男なんかに惚れない！！」

完全にレイを男だと勘違いしたまま先走るシェリスネイアに、つ  
いいつものように声を荒げて否定する。シェリスネイアは特に気に  
した様子は無く、きよとんとしてアドルバードを見つめる。

「あら、でしたら今の熱い視線は」

「いやそれは違わないけどそんなに熱くは……」

「アドル様、論点がずれています。シェリスネイア姫、お初にお目に  
かかります。アドルバード様の騎士を務めております、レイ・ハウ  
アーと申します」

そう挨拶しながらレイは優雅に礼をする。

普通ならばその後当然のように手の甲に口づけを贈るのだろうが  
シェリスネイアはもちろんそのつもりで手を持ち上げたが  
レイはそれを無視した。

「……シェリスネイア姫、レイは女です」

自己紹介するならついでにそこまで言えよと憎たらしく思いながらアドルバードが咳払いとともに説明する。

「女性？　この方が？」

訝しげに見つめてくるシェリスネイアが納得していないのは一目瞭然だつた。いつもの騎士服ならまだしも　今はあえて男に見えるように大きめの服で曲線を誤魔化している。

レイは嘆息し、上着の釦を外す。

「レレレレレレ、レイ！？」

いきなり上着を脱ぎ始めた自分の騎士を見て声がひっくり返っているアドルバードはかなり情けなかつた。

大きめの上着が脱がれ、薄めのシャツ姿だけになつたレイの身体は明らかに女性のそれだつた。

「……嘘では、ありませんのね」

少し呆然としたままシェリスネイアは呟く。  
レイはにつこりと、お得意の作り笑顔で言つ。

「ご理解いただけてなによりです」

## 10・口説き方がなつてませんわ

「つまりアドルバー＝王子はあの騎士に恋をしてるところいつことなの？」

すっかり打ち解けたシェリスネイアとリノルアースは仲良く午後のお茶を楽しみながら談笑していた。この場に無粋な男集団はいない。

「わうよお、なつがい片思いなんだから。邪魔しないであげてね、シヒリー！」

「あら、片思いならまだ私が入る隙もあるんじゃなくて？」

「無駄よ。両思い目前の片思いつていつか両思いなのにアドルが無駄なこだわりを見せてくつついでいいだけだもの」

それは両思いなんじゃないので、ヒューリスネイアが面白くなさそうに呟く。

別に、本気の恋なんかじやないけれど。

「いい男とかそのへんに転がつてないかしら」

ふう、とため息とともに本音を零す。

「シヒリーならすぐに見つかると思うわよ。幸いお姫様だけじゃなくあちこちの王子も集まってきたるし、物色すれば？」

「皆あなたを狙つてきた男達でしょう。そんなの願い下げですわ」

「あらそれは敗北宣言をみなしていいの？ 世界で一番綺麗なのはこの私つてことよね？」

「誰がそんなこと言いました！？ あなた程度の女を狙つてくるような低レベルの男はごめんって言つているのよこちらは！！」

誰もが目を奪われるような美しい姫が一人、温かな温室の中で花に囲まれながら低レベルな言い争いを続ける姿はかなり奇妙だ。

まだ外は寒いハウゼンランドだが、温室の中ならばたくさんの花が咲き乱れている。とても手入れの行き届いている温室はリノルアースのお気に入りだった。

「やあ、リノル。こんなところにいたのか」

ぎやんぎやんと騒ぐリノルアースとシェリスネイアのもとに、人の青年がやって来る。

蜂蜜を固めたような金の髪に、緑色の瞳の青年だ。年はだいたい十八歳くらいで、すらりと背も高い。服は見るからに上等のもので、立ち振る舞いも優雅だった。一国の王子だと言つても遜色ないほどに。

「……気安く呼ばないでくれる、ハドルス」

リノルアースから発せられたとは思えないほどに低い、不機嫌そ  
うな声だった。

シェリスネイアはその変貌ぶりに驚きながらも、リノルアースと

ハドルスの二人を交互に見る。

「従兄弟なんだから、いいじゃないかこれくらい。久しぶりに会う  
んだ、もう少し喜んでくれてもいいんじゃないかな？」

「従兄弟だろうがなんだろうがあんたに愛称で呼んでいいと言つた  
覚えは無いわ。一度と会わなくとも私は困らないし」

親しげに近寄つてくるハドルスを追い払うかのようにリノルア  
スが手でしつしと振る。

その小さな手を掴み、ハドルスはお伽噺の騎士のように跪き、手  
の甲に口づける。リノルアースの肌が粟立つたのがシェリスネイア  
でも確認できた。

「まだ婚約者を決めてないみたいだな。どうせなら俺の妻にならな  
いか？」

「冗！ 談！ 觸らないでよ気持ち悪い……」

ハドルスの手を振り払おうとするが、強く握り締められたままり

ノルアースはその憎い拘束を解くことができない。

ルイを連れてくるんだった 後悔しても遅い。ルイには別の仕事を頼んでいる。

「そりやリノルは一国の王妃だ。悪い話じやないだろ？ 見知らぬ国に嫁ぐよりもむしろ」

ハドルスは王座を狙っている そんなことくらい、リノルアースも分かっている。そのために自分が利用されようとしていることに気づかないほど愚かなお姫様じゃない。

「馬鹿なこと言わないで！ ハウゼンランドを継ぐのはアドルバードよ！ あなたの出る幕じやないわ！」

「あのチビに何が出来るんだよ。運良くアルシザスとの同盟が成立したくらいがなんだつての。俺だつてあれくらこのことできるわ」

あんたのビニに、アドルが負けるつていうの。

ハドルスは分かつていないので。

アドルバードは自他共に認める見事なシスコンだ。しかし。リノルアースもまたブランコンであるのだ。ただ分かりにくいだけで、程度はアドルバードと大差ない。

共に生まれ、共に育つた大切な片割れだ 当然だらう。空いているほうの手で思い切りひっぱたいてやろうと 手を振り上げようとしたその瞬間だった。

ぱしゃ、と。

そんな音が聞こえたと思つたときにはハドルスは濡れていた。

「口説き方がなってませんわ。一昨日いらっしゃいます

ずっと傍観していたショリスネイアが少し冷めた紅茶をハドルスにぶっかけたのだ。

片手には空になつたティーカップがある。

「なつ……何しやがる!」

「あら、私に手を上げますの? 私はアヴィランテ帝国第三皇女、シェリスネイアですわよ。それなりの覚悟をもつておやりなさいな。全力であなたを潰しますわ」

シェリスネイアに掴みかかるうとしていた手が空を掴む。ハドルスの顔が青ざめ、ちらりとリノルアースを見た。

それが確認なのだということくらいリノルアースにもわかる。それでもこいつに助言する必要はない、リノルアースは無視した。「見る限りあなたはリノルの従兄弟でいらっしゃるようですが、たとえ縁戚であろうとも王族には敬意を払うべきですわよ。臣下であることに違いはありませんもの。まして国賓の前でこんな醜態本当に馬鹿馬鹿しいこと」

ふう、と色っぽくも感じるため息を零しながら、シェリスネイアは空のティーカップをわざと音をたてて置く。

「馬鹿なのはこいつとこいつの弟だけよ、ごめんなさいねシェリー。不愉快にさせて」

「お互い様ですね。そこあなた。今回はリノルに免じて見なかつたことにして差し上げますけど、次はありませんわよ? 私のお友達を困らせないでいただけるかしら?」

「こりと微笑むシェリスネイアに、ハドルスは一瞬だけ見惚れて慌てて頷く。

「し、失礼を……その、アヴィランテの姫とは知らず、挨拶が遅れまして」

「あなたからの挨拶など必要ありませんわ。礼儀知らずとは知り合いになる価値もありませんもの。早く出て行つてくださいない? 私はリノルと楽しくお話をしたいんですの」

そのセリフを聞いたハドルスの青ざめた表情を、アドルバード達に見せられなかつたのは實に残念だ。

何度も弁解しようと口を開きかけていたが 無駄だと思つたのだろう。ハドルスは肩を落として温室から去つていった。

「ありがと、シェリー」  
助かつたわ、トリノルアースがお礼を言つと、シヨリスネイアは照れて顔を逸らす。

「何のことです？ 私はただあの男が不愉快だつただけです」「いやあねえ、シェリーつたら照れちゃつて。可愛い奴う」

「……結局、あれは何なのかしら」「あれというのはハドルスのことだ。

二人の会話から従兄弟同士だということしか分からなかつた。

「んー……自信過剰で野心家で下心見え見えの最低の従兄弟つてとこかしら。今十八歳であるとおり王座を狙つてる愚か者よ」

「どこにでもいるのねえ、そういう男」

シヨリスネイアにはリノルアース以上の心当たりがあるのだろう。腹違ひの兄弟が山ほどいるアヴィラでの王位争いなんてハウゼンランドの比ぢやない。

「あんなんでも継承権は第一位なのよねえ。その下のルザードって弟が第三位。まあアドルが死なない限りアドルが継ぐことになるんだろうけど、どこから湧いてくるんだか、自信満々なのよ、あの馬鹿」

「……だから、王子には力が必要なんでしょう

シヨリスネイアが小さく呟く。

もしもハドルスが有力な貴族や、他国の姫君を妻に迎えると弱小貴族のレイを妻に迎えようとしているアドルバードが不利になるのは目に見えている。

王家の結婚が政略なのは昔からの決まりごとのようなもので本当に愛する人と結ばれる人はそれほどいるだろうか。

「アドルだけを、不幸にするつもりはないわ。力をつけて、あの子が一番幸せだと思える未来まで導くの」

「分かりにくい子ね、あなた」

お兄様が大好きなら大好きって言えばいいじゃない。

くすりとシリスネイアは微笑む。

その笑顔は少し大人びていた。

## 10・口説き方がなつてませんわ（後書き）

更新が遅くなつてすみません！

展開も遅くてすみません！

嫌なキャラが出てきました（笑）シェリーナイス。

「意見」「感想などありましたらどうづか一言でも。

## 11・できる限り俺の側にいる

「ハドルスに会つたんだって？」

出会つた一番最初にそれを心配そうに聞いてくる兄が、やはりリノルアースは好きだつた。

あの鬱陶しい従兄弟のことが嫌いで、リノルアースが苦手にしていることを充分に彼は理解してくれているのだ。

「ショリーが追い返してくれたわ。まさかあなたのところにまで来たの？」

「それこそまさか。ありえないだる。たまたま廊下でルザードの方と会つたから」

「……それはそれで災難ね。レイはまた口説かれたの？」

リノルアースは苦笑して問いかける。

兄のハドルスはリノルアース狙い、弟のルザードはレイ狙い随分と面食いな兄弟だ。

「見事にあしらつてたよ。あいつも相変わらずしつこい」

「アドルに言われたらおしまいよねえ、一体何年越しの片思いよ」

うつ、とアドルが言葉に詰まる。

年数で言つたら、それこそ誰にも負けないほどだらう。これが相手に少なからず思われているから良いのであって、相手に何とも思われていらないのにそれほど思い続けているんだとしたら、かなりしつっこい。

「ま、まるつきりの片思いつてわけじゃないし。今は」

「そうねえ、早く伸びるといいわね、身長」

「つるさい、と言いながらアドルバードはリノルアースの頭を小突く。

その時の感覚がいつもより少し違つていて、リノルアースはじまじと兄を見上げる。

「……少し、伸びた？」

「ええ！？ 牛乳の効果が今ここでやつと！？」

今にも小躍りしそうなアドルバードを冷ややかに見つめ、リノル

アースは嘆息する。

「いや、気のせいみたいね」

「期待させておいて結局それか！？」

いつものリノルアースの嫌がらせだと認識したアドルバードはがっくりと肩を落とす。

本当の本当は、少し伸びているみたいなのだが。

くすくすとリノルアースは笑いながらアドルバードと腕を組む。

「……なんだよ」

「なんでもないわ。温泉まで」一緒にしない？ お兄様」

「悪いけど、この後ウィルと約束してる」

ああそういうばそんな男いたな とリノルアースは記憶の片隅に追いやっていた存在を思い出す。

「ならウィルも一緒に。ショリーはとっても素敵な子よ？」

「……リノル、何を企んでる」

嫌な予感がしてアドルバードは妹を見る。

につこりと鉄壁の微笑みを浮かべたリノルアースの心情は読み取れない。

「何も？ とりあえずショリーとアドルをくつつけよつとは考えてないわ。そうなつたらなつたで面白いけど、今更アドルがレイを諦めるとか考えられないし」

逆は多少ありえそうよねえ、と不吉なことを言い出され、アドルバードは青ざめる。

「……ところでレイは？」

ソリで一緒にアドルバードをからかうと面白いのこ、といつまきながらリノルアースが辺りを見回す。

他国にいるときは違い、ハウゼンラングにいるときは別行動をとる事が多くなる。慣れた城内ならばアドルバードもリノルアースも人目につかずに逃げ出すことができるし（幼い頃から脱走を繰り

かえてしてきた成果だ） 穏やかな国柄か、危険もない。

「今ちょっと……」

不自然に言葉が途切れ、アドルバードは突然立ち止まる。腕を組んでいたリノルアースは首を傾げながらアドルバードを見上げ、そしてその視線の先にあるものを見る。

「あ」

背が高く、美しい銀髪の騎士。

それに言い寄るあの忌まわしい金髪。

「あんの野郎昨日に続いて今日もか！！」

火花が飛んでくる前にリノルアースはするりとアドルバードから手を離す。

疾風のごとくアドルバードは走り去り、リノルアースはその後ろ姿を見守った。

「いいかげんアドルバードなんて見放したらどうだ？ 今からでも俺のところに来いよ。不自由はさせないぞ？」

「剣の誓いを違えるつもりはありません。今も不自由しているとは思いませんし」

「でもあんなチビっ子だとわ……夜とか満足できないだろ？」

どうして気づかないのか。

その一言でレイが明らかに殺氣立つているのを。

何よりもレイは潔癖な女性なので、下品なことは大嫌いなのだ。

「ルザード様」

低く、冷たい声。

その声は明らかに警告だった。これ以上近寄るな、触るなという。

それに気づかない愚かな男はレイの顎を持ち上げる。抵抗という

抵抗は出来ない レイが抵抗すれば、それはおそらく大怪我に繋がる。

無意識に手が腰の剣に触れる。それを理性で食い止めた。「……」剣を引き抜けば、アドルバードに責任がのしかかる。

レイが抵抗できないのを知っているルザードは面白そうに笑う。顔に息がかかるほど近づく前に 何かに遮られる。

「俺の騎士に勝手に手を出すな」

遮つたものは アドルバードの手のひらだった。  
ルザードが舌打ちする。

「……………アドル様」

零れた声は思いがけず、弱々しかった。

「いいかげんにしろよ、ルザード」

「恋は自由なもんだろ？ 自分の騎士にはそれすら許さないってか  
？」

「どの口がそれを言つ。 レイは既にまつきりと断つてゐるだろ？」「アドルバードには少し似合わない 人を馬鹿にしたような笑みを浮かべて、レイの手を握る。

「これ以上はもう許さない。 言い寄るのが目的なら彼女に近づくな」  
行くぞ、と短く呟いてアドルバードはレイの手を引く。  
しばらく無言のまま、歩き続けて アドルバードは小さな資料室に入る。

「……………アドル様？」

大人しく着じて來たレイが不思議そうに見つめてきた。

「すぐ済む」

そう言いながらアドルバードは扉を閉め、相変わらず自分よりも背の高い騎士を見つめる。

「……………レイ」

名前を呼ぶと素直にはい、と答えてくる。

その彼女の頸に そつと口づけた。

ほんの一瞬、触れるだけだ。 それ以上はしない。

不意をつかれて反応を返せずにいるレイを見上げて、アドルバードは至極真剣に言う。

「……消毒だ。文句あるか？」

そこは、つい先ほどルザードが触れた場所。確かに触れられるのはレイも嫌だった。しかしあのままアドルバードが来なかつたら ルザードの本願は叶つただろう。たかがキス程度と、歯を食いしばつて堪えただろう。その覚悟からしてみれば、触れられたくらい

「…………いえ」

消毒するためだけに、一目のない所に行きたかったのだろう。「ルザードがいる間は絶対にもう一人になるなよ。できる限り俺の側にいる」

一応釘は刺したけどな、とアドルバードが呟く。それがそれほど効果のある人間じゃないことが充分に分かる。

「仰せのままに」

淡く微笑みながら答える。

アドルバードは満足したように頷き、入った時と同じようにレイを手を引きながら部屋から出す。

「随分と短い逢瀬だつたけど、もうよろしいのかしら？」

突然降りかかる声にアドルバードがびくりと身体を震わせた。

「リ、リノル！」

部屋を出てすぐの廊下でリノルアースが壁にもたれながら待っていた。

茶化す妹に怒鳴りつけながらも、レイの腕を放さなかつたのは  
せめてもの意地ともいえよう。

## 11・やある限り俺の側にいる（後書き）

長い間放置してしまってすみませんでした！！  
もう一つの連載が終わりましたので、これからはこちちらに本腰を入れて頑張りたいと思います！！

ハドルスもルザードも作者嫌いです……ウザイ。書いて腹立ちます（笑）

嫌な奴を書こうと思つて作ったのである意味成功してますけどね。

## 12・味方のふりして実は最大の敵

「密室に女連れ込んでどうのこうのっていう不名誉な噂を流されたくなかったら大人しく妹の言つこと聞いて欲しいんだけど? お兄様」

「……それアレだよな。結局俺に拒否権はないっていうアレだよな」

「あらやだアドルってば話が分かるうー! だから大好きよー!」

「本当におまえ良い性格してるよな……」

密室(と言えばそなるかもしない)に女(とはいえ騎士の格好をしている)を連れ込んで どうのこうのといつても顎にキスしただけなんだけど とにかく半分以上は事実なのでアドルバードも抵抗できない。

ただでさえあちこちの王子やら姫やらが集まっているこの時にならぬ噂を流されては面倒だ。リノルアースの場合すると言つたらなにがあるひとつと実行する。

「今日は実に控えめで可愛らしいお願ひだからそう身構えなくとも大丈夫よ。シェリーが雪が見たいつていうからバルトス山まで行こうと思つて。それについて来て欲しいなーつてお願ひしようと思ってただけだもの」

「おまえはアレか。俺とレイの恋路を邪魔したいのか。味方のふりして実は最大の敵だつたりするわけか」

「レイが男だつたら全力で略奪愛上等だけど、女だもの。シェリーとくつついても面白いけどレイが可哀想だから、その場合アドルを簾巻きにして冬の川に投げ込んでやる」

最初から最後まで真剣な顔でそう答えられるのでアドルバードも絶句する。

「ただ単純にシェリーとは仲良くなつて欲しいしその方が得だから

お願いしてゐんぢやないの。お姫様一人で外出は危ないしー」「リノル一人なら平氣そつだけど

「なんか今むかつくこと言われた氣がするんだけど氣のせいしから？ それともこの私が可愛い上に腕が立つて褒められたのかしら？」

「褒めた褒めた」

紙一重だけど。

アドルバードはわざとらしい笑顔を作つてとりあえず難を逃れる。「まあいいわ。付き合つてくれるでしょ？ 可愛い妹の頼みだもんねえ？」

「別にいいけど……ちょっと待て。そういうえばルイはどうに消えた？ まさかおまえどつかに捨ててきたのか！？」

本来ならばリノルアースの護衛についているはずのルイが最近姿が見えない。雪を見に行く云々にしろ、ルイの同行は至極当然のはず。

「ああ、ちょっと別の頼み」としててね。側にいないの「頼み」とつて……まあおまえが良いなら構わないけど」といつてもルイの所属は一応、国に仕える王宮騎士団なのだがもはやリノルアース専属の騎士になりつつある。

「じゃあ早速シェリーのとこに行きましょ。まだお昼にもなつてないし、今日出発！ もちろんオプションのレイは大歓迎」言つに事欠いて国でも凄腕の騎士をオプションか。

確かにアドルバードにレイは当たり前のようについてくるのだが。

「……今日は今から何か予定入つてたつけ？」

一方的に明日を予約されてしまったのだが、あちこちの王子やら姫やらと会談してばかりの最近では暇な日などない。

「これからウイルザード様とご予定が」

「ああ……ウイルならいいや。ていうか一緒に連れてけばいいだろいっそ。どうせ世間話だ」

「一応國賓なんですから、そう謾るにしてはいけませんよ」

一応なんてつけてるレイの方がよほど蔑ろにしてないだろ？が、  
といつつつこみは心の奥底にしまいこむ。言い返せば倍以上になつ  
て返つてくるのはいつものことだ。

「今日出発つてどこには何も異論ないわけ？」

少しそこには大きな反応を期待していたリノルアースがつまらな  
そうに問う。

「おまえが突拍子もないのはいつものことだからな」  
アドルバードがそう勝ち誇つたように言うのでリノルアースは少  
し面白くなかった。

移動は馬車で　　とはいかなかつた。

何しろ急遽連れ出されるウイルザードを含めた五名中四名は馬に  
乗れるのだ。唯一乗れないシェリスネイアだけがレイの馬に同乗し  
ている。リノルアースもアドルバードも体格的にシェリスネイアを  
乗せるのは無理がある。ウイルザードでも良かつたのだが　　出会  
つたばかりの男と一緒に馬に乗ろうなんて考えるお姫様はそういうな  
いだろう。

「　大丈夫ですか」

落ちる危険性も考え、シェリスネイアはレイの前に　腕に包み  
込まれるように座つている。

「特に問題はなくてよ。馬車よりも面白くて良いわ」

馬にも速さにも怯えることなくそう笑えるシェリスネイアはやは  
りどこかリノルアースと似通つたところがあるので。リノルア  
ースは小さい頃から乗馬をやつてるので一人で堂々と手綱をさば  
いている。

「バルトス山まではそつ遠くありません。しばらくご辛抱いただけ  
ればすぐに着きます」

「そこまで行けば雪があるのでね」

その声には少女らしい好奇心に満ちた響きがあり、レイも思わず微笑んだ。

「山の方が寒いですから、早く雪が降るし、なかなか溶けません。

雪を見るのは初めてでしたか」

「アヴィイラで雪が降つたら恐ろしいですわ」

ショリスネイアの真面目な返事にレイはそうですね、と答える。レイの綺麗な顔を見上げながら、ショリスネイアが問う。

「……あなたは、王子のことを愛していらっしゃるよね」

言つてから自分らしくなことと思つた。ビックリしてこんなことを聞いているんだろう。

アドルバードにはそれなりに好感がもてる。結婚してもいいだろうと思える。良い人だとも思つ。けれど 恋にはなつていないので

」。

「現時点では忠誠を誓つておつますとしか答えられません。主が変なこだわりのある人ですので」

「こだわり?」

観察してきた限り、アドルバードは柔軟な人だと思つ。何をこだわっているのか。そういうればリノルアースもそんなことを言つていた。

「ええ 私の身長を越すまでは、主従関係のままでこると

なんだそれは。

ショリスネイアは馬鹿馬鹿しくて口をぽかんと開けて呆然とした。ぐだらない。ぐだらなさ過ぎる。

「なんなのそれは。男の見栄?」

「さあ……私はもちろん気にしてませんし、アドル様のお気持ちは見てる限り分かりますので。アドル様がそうなさりたいというのなら別に」

確かに聴そつなこの騎士には気持ちなんて昔からバレバレだったんだろう。

面白い話だ 馬の上でなければ聞けないよつな。アドルバード

とレイは始終共にいるから、レイから「この話を聞きだすなんて容易ではない。

「そんな悠長に構えていると、どつかの馬の骨に奪われますわよ」  
「うつかり自分がその馬の骨になりかけたのだが、やはり人から奪つてまでアドルバードが欲しいという気持ちは湧いてこない。彼にあるのは恋愛感情というよりも家族に対する愛に近い。あんな兄がいれば、きっと少しほマシな生活だつただろう。」

「その時はその時です。奪われるものならどんな状況でも奪われますから。私にどうぞ重要なのはアドル様の幸せです」

なんて潔いのか。  
なんて凜々しいのか。  
なんて

「……あなたの方が男らしいんじゃなくて？」

レイが苦笑して、よく言われますと答える。  
その青い瞳が前を向き、つられてようとしてショリスネイアも見  
た。

白いベールをかぶつた山だ。  
「もう着きますね。あの白いのが雪ですよ」  
ショリスネイアはその白に山を奪われた。あれば。  
息を呑んで山の前の光景を見つめるショリスネイアの為に、レイ  
は馬をゆっくりと歩かせる。  
ハウゼンランドは何もない小国だ。  
けれどこの自然の美しさだけはどの国にも負けないだろ？

「……………」

なぜかそう言つのが相応しいと、レイは思った。

## 12・味方のふりして実は最大の敵（後書き）

本当にすみません（土下座）

本腰入れたいのに学校がーー！　バイトがーー！　気がついたら寝てたーー！

というわけで土田にできる限り書き溜めようと頑張つてみたりします。

更新が遅れてお待たせしている方々には本当に申し訳ないです。見捨てないでください。

### 13・むしろ肉食獣の子供？

バルトス山には新雪が積もっていた。  
最初はおそるおそる、といった感じでショリスネイアは雪に触れ、  
その柔らかさに思わず微笑んだ。

「……すっかり取られたな」

女三人で和気藹々と話しているのを遠めに、ウィルザードが少し  
ふて腐れたアドルバードに話しかける。

もともと二人は同行者というよりは見栄えのいい護衛のような役  
回りで一緒に来たのだが、護衛の一人であるはずのレイはリノル  
アースとシェリスネイアに独占されている。彼女の主人を無視して。  
「……レイはああ見えて人の懷に入るのが得意だから。すぐに懷か  
れるんだよ」

口数はむしろ少ない方だが、いじわるという時にびっくりするく  
らいにぴつたりな、その時に欲しい言葉をくれる。

どこか一線を引いていたシェリスネイアが心を開くとしたら、リ  
ノルアースでもアドルバードでもなくレイだろうとは思った。ただ  
これまで接する機会が少なかつただけだ。

「誰も手に負えなかつたおまえら双子を手懐けたんだもんなあ  
「人を野生動物みたいに言うな」

「むしろ肉食獣の子供？ 見た目は可愛いのに凶暴」

凶暴なのはリノルアースだけだ、とアドルバードは心中で抗議  
する。小さい頃は一人で悪さをしていたりもしたから、強く否定は  
できない。

二人に囲まれながらレイがちらりとアドルバードを見る。主人を  
放置していることに少なからず罪悪感を抱いているのだろう。  
目だけで気にするな、と合図すればかすかに微笑んだ。

だから。

「……そういうの不意打ち……」

赤くなつた顔を隠そつとアドルバードは俯ぐ。

意識が他に移つたからだろ？ どこか空気が違つ氣がある。  
殺氣？ 視線を感じる？ しかしつもなら一番に察するであ

る？ レイは何も気づいていないようだ。

分厚いコートの下に隠している投げナイフに触れる。

「………… ウィル。何か感じないか？」

暇そうに女性陣を眺めていたウィルザードが眉を顰める。

「 不覚」

気づかなかつたと言いたいのだろ？ 一人の様子に気づいたレイ  
も、周囲の異変を感じ取つたようだ。

放たれた矢をレイが素早く切り落とした。

それが合図になつた。

「アドル様！！」

「来るな！ そつちにいろ！」

命じなければすぐにでも駆けつけて来てしまいそうなレイにそう  
言い放つ。そんなことはない、彼女はリノルアースと 国賓であ  
るシリスネイアを守るだろ？ 心の底で望んでいる」ととは異な  
つていても。

一、二、三 全てで七人。どれもが雪に隠れるように白い

服装だ。木や岩陰に隠れていたんだろう。

馴染んだナイフを投げる。それは想像していたとおりの線を描い  
て刺客の首に命中した。

アドルバード、リノルアース、ウィルザード、そしてシェリスニア。狙いになりそうな人物ばかりでどう行動すればいいのか判断を鈍らせる。

ただ人を殺すことに躊躇する暇がないということだけは容易に分かつた。躊躇つたら最後、屍になるのは自分だ。運が良くて捕らわれ、國に身代金が要求される。

「きやああああ！」

シェリスニアの悲鳴が耳を貫いた。目の前の惨劇に彼女は身体を震わせている。その身体を抱きしめているリノルアースの顔も蒼白で、唇を噛み締めていた。

一人に危険は及ばない。レイが乱れぬ剣捌きで誰も、何も彼女達には近づけさせないから。

ウィルザードも足手まといになるほど弱くない。一人を切り伏せ、もう一人と剣を結ぶ。

これなら勝てる アドルバードがそう油断した時だった。

「きやあ！」

いなかつたはずの八人目がシェリスニアに剣を向けていた。

狙いは彼女か そう判明したと同時にアドルバードは舌打ちした。咄嗟に短剣を投げ、見事刺客の背中に命中したのにも関わらず動きを封じるまでには到らなかった。

「シェリスニア様！」

一番近くにいたレイが走る。

切り結んでいた敵に左腕を斬られた。

「レイ！！」

出血からしてそれほど深くは無い

レイは振り向き様に相手の

胴を斬り倒す。

けれどもう間に合わない。

剣は今にもシェリスニアと、それを守りつくるリノルアースに振り下ろされる。

「ルイー！」

こんな時にリノルアースが助けを呼ぶのはやはり彼女を守る騎士だった。

それは悲鳴にも似た声で。  
それはもう劇的に。

黒い何かがリノルアース、シェリスネイアの前に立ちはだかり、一人を斬ろうと下ろされた剣を弾き飛ばした。得物を持たない敵を容赦なく切り捨て、顔すらも隠した黒衣の男ルイ・バウアーは主に問う。

「お怪我は」

ちらりと見えたその緑色の瞳は間違いなく彼のもので。

「……ないわ」

まさか本当に助けに来るなんて思わなかつた。そもそも彼はここにいなはづなのに。

幻でも見ているのだろうかとリノルアースは呆けたような間抜けた声しか出なかつた。

他の刺客も三人によつて倒されていた。

真っ白な雪を染める血の赤に眉を顰めつつ、ルイを見上げる。

「……あまり、無茶はなさらないでくださいね。今俺は都合よく側にいなんですから」

ルイらしくない、少し怒つたようなその声に負けて素直に領きたがら、「ごめんなさい」と子供のような返事をしてしまつた。そんなの、私らしくもない。

「では仕事に戻ります」

そう言つてろくに顔も見せないままにルイは去つていいく。

そんな、お伽噺か何かの王子様じゃないんだから タイミング良く助けて、そんなにすぐ立ち去らなくていいでしょ？

「大丈夫か？」

本来ならすぐに駆けつけてくるであろうアドルバードではなく、嫌そうな顔を隠しもしないウイルザードにそう問い合わせられた。

「平気よ」

アドルバードは敵を一掃してすぐにレイのもとへ駆けつけた。こちらの唯一の負傷者だ。

リノルアースに寄りかかつたままのシェリスネイアはまだ顔色が悪い。狙われたのはほぼ間違いなく彼女だった。一番可能性が高いだろうとは思っていたが。

「ここはまだ危険だ。城に戻るぞ」

レイの手当を終えたアドルバードが彼女に寄り添いながらそう指示する。

誰もそれに異論を唱えず、馬を繋いだ場所まで戻る。

「シェリスネイア様、申し訳ありません。帰りはウイルザード様の馬にご同乗願えますか」

レイがそう切り出すと、シェリスネイアの顔色が一層曇る。

「……怪我は、そんなに深いの？」

怯えた表情のシェリスネイアに、レイはいいえと答える。

「そう深くはありません。私は騎士ですからこの程度の怪我には慣れています。けれど帰りまた刺客に襲われるようなことがあれば自分の身を守ることは出来ても、シェリスネイア様を守りながら戦うことは難しいかもしません。ですからより安全な方法を」「低い評価だと誰もが思うだろう。レイは片腕を負傷していたとしてもこの中で一番強い。けれどシェリスネイアが狙われていると分かった以上は彼女を守る為の陣形でなければいけない。

「ウイルザード様も、お辛いかもしれませんがご辛抱ください」

レイが丁寧に頭を下げる。

女嫌い（しかもシェリスネイアはどちらかと言えば嫌いな部類）のウイルザードにとつてはなかなか苦痛だろう。

「気にするな」

しかしここで駄々をこねるほど子供でもない。

ウィルザードは丁寧にシェリスネイアをエスコートして、自分の馬に乗せた。

その厚い上着の中で鳥肌がたつていたことは本人しか知りようがない。

## 14・あなたの目的は何？

「『めんなさい』」

もう城まで残りわずかとなり、一度休憩しようと馬を下りた時だつた。

らしくないともいえるほどにしおらしく、シェリスネイアがぽつりと呟いた。

襲撃にあつた原因は彼女だというのもはや分かりきつたことで、

彼女がそれを詫びたいと思う気持ちも分からぬでもない。

「気にしなくていいのよ、シェリー。私たち友達でしょう？」

優しい微笑みを浮かべたままリノルアースはシェリスネイアに歩み寄る。

その微笑みが心の底からのものでないといふことに他の二人はすぐには気づいた。

「なんて、言つと思つ？ 謝ると言つことはシェリーは予測していたということよね？ それでも私たちを危険に曝したんじよう？」

真っ直ぐに見つめてくる瞳にシェリスネイアは返す言葉がない。

「……否定しないわ。私を殺したい人間なんて山ほどいるもの」

苦笑しながら顔を逸らすシェリスネイアの手をリノルアースが掴む。

「誤魔化さないで。それが許される立場でもないわ」

突然襲われた。その結果アドルバードの騎士であるレイが負傷した。もしもシェリスネイアが事前に一言言つておきさえすれば回避できたであろうことだ。

「あなたの目的は何？」

南の大國の姫がこんな小さな国にやって来る理由。

どう考へても利益なんてどこにもなかつた。疲れるし金はかかる

しむしろ損ばかりだ。

「……アヴィランテで生き残るつとゆつのなら、王子を産めと。昔からそう言われてきたわ」

シェリスネイアはリノルアースから顔を逸らしたまま、ぽつりと咳く。

「女系の国で姫がいくら生まれても意味は無い。王子を産んだ妃は優遇され、高い地位を得て、死ぬまでの生活が保証される。私の母にはもはや私しか子供がない。このまま私がどこかに嫁げば母はきっと後宮の影で生きていくしかなくなる」

「 もはや？」

「 ずっと傍聴していたアドルバードが問う。

それはつまり、一人では シエリスネイアだけではなかつたと  
いうことか。

シェリスネイアはアドルバードの問いに曖昧に微笑んだ。南国の大輪の華が散りゆくその瞬間のような微笑みだつた。

「 私にはね、兄がいたはずなのよ

王子さえいれば 。

母がいつまでも呪詛のように玹いていた言葉。

「 兄は赤ん坊の頃に、北の大地へ向かう途中の砂漠で嵐に巻き込まれ、行方知れずとなつたの。王子がいなくなつてしまつた私たち母子の生活なんて急落していつたわ」

それでもシェリスネイアが美しく成長し、父の目に留まるようになつてからは楽になつた。男達からの貢物もあつた。

しかしシェリスネイアはいつまでも母の側にいるわけではない。

「 だからね、リノル。私は兄を探しここここまでやつて來たのよ

「王位につける人間が増えればそれだけ面倒ごとも増えるからな。それにシェリスネイア姫が嫁ぐ場所によつては、その行方不明の王子が王位につく可能性は大いにありえる。もともと田障りな姫を殺して、さらに不安の芽を摘み取ろうつて魂胆なんだろくな」

あれから特に問題なく城へと戻り、シェリスネイアは疲れたと言つて部屋に籠もつてしまつた。リノルアースもなんだか怖い顔で自室に籠もつている。

レイが淹れた温かい紅茶を飲みながら、ウィルザードが暢気によらぬ説明する。

「どこの国も似たようなもんだなあ」

「そりやそうだ。小さいのも大きいのも関係ないだろ」

それはつまりハウゼンランドが小さいと言いたいのか　　とアドルバードは思つたが、どう足搔こうと変えることの出来ない事実なので大人しく口を噤む。

「起死回生の一手、つてところかね。限りなく望みの薄い話だが」「十年以上も前に行方不明になつた王子が生きているなんて思えない。まして当時赤子だつたというのだからなおさらだ。

「そう思つても、縋りたかったんじゃないのかな」

叶わないと分かつっていても、敵だらけの生活の中で唯一の家族である母のために。

「なんだよ、随分と肩を持つな。惚れたか？」

「なんでそうなる!?　俺は別にそういう意味で言つてるんじや」

「

「ムキになるあたりが怪しい。騎士さんどうするよ?　浮氣されてるぞ」

さつきから甲斐甲斐しく紅茶を淹れたり上着を片付けたりしてい

るレイにウィルザードが話をふる。

「浮気もなにも。私とアドル様はそういう関係ではありますんで」

「……そつきつぱり言わると傷つくぞ俺も」

そりや確かに事実だけれども。少しあ気にかけてもいいんじゃないのか。

「…………おまえ何普通に仕事してるんだよ…… 手当てにいけ手当てに…… 応急処置のままじゃねえかソレ……？」

レイの腕にはアドルバードが急いで巻いた布が縛られているだけだ。その布もうすらと赤く染まっている。

「特に支障がなかつたので」

「あるだろ大いに！ 今すぐ医務室へ行け！」 レ命令！ 扉を指差しGOサインを出す。命令するのは正直好きじゃないのだがこうこう場合は仕方ない。 といつよつこのままだと本気で放置しかねない。

「しかし」

「城の中で危険はそうない！ ウィルもいる！ おまえが手当てしてくれる程度は支障ない！」

いいから文句言わずとにかく行け！！」

レイはまだ何か言いたそうにしていたがアドルバードが睨むとため息を零して部屋から出て行つた。

「なんていうか相変わらず自分のことは後回しだなあ」

呆れるというよりも感心してウィルザードを見送る。

「そりなんだよ嬉しいんだけどそれってどうよつていうか傷跡残つたらどうすんだよもう少し気をつかえつていつも言つてるのに別に傷なんて残つても俺は全く気にしないけどさホントいつも俺のことばっかり……いや嬉しいんだけど、嬉しいんだけどさ……」

「鬱陶しい」

ノロケとしか思えないアドルバードの言葉をウィルザードはまざつさりと切り捨てた。

「あー……」めん。つい本音が……で、リノルはどうするつもりな

んだる。まさか途方も無い兄探しの手伝いなんかするつて言いだすんじやないだろうな！？ それつてつまり俺も強制参加だろ！？

「……ホントおまえらの力関係がよく分かるよ。たぶん 手伝つんじやないか？」

アレも相当なブランコンだし。

ウイルザードの眩きにアドルバードは首を傾げる。自分がシステムだということはもはや否定しようがないが、リノルアースまで？「そもそも砂漠で消息が絶つたつていうのにハウゼンランドに来たつてことはそれなりに情報があるんだろうよ。そのうち聞いてみりゃいい」

「 手伝つ気は？ どうせ暇だら？」

一人でも多くの生贊を提供して自分への負担を減らそうとするアドルバードに、ウイルザードは苦笑する。魂胆が見え見えだ。こいつは腹の探りあいには向かないだろう。

「 国賓に雑用させる気か。悪いがごめんだけね」

「 なんで」

珍しい とアドルバードが素直に驚く。ウイルザードはなんだかんだで付き合いはいい奴だ。

「 苦手なタイプの女×2はさすがに嫌だ」

ああー……とアドルバードは妙に納得した。

あの二人が今田のような調子ではなく、いつもの通りの様子ならばウイルザードとつてそれは生き地獄だろう。

「 でもまあ、暇で暇で仕方なかつたら少しきらいに付き合つてやるよ」 そう言いながらウイルザードが退室しようと立ち上がる。

タイミング良く手当てを終えたレイも帰つて来た。随分と早いのできちんとやつてきたのかとチェックをしてみたが 問題なかつた。

「 ジャあなアドル。無事を祈る」

「 ……そりやどうも」

アドルバードは苦笑いで手を振りかえす。

「……何の話です？」

レイが珍しくきょとんとした顔で一人を見ていた。

## 15・自分の武器が何であるか知っていた

兄のことは覚えていない。

生まれる前に行方知れずになつた人のことを知るはずもない。母も兄に關しては口を噤んでしまつて、シェリスネイアに話してくれることはなかつた。呴く言葉といえば、兄さえいればの一言だけだ。リノルアースやアドルバードのように、家族に対する絶対的な愛情があるわけではない。むしろシェリスネイアの中にあるのは冷めた感情だけだ。

それでも　自分がいなくなつた後に母が生きていけるだけの手立ては用意しようと。それが自分を産んでくれたことに対する恩返しだと　そう思つてシェリスネイアは生きているかも分からぬ兄を探しにきた。

もしかしたら　それすらも言い訳かもしれない。  
閉鎖的な王宮から少しだけ出てみたかつた。外を見てみたかつた。空から降る氷の結晶はどれほど美しいものだろうか　。  
だから目的という目的も存在しなかつた。兄を探しているなんて、そんなことを口にしてしまつたのはたぶんきっと。

「……少しだけ、羨ましかつたのよ」

お互いがお互いを思いあうあの双子が。  
妹を見つめる優しいあの兄の瞳が。  
それがもしかしたら自分にもあつたものだったかも知れないと、  
そう思えて。

らしくない　本当に自分らしくない。

家族の愛情なんて、とうの昔に望まなくなつていたはずなのに。

『ああ　あの子をえいてくれれば、こんな生活送つていなかつたのに』

『陛下は今でも私を愛してくれていただらうに』

『どうせ生まれるなら王子であれば良かつた。いくら美しいても姫では意味が無い』

『どうしてあの子はいないの』

物心がついた頃には、呴かれる毒を持ったその言葉たちに慣れてしまつっていた。

母に心のそこから愛されていないことに気づいたのも早くだ。それでもシェリスネイアには後宮の中で生きていけるだけの美しさがあった。自分の武器がなんであるのか幼い頃から知っていた。家族なんてただ血が繋がっているだけの他人だと　そう考えてきたシェリスネイアの生き方をこの北國の人間は悉く潰してしまつた。

同じ王族なのにどうしていつも違うのだろう。

あの二人はあんなにも両親に愛されて、周囲から守られているのに、自分の惨めさといつたらなんだろう。

羨ましい。

そんな感情を、シェリスネイアは今まで知らなかつたのに。

「　それで、シェリスネイア姫の兄君が本当に生きていると思つ  
か？」

古い資料を掘り出しながら、同じ作業に文句一つ言わず淡々となすレイに問いかける。

「さあ、どうでしょうね。まるで望みがないわけでもないと思いますが、なにしろ随分昔のことですし、生きていたとしても本人がアヴィラの王族であつたことを覚えているとは思えないのです」

なにしろ行方不明になつたのは話すこともできない赤子の頃だ。

「砂漠で行方不明ねえ……確かにうちの南の方は中央砂漠との行路もあるし、近隣の国に比べて国境の警備も厳重じやないから入りやすいかもな」

「国境の警備がなつてないということに少しは危機感を覚えたらどうですか」

ため息と共に吐き出されたレイの忠告をアドルバードはさらりと聞き流す。

ハウゼンランドは攻め入つてもそれほど利益のない小国で、今では大国アルシザスの後ろ盾もある。まして冬になれば他國の人間では凌げないだろう大雪の壁があるのだ。攻略しにくい国ではあるだろう。

「えーと……十五、六年前か？俺達が覚えているわけないしなあ」「アドル様もリノル様も生まれてませんよ　　ああ、確かに中央砂漠で大きな砂嵐が相次いだみたいですね」

手元の資料に目を落としながらレイが呟く。彼女も幼すぎて記憶にはないのだろう。

「どれ。ああ、ホントだ。これのどれかに王子が巻き込まれて、行方知れずになつたってことか。それにしたつて何の情報もないけど」「……亡命であつた、ということは考えられませんか？」

「亡命？」

アドルバードが眉を顰めた。

他國からの侵略の心配もないような大国、アヴィランテの王子が？「アヴィランテには既に何人かの王子がいます。どれも生きているかもしないシェリスネイア姫の兄君より年上です。確か王子は皆

年齢は近かつたと思います。……当時たくさん生まれた王子は邪魔者であつたとしても排除するのは難しかつたでしょう。しかし、その後何年かして生まれた王子は……先に生まれた王子、または王子の後ろ盾によつて暗殺されていたとは考えられませんか？」「しかも送り込んでくる敵は王子の数だけいるつてことか？」

「ぐくりと、アドルバードは息を飲んだ。

王家といつものけつこう血生臭いものだと 知識として知つてもやはり実感がない。自分がどれだけ優しい世界で生きてきたかを思い知らされる気がした。

「おそらくは、シエリスネイア姫に聞いて確かめてみましよう。生まれてすぐ死んだ王子はいか、いたとしたらそれは何人か」レイは持つていた資料を閉じて、脇に置いて、必要ななくなつた資料だけ片付け始めた。

「推測として、シエリスネイア姫の兄君はそういう人間から逃れる為に いや、逃がされて、たぶんハウゼンランドあたりを目指していた。そして中央砂漠を越える際に砂嵐に巻き込まれた？」

「それほど無理のある仮説ではないと思ひます。シエリスネイア姫もここまで辿り着いて、ハウゼンラングへやつて来たのではないでしょうか」

頭の切れる人みたいだからな、とアドルバードは呟く。

「じゃあ、シエリスネイア姫のことく

」

「今日はそつとしておいたらどうですか。行つても会つてもらえないかもしれませんし」

行こうかと言おうとしたアドルバードの言葉をレイが遮る。

「それよりも、行きたいところが」

話しながら出した資料をほとんど片付けたレイは、何冊か日ぼしの資料を取り立てる。

「ああ、別にいいけど 一体どこに？」

立ち上がりレイの後ろに続いて部屋を出る。

思い出したんです、というレイの咳きにアドルバードは首をかし

げた。

「十五年くらい前に、父は中央砂漠まで調査に向かっています。おそらく多発した砂嵐の件でしょう。行けば何か聞けるかもしれません」

「ディーグが？」

「当時はまだただ王妃の騎士であつたはず。今は騎士と共に王宮騎士団長まで兼任しているが。」

「ええ。今頃はたぶん団長室にいると思いますから」

「ああ……じゃあ俺も一緒に行くよ」

「……嫌なら別に部屋で待つていて下さつてもかまいませんが？」

アドルバードの空気の変化に敏感に気がついたレイがちらりとアドルバードを見て言つ。

「嫌つてわけじゃやないけど。ディーグは会つたびにやれ肉を食えだの牛乳を飲めだの稽古をつけてやるだのうるさいから……」

小さな頃から好き嫌いだのには両親よりもつるさかつた。ディー

クに稽古をつけてもらつた次の日には筋肉痛で一日中動けなくなる。「あれでもアドル様を心配してんですよ。稽古はむしろつけてもらつた方がいいんじゃないですか？ 最近怠つてますよ」

ばれていなかつたが、やはりレイには隠し通せるはずもなかつたか とアドルバードはしどろもどろに言い繕つ。

「いやそれはホラ、ちょっといろいろ忙しくて」

「適度な運動した方が身長は伸びると聞きますけど」

「筋肉が悲鳴を上げるまでの運動は適度なのか？」

さすがにそのアドルバードのぼやきにはレイも苦笑する。

最近はなおさら 彼の一人娘に手を出しちゃったことが後ろめたくて顔を合わせずらい。親馬鹿というわけではないのが救いだらうか。

「こぞとなつたら助けてますよ。たとえ父からでもね」

そう微笑むレイが心強い。さすがに剣聖と讃えられる男に立ち向かうほどの勇氣はアドルバードにはなかつた。



## 16・男なら黙つてこの顔に騙されねばいい

アドルバードとレイが城から出た頃、事件は起きた。

「きやあああ……」

若い女官の悲鳴が響き渡り、一人物思いに耽つていたシェリスネイアは現実に引き戻された。

「何があつたの？」

寝室から出て騒ぎの中心であろうう女官に問う。彼女の手には色鮮やかな布があつた。模様に見覚えがある。

「……それは」

シェリスネイアよりも先に駆け付けた女官が涙ぐむながらボロボロになつた布切れを握り締めている。

「……シェリスネイア様のご衣装です」

それは確かにシェリスネイアが国から持つてきた衣装だった。「すべて切り裂かれてます……誰がいつたいこんなひどいことを」シェリスネイアは苦笑した。心当たりがありすぎて犯人など見当もつかない。衣装を盗まずに破いたあたりハウゼンランドに来た王族の誰かからの差し金だろう。

どこに行つても結局自分が生きてる場所は汚いのだと思い知らされたようで、シェリスネイアは密かにため息を零した。

短い悲鳴が聞こえて、ウイルザードはその部屋まで駆け付けた。女嫌いとはいえ、悲鳴を無視するほど非道ではない。

そして辿り着いた先が城の客間の中では一等豪華な部屋だということに気付いて、自ずとその部屋の主が分かつてしまつた。

「何があつたんですか、アヴィラの姫君」

開け放たれた扉からウイルザードが話しかけると、シェリスネイアは顔を上げ、驚いたように手を丸くした。

「……失礼しても？」

返事のないシェリスネイアにウイルザードが入室の許可を求める  
と、シェリスネイアは慌てて頷いた。

「どうぞ、ネイガス王国の王子 とてもお茶を出せるよつな状況  
ではありますんけど」

ウイルザードはゆっくりと部屋に入り、泣いている女官から切り  
裂かれたシェリスネイアの衣装を受け取る。

「これはまた 派手にやられましたね。とりあえずリノルアース  
にでも衣装を借りてはどうですか？」

ため息まじりのそのセリフにシェリスネイアは眉を顰めた。

「……言わなくともそつさせていだきますわ。お嫌なら無理に  
気遣つていただきかなくても結構ですよ」

ウイルザードがシェリスネイアに対し良い感情を抱いていない  
だろうことは容易に想像できた。他の男とはまるで違う反応を  
逆の反応をするから分かりやすい。他の男が好意を寄せているのだから、逆のウイルザードは嫌悪だ。

「ああ、誤解させたのなら謝罪しますよ。俺は確かに女は苦手です  
し気の強い奴なんて尚更です。けど今はむしろこんな子供じみた馬  
鹿なことをする奴の方が不快ですね」

さらりとした口調に毒気を抜かれてシェリスネイアは黙る。気の  
強い女 シェリスネイアがそれに当たるだらうことを隠せな  
いあたりがいつそ清々しい。

「……リノルのところへ行きますわ。エスコートしてください?」

「謹んで遠慮させていただきます。俺はあいつが一番苦手なんで  
「絶世の美女の頼みをそつ簡単に断るなんてどうかしてるんじゃな  
くて?」

「怖いからどうしてもとおっしゃるなら扉の前まで」一緒にしますが  
?」

シェリスネイアはさつと顔を赤く染めた。図星をつかれて余計にこの男が憎らしくなる。

男なら黙つてこの顔に騙されればいいのよ！

「怖くなどありませんもの、結構ですわ！　女性の頼みを無下にする男など始めからあてにしておりませんもの！」

赤く染まつた頬を隠すようにシェリスネイアは顔をそらす。女官に美しい衣装であつたものの残骸の片付けを命じて、シェリスネイアはリノルアースの部屋へと足早に歩く。

その数歩後ろに、ウィルザードが着いて来る。

「…………」

「…………」

ただ黙々と歩くシェリスネイアを追い越せばいいものの、一定の距離を律義に守つてウィルザードは歩く。その様子にシェリスネイアの苛立ちは募る一方だ。

「　いい加減にしてくださいない！？　後ろを歩かれると鬱陶しくてたまりませんわ！－」

シェリスネイアの限界の壁は簡単に崩壊し、振り返つてウィルザードに怒鳴る。

「大国の姫なら人を率いて歩くなんて慣れてるでしょう。お気になさらなくて結構ですよ。たまたま、偶然、行く方向が一緒なだけです」

見え透いた嘘を、と思いながらシェリスネイアはまた歩き出す。嫌な男だ。嫌な男だけれど　シェリスネイアに騙される馬鹿な男よりも、ずっと面白い。こんな男はいなかつたと思わず楽しんでいる自分をどこかで感じていた。

「あらま、大変ねえ。でも私の服じゃシェリーが着るには小さいんじゃないかなしら？ それにアヴィラの衣装にはコルセットはないでしょ？」「コルセットはそれぞれ特注で作るものだし」

リノルアースの部屋へ行くとリノルアースは暢気にそう説明した。ウィルザードはリノルアースの部屋まで辿り着くと素知らぬ顔で立ち去つた。

「みんなのをしていてよく息ができるわね」

「慣れよ慣れ。一応コルセットをしなくてもいいドレスが何着かあるから、それを持ってくといいわ。私は着ないし」

そう言いながら侍女に命じてドレスを持つてこさせる。

薄紅、水色、赤、色とりどりの美しいドレスが何着も運び込まれ、シェリスネイアは首を傾げてリノルアースに問う。

「あなたが着ないドレスがどうしてこんなにあるの？ 見たところあなたが着るには少しだけ大きいみたいだし」

「あー、これはアドルのだから」

さうつとリノルアースが零した言葉にシェリスネイアが硬直した。

「…………アドルバード王子が？ 着るの？ ……これを？」

「そうよ？」

リノルアースがきょとんとした顔で答える。  
ちょっと待て。

「…………王子には女装癖があるの？」

シェリスネイアの真剣な顔を見てリノルアースが頬を搔く。

「あー……いや、そういうわけじゃないってね。まあ色々あってね。私は変装してもらつた時のがそのまま取つてあるだけ。ホラ、双子だからさ、服装変えると親しい人以外は結構騙せるもんなのよ。普

段着るんじゃないから。むしろアドルは女顔なのがものすつゝ」  
ンプレックスだから

説明し忘れるところだつたとリノルアースが笑う。そこはぜひと  
も忘れないでいて欲しい。

「そう……ではお借りするわ。ありがとうリノル」

色々なことにほつと一安心しながらシェリスネイアが微笑む。

「どういたしまして。後で部屋に運ばせるわね。作りは単純だから  
簡単に着れるとと思うけど、朝にうちの女官に行かせるから着付けて  
もらつて」

アヴィラから連れてきた女官じゃ着せられないでしょう? とリ  
ノルアースに指摘されてシェリスネイアも苦笑する。

「心配しなくても嫌がらせの犯人はこっちで突き止めるから。何と  
なく予想は出来てるけどね」

「いらっしゃしてみれば日常茶飯事だもの、急がなくてかまわない  
わ」

アヴィラではむしろもつと危険な目に遭つてている。迂闊に食事が  
出来ない時期だつてあつた。

「こっちの問題でもあるのよ、シェリー」

リノルアースが苦笑する。国賓を危険な目に遭わせたともなれば  
本来なら責任問題は免れないだろう。

「ならお任せするわ。それじゃあ失礼させていただきますわね」

ハドルス山でのこともあり、正直あまり面と向かつて会話するの  
は辛い。リノルアースは本当に人の心の奥底まで見透かしていくよ  
うだ。

「シェリー」

呼び止められて、シェリスネイアはぎこちなく振り返る。

「……本当に見つかると思うの?」

誰がとも何がとも言わなかつた。ショリスネイアの兄のことかも  
しれないし、嫌がらせの犯人のことだったのかかもしれない。  
けれどショリスネイアは前者に思えた。  
だから。

「思わないわ」

初めから望みの無い賭けだと知つていて。  
だからそう答えた。希望なんて初めからないのだから。

## 17・物分りのいい人間のセリフ

ディーア・バウアー。

若くしてその実力から王妃の騎士となり、その剣の腕は誰もが疑うことなくハウゼンランド一である。功績を讃え、国王から『剣聖』という特別な称号を与えられるほどだ。誰も知らないような弱小貴族であつたバウアー家はそれ以来誰もが知る貴族となつた。家柄としては弱小のままだが。

四十三歳になるディーアは衰えを感じさせない。筋肉は若き時よりも洗練され、剣の腕は一日経つごとに上へ上へと昇っていく。

その人を一言で表せば、岩だ。とにかく身体がでかい。小柄なアドルバードからするととてもなく圧迫感がある。纖細な美しさを持つレイの父とは、とても思えない。

「お久しぶりです。殿下。お元気そうでなにより」

騎士団長室を訪れるディーアは娘に声をかけるよりも先にアドルバードに挨拶する。お互いに仕事中だという意識があるのでだろう。「アルシザスから帰つて来た時に挨拶に行つただろ。まあ、それも大分前になつたか……少し話があるんだけど、今時間は？」

「ないとしても殿下からの頼みならば」

ディーアは立ち上がり、アドルバードに応対用のソファに座るよう勧める。アドルバードが座つてからディーアも腰を下ろした。

「レイ、おまえも座れ」

後ろに立つているレイにそう命じる。ディーアを相手にするならレイに任せた方がいい。昔のことを聞くにしろ、彼女の方が覚えているだろ？

レイは素直にアドルバードの隣に腰掛ける。

「……なんだ。ついに殿下のところに嫁にでも行くのか」

アドルバードとレイの真剣な様子に、ディークはつっさりと誤解した。

「いやまだだから！　早いだろ俺まだ十五歳だし！　ていうか知つてたのかディーク！」

アドルバードが動搖を隠しきれず、大慌てだ。

「アドル様、落ち着いてください」

「そりやまあ昔から見てれば嫌でも気づくでしょう。ばればれですよ。特に殿下が」

冷静な親子につっこまれてアドルバードは俯き、そのアドルバードの横でレイが律儀に説明する。

お願いだからそんなに言いまわらないでください。そりやあもしかしたら未来の義父なんだから仕方ないのかもしれないけど！  
「そりやあと何年かかるんだ。とつと結婚しちまえ」

「それが父親の反応ですか、普通は一人娘が嫁ぐ時は一番嫌がるものでしょ。そろそろ本題に入つてもいいですか」

おう入れ入れ、とディークの態度の気安い。

「十五、六年前に中央砂漠に調査に行きましたよね？」

レイは持ってきた資料を広げながらディークに問う。

「ああ、それがどうした」

「話を始めると長くなるんですが」

シーリスネイアの事情と目的、そのうえで考えられる推測をレイはかいつまんで説明した。

アドルバードは緊張で口が渴いた。おそらく父と向き合いつつも、ディークとこうして向き合つことのほうが緊張する。

「なるほど、悪くない推測だな」

一通りレイから話を聞いたディークが微笑みながらそう言つ。  
「多発した砂嵐は、何十年かに一度はあるひとつてことのない自然現象だ。それに巻き込まれて死んだ人間は山ほどいるだろつ……それよりもレイ、おまえは結論に辿り着いているんじゃないのか?」「ディークはレイを見ながら笑つ。奥底に何かを隠し持つたような顔だ。

「……憶測にすぎません」

レイは躊躇つたようにそう呟く。アドルバードだけが置いていかれたまま、親子二人は結論らしきものを掴んでいるようだつた。

「もう少し他の人間に分かりやすい会話をしてくれないか」

馬鹿にされるのは重々承知でアドルバードが控えめに主張する。

「殿下、もう少し柔軟になられた方がいいですぞ」

「持つている知識をすべて統合すれば分かる話ですよ」  
案の定二人同時に「こまれる。頭の回転が速い奴らについていけない自分が情けない。

「……まず、このハウゼンランドで南国出身のものは田立ちます。容姿がまるで違いますから」

レイが丁寧に説明を始めて、アドルバードも素直に頷く。

「そしてショリスネイア様が探している兄君は十五年くらい前に、ハウゼンランドに近い中央砂漠で行方不明となつた……ここまではいいですか?」

「それくらいは分かる。それで?」  
「ここから応用です、とレイが呟く。

「十五年前に、砂漠で拾われたおそらく南国出身であるうつ人を知りませんか?」

そんなに都合よくいるわけがないだろつと言おうとして たつ

た一人、当てはまる人間を思い出す。

濃い肌、黒髪、十五年くらい前彼は赤子の時に捨てられた。まさか、と呟いていた。

信じられるだろうか？ こんな偶然がそう転がっているわけがない。

「…………ルイ？」

口の中が渴き切っていた。

アドルバードの呴きに、ディーケもレイも何も言わない。当たつているとも、外れども。

「……父上は気づいていたんですか。ルイの出生について。だから父上が保護をした。ハウゼンランドで城の中に次いで安全であろうバウアーハー家に。養子にしたのも追っ手などから誤魔化すためでしょう 違いますか？」

レイの淡々とした口調が何故か重かった。

ハウゼンランド一の剣の腕前のディーケの側にいることは、もしかしたら城内よりも安全だつたかもしれない。加えてバウアーハー家は名はそれほど知られていなかつた貴族だ。他国の者の目を欺くにはうつつけだろう。

ルイは幼い頃はあまり家の外に出ることを許されなかつた。だから、アドルバードやリノルアースと幼い頃から一緒だつたレイとは違つて、初めて出会つたのは随分と大きくなつてからだ。

それが、ルイの身の安全のためだとしたら？

「……拾つた時に側にいた男が、ただ守れと言つていた。追つくるだろう輩に渡してくれるなど。その男はそう言つてすぐに死んでしまつたがね。ルイを拾い、育てながら調べたさ。おまえと同じ憶測にも辿り着いた しかし、証拠はない」

「……ルイは、このことを知っているんですか」

レイが静かに問う。

ディークはゆっくりと首を横に振った。

「話すつもりなどなかつたわ。こんなことにでもならない限りは。あれがもし本当にアヴィランテの王子だとしてどうする？ 命の危険があつて逃げてきたといふのに、アヴィラに戻すのか？ 俺は助けた命をむざむざ殺すつもりはない」

あれはもう俺の息子だ、とディークが呟く。その言葉に嘘偽りは感じなかつた。

「ですが、もはや話さなければならぬ事態です。ルイにも、シェリスネイア姫にも。ルイはもう赤子でも子供でもありません。選択する権利は彼にあるべきです」

冷静だな、とディークは呟いた。

アドルバードもそう思ひ。レイにとつて、ルイは大切な家族ではなかつたのか？

重い空氣のなか団長室を出て、アドルバードの部屋へと帰る。レイの言うことが間違いでないのは分かつてゐる。ルイがもしアヴィラの王子だとして、その可能性に気づいているのに隠そつとすればそれは国際問題になる。けれど。

「……おまえは辛くないのか」

アドルバードは小さく呟いた。

それでもレイには聞こえてゐるはずだ。今は一人の足音くらゝしか音らしい音は存在しない。

「何を、辛く思うんですか」

レイも小さく答える。

「ルイの生まれがどうであれ、この話を聞いたルイの選択がどうであれ、ルイ・バウアーが私の弟であり、父上の息子であることに変わりはありません。彼が私を姉と慕ってくれることも、父を尊敬している気持ちも、消え去るわけではないんですから」

物分りのいい人間のセリフだ。

それでもアドルバードもそれで納得してしまつ。いつもと変わらない日常となつても、遠く離れる結果が訪れても、彼が彼であることに変わりはない。

「彼にとって最良の道を選ぶべきなんです。そしてそれを祝福し、応援するのが家族の務めというものでしょう」

アドルバードはレイの横顔を見上げる。

何もかもを、覚悟しているような、そんな顔をしていた。

何も考えない。  
何も思わない。

あらゆる可能性をこの脳から排除する。  
それでもなお思考しようとする脳をどうにか制御する。

知りたくない。  
気づきたくない。

リノルースは明かりを消し去った部屋の中　寝台の上で膝を抱えながらじつとしていた。

女官は皆下がらせた。リノルースを気遣う彼女達の存在は時に鬱陶しい。一人になりたい時もある。

否、本当は一人でいたくない。ただ一人の人に側にいて欲しい。たぶん彼はリノルースが黙つたままでこんな暗い部屋の中にいたら大いに動搖して、右往左往するのだろう。そんな光景が容易に想像できて少しだけ笑えた。

そして彼に仕事を言いつけていた自分に感謝し、同時に恨んでしまう。

「……ルイ」

呼んでも返事なんてあるわけがないのに、何故かリノルースの唇は騎士の名を紡ぐ。

闇がリノルースの鈴の音のような声を吸い取る。小さな声は飲み込まれたままだ。

当たり前かとリノルースはため息を吐き、膝に頭を預ける。

「呼びました？」

いつもの低い声を聞いても、空耳だろ？と思つた。いるわけないとこう意識がそれを幻として処理した。

「……リノル様？」

暗闇の中、彼の緑色の瞳と目があつて 現実だと認識される。

「ル、ルイ どうしてここにいるの…？」

仕事しなさいよとリノルアースはつい照れ隠しでいつも憎まれ口を叩いてしまう。

「いえ、その……一応リノル様の安全を確認しておこうかなと」

「怪我なんてしないわよ。昼間も確認したでしょ？」

「……そうですけど、呼んだでしょう？」

柔らかな微笑みを浮かべてルイが言う。

ああ、もう まさか本人がいて聞かれているなんて。一生の不覚だ。

「……何よ。呼んだら悪いの？」

リノルアースが照れ隠しに睨み付けると、ルイは優しく微笑んだまま、いいえと答える。

「いつ、どんな時でも俺を呼んでください。あなたの声が聞こえたなら、何もかもを投げ出しても参上します 俺はあなたの剣であり、盾ですから」

こんな時にそんなこと言わないでよ。思わず縋りつきたくなるような。

「……聞こえないほど遠くにいたら？」

返事は分かつていた。けれどリノルアースはふて腐れたようにそう呟く。

「命令でもない限り、そつ遠くには行きませんよ」  
即答するルイを見つめてリノルアースは黙り込む。

迷いなくきっぱりと言いつけてくれる彼が好きだと思つ。本人には決して言わないけど。ルイにしてみればなんの含みもない言葉だったんだろう。リノルアースが密かに不安に思つることにも鈍感な彼は気付いていないに違ひない。

なんとなく、嫌な予感はしていた。だからルイをシェリスネイアには会わせなかつた。

分かつてしまつた。

こんな時は自分の回転の早い脳を恨みたくなる。

どんなに考えないようにしても自分の頭は答えを導き出す。

たぶんルイは、シェリスネイアの兄だ。

アヴィランテの王子だ。

ハウゼンランドなんて小国の姫では手も届かないほどに遠い。

「なら今ここで誓いなさい。いつまでも、私の側について私を守ると」

真剣なリノルアースに若干の違和感を感じつつ、ルイはリノルアースの足元に跪く。剣を掲げて頭を垂れた。

「誓います。いつまでもあなたの側で、あなたの剣となり盾となると」

ああ、なんてズルイんだろう。

彼に選択の余地も「えず」に忠誠という見えない鎖で縛り付ける。不意に零れそうになつた涙を堪えた。

差し出したリノルアースの手の甲に、ルイは自然な動作で口づける。唇が触れた部分が甘くて痛い。

「……誓いを破つたりしたらどうなるか分かつてるわよね？ タダじゃないわよ」

「破りませんよ、命は惜しいですから」

そう言いながらルイは苦笑する。

「 報告を。その後で仕事に戻りなさい。客人に変わった様子は？」

「他国の方々には特に目立つた動きはありませんよ」

そう、とリノルアースはひとまず安堵した。

ルイには少し前から隠密にも似た仕事をしてもらつていて、國賓の動向などを探つてもらつっていたのだ。万が一にも面倒事が起きないようだ。

「では、ハドルスとルザードは？」

リノルアースの悩みの種はむしろそつちだった。

随分昔からアドルバードが座るべき王座を狙う従兄弟達。野心家で自信いっぱいでけれども実力を見誤つてゐる比較的凡人。それに気づかずといふといふことでも愚かな証拠なのだが。

「そのことでご報告が」

低いルイの声がいつそう低くなる。

話なさい、とリノルアースは小さく命じた。人払いが済んでいたのは幸いだつた。

「シェリスネイア姫が嫌がらせに？」

城に戻った途端にウィルザードから話を聞かされてアドルバードは重い息を吐き出す。

「……どうしてこう次から次へと問題が起きるかな」

「誰が犯人かまだ分からないうが、まあ目障りな敵だつたんだろうなあ」

報告しにきたウィルザードが暢気に呟く。

シェリスネイアのことをなぜウィルザードが知っているのか問い合わせしたいところだつたぶが、聞くタイミングを逃してしまった。

「それで、姫のご様子は？」

やはり少しは心配なのだろう、レイがウィルザードに問いかける。「まあ、強がれるくらいには平気みたいだつたぞ。嫌な話だが、慣れるんだろうな、ああいう人は」

女の世界で美人は敵を作りやすい。それは本人の性格関係なしだ。男も美貌を気にしないわけではないが、女は特に敏感だ。何よりこういう王族貴族の世界は顕著に現れるだろう。女性にとつて美しさだけが己の武器だから。

つまりリノルアースやシェリスネイアのような絶世の美女は格好の的なのだ。徒党を組んだ女性達によつて徹底的に叩かれる。

「……そういう生き物ですから」

苦笑交じりに咳くレイを見上げ、アドルバードは控えめに問いかける。

彼女も的になりそうな美人であつたことを今更思い出しても、少なうとも自分の記憶には彼女が攻撃されていることはなかつたような気がする。あつたにも関わらず気づかなかつたのだとしたらよほど

馬鹿だ。

「…………ねまえもあつたのか？ そつこつこと」

「まあ、小さな頃に少しだけ」

やつぱりあつたのかとアドルバードは自分を殴りたい衝動に駆られる。誰よりも一番側にいて気がつかない俺は何様だ。

「「めん」

気づかなくて。助けてやれなくて。支えてやれなくて。

いろんな意味の謝罪が混じり混じって結局そんなことしか言えない。

「アドル様のせいではありませんよ、本当に幼い頃だけですし」貴族のお嬢様からすればレイは目障りな存在だったに違いない。特に高い地位の貴族でもないのに王子と誰よりも親しい。ましてこの外見だ。小さな頃から男の格好をすることもあったが、髪は長かつたし普通にドレスを着ていることもあった。

「むしろ十歳を過ぎた頃の私にそんな真似をするような勇敢な方はいないでしょ？」

おどけたレイの言葉にアドルバードは思わず笑う。

「ホント、女の世界は黒いよなあ」

心底嫌そうにウィルザードが呟いた。

存在をすっかり忘れていて「まだいたのか」と口から零れてしまった。

ウィルザードはアドルバードの言葉に気分を害した様子もなく立ち上がる。

「そろそろ出てくよ。こちやつくならそれからにしてくれ

ひらひらと手を振つてウィルザードは部屋から出て行き、彼の言葉を飲み込むのに若干時間のかかったアドルバードが顔を真っ赤にして怒鳴る。

「…やついてないんかなー…」

## 19・あげないわ

「はあいお兄様。お元気?」

気の抜ける声で登場したのはもちろんアドルバードの妹、リノルアースだ。

「おまえ今度は何を企んでる? 悪いけど今はそんな暇じゃないぞ」リノルアースがアドルバードを兄と呼ぶときはいつも何か思惑があつてのことだと身に染み付いている。

「別に何も。どうせシェリーの件は動いてくれてるんでしょ?」

「そりや無視できないだろ」

「優しいわねえ、アドルは。八方美人とも言つけど。そこんとこ嫌になつたりしないの?」

レイ

そんな話を振るな! とアドルバードはリノルアースを睨みつけたが無視された。

「そういう方だと知っていますから」

レイは嫉妬なんて言葉は微塵も感じさせず、さらりと言い放った。いつだか嫉妬深いんだと言つたのはどこにいつたとアドルバードは少しだけふて腐れる。

「寛大ね。とても真似できないわ」

苦笑してリノルアースはレイを見つめる。

いつもとは違うその微妙な変化にアドルバードは妹の側まで歩み寄つた。

「……なんか、あつたか?」

少し躊躇いながら、アドルバードはリノルアースの髪を撫でた。自分のそれとは違つてずっと柔らかくて心地よい手触りだ。昔はそ

う変わらなかつたような気がするのにな、とアドルバードは少しだけ寂しく思う。

「……なにも」

ない、リノルアースの唇が紡ぎうとしていた。

しかしそれは声にならず、リノルアースは黙つて俯く。

小さい頃よくしていたように、アドルバードは妹を優しく抱きしめる。身長もいつの間にかアドルバードの方が少しだけ高くなつていた。

他人には滅多に甘えないリノルアースも、兄にはやはり、時折こうして甘えてくる。

「……リノル？」

大丈夫だろうかと呼びかけると、リノルアースは顔をあげた。ほつとしたのも束の間、次の瞬間には柔らかい何かが頬に触れた。それこそ小さい頃で卒業したはずの ほっぺにキスだ。

「こんなことも許せちゃうわけ？」

と、リノルアースは意地悪げにレイを見る。

「兄妹で、双子でしょう。あなた達は」

レイは呆れ顔でそう答えた。アドルバードは依然思考が停止したまま固まっている。

「あら、あなたもルイとするの？」

「うへえええええええええ！」？

それは祐けちゃうかも というリノルアースの声はアドルバードの叫び声でかき消された。

「しませんよ」

即答されてアドルバードはほつとする。

「……アドルは小さい男ね」

「小さい言つなつ！」

「身長も小さくて器も小さいんじゃ救いようないんじゃない？」つづ、と言葉に詰まる。

器が小さいと言われようと惚れた女が他の男にキス（たとえ頬で

あつても)するのは許せないだろ?。弟といつても血は繋がつてい  
ないわけだし。

「……まあ、私も他の女にそんなことされやがつたらぶん殴るけど  
ほつりと隣でリノルアースが呟く。おまえもじやないか、とアド  
ルバードは心の中でつっこむ。

あれ?

つまりそれはリノルアースが。

「…………おまえまさかルイが好きなのか?」

妬けちゃうだのぶん殴るだの どれも主従といつより恋愛によ  
る心情の気がする。

「…………やつぱり氣づいてなかつたんですか」

「そうきつぱりはつきり言わないでよ恥ずかしい。氣づいてないの  
なんて本人とアドルくらいよ」

一人同時に呆れながら呟かれる。

ああ確かに本人はこれっぽっちも氣づいてないぞ少しくらいそ  
う素振り見せてやれよルイが報われないだろうが

「はいはいはい！？ いつから何で！？ ていうかなんでアレ！？

いや別にどこの馬の骨かも分からぬような男よりはマシだけど  
さあ！」

「どこの馬の骨かは分からないでしょ。拾われて養子になつたんだ  
し」

リノルアースのつこみに、アドルバードは言葉を詰まらせた。  
どこの馬の骨か 今はもう検討がついている。それをルイに惚  
れてしまっているという妹に伝えるべきか否か。

「……その反応からしてルイがシエリーのお兄さんだつてことには気づいたのね。思ったより早かつたこと」

「うん、実はそう……って知ってるし…」

流されて答えたアドルバードは驚くはずだつたリノルアースに逆に驚かされた。

対するリノルアースは「ああ、レイか」と兄をサポートする存在に気づく。鈍感のアドルバードが気づくとは思っていないらしい。

「当たり前でしょ。私を誰だと思ってるの」

ふん、と胸をはるリノルアースを前にアドルバードは脱力する。

「……だったら、どうするつもりだ?」

もし本当にルイがアヴィランテの王子ならば。

彼はどうやっても、王子として国に帰らなければいけなくなる。

「あげないわ」

きつぱりとリノルアースは言い切つた。

その潔さにアドルバードは何故かほつとしてしまつ。これでこそリノルアースだと。

「ルイは私の騎士よ。剣の誓いこそはたててないものの、私を守り続けるとこの私に誓つたのよ？それを破ることは絶対に許さないわ。アヴィランテにだらうとショリーにだらうと譲るつもりはないわよ」

完全に物扱いだよなあ、と苦笑しつつ、アドルバードはリノルアースの頭を撫でた。

「…………何よ」

「別に?」

嬉しい、なんて言つてもリノルアースには理解してもらえないだろ?。

リノルアースは昔から本当に欲しい物を欲しいと言わない子供だ

つた。それは一番一緒にいたアドルバードだからこそ知っている。  
どんなに欲しいと望んでもそれを求めたりしない。いつも「欲しい」の一言を言えずに後で唇を噛み締めていた。

アルシザスとの同盟も話をつけたのはリノルアースだが、それは全てアドルバードを王座に座らせるための策略に過ぎない。彼女が望んだものではないのだ。

おそらく、アドルバードが知る中で生まれて初めてリノルアースは本当に欲しいものを譲らないと言つた。

なら。

「俺は、おまえに力を貸すよ」

振り返り、アドルバードはレイを見た。  
いいだろう? と目で問う。

レイは何も言わない。ただ優しく微笑むだけだった。

皮肉なことに、嫌がらせを受けることに慣れているショリスネイアの対応は的確だった。

怯えている姿は見せない。強がりだと言われようと不敵に微笑み続ける。

矛先が自分に向いている間は何をされようと心は痛まない。辛くても顔に出したりしない。

部屋の前が水浸しになっていたり、暖炉の中に不審物が入れられていて煙が凄いことになつたり 嫌がらせはアヴィラでは想像も出来ないことだった。まず水浸しにしてもアヴィラでは炎天下のなかすぐに乾いてしまうし、涼しくてむしろ嫌がらせにならない。そして暖炉なんてものとは無縁なので後者はまず思いつかないだろう。

どれも今まで受けてきた仕打ちに比べれば可愛いものだった。

可愛がっていた小鳥が殺されたわけではない。

毒を盛られたわけではない。

そう、いくらでも我慢できたのだ。

標的が自分一人なら。

「 腕、どうしましたの？」

国から共にきた侍女の腕に巻かれた包帯を見てショリスネイアは問いかける。

びくりと一瞬だけ身体を震わせて、それから何もないうつに微笑みながら「何もありませんよ」と答える。

「ちょっと転んでひねっただけですよ。大事ありません  
それが嘘だということは先ほどの反応で充分に物語っている。

宣戦布告だ。

どんな嫌がらせがあるつとも、何が起きても反応せずに傍観した  
けれどその矛先を自分の周囲に向けられるというのなら 話は  
別だ。受けたとうではないか。

これはもはや戦いだ。

すっとシェリスネイアは立ち上がり、慣れない北国のドレスを苦  
もなく着こなして部屋を出る。

「シェリスネイア様？」

「……王子とリノルの所へ行つてくるわ」

先にリノルアースの部屋に行くと、彼女はアドルバードのもとへ  
行つているという。仕方なくシェリスネイアはアドルバードの部屋  
へと向かつた。

足が止まる。

前方に最近妙に苦手に感じる男がいた。相手はこちらに気づいて  
いないようだから、無視するなり別の道を通れば良いのだが そ  
れはそれで逃げていふよりでシェリスネイアのプライドが許さない。  
そういうしているうちに、相手はシェリスネイアに気づいてしま  
った。

「これはアヴィラのお姫様 そんな格好されると気づかないもん  
ですね」

男 ネイガス王国の王子・ウイルザードはわざとらしげ作り笑

いを浮かべながら近づいてくる。

「気づかないままによろしかったの。アザとい男ね」

「随分と口が悪くなつてきますよ。ビジヤの姫の悪影響でも受け  
てるんじゃないですか」

「くすくすとウィルザードは笑う　たぶん、この顔は本当に笑つ  
ているんだろう。作り笑顔ではなく。

「本当にリノルがお嫌いなのね。ならハウゼンランドに来なれば  
よろしいでしよう」

「親戚なんでもうもいかないんですよ。嫌いとこつよりは苦手なだ  
けなんで」

シェリスネイアは嫌いと苦手はビリ違ひの、と聞こえとして止め  
た。どうしてこの男とそんな話をしていくなければならない。

「どちらへ？　姫一人で動き回るもんじゃありませんよ」

さりげなくエスコートを申し出たウィルザードに驚かされた。こ  
の男がこんなことを言い出すとは思わなかつたのだ。

「王子の部屋ですね。もつずぐれいですもの、平氣です」

「帰りはどつするつもりで？　どうせ俺も用があつたんですよ」

ついでだから一緒に一緒しましょ、とウィルザードは続ける。口調  
こそは丁寧でも、この男にはいつも馬鹿にされているような気がす  
る。

他の男なら、あの手この手とシェリスネイアを口説くとするとい  
うのだが。

「　何かあつたんですか」

一瞬の沈黙の後、ウィルザードが躊躇いがちに口を開く。  
心配してくれているということが、とシェリスネイアは少し気恥  
ずかしくなりながら別に、と素っ気無い返事をした。

「あなたには関係のないことです」

「そうですね、そうですが　どうせアドルに話すなら俺も聞く

話ですよ

「ならなおさらですわ。同じ事を一度言つ必要はないでしょ?」  
知りたいのなら黙つてアドルバードにする話を聞いていればいい、  
シェリスネイアの言葉にウィルザードも黙り込む。

らしくないなあ、という咳きが隣から聞こえ、シェリスネイアは  
ウィルザードを下から睨みつけた。

「あなたじゃないですよ、気にしないでください」

いつもなら、あなたのようなお姫様の悩みになんて興味も持たないんですよ、俺は。

そんな言葉は心の奥底へとしまいこむ。ここのお姫様にそう言つ自分が想像できない。むしろ冗談じゃない。

それではまるで婉曲な愛の告白じゃないか。

「…………」  
ウイルザードはぶつぶつと文句を言いながらシェリスネイアの向かいに座る。

「…………以前から続いている嫌がらせなんですけれども、少々悪化しているようですの」

「悪化、ですか……すみません。俺の力不足で」

アドルバードは素直にシェリスネイアに頭を下げる。

「いえ、短期間でのことですし、仕方ありませんわ。慣れていますから、私だけならばこうして出向くこともないのですけれど」

「他にも手を出したってこと？ まったく考えることが幼稚よねえ」  
ため息まじりにリノルアースが呟く。彼女もシェリスネイア同様、そういうことには慣れてしまった人種だ。

「それで？ ドレスが破かれた、水をぶっかけられた、暖炉に変なものが入れられたの他に何があつたの？」

ドレスが破かれた以外のことはリノルアースにも言つていらない。  
どうやら被害にあつた二つは、ハウゼンランドでは一般的な嫌がらせなのかもしぬれないなんてシェリスネイアは苦笑する。

「侍女が怪我をしました。本人は転んだだけだと言つておりますけど」

「あらまあ傷害までやらかしたの？ そりやもう極刑ね」

それを待つっていたんだけどね、とリノルアースが不敵に微笑む。

「リノル、おまえ誰が犯人か知つてるな？」

兄の勘とでも言つべきか、アドルバードが痛む頭を押さえながら問いただす。

「私を誰だと思つてるの？ これを理由に目障りな蠅は徹底的に叩き潰すわ」

「…………本当にずる賢いわね、あなたは」  
ため息を吐き出してシェリスネイアは呟く。ウイルザードはもはや傍観者にすぎない。

「シェリーならある程度我慢できるだろつと思つて。利用してごめんなさい？ でもお互い様でしょ？」

そうね、とシェリスネイアは答える。

女に計算はつきもの。ましてリノルアースやシェリスネイアのような女ならなおさら。

「むしろ感謝してるわ。これでアドルの未来の王座は安泰」ここまで言わればアドルバードでも犯人が分かる。

王座を狙っている人間は知る限り一人だけ。そしてその一人ならば共犯は充分にありえる。

彼らにしてみれば、事件をアドルバードの汚点にしようとしたのだろう。犯人が見つか

らず、シェリスネイアから声高々に被害を訴えられれば国の問題になる。

「ハドルスとルザード、か

まったくもつて面倒な従兄弟だ。

## 21・やつちやいまじょう

「……とにかくで、やつちやいまじょう」

アドルバード、ウィルザード、シェリスネイアが座るテーブルの前で仁王立ちになつてリノルアースが宣言する。

「……心なしか殺つちゃいましょうに聞こえるんだが」

ウィルザードがリノルアースから目を背けて呟く。

「……俺もそう聞こえた」

隣に座るアドルバードも小声で同意する。おおっぴらに彼女の犯行声明に異を唱えれば矛先は自分に向かう。

「人聞きの悪い解釈をしないでちょうどいい。いくらなんでも親戚を堂々と抹消しようなんて考えないわよ。一応今はまだ相手は王位継承権を持つてるんだし」

「……それはつまり王位継承権も持つてなくて親戚でもない人間なら抹消するということですわよね？」

そう呟くシェリスネイアもリノルアースを直視できずにティーカップへと視線を落とす。

「やだもうシェリーまで！ あんたらが変なこと言つからよ！？」  
リノルアースが心外だとでも言いたげにアドルバードとウィルザードを睨みつける。

「話が逸れていますよ。……それでリノル様は何をお考えで？」

今まで黙つてアドルバードの側に立っていたレイが軌道修正する。放つておくとこのまま変な方向へ話が飛びかねない。

「分かつてゐるのに私に説明させるつもり？」

リノルアースは美しい微笑みを浮かべてレイを一瞥する。レイは何のことですか？ とさうりと交わして、リノルアースは頬を膨らませた。

「まあいいわ。」Joffreyとしてはハーダルスヒルザードが王位継承権を剥奪されるようにしてみたいわけよ？ もともとそれだけ大きくなりうる問題だしね。それでショリーには我慢してもらつたんだけど」

「 その話乗つてもよろしくてよ。あの男には腹が立ちましたし、これ以上嫌がらせに耐えるつもりはございませんもの」

「ふふ、と黒い微笑みを浮かべる大陸一、二の美姫に男一人は青ざめる。

「これだから女は嫌いなんだと呴くウイルザードを憐れに思いながら、アドルバードは紅茶に口をつける。

まあ、これも自分の為にやつてくれていることだし。  
と静観できるくらいの器はある。

「というわけでショリー。貸してるドレスを一着返却してくれない？ そうね、赤いのがいいかしら」

「ひとつと微笑みながらそう言に出した妹にJoffreyで食いついておかないと後悔する。それはもうアドルバードが生まれ持つた機器察知能力だろう。

「 ちょっと待て……」

ガタッと立ち上がりつてリノルアースを睨みつける。

「なんでそこでそんな話になる？ ショリスネイア姫に貸したのは……俺の、その」

自分のドレスだと断言するにはこなしか抵抗があつて口籠もる。敗因を挙げるならまさにここで勢いをなくしたことだらう。

「アドルの女装用のドレスよ？」

「そう！ だからなんでそれが必要になるんだ！？」

「アドルが着るから」

きつぱりと断言されてアドルバードはぐくりと肩を落とす。

「 なんでもうなる！？」

「作戦上必須事項なのよ」

「その作戦を細かく話してからにしうせめて……」

最近では女装することも少なくなつて、ほつとしていたこのタイミングで爆弾投下か！？

「私としてはね、あいつらのたつかいプライドまで木つ端微塵にしたいわけ？」お分かり？

そのためには女に負けたといつこの上ない汚点をあいつらの心に刻み込みたいんだけども生憎私はそこまで腕力ないしー」

だからこの際、アドルが私のふりしてぶん投げて？ とリノルアースは小首を傾げて可愛らしくお願ひする。それに騙されるほど愚かな兄ではない。兄馬鹿ではあるけれども！

「それはおまえの個人的恨みだろ！？」

「私の恨みはアドルの恨み、アドルの恨みはアドルの恨みでしょ？」

「なんだその解釈は！？」

「いいじゃないついでだし」

ふう、とため息を吐きながらリノルアースが呟く。

「いやつ！ ていうかばれるだろ！？ 一応はあいつらも親戚だぞ！？ 血縁だぞ！？」

「……あれを見破るのは私達姉弟か、ビジギの国王陛下だけだと思いますよ？」

うわあ、それはどんな贅辞だ。レイの言葉も素直に受け取れずに入アドルバードは涙を堪える。

見破れると断言してくれることは嬉しいが、それはつまりやっぱり俺が女顔だつてことか？

レイの鋭い一撃にすっかり勢いをなくしたアドルバードの肩にリノルアースがそつと触れる。なんだと顔をあげると、すぐそこに自分に似た、けれど自分よりも愛らしい顔があつた。

「……ルザードがレイを口説く」ともなくなるかもよ？」

リノルアースに耳元でそう囁かれて、アドルバードの抵抗は確実に弱まつた。さすが妹。兄の急所はどこであるのかをよく知つてゐる。

ちらりと背後の彼女を盗み見れば、レイは首を傾げて見つめ返してくるだけだ。

「やつてくれるわよね？」

にっこりと微笑むリノルアースに反駁する意思はもうない。肩を落とすように、頷く。

「あら、楽しみですわ。実は少しだけ見てみたかったんですねの」

「まあ俺も間近で見たことなかつたし」

傍観していた二人がアドルバードの味方をしてくれなかつたのはそのためかと、ウイルザードに対しては憐い友情を悲しく思つ。

「作戦としてはとりあえずあいつらの長い鼻をへし折るのが先。その間にお父様にショリーが嫌がらせを受けていることを報告させてもらつわ。本人もいればかなりの罰が期待できるんじやないかしら」「個人を罰する代わりにハウゼンランドを責めないと言えれば一割り増しくらいにはなるんなくて？」

もとより国単位の問題にするつもりはありませんけれど、とショリスネイアが付け加える。本当に末恐ろしい女だ。

「即日実行か……？」

ショリスネイアが侍女にドレスを持つてくるように命じてゐるのを見てアドルバードが若干青ざめる。

不本意ながら女装には慣れたが、さすがに今まで見られたことのない人にまで変装前と変装後を見られるのは恥ずかしい。

「膳は急げつて言つじやない」

「急がば回れとも言つわ」

「今回は違うの。このままにしておいたらショリーが危ない目に遭うかもしれないじやない」

そう言われば黙るしかない。

「……アドル様、どうせリノル様には勝てないんですから」「それ慰めてないよな？」

むしろ兄としての威儀とか否定する言葉じゃないか、と自分の騎士に向かって呟く。

「シェリスネイア様、お持ち致しました」

侍女が真っ赤なドレスを手に戻ってきたのを見てアドルバードも腹をくくる。

女装がなんだ。  
ドレスがなんだ。  
コルセットがなんだ。

そして同時に一刻も早く男らしくなりたいと心の底から思った。

## 22・女王様にでもなつた気分で！

「…………まあ」

ショリスネイアのため息を聞いてアドルバードは肩を落とす。長く背中を覆う髪の毛は実物のものよりは艶がない。けれどそれ以外はまさしくリノルアースそのものといつてもいい。アドルバードの女装は相変わらず完璧だった。

「驚きましたわ。まるでリノルが一人いるよ」「ひう

「…………素直に驚かれてもこっちとしては結構辛いんですけどね」  
きらきらと輝く瞳で見つめられればなおさら痛い。

アドルバードはリノルアースの指示のとおり、真っ赤なドレスに身を包み、完璧な化粧を施されリノルアースに化けた。

「うわー。間近で見たの初めてだけどすげえなあ。長い付き合いの俺でも一瞬わかんねえ」

ウイルザードの感心したようなその言葉には純粹な殺意が湧く。

人事だと思って楽しみやがって。

「双子なんだから当然でしょう。アドルが大きくなるまでの期限付きの手ではあるけど」

「小さな頃に比べればまだ分かりやすいですよ」

アドルバードの長い髪を梳きながらレイが呟く。

「今は個人の性格が顔に出てるので。アドル様。いつものように理想のリノルアース様を演じるとすぐにバレますよ？」

いつもは理想的なお姫様をやっていれば良いので楽だったのだが  
本物のリノルアースの真似をするとなると、アドルバードの性格的に難しい。

「…………いちいちはりさいわね。わかつてゐるわよ」

むす、とした表情のまま妹の真似をすると、横から鉄拳が振り下ろされた。

「いった！ 何すんだよ兄にむかって！」

犯人であるリノルアースを睨みつければ、その倍以上の迫力をもって睨み返される。

「何じゃないわ！ それは私の真似のつもり！？ もつと見下すよう、徹底的に踏み潰すように！ 女王様にでもなった気分で！！」

「おまえレイにむかってそんな顔してるか！？」

「練習よ練習！－」

練習つて言われても……と渋ると、リノルアースは再び鉄拳をちらつかせる。

逃げ腰の主人に対しても救いの手を差し伸べたのはやはりレイだ。

「……アドル様。真似ようと思わず、いつものリノル様を想像してください。試しにウィルザード様を相手に」

「え？ 僕？」

突然矛先を向けられたウィルザードが自分を指差し、ビクしたものがアドルバードに近づく。

「この私に何か御用かしら？ ウィルザード」

リノルアースにしか見えないアドルバードはにっこりと微笑みながらウィルザードに話しかける。

その瞬間 鳥肌が立つた。

「アアアアアア、アドル！？」

「あらやだ何言ってるの？ ついに頭を打つて馬鹿になつたの？ それとも私の顔見て頭が混乱してるのかしら？」

「しょ、正気に戻れ！！ 頼むから！－」

「失礼ね。私のどこか異常だつて言うの？ あんたこそその頭どうにかしたら？ ていうか近づかないで馬鹿がうつるから」

ウィルザードはアドルバードの変貌ぶりに顔色も悪くなる。この世にリノルアースが一人 どんな悪夢だそれは。

「この性悪女！ 実の兄に毒でも盛つたのか！？」

「失礼千万ね。海の藻屑になつて消え去りなさい」「本物の方が数倍斬り返しが痛い。

「……もう充分でしょう。ご協力ありがとうございました。ウイルザード様。だから言つたでしょ、アドル様」

身体が覚えますよ、とレイが呟く。日頃から見慣れすぎているリノルアースの言動行動が身体にまで染み付いてるとは。

「……恐ろしい」

「俺は本当におまえが怖かった」

リノルアースにしか見えなくて、と付け足され、少しだけ自信もつく。

「八十五点ってどこかしら。これならハドルス達も騙せるでしょう」  
合格点ということなのだろう、リノルアースが額きながらGOサインを出す。

「俺を実験台にするなよ……そこの騎士さんにやらせりやいいじやん」

レイを指差しながら脱力するウイルザードに、リノルアースが馬鹿じやないの、と冷たく言い放つ。

「レイは目を塞いでても騙せないわよ、たぶん。今から一人でドレスを着替えても無駄だろうし」

リノルアースとアドルバード（作り声）は寸分の差しかない。本人ですらその差を明確には説明できないかもしない。おそらくそれが出来るのはレイくらいだ。見た目が加わればレイも騙されはないだろうが。

「嘘つけ。やつてみる」

信じられないウイルザードが言い出して、ささやかなゲームが始まった。

目隠しされたレイをリノルアースとアドルバードの二人で呼び、レイは自分の主人のもとへ行けば良いだけの単純なゲームだ。  
距離としては数メートルしか離れていないし、周囲に邪魔なもの

はそれほどない。下手に気配を読まれないように、リノルアースとアドルバードは立った場所から一步も動いてはいけない。

「……本当にやるの？ 無駄だと思うけど？」

リノルアースが面倒臭そうに呟く。

しかしショーリスネイアとウイルザードには面白い余興となつて中止を言い出す氣配はまったくない。

「「レイ」」

仕方なくアドルバードとリノルアースは一人同時に、レイを呼んだ。それはリノルアースの声が重なり合つたようにしか聞こえない声だ。

無理だろ、とウイルザードが呟いた。ショーリスネイアも同意して頷く。

重なり合つた音なんて聞き取りにくい。これから一人一人がレイを呼べば良い しかし双子はどちらもレイを呼ばない。

これじゃあゲームにならないぞ、とウイルザードが言おうとする

と

すつ、とレイが一步踏み出した。

「…………おい、冗談だろ」

ウイルザードが苦笑しながらその声をかけるが、レイはそれを無視して迷うことなく一人のもとへ歩き その足元で跪いた。そしてまるで見えているかのように、その人の手をとる。

ほつとしたような息が吐き出され もう一度、名を呟いた。

「レイ」

「　　はい。アドルバード様」

「ううレイが答えれば、目の前に立つ人の手によつて田隠しがはずされる。

レイの視界に飛び込むのは真紅。

そのドレスを身に纏っているのは　紛れもなく彼女の主である

アドルバードだ。

「だから言つたじやない、馬鹿馬鹿しい」

リノルアースがため息を吐き出してそう言い放つ。

「いや、ですけどまさか本当にできるとは思いませんでしたわ」

感嘆のため息と共にシェリスネイアが答える。アドルバードといはすつかり一人の世界だ。

「　　できちやうのがあいつらなのよ」

ほんの少し羨ましいと思つから、こんなことしたくなかったのに。  
あの二人ほどの絆は、まだない。

## 23：敵に回したこと最大の失敗ね

「……なんで分かるんだ」

化け物でも見るよう、ウィルザードはレイを凝視した。  
「お一人が小さな頃から相手をしているのに、区別できないわけないでしょ。そもそもアドル様の方が声が低いですから」「わざかな違いですけど、とレイが付け加える。そのわざかな違いを本人達も分からぬというのに。

「愛の力といつやつですわね？」

シヨリスネイアが至極真剣な眼差しでそう言い出し、アドルバードは飲んでいた紅茶を噴き出す。

「やだ、汚いわよアドル」

いつものことだけ、と冷静にリノルアースがハンカチを兄に差し出す。そのハンカチで口元を拭いながらアドルバードは動搖を隠しきれていなかつた。

「ああああああああ愛つて……」

「愛の力でしょう？」

さらりとリノルアースに言い返されて、アドルバードは赤面する。

「せめて忠誠心にしていただきたいところですね」

愛だの言いくにはまだ早いようなので、とレイに言わればなお顔は赤く染まっていく。

レイが双子の見分けがつくのも、聞き分けができるのも昔からだ。それを愛の力だなんて。

「レイの忠誠心はアドルへの愛の力でしょう？」

「……それとこれとでは別の話ですか？　というより別にしてください。そういう浮ついた気持ちで仕えているわけではありませんから」

アドルバーードはレイがこうも冷静に対応しているのを見て、自分がこれほど動搖しているのが恥ずかしくなつてくる。

「ま、いいけど。アドルもいいかげんに落ち着きなさいな。せつとハドルス達に一泡吹かせてやらなきや」

「……あと五分くれ」

早鐘のように脈打つ心臓をどうにか落ち着かせようとアドルバードは深呼吸する。

ああもう本当に心臓に悪い。

赤みがかつた、長い金の髪の少女を見つけて、ハドルスは早足になる。

大陸でも有名な美少女にして、従兄妹のリノルアースだ。あの珍しい髪の色ですぐに分かる。

最近は 　 といつよりも、城の中だからなのだろうか、騎士を連れて歩いていないことが多い、それはつまりハドルスにとつては好都合だった。

「リノル」

充分に距離を詰めてから、そう呼びかける。

美しい少女は振り返り、ハドルスを見た。深紅のドレスが華やかなリノルアースによく似合つ。

「 愛称で呼んでいいと許可した覚えはないけど？ いいかげんしてくれない？」

につこりと、微笑みながらそう拒絶されるのもいつものことだ。

「いいだろ？ なあ、いつになつたら心を開いてくれるんだ？」

「あんたに聞くほどあたしの心は安くないの。はつきりと言わなきや分からぬ？」大嫌いなのって

「嫌い嫌いも好きのうち、って言つだろ？」

リノルアースは眉間に皺を寄せながら、触れようと手を伸ばしてきたハドルスの腕を振り払う。

「あんたは例外よ。自信過剰な男って鬱陶しいだけじゃないの。器の小さい男はなおさらね。ねちねちみみっちい嫌がらせして」

懲りずに伸ばされた手が不自然に止まる。

リノルアースは相変わらず冷めた顔でハドルスを見上げていた。

「……なんだつて？」

今までとは違う低い声。

リノルアースは勝ち誇ったように微笑み、そうして続けた。

「気づいてないとでも思ったの？ お気楽ねえ。あんたがシェリーに……アヴィランテの姫君に嫌がらせしていることくらい、こっちはお見通しなのよ？ 何の為にこんな忙しい中ルイが護衛についていないと思ったの？」

ぎり、とハドルスが歯軋りする。いなくて好都合だと思っていたが、逆だったらしい。

「それで？ 知つているのがリノルとあいつだけなら……」

「馬鹿ね。それだけだと思うの？ もうルイにはお父様に報告するようになつてあるわ。残念でした。このままじゃ王位継承権は取り上げられるかもしれないわねえ？」

味方の弟君も同罪よ？」とリノルアースは微笑む。ルザードが絡んでいたことまで知られているとは 焦りか、怒りか、頬を汗が流れる。

「あたしを敵に回したことが最大の失敗ね。『愁傷様』

美しい微笑み　今だけは、それを見て殺意がわく。

「このクソ女っ！！」

あの鈍感な王子にはこんなこと思いつかない。

この姫さえいなければ　将来の地位も、安泰も、約束されたというのに。

ハドルスが振り上げた拳を、リノルアースは片手で受け止めた。

「な

呆然としている間に、ハドルスの身体は宙に浮く。どん、と勢い良く背中を床に叩きつけられた。

何があつた？  
何が起きた？

あんなに華奢なリノルアースに、投げられた？

「一体何が　！」

騒ぎを聞きつけた使用人やら衛兵やらが集まってくる。その目に映るのは、無様に寝転がるハドルスと、それを見下しているリノルアースだけだ。

「リ、リノルアース姫？」

おずおずとリノルアースに話しかけた使用人に、リノルアースは極上の笑みで答える。

「ごめんなさい。何でもないのよ。私がちょっと驚いて、ハドルスを投げちゃつただけだから」

一瞬目が点になつた周囲の人間も、状況を再確認して納得する。ハドルスは羞恥で顔が赤くなつていいくのが分かつた。こんな小さな女に負けた、だなんて。

そんなハドルスをリノルアースは冷たい眼差しで見下し、そして微笑む。

「さよなら、ハドルス」

それはまるで、悪魔の囁きにも似た声だった。

部屋に戻り、アドルバードは深くため息を吐き出す。そうしてリノルアースの仮面を外す。

「ご苦労様。なかなかの演技だつたじゃない？」

本物のリノルアースが満足そうに微笑んだ。

「……どうも。あとはルザードか？」

まだもう一戦あるな、と呟くと、リノルアースに腕を捕まれた。

「そつちはいいわ。もともと王位に興味のない奴だし。継承権は剥奪確定なんだから」

「でも」

むしろ俺としてはそつちを完膚なきまでに叩き潰したいんですけど、とアドルバードはリノルアースをじっと見る。

「ルザードの退治はレイが行つたし」

「それを早く言え

「！」

すぐにでも駆け出しそうなアドルバードを再び止めて、リノルアースはため息を吐き出す。

「王子様がその格好で駆けつけるつもり？」

## 24・ひとつにもならない仮定だ

その一報は、兄よりも先にルザードのもとへ届いた。

曰く、

アヴィランテからはるばる来た姫君に対する行為に関して。  
重要な賓客に対し、ハウゼンランド王家の血統に属する者として  
相応しくない行動がどうのいつの。

その処罰として王位継承権を永久に剥奪し、王城への立ち入りを  
五年間禁止する 　とのことだった。

正直兄のハドルスのようすに王座に興味はなかつたのでどうでも良  
い。兄の手伝いをしたのが失敗だつたなあ、とそれくらいにしか思  
わなかつた。

ただ、

「 五年、ねえ。これじゃあ勝ち目はないかな」

苦笑しながらそう呟く。

呟いた相手はすぐそこにいた。

銀の髪の、美しい騎士。もうどつこの昔に他人のものだけど。  
「……ご自分のなさつたことを少しほは反省したらどうです？」  
レイにため息まじりにそう言われて、ルザードはまた苦笑した。  
「多少は反省しておこう。でもまあ俺としては大して困らないし」  
寒い廊下の風が髪を揺らした。こういう時に必ず隣にいてくれる  
人がいればいいと、ずっとそう思つていたのだが、今現在もそんな  
存在はいない。

……だから、ずっと羨んでいた。

「ちちちゃん王子様との勝負は完敗みたいだし。そろそろ諦め時かなと思ったところだよ」

いつも彼女が側にいるのは、昔からたつた一人だ。

「ルザード様ならば、他にたくさんいらっしゃるでしょう」

もう少し眞面目にすればの話ですが、トレイは苦笑した。

「欲しかったのはたつた一人だ」

いつになく眞剣な声で 真剣な表情で、ルザードはレイを見つめた。手を伸ばせば触れられる距離でも、どうしてか今日は手が伸ばせない。

「どうして、俺が王子じゃなかつたんだろうな？ 王座なんてどうでもいいけど、俺が王子だったなら、あんたは俺のものだつたのに」

どうにもならない仮定だ。

生まれた時には俺は俺で、あいつはあいつだつた。

彼女は初めて会つた時からあいつの側にいた。

「……無駄な仮定ですよ、ルザード様。私は王子であるアドル様に仕えているではありませんから。私は私の意志で、アドルバードというあの方に仕えているんです。あなたが王子でも、私はあなたのものになりますん」

眞剣な思いには、彼女は眞剣に応えてくれる。

その答えもどこかで分かつていたような気がして、ルザードは苦笑する。

出会つた時から彼女は彼女だつた。

もしも彼女が傍らにいてくれたらなんて、そう思つていただけれどそんな彼女に、自分はこれほどまでの思いを寄せただろうか？

「……あんな頼りない王子様がそんなにいいわけ？」

「私には、必要な方ですか？」

あなたがどんな風に思おうとも、どんな評価を下さうとも。そうきっぱりと言い切れる彼女が潔くて美しい。

「もつと早く　あいつよりも出会えていたら、と思うのも無駄か？」

「……それでもやはり、結果は変わらなかつたと思います。ルザード様、あなたはどうやってもアドル様にはなれません」

本当に、きっぱりと言つて切るよなあ、と呟く。結構心にぐさつと刺さる言葉だが、なんでもない風に振り舞うだけの甲斐性はある。「まあ……分かつてたけどな　と、王子様のご登場みたいだな」遠くから息を切らしながら、小柄な王子が駆け寄つてくる。そんなに大事ならしつかり捕まえておけよ、という助言は心の中にしまつておくことにした。

「レイ！」

当然のように彼女の隣に並んで、ルザードを見上げて睨みつけてくる。

小動物みたいな、と可笑しなつてルザードは笑いを噛み殺した。

「俺の騎士に手を出すなど、言わなかつたか？」

騎士、ね。

ルザードはそのセリフを嘲笑つ。

「せめてそこで俺の女だとでも言つとけよ。情けねえぞ」

「なつ……つるさこ……！」

「ルザード様」

レイの制止に、ルザードは降参する。恋敵を　敵わない相手をこの程度いじめるくらい、許されるだろう。

「……何もしてねえよ。話してただけだ、なあ？」

威嚇していくアドルバードにルザードは両手を挙げて戦う意思がないことを表明する。

レイがええ、と頷くのでアドルバードは素直に威嚇を止める。実際に分かりやすい王子様だ。

「せこぜこ手放すなよ、お互いにな

くしゃ、ヒアドルバードの頭を撫でて、ルザーダは寒い廊下から温かい部屋へと帰る。

誰もいない隣は相変わらず寒い。

繋ぐ手もないひらをポケットに突っ込み、窓の向こうの空を見上げてため息を吐き出す。

「…………寒いなあ」

「本当に何もなかつたんだな?」

しつここほどにアドルバードに尋問され、レイはため息を吐き出しながら変わらぬ返事をする。

「ご心配するようなことは何も」

「心配しないようなことはあつたのかー?」

「お話していただけです」

「どんな!?」

「これではまるで浮氣を問い合わせられる魔王ではないか」という

言葉は飲み込んでおいた。立場がまるで逆す。

「プライベートですよ、アドル様」

そこまで説明する必要もない。

まして本気で口説かれていたなんて言つたらどんな反応をするか分かったもんじやない。

「あ、う、それは、その、そうだけど……」

レイに強く言われれば、アドルバードがこれ以上尋問できないことは分かりきっていた。

それでもこの人は知りたいんだろうな、とレイは思つ。

「改めて口説かれただけですよ」

仕方なくレイがそう言つと、案の定アドルバードは食いついてきた。

「だけ！？　だけじゃないだろ！？　何もされてないよな！？」

「ですから、心配するようなことは何も。指一本触れられてません。真剣に口説かれてただけです」

「だからそれってだけじゃないし！　大事だろ！」

ぎやあぎやあと騒ぎ、そしてアドルバードが冷静さを取り戻してから、窺うようにレイを見上げる。

「それで、その……」

そんなことを確認していくとも、分かりやすい人だとレイは微笑む。

「…………大丈夫ですよ」

ああまた自分がこんなことを言つ破口になるんだな、と少し思ひながら、少しでも婉曲な答えを探し出す。

「私はこの場所を離れるつもりはありませんから」

つまりは、あなたの隣を。

## 24・ひとつもならない仮定だ（後書き）

ハドルス＝「どうも知らない馬鹿  
ルザード＝良識がある、まだ救いがある馬鹿  
　　という感じです。

ハドルスは顔と地位だけでリノルに言い寄つてたけど、ルザードは  
結構本気でレイに惚れてました。

## 25・これは賭けだ

リノルアースの目論見どおり、ハドルスもルザードも王位継承権を剥奪された。

思い通りに事が進んでいる　　なのにどうしてだろう。どこか胸の中の不安が消えない。

リノルアースの願いどおり、このままアドルバードが王位を継ぐだろう。そうしていつまでも平和なハウゼンランドが保たれる。

ぼんやりと寒い廊下に、一人佇む。

城内は数日後に控えたパーティの準備で慌しい。アドルバードは結局大勢の姫君をどうするつもりなんだろう、と考えて、どうでも良いとさえ思う。

大勢の姫君と、何人かの王子　　ハウゼンランドは各国の王族に出会いの場を提供したようなものだ。

アドルバードとの見合い、と公言して集まってきたわけでもないから問題も起きない。アドルバードがこれからやるべきなのはたくさんの方々との信頼関係を作ることだ。

だからもうリノルアースが口出すことはない。

策略なんて必要ない。

あとはただ、姫も王子も皆いなくなつて、静かな日常に戻るのを待つだけ。

「……いつまで、そうじてるつもりですか？　風邪をひきますよ？」

そんな優しい声と一緒に、肩にふわりとかけられる。

「ルイ……いたの？」

ルイは自分の上着をしっかりとリノルアースの肩にかけ、そして微笑む。

気配を消すのは姉同様に得意なんだな、とリノルアースはわずか

に微笑む。

「言いつけられた仕事も終わりましたから。一人になりたいのかもしれませんけど、ここは寒いですから、その」

心配で、影から見ていたのだろう。

「部屋に戻るわ。久しぶりにお茶でも」

優しくされたから、その分だけリノルアースも優しい声になる。今日はルイをからかう気分になれない。

自分の部屋で、久しぶりにルイが淹れてくれるお茶でも飲もう、とそう言おうとした。

その先に。

「リノル？」

美しい、艶のある声。

リノルと呼ぶことを許した者のなかで、そんな声なのはただ一人で それは、ルイには絶対に会わせたくない人だった。

「……シェリー」

綺麗なドレスを着た、アヴィランテの皇女。

「ちょうど良かつたわ、あなたを探して どちら、様？」

シェリスネイアの視線がリノルアースの後ろ ルイに注がれる。見ないで、と叫びたくなるのをリノルアースは堪えた。

「私の騎士よ。レイの弟なの。この間までハドルス達の行動を見張つてもらつてたから……」

あなたに会わせないために、とは言わない。

「ルイ、アヴィラの姫君よ」

挨拶しなさい、と短く、震えそうな声で言つ。

気づかない。気づくはずない。

二人は初対面で、そして 互いが兄妹かもしれないなんてこと、知らないのだから。

「お初にお目にかかります。ルイ・バウアーと申します。アヴィラ

ンテの姫君」

レイには及ばないながらも、凛々しく、優雅に騎士の礼をする。シェリスネイアがじ、とルイを凝視していた。

「初めまして。シェリスネイアです……あの騎士殿、お姉様とはあまり似てないのね？ ハウゼンランドの人というより、むしろ、びくり、とリノルアースは身体を震わせる。シェリスネイアも、ルイも、まるで気づかないほんの一瞬。

南国の人ようだわ。

シェリスネイアの純粋な感想に、リノルアースがどれだけ動搖したことだろう。

ここで会話を止めなければ。

たぶん、ルイは

「私は、養子ですので」

苦笑しながらルイは答える。

それ以上話さないで。

そう願い、ルイの服の裾を掴む。驚いたようにルイがリノルアースを見た。

「シェリーが美人だからって鼻の下伸ばしてんじゃないわよ。横にこんな美少女がいるでしょうが…………少し、寒いわ」

二人に感づかれないように、完璧にいつもの自分を装う。そしてそれは見事に成功していた。

「だから、ここは冷えると 大丈夫ですか？ 早く、部屋に……」

心配そうに顔を覗きこんでくるルイと目を合わせずに、ただ頷く。

「ごめんなさいね、シェリー。お話はまた今度」

リノルアースは微笑み、そう言ってシェリスネイアの脇を通り過ぎる。

「いいえ、風邪をひかないようにお気をつけて。この国は寒いから、リノルアースはその国で育ったのよ、と苦笑する。

弱つたふりをしてルイにもたれかかる。ルイはそれが演技だなんて気づかずに、心配そうにリノルアースを支えた。

「歩け、ますか？ 無理なら俺が」

「平気かもしないけど、歩きたくない」

リノルアースがそう言えば、ルイがそっと抱きかかえる。まさに

お姫様抱っこだ 本当は、全然余裕で歩けるけれど。

ルイのぬくもりが優しく心の緊張をほぐす。寒いのは身体じやなかつた。

「部屋に戻つたら暖炉の火にあたつて、お茶でも飲みましょう。熱はないみたいですから、やっぱり少し廊下に居すぎたんですよ」

「ルイがお茶淹れて。最近飲んでないから

「……不味いって文句言つじやないですか」

「いつまでも上達しないでしょ。今なら何飲んでも美味しいわ」

寒いからね、と付け加えてリノルアースはくすくすと笑う。本當は言うほど不味いわけじゃない。からかうのが楽しかつただけ。ルイの首に腕をまわす。その方が安定すると、そう思った。

ルイの顔がすぐ近くにあつた。レイや、アドルバードとは違うけれど綺麗な顔だと、リノルアースは思う。

それはそうだ。あの、シェリスネイアの兄なのだから 。

「 ルイ」

静かにリノルアースが口を開く。

二人は会つてしまつた。

歯車はもう止まらない。

隠し続けることは、彼にも失礼だ。隠し、偽り、その選択肢を見せないのは。

これは賭けだ。

リノルアースはルイの耳元で囁くよ、ついに言へ。

「あなたは、アヴィランテの王女なのよ」

「ああ、じりりを選ぶ？」

耳に甘い吐息がかかる。

ああもう、またこの人は、自分をからかって　そう思っていた。

「あなたは、アヴィランテの王子なのよ」

静かな声。

真剣な声。

それはいつものリノルアースのそれではなく　。

「なにを、言つてるんですか」

動搖がそのまま声に出た。

アヴィランテなんて大国、自分には縁のないものだと思つてきた。  
自分はこのまま、ハウゼンランドで、騎士として、穏やかに生きて  
いくと、そう思いこんでいた。

自分の出生なんて気にしたことはなかつた。

気になくともいいくらいに　恵まれた人生を歩んでいたから。

「……私個人で、随分前から調べていたわ。確証はなかつたけど…  
…あのね、ルイ。シェリーはたつた一人のお兄さんを探しに来たん  
ですつて。十五、六年前、中央砂漠で消息を絶つた、まだ赤子だつ  
たお兄さんを」

偶然に思える？　とリノルアースが微笑む。

その笑顔がどこか悲しげで、ルイは何も言えない。

「アドルとレイがディーアにも確認をとつたらしいわ。誰もがあな

たが王子じゃないなんて否定できないくらい、状況証拠はそろつて  
るの」

自分がまるで知らないところで、随分と大きなことが動いていた  
。

確かに、外見の特徴といい、ディークに保護された状況といい  
出来すぎたくらいにぴったりだ。

何も言えなかつた。

何を言えばいいのか分からなかつた。

ずっと、ただの騎士として生きてきたのに　ある日突然大国の  
王子だったなんて。

「……まだシェリーには話していないわ。でももう、限界ね。会わせ  
ないようにしてたのに、遭遇しちゃうんだもの」

果然と、話を聞いているうちにリノルアースの部屋まで辿り着く。  
淡々としたリノルアースの声が、ただ耳に入つてくる。そこには  
寂しさも、悲しさも、感じられない。

「アドルのところで詳しく話をきいてくるといいわ。レイもいれば、  
もっときちんと説明してくれるでしょう」

「……リノル様」

そつとリノルアースを椅子に座らせ、ルイはその顔を見つめて言  
う。

「その前に、お茶を」

淹れると約束した。

いつも不味いと言いながらきちんと最後まで飲み干してくれてい  
ることくらい、ルイも知つている。

「……本当に、アヴィランテの王子だったなら、私なんかにそんな  
ことする必要はないのよ?」

あなたの方がずっと偉いんだから、トリノルアースは俯きながら  
呟く。

「そもそもれません、でも　今ここにいるのは、ルイ・バウア  
ーですから。あなたに仕えてきた、ただの騎士です」

説明を聞きに行くのは、お茶のあとでもいいでしょ?」とルイは微笑む。

なぜか今のリノルアースを一人にさせたくなかった。

結局リノルアースが就寝するまで、ルイは側から離れなかつた。いつもなら追い出されるが、リノルアースが寝台に入つて眠りにつくその時まで、そつと傍らに立つ。

暗くなつた部屋をそつと出て、ルイはアドルバードの部屋に向かつた。まだ一人とも起きているだらう。

案の定、部屋の前まで行くと中から話し声が聞こえた。

「失礼します。アドルバード様」

ノックと共に、ルイは入室すると、夜着に着替えたアドルバードと、未だに騎士服を着た姉のレイがいる。

「ルイ? どうしたこんな夜遅く」

「こんな夜遅くに姉さんを部屋に入れてるアドル様にお聞きしたいことが」

この人に限つて問題はないと思つが　姉も妙齢の女子であることをたまには主張しておかなければ。

「な、なんだよ」

厭味を言われていることに若干押され、アドルバードはルイを見上げた。

「俺が、アヴィランテの王子かもしけないと、リノル様から聞きました」

しん、と部屋の中が静まり返る。

アドルバードなんて全部顔に出てる。レイは何を考えているか、

まるで読めないが。

「……リノル様が、おっしゃったのか」

レイが静かにルイに問つ。

「ええ、アヴィランテの姫君に会つた直後に、もう隠しきれないからと」

「そして、説明を聞きに来た」

リノルアースが話さなかつたのは たぶん、辛いからだりつと、

アドルバードもレイも推測する。

「リノル様がそうするのが良いだつと。父上からもすでに話を聞いていいるやうですね?」

こくりと、レイが頷く。

そしてちらりとアドルバードを見てから、説明役を買って出た。正直上手く説明する自信がなかつたアドルバードとしては感謝だ。

説明といつても、おおよそが憶測に過ぎない しかしそのあまりにも合致すぎる状況に、ルイもため息を吐き出す。

「 黙つていてすまなかつた」

すべてを説明し終えてから、申し訳なやうにレイが呟く。

「気にしてません。俺にはどうでも良いことですから」

「どうでも良いつて けつこう大事だぞ? おまえ本当にアヴィラの王子なら一生苦労しないで生きていけるだ」

黙つていたアドルバードが思わず口を開く。

「楽に生きろなんて教育受けてないので。このままアヴィラの姫君が帰るまで素知らぬ顔をしていれば良い話でしょう? 証拠はないわけですし」

「いや……ばれたら国際問題に」

「十年以上も前に行方不明になつた王子のことなんて、アヴィラの人間でも忘れているでしょ?」

確かにそうだが、とアドルバードは口籠もる。

「一応、妹かもしれないんだぞ？」

シェリスネイアのことだ。ルイの反応はあまりにも淡白すぎる。

「俺の家族は両親と姉だけです。俺はこのままハウゼンランドに骨を埋めるつもりなんですから」

そのきつぱりとした言葉を、リノルアースにも聞かせてやりたいな、とアドルバードは思つ。

「……それが、許されれば良いけれど」

レイが静かに不吉な言葉を呟く。

「レ、レイ？ そんなこと言うとや、ほら、悪いことが」

「起きるでしょうね。シェリスネイア様はリノルアース様並みに頭の回る方ですから。ルイと顔をあわせた段階で、ルイが兄である可能性を考えるでしょう。そしてルイはもう養子であることを言つてしまつた」

決定打を言つていながら幸いですが、とレイは付け加える。

「遠からず、探られるでしょう。その時上手く隠し通せるとは思いません」

顔に出やすい人がいますから、と誰かは言わなかつたが、誰のことかはその場にいる者なら分かつてしまつた 不幸なことに本人でさえ。

## 27・じつに前科がある！

偶然だろうか、必然だろうか。  
ショリスネイアは頬杖をついてぼんやりと窓に向こうの景色を見つめる。

あの人容姿は、どう考へても北国の中ではなかつた。  
どちらかといえば、そう、南国の中。いや、南國の人間そのものと言つても過言ではないだろう。  
黒い髪に、濃い肌。瞳の色は確かに緑色だつた。

『あの騎士殿とはあまり、似てないのね？』  
『私は、養子ですので』

つまり、この国人間ではないということ？

南國の人人がどうしてこの国に、しかも年頃もショリスネイアの兄と同じくらいだ。  
これは偶然だろうか？  
偶然にしては出来すぎでいる。

優しそうな瞳をしていた。気遣わしげにリノルアースを見ていた。  
彼が兄であったなら、あの双子のように、なれるだろうか。  
「……確かめてみる価値はあるわよね？」  
自分の願望と言わればそれでおしまいかもしれない。  
当初は兄が生きているなんて露ほどにも思つていなかつたのだから。

そこで可能性の高い人を見つけて、すがり付いてしまうのは都合の良い話なのかもしないけれど。

それでも。

とりあえず一番顔に出るアドルバードは今後シェリスネイアと接触を避けるように、バウアー家の一人からきつく言い渡された。

「……今日は、リノルアース様の部屋で休みます。アドル様、くれぐれも迂闊に部屋から出たりしないでくださいね。シェリスネイア様に会つても平常心で」

レイが突然そう言い出し、アドルバードは大慌てだ。

「ちよちよちよちよちよつと待て！ なんでおまえがリノルの部屋に行くんだよ！」

大抵レイはアドルバードの部屋の隣室で就寝する。同性の騎士ならばそれが当たり前だし レイの場合もあらゆる意味で危険はない。アドルバードにはそんな甲斐性は存在しない。

「今夜はたぶん一人では心細いでしょうから。レイが添い寝するわけにもいかないでしょう？」

「ねねねねねね姉さんっ……」

当たり前だと言いたいのにも関わらず、冷静な姉のセリフに動揺を隠せないレイは顔を真っ赤にして慌てる。

「レイが代わりにアドル様についてくれ。隣にいつも私が使ってるベットがあるから」

「おいこら待て！ ルイがレイのベット使うのか！？」

「そこでどうして過剰反応する必要があるんですか。姉弟ですよ？」

それでも心の狭いアドルバードには許せない事態であって そもそも惚れた女の残り香がするベットに、弟であろうともどうして侵入を許せようか。

「こいつには前科がある… 昔はレイが好きだったっていうし…」

「そこでバラしますか普通！ 人の初恋を踏みにじらないでください！」

ルイが顔を赤くしたり青くしたりしつつ、アドルバードの口を塞ぐとする。

「……ではアドル様の寝台で一人で寝ればいいでしょう」  
ふう、と呆れたようにため息を零しながらレイが新たな提案をする。

「誰が男と添い寝して嬉しいか！！」

「それはこっちのセリフですよアドルバード様！」

ぎやあぎやあと喰く一人を見て似たもの同士だなどという感想を思ひ浮かべながら、レイはさらなる提案をする。

「ではルイが長椅子なりソファで寝ればいいでしょ？……それとアドル様」

「は、はい？」

少しだけ怒ったようなレイの声に、自然とアドルバードは背筋を伸ばす。

「了見の狭い男はもてませんよ」

それが痛恨の一撃だった。

結局アドルバードはルイがレイのベットを使うことを泣く泣く許可し、レイはアドルバードの部屋を出てリノルアースの部屋に向かうこととした。

「姉さん」

その後ろをルイがついて来て、レイは振り返る。

「……いくら私がいたとしても、この間にリノル様の部屋に入ることは許可しないが」

「いや、別にそんな理由では 送ります。姉さんも強いけど女性だし。それに」

話が、と呴かれて、レイは静かに頷く。

「……姉さんは、俺がアヴィランテについた方が良いと考えてるで

しょう?」

隣を歩く姉を見ることが出来ずに、ルイはただ床を見つめた。

レイは何も言わず、ただ黙って歩く。

「俺としては、このままリノル様の側にいたい。それがハウゼンランドを危険に曝すことになつても、姉さんは、どうしてたぶん、同じ立場になつたら、この人も同じように願うだろ?」

「…………ルイ」

静かに、レイが口を開いた時だつた。

ぱつしゃりと、どこからかともなく水が降つてきた。それこそバケツをひっくり返したくらいの水が。

その大半がルイにかかり、上半身だけでなく全身がびしょぬれだ。

「…………はい?」

何が起きたのか飲み込めず、ルイはただ呆然とそう呟く。  
「ももももも申し訳ありません!! 蹤いたら水差しが物凄い勢いでそちらにいつてしまつてしまふえええつ!!」

瞬間移動かと思えるほどの速さで女官がルイに駆け寄ってきて白々しいまでに頭を下げる。

「…………シリスネイア様のお付きの方ですね?」

レイが静かに女官を見下ろす。特徴は南国の者のそれとしては地味で、一見どこの國の者か見分けは出来ないはずだが、レイは人の顔を覚えることが得意だ。

「え、ええと、その。姫様が喉が渴いたとおっしゃいまして、それで眠れないとおっしゃるものですから、つてそんな場合ではあります! 早くお脱ぎください! 風邪を召されたら大変です!」

「…………！」

「ついてえ! ちょっと! 人の服を剥がないでください!」

女官の手がルイの服に伸び、あの手この手と服を脱がそうとするが、。

「ここなどここで服を脱いだ方が风邪を引きます。暖かな部屋に向かう途中でしたし、身体を鍛えた骑士ですので心配なく。それに若い女性が男性の服を脱がそうとするものではありませんよ。夜とはいえ、ここではどこから誰に見られているかも分かりませんから」レイが静かな声で女官を止める。

その声に圧倒され 女官もしぶしぶといった態で下がった。  
「シリスネイア様がお待ちなんでしょう? 主人を待たせるのは

関心しませんよ……失礼します」

そう言つてレイはルイの腕を引き、少しだけ歩調を速めてその場から去る。

「姉さん?」

ルイは首を傾げて、前を歩く姉を呼ぶ。

「黙つて歩け。リノルアース様の部屋で話す」

「ここでは駄目だ、と呟かれ、ルイも口を開ざした。

窓の向こうには、今にも折れそうなほどにか細い月が夜空の中で懸命に自分の存在を主張していた。

静かに、音をたてないよつてレイはリノルアースの部屋へと入った。

寝台の上ではリノルアースが大人しく眠っている。

「……不測の事態とこいつことで許可はするが、寝台には近づかないよつて」「元」

レイはため息と一緒にそつ忠告して、レイと共にリノルアースの部屋に繋がる隣室へと移動する。

「姉さんは弟を信用してないんですか……」

がつくりとうな垂れながら、ルイが呟く。それなりの信頼関係は築きあげてきたつもりだが。

「男は時に豹変するものだと、主からきつゝ言われているから仕方ない。早く着替えないと本当に風邪をひく」

ふわりと頭にタオルがかけられ、ルイは自分でも出来るところにレイは髪を拭き始めた。

「どうしてこんなに急いだんです？ 別に廊下で脱いだりで脱いだり」と

話しながら上着を脱ぎ、特に支障はない、とそうルイが言ぬつとすると、

「あの水は、故意にかけられただらう」「うう

といつレイの静かな声で遮られた。

レイの手が抜き出しのルイの右肩に触れる。冷えた肩にその手はとても温かく感じた。

「……うちに来た時には既に、ここに火傷があつたな」

レイが触れるその場所は、ひどい火傷が今も痕をしている。

「それが、見られてはいけないものだとでも？」

何も分からぬルイは首を傾げながらレイを見下ろす。レイはた

だ真剣な瞳で、ルイの右肩を見つめていた。

「……アヴィランテの王族は、右肩に王印をつけると聞いている。

おまえの右肩も、かすかだが何か描かれていたように見えなくもない

い」

「初耳だった。

そもそも遠い南国の知識がある姉が異常なのだとしても。

「おそらく、それを確認したかったんだろう。そしてこれを見られたら、シェリスネイア様の中でおまえは兄と確定しただろうな」

「……俺には、死の宣告にも感じますけどね」

ルイは苦笑して、咳く。

王子が亡命するために、王印を隠した。幼い 幼すぎる王子にそんな仕打ちをしなければならない事情があつたと考えるのも、不自然はない。

ルイは自分の右肩に触れ、苦々しく咳く。

「やはり、俺はアヴィラの王子なんですか？」

姉に答えを求めるのは間違っていると、分かっていても口は勝手に動いていた。

そんな弟をレイは静かに見つめ 右肩に触れる弟の手に、自分のそれを重ねた。

「…………おまえは聞いたな、アヴィラに行くことに賛成なのかと」

ルイは俯いていた顔を上げ、美しい顔立ちのレイを見つめた。

「正直、そうなれば良いのかもしないとも考えているよ、私は」  
分かつていた答えに、ルイは心が痛んだ。どうして、という問い合わせ同時に浮かぶ。

そんなルイの心を読み取ったかのように、レイは続けた。

「おまえはリノルアース様が好きで、そして私はアドルバード様が好きだ。そしてアドルバード様も、同じように思つていてくださる

「…………昔は、ただ側にいるだけでよいと、そう思っていた。  
私は王妃になれない」と

だから、良かつたんだ、とレイは呟いた。

アドルバードの名前を一切略さずに話していくことに気がづいて、姉は真剣なんだとルイは気づく。レイがアドルバードの名前を略さない時は、真剣な時か、本気で怒っている時だけだ。

「もしおまえとリノルアース様が結ばれても、私とアドルバード様が今ままなら、それで良かつた」

そこまで言われて、ルイも気がつく。

たった二人の王の子供が、同じ一族と婚姻を結ぶわけにはいかない。それはハウゼンランドの政治に偏りを作り出してしまうだろう。貴族からの反発は大きいことなど容易に想像できる。他国の王族、またはハウゼンランドでも有数の大貴族ならまだしも　バウアー家は弱小貴族。

どちらかだけなら、可能性はある。

けれど、どちらも無理だ。

レイはずつと前からこのこと気にづいていた。だから　自分の恋を、叶えようと思つていなかつたのだ。

「…………それでも、私ももう引き返せない。ならば、周囲を納得させる術を考えるしかない」

だから今まで以上にアドルバードの為に尽力した。周囲を黙らせるだけの才覚がアドルバードにあれば、婚姻など小さな問題だと。

「…………でも、俺がアヴィランテの王子となれば

ルイが自然と呟く。

状況は一度で解決する。

所詮は行方不明だつた第九皇子だ。アヴィランテでの扱いは重い

ものではないだろ。けれどハウゼンランドにしてみれば、大国との繋がりだ。

「リノルアース様が嫁ぐことなんて簡単に決まる。その繋がりを作り出したアドルバード様の才能も認められる」

そしておそらく、お互いの恋が実る。

「……でも俺が、リノルアース様への思いを諦めれば」

そもそもレイとアドルバードのよつに相思相愛でもないのに、トルイは呟く。

真実を知るレイはため息を零しながらルイを見つめた。

「おまえはアドルバード様並みの鈍感じやないだろ？」

それはある意味でひどい言葉だ。

ルイが心外そうにレイを見つめ返す。その心の底まで見通してしまいそうな青い瞳に、押される。

「少なくとも、可能性がゼロだとは思わないが。リノルアース様は気に入らない人間は側に置かない人だからな」

それは、もちろん知っている。

側にいろどり、命じるくらいにはルイに対して好意を持つているのだろうと。その命令に、ほんの少し期待してしまったことも嘘ではない。

「私は、自分の恋の為におまえを切り捨てよつとは思えない。……おまえも同じように思つてくれるだろ？と、信じてもいる」

レイが優しい、綺麗な微笑みを浮かべてそう言つ。

だから、諦めるなど、そう言つてくれる優しさが胸に染みて、ルイもつられて笑つた。

気高く、澄んだ、凛とした強さを持つ姉に、憧れていた。

容姿があまりにも違すぎるところから、実の子でないことは幼い頃から教えられていた。それでも変わりない愛情を与えたと思えるほどに愛されていた。

だからこそ、姉に対する憧れが恋になつたことにも違和感はなかった。

幼い頃の、狭い世界の中でそれはたぶん必然だった。

そしてその彼女が誰を見つめているかも、すぐに分かつていた。

もはや恋ではない。

家族に対する愛情だと、胸を張つて言える。

けれど大切な人であることに変わりないから。

その人から差し出された選択肢に、手を伸ばそうとする自分がいる。

それが誓いを破るものだと分かっているのに。

「…………ルイ？」

暗闇の中で人の気配を感じて、リノルアースは目をこすりながら、わずかに差し込む月光を頼りにその人を探す。こんな真夜中に、ルイが自分の部屋にいるわけがないと分かつているのに、一番最初に名前が浮かんだのが彼だった。

人影が動く。

「…………ルイではなくて、申し訳ありません」

苦笑するような、涼やかな声。

その声には、幼い頃から馴染みがある。付き合いだけならルイよりも長い。

「レイ　どうしたの？」

暗闇に慣れ始めた目が、レイの表情を読み取る。珍しい顔をしている。

「今夜は、お一人では心細いかと思いまして。ルイの方が良かつたみたいですが」

「べ、別にそういうわけじゃ　　大体あの男がこんな時間に部屋にいたらしくらんでも叩き出すわよ」

そもそも寝顔なんて　　そんな無防備な顔を、ルイにそつそつ曝すわけにはいかない。

「つい先ほどまでは隣室にいましたが

「んなっ……どうして！？」

寝顔を見られたという羞恥心と、その時に目を覚まさなかつた自分に対する憤りが交じり合つてリノルアースは思わず声を荒げる。

「いえ、少し奇襲に遭いました

「奇襲？」

首を傾げるリノルアースに、レイは「明日説明しますよ」と答え、

再び眠るよつに促す。

「……わざわざ来ただもの、ここで寝るんでしょう？」

甘えるような声になつたのは、やはり今日ほどこか疲れたからかもしれない。

レイは優しく微笑んで、もちろんと答える。大きな寝台に、二人眠ることはたやすい。

「こんな風に寝るの、何年ぶりかしら。小さな頃はアドルと三人並んでお昼寝とかもしたわね 夏に、芝生の上で寝たりして、レイがディーケに叱られたこともあった」

懐かしいですね、というレイの声が、まだ眠い脳に心地よく響く。プライドの高いリノルアースが甘えられる人は、そう多くない。兄でさえ素直に甘えることは滅多にない。

その中でレイという人は 昔から立ち位置が変わらない。こうして甘えたい時に、そつと側にいてくれる。

「こんな毎日が、ずっと続けば良いのに」

それは大人になりたくないという、リノルアースの本音を零していた。

「そうすれば ずっと、一緒にいられるのに」

政略とか、そんなもの関係なかつた小さな頃のよつに、何も気にすることなく、未来を憂うこともなく。

「……リノル様」

レイが優しく、リノルアースの髪を撫でた。

その手が嬉しい。けれど同時に、その手じゃないとも思う。本当に触れて欲しいのは、違う人だ。

「本当は国政とか、どうでもいいわ。アドルがいて、レイがいて ルイがいてくれれば、いいのに」

立場がそれを許さない。

ただ状況に流されてしまえば、リノルアースはどこかの国に嫁ぐことになるだろうし、アドルバードは美しい姫君を娶るのだろう。それが嫌だった。

嫌だったから あらゆる手を使つて掴もつとする未来に手を伸ばしたのに。

「ルイが」

リノルアースは耐え切れずにレイにしがみつく。  
その声が震えて、大きな瞳から綺麗な雫が落ちたのは たぶん  
気のせいじゃない。

ルイが、いつしかやつ。

遠くへ。

その切ない声に、レイは何も言えなかつた。

ただ優しく抱きしめてあげることしか出来ない。ついさっき、ルイに言つた言葉ばかりが頭の中で繰り返される。  
欲しい未来を手にするには、そうするべきだと、そう思った。  
しかしそれしか道がないわけじゃない。

道を選ぶのはルイだ。彼が選ぶ道を、姉として応援するだけだ。  
そしてたぶん、レイはもう分かっていた。ルイがどの道を選ぶのか、その結果誰が傷つくのか。

レイはただ、リノルアースを抱きしめる力を強めた。  
それしか、出来なかつたから。

「では、確認はできなかつたのね？」

ふう、というため息と一緒に、ショリスネイアが失望の色を含んで呟いた。

「申し訳ありません。その、邪魔されてしまつて」

「仕方ないわ。あの騎士は一番手ごわそだもの。その反応を見れただけでも良しとしましょう……明日あたり、王子カリノルに、それとなく探りを入れればいいのよ」

王子あたりは顔に出るでしじうしね、ヒショリスネイアは微笑む。そして無意識に自分の右肩に触れた。

アヴィランテの王族である証。それはアヴィランテの王族の象徴である鷲が描かれた王印 生まれて間もなく、刻まれる痛み。兄なんてどうせ見つからないと思つていた。

嫁ぐ前の最後の悪あがきだつた。

なのに どうしてだろう。もしかしたらという人を見つけただけで、こんなにも自分は躍起になつてゐる。

この北国にきて思ひ出されるのは仲の良い双子 その傍らに立つ、綺麗な騎士。普段ならおそらく、その輪の中にあの騎士も加わるのだろう。

思い描いてきたような幸せな光景。

温かな日差しの中で微笑む人々。他愛ない語り。

どうして？

どうして自分が望んだものが、こんなにもここには溢れているんだろづ。

欲しいと切望して、今まで叶わなかつたものが。

「ずるいわ、リノル……」

同じじみた王族として生まれ。同じように大陸でもてはやされてきたところの王族にしているものはこんなにも違う。アヴィランテはいつも寒い。この北国のような温かさなんてどこにもない。あるはずの、母親の側でさえ、シェリスネイアにはなかつた。

「わけて、くれてもいいでしよう?」

その咳きは闇の中に溶けていく。

だって、あなたは他にもたくさん持っているじゃない。私にないものを、私が欲しくてたまらなかつたものを、そんなにたくさん持っているじゃない。

ならば、本来私のものだつたはずの人くらい返して。

### 30・迷いのない答えに、心が決まった

アドルバードの部屋に行くと、部屋の主は不機嫌そうに立っていました。

「……まだ、お休みになつてなかつたんですか」

もう夜は遅い。朝早くから色々なことに奔走しているアドルバードならばもう休んでいるだろうとレイは思っていた。

「おまえの帰りが遅いから、もしやレイカリノルに手を出したんじやないかとヤキモキして、それでもレイに部屋から出るなと言わっているから追いかけることも出来ずにこゝにして大人しく待っていたわけだ」

「……どうやつたらそんな想像できるんですか。あの一人に俺が勝てるわけありません」

四人の中では最弱だと自覚している。

そしてそれも、アヴィラのことを含めれば一転するんだなど頭の隅で考えてルイは黙り込んだ。

「レイには実力でも負けるかもしぬないが 力押しだつたらリノルには勝てるだろ」

そんなことしたら生きていられると思つたと聞いたげな田でアドルバードはレイを睨む。

「その後が怖くて力押しも無理です。こちとらキスの一つもしない清い関係なんですよ。どこかの王子様と違つて！ そもそもそんな関係にすらなれませんけどね！」

言い返すと、アドルバードは「う」と口籠もる。前科があるのはどっちだ。

「大体姉さんのことを持つまでも引きずらないでくださいよ。純粋に今は姉としてしか見てませんから」

ため息を零しながらルイは上着を脱いだ。先ほど着たばかりだが、どうせもう寝るしかない。

「その点については少し興味があるんだが いつ、惚れてた？」  
何でそんなことに興味を持つんですかと言い返そうとして、止める。

「アドル様にはまだお会いしてない頃ですよ。俺が家から出ずにいた頃ですから 八歳前までですかね。あの頃は世界そのものが狭かつたんで」

八歳で、王城に入ることを許可されるまでは基本的に家の近所にしか出歩かなかつた頃だ。姉は物心ついた時から王城に出入りしていたのだから、随分な差がある。

「それで？」

尋問ですか、トルイは苦笑する。

年頃の乙女でもあるまいし、どうして男一人で就寝前に恋話に花を咲かせないといけないのか。

しかしまあいいか、という気分も味方して、ルイは昔を思い返した。

厳しい父と、今は亡き優しい母、そして美しく強い姉。  
それしか存在しなかつた頃。

血が繋がつていないと云ふことを、今はもちろん気にしてはいな  
いが、幼い頃にはそれがどうしても負い目に感じていた時期は少な  
からずあつた。

そのせいであの親に素直に甘えられずに距離を置いていた。

そんな中で、つい母に対して癪癪をぶつけてしまった。実の子供じやないのだからと、優しくしなくてもいいと。そんなことを怒鳴

り散らして。

叱ろうとする父を無視して飛び出した。

「まま」つそ放り出してくれればいいと、そう願う心があつた。

「 ルイ? 」

逃げ出して 庭の片隅で蹲つているところを見つけたのは、レイだった。

いつも小さな癪癩の後でルイを見つけるのはレイだった。だから今回もそうだろうと、ルイは思っていた。レイはいつもルイが落ち着くまでただ黙つて側にいるだけだったのだが 今回だけは違つた。

頬に痛みを感じると同時に、ルイの身体は飛んでいた。

芝生の上に倒れこんで、呆然と姉を見上げる。

レイは 怒っていた。

「母上に謝りに戻れ」

拳を握り締めたまま、レイは低く言った。

でも、と呟くと、また拳が飛んできそうで怖かつた。

「父上も母上も、おまえをどれだけ愛しているのか分からぬのか。分からぬのは、おまえが分かろうとしてないからだ。どうしておまえがルイって名前をつけられたと思ってるんだ」

聰い子供だったレイと違つて、ルイにはその言葉のほとんどが分からなかつた。

ただ怒つているレイが同時に泣きそつなのだけは、馬鹿な子供だつたルイにも分かる。

両親に謝りに戻ると、先に父親のお説教が待つていた。

小一時間のお説教の後で、両親に一度に抱きしめられてから

ルイの中の負い目はなくなつたのかもしれない。

もう少し成長してから知つたことだが 母は、レイを産んだ後

で子を成せない身体になつたのだといつ。跡継ぎを、と望まれる立場で女の子を一人産んだだけの母は親戚連中の内で肩身が狭い思いをしたのだという。

父がルイを拾つたのも　両親にとつては天の導きがあつてこそだつたのだと。

そして、この名前の意味も。

「レイヒルイつていうのは、砂漠の民の言葉で白と黒つていうんですよ。なんとも安直な名づけ方ですね」

苦笑しながらルイは久しぶりに自分の名前の由来を口にする。

レイが名づけられたのは偶然としか言いようがないが　砂漠でルイを拾つたのは、もはや運命に近かつた、と父に昔話された。

「……それのどこでレイに惚れるんだ」

殴られただけだぞ、と言われてルイは苦笑とする。

「いつも黙つて側にいてくれた時から惚れてたんでしょうね、泣きそうな顔見た時から、完璧に意識は変わつてたのかも　それでも、姉さんの眼中に自分はまるで入つてないことに気づいて傍く散りましたけどね」

恨めしそうにアドルバードを睨みながらルイは言つ。

「……そういえば俺はいつからレイが好きだつたんだろう」

ルイの視線に気づかず、アドルバードが首を傾げていたので、ルイはさすがにため息を隠せなかつた。

「そんなことも分からないつて、やっぱリアドル様はヘタレですね」

「おまえに言われたくない。少なくとも剣の誓いをたてた時には既に

そう呟きながら逆算を始めるものだからますます姉が不憫に感じ

てきた。

そもそもこの二人は、いつからなんて考えるのも馬鹿馬鹿しくなるくらい昔から、無自覚に相思相愛だったのだ。それはレイをずっと見てきたルイが保証できる。

この二人はたぶん、世界が終わりを迎えるよつとも、その瞬間までお互いの傍らにいるのだろうと。

それが羨ましかったのだから、その一人を引き裂くうとなんて考えられない。

「アドルバード様、姉さんのことを愛してますか？」

気がつけば口が勝手に動いていた。

はつとしてルイが自分の手で口を塞いだ時には遅い。

「愛してるよ」

あつさりと即答されて、むしろルイが呆気にとられた。

それがそのまま顔に出でていたのだろう、アドルバードが「なんだよ」と笑う。

「弟のおまえが心配しなくても、レイを不幸になんてしない。それくらいの甲斐性は期待していいぞ」

期待していた答えを、簡単にアドルバードに言われて呆然とする。迷いのない答えに、心が決まったのは確かだった。

「それにしても姉弟だよな」

アドルバードはくすくすと笑いながらそう続ける。

意味が分からずに首を傾げるルイに向かつて、アドルバードは指摘した。

「口癖だよ。真剣な時とかはおまえも俺のことアドルバードって呼ぶ。絶対な。たまに普通の時もそう呼んでるけど」

肝心な時は絶対だ、と言われて自分の言動を思い返す。あまり愛称を使わないように気をつけていたはずなのだが、やはり気が抜けてしまっていることが多いらしい。

しかし今回は都合がいいが、トルイは苦笑する。

「姉さんをお願いします」

ルイはそう言ってアドルバードに頭を下げる。

驚いたアドルバードは、ただルイを見下ろしていた。声をかえる

余裕もなく、俺は、トルイが続ける。

「王子として、アヴィランテに行きます」

### 31・嫌な予感はいつも当たる

急にアドルバードに呼び出されたリノルアースは、一人で兄の部屋に向かう。同じ寝台で眠ったレイも、朝目が覚めるとすぐに身支度をしてアドルバードのもとへと帰った。

アドルバードが呼び出すなんて珍しい それが少しだけ、何かの前触れのように感じてリノルアースは自然と足が重くなつた。

アドルバードの部屋の扉を、ノックもせずに開けた。

いつもならそれをとやかく言うアドルバードが、静かにリノルアースを迎える。

部屋の中には何故かシェリスネイアとウイルザードまでいた。ウイルザードはリノルアースと田が合いつと分かりやすいほど嫌悪が顔に出でていた。

「……一体、何の騒ぎ？」

ため息まじりに、いつものように堂々と、リノルアースはアドルバードに問いかける。強がってなければ、足が震えそうだった。

いつもいつも、嫌な予感は当たる。

「皆様に集まつていただいたのは、俺の都合です」

どうぞ、ヒルイがリノルアースの為に椅子をひきながら、そう答えた。

「ルイがわざわざ私を呼びつけたって言うの？ 随分偉くなつたわねえ？」

リノルアースの厭味に、ルイはすみませんと苦笑するだけだった。

「それで？ どうして私やネイガスの王子まで呼ばれたのかしら？」

先に座っていたシェリスネイアが紅茶を飲みながらルイに問いかける。

「全員集まつたことですし、始めますか、アドル様」

レイがリノルアースの前に紅茶を用意して、アドルバードに言う。

アドルバードがちらりとルイを見て ルイは、気まずそうに頷いた。それを確認したレイが、一番最初に話し始める。

「まずは、昨夜は弟に水をありがとう」とぞいました。シェリスネイア様

丁寧な声に、シェリスネイアの顔色が曇る。

「あれは、うちの女官が失礼いたしましたわ。風邪などは召されませんでした？」

「ご心配には及びません。はつきりとお聞きします。……あれは、故意でしよう？」

当本人のルイは黙つたまま、リノルアースの側に立つていて。シェリスネイアは若干動搖しているのだろう。いつもの雄弁さがない。

「な、なんのことですかしら。あれは女官が転んで」

「あなたが確認したかったのは、ルイの右肩でしょう？」

レイの静かな問いに、シェリスネイアの肩がびくりと揺れた。図星だったのだと、その場にいる誰もが分かる。

「右肩……」

リノルアースはその単語に、自分の知識を掘り出した。アヴィランテの王族ならば誰もが持つ、王印。

リノルアース自身は、ルイの右肩を見たことはない。王印の位置は正確には背中に近い、右肩だ。そんな場所、上半身裸でもなければ見えないだろう。

「アヴィランテの王族である証、王印の有無を確認したかった違いますか？」

レイの重ねた問いに、シェリスネイアはしぶしぶといった感じで頷いた。

「残念ながら、王印はありませんよ。別のものならあります」レイの答えに、シェリスネイアもリノルアースも、ルイに注目する。普段こんなに注目を集めない本人は、美少女二人からの視線に居心地悪そうにしていた。

「……正直、年頃の姫君の前で服を脱ぐのは抵抗があるんですが、周囲の無言の要求に、ルイが弱々しく抵抗の意思を見せるが、それは無意味だった。

「騎士団の中では簡単に脱いでいるんだから、今更気にする必要もないだろ！」

レイがさらりとそう言つてのけると、過剰反応する人間が一名いる。

「…………ちょっと待て。それはおまえがルイの裸を見たことあるってことか！？ 騎士団はそんなに羞恥心がないのか！？」

「戦場に出れば手当ても必要ですし、稽古をすれば汗もかきますからね。男性はかなり露出することもありますよ」

「そんなもん見るなああ！！ 田が腐る！！」

レイ自身は随分と前からそういう環境で育つたので、大して気にしてはいない。さすがにレイの存在を気にしてか、下まで脱ぐ男はない。アドルバードの着替えすら手伝うレイにそれは今更だろう、と周囲は呆れたようにアドルバードを見つめた。

「目が腐るほどものじやないですよ、いくらなんでも「ぶつぶつと咳きながら、ルイが上着を脱ぎ始める。女性の視線を気にしてか、後ろを向いているが。

だから、それはすぐに見つかった。

上着の中のシャツまで脱いだ、上半身は何も纏つてい無いルイの引き締まった背中。右肩ともいえるその場所にある、古い火傷の痕。

「ルイ、それは……」

リノルアースが驚いたように咳いた。

「赤ん坊の頃の火傷ですよ。記憶にすら残つてないので、他には説明しようがありません」

苦笑しながら、ルイは自分の右肩に触れる。

「……わずかにですけれど、王印のようなものも見えますわね」  
ショリスネイアが確かめるように、じつとルイの火傷の痕を見て  
呟く。

「ここにいる人はもはや存知でしょう。俺はバウアー家の血筋で  
はなく、拾われた子だと。そしてその当時の状況が、アヴィラの王子の失踪と重なり合うと」

暖炉の火がついた部屋の中でもさすがに寒いと、ルイが厚い上着だけを肩にかけた。

「状況証拠にあわせて、肩の火傷の痕。これだけで俺は王子と認められるでしょうか？」アヴィラの姫君

何を、言っているのか。

リノルアースは即座には理解できなかつた。

「……拾われた当時、身に着けていたものはありますかしら？　その品によつては、納得させることは可能だと思います」

「屋敷にまだあります。かなりぼろぼろになつてはいますが」

ショリスネイアの問い合わせ、それに答えるレイの声も、どこか遠い。

「…………ルイ？」

呟いたリノルアースの声は、搔き消えてしまいそうなほどに細かつた。

しかしその声にルイは気づく。リノルアースを見つめ、複雑な表情を浮かべた末に、優しく微笑んだ。

「……アヴィラに、行くつていうの？」

ルイはリノルアースのもとまで歩み寄り、その足元に跪く。リノルアースの小さな手を握り、ルイはリノルアースを見上げて、まるで神聖な儀式のように、言づ。

「 そのお許しをいただく為に、リノルアース様をお呼びしたんですね」

頭を殴られたような、衝撃だ。

嫌な予感はいつも当たる。

許しなんて、そんなもの もう必要ないと、分かっているだろうに。

ルイがアヴィランテの王子ならば、リノルアースの方が格別に地位は下なのだ。同じ王族でも、アヴィランテとハウゼンランドでは国力があまりにも違いすぎる。

何より、リノルアースの頭に浮かんだのは

「…………嘘つき」

泣きそうになるのを、必死で堪えた。

リノルアースはルイの手を振り払い、椅子を倒す勢いで立ち上がる。ルイは跪いたまま、リノルアースを見上げていた。

「ずっと、私を守るって約束したじゃない！――」

そこまでが限界だつた。

リノルアースのプライドが、それ以上を許さなかつた。リノルアースはそう叫ぶと、部屋を飛び出した。

それ以上にルイに怒鳴り散らせば、たぶん、その場で泣いてしまつただろう。



### 32・あなたが、好きだからです

走り去つたリノルアースを追おうとして、ルイは一瞬躊躇つ。自分に追いかける資格があるのかと自身で問いかけ、その答えを見つけられずに、ただ扉を見つめた。

「つ！ リノルっ！！」

躊躇いもなく追いかけようとしたアドルバードを、レイが止める。

「なんだよ！ あの様子じゃ絶対っ」

泣いている、と。そう言おうとして、レイを振り返るが、アドルバードはその顔を見て大人しく引き下がつた。

「……いい加減、妹離れしてください。どう考へても、今駆けつけるべきなのはアドル様じやないでしょっ」

レイの静かな声だけが、広い部屋に響く。

部屋が静まり返り、時計の音が嫌に大きく聞こえた。

「……………ルイ」

沈黙を破つたのは、やはり涼やかな声で。

怯えたように姉を見たルイは、何も言わずにただ立ちぬくしていた。

「ここで言われなけば行動もできないのか」

静かな怒り。確かにレイは怒っていた。

その言葉でルイは躊躇つた自分を、叱り付ける。

「すみません」

「それを言つ相手を間違えている」

レイはさらに追撃し、ルイは苦笑して扉へと向かう。

そして何も言わずに走り出し、リノルアースの姿を探し始めた。

部屋から飛び出し　自分の部屋まで逃げ込もうとして、リノル  
アースは断念した。

広い中庭の植え込みの中に隠れ、堪えていた涙を溢れさせた。人に泣き顔を見せたくなかつたから、本当は自室に籠もりたかつたけれど、もう我慢できない。

それでも大声で泣くことはできず、声を必死で堪える。そうすると随分情けない、子供のような泣き声が漏れた。

なんとなく、予想はしていたことだ。

ルイの選択を拒むことは許されない。

そしてその選択肢を「えず」に誓わせた言葉で、彼を非難することも、できない。

分かっているのに。

「　ルイ」

漏れる泣き声が、時折勝手に彼の名前を呴ぐ。

命令でも約束でも何でも良いから、彼が側にいて欲しいのに。

「はい」

呼んだわけではない名前に、答える人はただ一人だ。

驚いてリノルアースは思わず顔をあげてしまった。泣き濡れた顔を、見られたくない人に見られてしまう。

「こんな所にいると、風邪をひきますよ。リノル様」

そう言いながら、ルイは上着を脱いで膝を抱えて座り込むリノルアースにかける。咄嗟のことに反応できなくて、しばらくリノルアースはルイを見つめていた。

その手が優しく、リノルアースの涙を拭うまで。

「なつなんでここに……」つ

羞恥で顔を赤く染めたりノルアースが動搖して声を荒げる。

部屋にも行かずに、中庭に隠れていたのに。リノルアースがそう簡単に見つかるような所で泣くはずがない。

一  
部屋に戻ったのかなと思つたんですね  
途中に止を通りた時、

困ったようにルイが微笑み、リノルースの濡れた頬を撫でるのは、止めない。

その手が心地よいのに、恥ずかしくて、振り払うこともできずに逃げることもできない。ただ泣き顔を見られ続けるのだけはプライドが許さず、ルイの胸にそのまま顔を埋めた。

あなたは和の驕二にて、お出でござる。

「そうですね。」  
「そうですね。」

「だつたら命令よ。ずっと、ハウゼンランドで、私の側にいて、私はリノルアースの身体を支えながら、静かに答える。」「守りなさい」

引き止めたいたいという気持ちが、リノルアースに言葉を紡がせる。こんなことを言つては駄目なんだと冷静な自分が頭の中で騒いでいるが、それすら気にならないほどに、願望が強い。

「…………すみません。その命令は聞けません」

静かに、しかしさつきりとルイは答えた。

その声がリノルアースの耳に痛いほどよく響く。

「私の命令よ！？」  
どうして聞けないなんて言うのー？」

最早それは泣き声でしかなかった。リノルアースがルイの胸を拳で叩きながら、泣き叫んでも、ルイは前言を撤回しない。

「…………どう、して」

嗚咽と共に零れるのはそんな言葉だけだった。どうして、どうしてと、ただそれだけを繰り返す。

リノルアースをただ支えていただけのルイの腕に、力が籠もった。強く抱きしめられ リノルアースは息を呑む。枯れることを知らないように流れていた涙が一瞬止まった。

「あなたが、好きだからです」

耳元で聞こえるその声を、幻聴ではないかとリノルアースは思う。ルイが自分に好意を持つていてことくらい、ずっと前から分かっていた。気づかないほど鈍感じじゃない。けれど、どうしてかずっと聞きたかったその言葉を聞いた時には、嘘だと思った。

「我儘で、お転婆で、強がりで、実はブラコンで、寂しがり屋なりノルアース様が好きです。他の誰よりも」

何度も好きだと繰り返され、リノルアースはようやくこれが現実なのだと理解する。

そして同時に、どうして、という問いかまた浮かんだ。

「でも俺はただの騎士で、あなたに釣り合うものなんて何も持っていない。拳句、この思いは姉さんやアドル様の障害にもなりかねない。何か問題が起きても俺はあなたや姉さんに振り回されるばかりだ」「何の力にもならない、とルイが自嘲気味に思いを吐露する。

リノルアースはいつも雄弁さんて忘れてしまったかのように、ただルイに抱きしめられていた。寒い外気が、まるで寒くない。互いのぬくもりだけでこんなにも暖かいのだ。

「だから俺は力を手に入れます。俺がアヴィラの王子になれば、事は随分と楽に運ぶでしょうから」

「そんな、こと」

必要ない、私がどうにかしてみせるから。

そう続けようとしたが、それはルイの言葉に遮られた。

「たまには、俺にもかつこつけさせてください」

苦笑しながら、ルイはそつとリノルアースを解放する。涙なんていつの間にかに止まっていた。それなのにルイの手が優しく頬を撫でる。

「俺はいつどこにいても、ルイ・バウアーです。いつまでも、あなたの騎士です。長い人生の中の、ほんの少しの時間、側から離れるだけですよ」

だから、大丈夫です。

そう言いながら微笑むルイを見つめて、リノルアースもいつもの調子が戻ってきた。

「…………五年、いえ、三年しか待たないわ。分かつてるとでしょ？  
いつまでもあんたを待ってるなんて出来ないんからね！？　こちら大陸中から求婚が来るんだから」

心なしかリノルアースが頬を赤く染めて、続ける。  
ルイはきょとんとした顔で、ただリノルアースの言葉を待つた。

「それまでに、私を迎えて来なさい」

その言葉の意味を、分からぬわけがない。  
ルイは頬の筋肉が緩むのを感じながら、精一杯真剣な表情を保つ。

「　　はい。我が姫」

必ず、あなたのもとに帰ります。

そう答えたルイを、リノルアーースは満足そうに見つめる。  
寒い風に肩を震わせ、二人で部屋に戻りながら、ルイは「それに  
しても」と突然切り出した。

あなた達兄妹は、人をじらすのが好きですね。

### 32・あなたが、好きだからです（後書き）

さて今回はどこかのセリフをサブタイトルにしようかなー……（いつもその話の中からセリフをひっぱってきてつけるのですが）と悩んだところで、決定には数秒しかかかりませんでしたね。だって、アレ以外のどこに名セリフがっ！？

とまあ最近ルイを覇権にしてる作者です。

個人的には同じヘタレのアドルより良い男なんじゃないかなあ、と（笑）

雑談失礼しました。スルーして大丈夫です。

ご意見、ご感想、誤字脱字等の報告ありましたらお願いいいたします。特に誤字脱字は多々あるかと……（汗）読み返しているんですけど、なかなか気づかないもので。すみません。

### 33：行かないでください

リノルアースを追いかけて、ルイが走り去るのを見送った四人の中には、妙な沈黙が漂う。

誰も呼んで来いと言わないのはやはり、誰も馬に蹴られたくはないからだろう。

「……………シェリスネイア様、紅茶のおかわりはいがですか？」

何とも言えない沈黙の中で、レイが静かに問いかける。

「……………け、けつこうですわ。もう充分」

色々なことでお腹がいっぱいだわ、とシェリスネイアはカップを置きながら答える。

ウィルザードはどこか居心地悪そうにきょろきょろしているし、アドルバードにいたつてはリノルアースを追いかける役をルイに譲つたのが果たして正解だったのか否かぶつぶつと自問自答している。「ていうかいいくらなんでも遅すぎだしあいつまさカリノルに手え出してないだらうなんなことしてたら問答無用でぶつ飛ばしてやる……」

最近はまともだと思つていたが、アドルバードの兄馬鹿ぶりはやはり尋常じやなかつたな、とレイは冷静に判断を下す。久しづりにあんなに弱つたりノルアースを見たからかもしれない。

「では、そろそろ解散しましょう。待つっていても戻つてこないと思いますから」

そうだな、とウィルザードは同意して、立ち上がる。

シェリスネイアも頷いたので、レイはウィルザードにシェリスニアを送つてくれるよう頼んだ。分かつたとやけにあつさり承諾する。

「……………なんていうか、俺はここに呼ばれた理由はあるのか？」  
正直完璧に部外者なんだが、とウィルザードが頬を搔きながらレイに問う。

「どうせ後で知られる」というから、初めからお話しておく方が面倒がないでしょう？色々どこ協力もいただきましたし、アドル様やリノル様の『親戚』もありますし

「まあ、そつちの都合が悪くないならどうでもいいけど。口は軽くないから安心しようと後ろの馬鹿に言つといてくれ」

話ができるような状況じゃないみたいだしな、とウイルザードが笑う。

「確かに伝えします」

レイがそう答えて一人を見送り、扉をゆっくりと閉めて振り返る。目線の先には、かなり情けない姿の主が一人。

「戻つてこないつてまさかあいつ本氣でリノルに手え出してたりして！？」

レイのセリフが脳内に届くまでに時間がかかったのだろう。今更にアドルバードが過剰反応を示して、レイは呆れたようにため息を吐き出す。

「そんな甲斐性はないと何度も分かるんですか。今行けばリノル様に恨れますよ」

「妹の窮地を救つて何が悪い！？」

「窮地に陥つてもいませんから。今が良』と『るなんですから、大人しくしていくください」

「大人しくなんてしてられるか！　あいつを一発殴る！！」

「純粋に力勝負なら負けますよ。アドル様」

あれでも騎士ですからね、とあくまで冷静にレイは切り返す。

「まだ早い！　やつぱりリノルに『愛だの恋だのはまだ早すぎぬ！』

「どの口が言うんですか、それは」

今にも走り出しそうなアドルバードの腕を掴みながら、レイが冷静に止める。

じたばたと暴れる主を見つめ、匕首止めたものが、と思案した。

「アドル様」

なんだ、とレイに呼ばれれば律儀に答えたアドルバードが悪かつた。

ふわりと、甘い香りが鼻腔をくすぐる。花に囲まれているみたいだとアドルバードは考え、レイに後ろから抱きしめられていることに、数秒後に気づく。

「行かないでください」

それは惚れた女の口から吐かれればかなりの威力を持つ兵器になるのだと、アドルバードはこの場を持つて思い知った。

「レレレレ、レイー？」

崩壊寸前までに脈打つ心臓の音が頭にまで響く。ここまで密着することがいまだかつてあつただろうか。しかも彼女の方から。

いやしかしセリフはともかく立ち位置は逆じゃないかとアドルバードは思うが、レイよりも身長の低いアドルバードが同じことをしても、これほどまでに絵にはならないだらう。

「ああ」めんりノル。おまえの危機も大事だけじお兄ちゃんとしてはこれはかなり見逃せないチャンスなんですけど。

心の中で可愛い妹に懺悔する。

「落ち着きました？」

その声と共に、吐息が耳にかかる。

アドルバードは顔だけではなく首筋まで真っ赤に染まり、じくじくと頷く。

その反応を確認して、そうですか、とレイはゆっくりと身体を離す。ぬくもりが離れていくことを惜しく感じながら、アドルバードは首を傾げた。

「……もしかして、これは、罠ですか？」

何故か敬語で、アドルバードは振り返りながらレイに問いかける。

「罠とは失礼ですね。……でも、頭は冷えたでしょう？」

いや別の理由で頭に血が上つてますけど！？

レイの微笑に、アドルバードは悲しくなつたらいのを怒つたらいいのか。

「……おまえ、俺以外にこんなことするなよ？」

「するわけがないでしょう」

そうやつて即答するところも男としてはかなりくるんですけどね。はあ、とアドルバードはため息を吐き出して、肩を落とす。レイの行動は天然なのか計算なのかさっぱり分からぬ。

「あー……リノルは大丈夫かな？」

意識を別に移そつと、とりあえずアドルバードは話を変える。

「レイが追いかけましたから、あの一人なりの妥協点を見つけるでしょう」

「……妥協、ねえ」

あの我儘な妹が折れるだろうかと不安になるのは仕方ないことだろう。

「もう子供ではないんですから、リノル様も理解していると思いますよ？」

苦笑しながらレイは不安そうなアドルバードに言つ。

「そうだろうけど 『ごめん、レイ。俺は、個人的にリノルの味方をしたかった』

レイ本人から頼まれたから、仕方なく協力したけど、とアドルバードが俯く。

リノルアースは我儘で、自分勝手だけど 本当に欲しいものを欲しいと言えない、人間だつたから。それを今まで共に育つてきたアドルバードが誰よりも一番よく知つていたから。

「分かつてますよ……分かつていたけど、私は味方になれなかつた

んです」

少しだけ悲しそうにレイが咳き、アドルバードの肩に額を押し付ける。アドルバードはその肩を抱きしめようかと手を伸ばしかけ止めた。

「だから、あなたはそれ良いんです。あなたはリノル様に優しくしてください」

私はたぶん、無条件にはそれができないから。

そう辛そうに咳くレイが愛しくてたまらなかつた。  
彼女がアドルバード以外のものを 例えばそれがリノルアースでも 犠牲にしてやるつとするのは、たぶんアドルバードとの繫がりだから。

そして今、レイは繫がり以上のものも手に入れようとしてくれているから。

それを求めたのはアドルバードだ。彼女が頑なに引いていた一線を無理やりに越えたのは自分だ。

「おまえは悪くない」

そつと、レイの髪を撫でる。

せりせりとした触り心地に、少しだけ目を細める。

「俺が悪いんだよ、全部

誰よりも我儘なのは 他ならぬ自分がだ。

### 34・女は須らく強い生き物

ショリスネイアを部屋まで送り届けることに異論はない。

彼女と友好的な関係でないことは確かだが、それを理由にショリスネイアをないがしろにしたことは一度もないとウィルザードは断言できた。

だから、この沈黙はキツい。

アドルバードの部屋から出て、一人でただ黙々と歩いているだけだが、空気が明らかに重い。ショリスネイアは床を見つめたまま顔をあげないし、女性との付き合いが苦手なウィルザードでは声をかけていいのかさえ判断できずにいる。

いつもの威勢はどこにいった。

リノルアースにしる、ショリスネイアにしる、いつもの霸気がないところちらの調子が狂わされる。

「……いつたい何が不満だつていうんだ？お姫様」

氣を遣うことができる力量もないのに、ウィルザードは素直に問いかげた。

ショリスネイアの黒い瞳が揺れて、ウィルザードを映した。

「……あなたは本当に嫌な男ね。ここはそつとしておいてください」とこねりよう?」

ああ、やはりそちらが正解か　と内心では苦笑しつつ、ウィルザードはショリスネイアを見つめた。

「俺にそんなこと期待されても無駄ですよ。言いませんでしたか？」

俺はあんたに好かれたいと思つて行動しているわけじゃありませんから」「

そこらへんの男と違つてね、と答えるとシェリスネイアは微かに笑う。

「そうでしたわ。あなたは例外ですものね」

それはどういう意味だと一瞬問いただしたくなり、ウィルザードは口を閉ざした。

こんなわがままなお姫様苦手なはずだらう? ともう一人の自分に問い合わせる。

「不満は、ないのよ」

シェリスネイアの声が耳まで届く。

「ただ、自己嫌悪で身動きがとれなくなつていいだけで」

「自己嫌悪?」

ウィルザードが繰り返す。その言葉を他人の声で聞いてやつと、シェリスネイアは自分の中の感情が整理できそうだった。

「……汚くて、本当に嫌になる」

シェリスネイアの静かな咳きは、確かにウィルザードの耳にも届いた。

彼女としては、ウィルザードに愚痴を零しているつもりでもないのだろう。ただ言葉にして、誰かに聞いてもらいたいだけなのだ。「自分の為に、他人から大切なものを奪いとるなんて野蛮人のすることだわ。それでも前言を撤回するつもりもないのよ。だつてリノルは私がずっと欲しかったものをたくさん持っているんだもの」友人だと思う。気の合う人と巡り会えたことに感謝している。けれど同時に妬ましい。境遇は似ているのに、環境はまるで違う。「私だって、誰かに守つて欲しかつた。誰かに側にいて支えてもらつたから。アヴィラなんて華々しいのは外面だけよ。中身はもう腐敗して、人間の汚い部分しか見えない。そしてその中には私も含まれているのよ」

ウィルザードはただ黙つてシェリスネイアの言葉を聞いていた。

彼女は返事も、相槌も求めていないはずだ。

ただ傍らに、当たり前のように誰かに居て欲しいだけなのだと。

間違えて、いたかもなあ。

自分の中のシェリスネイアのイメージを、否定したくなる。  
目の前にいるこの少女はただのか弱い、守つてあげたくなるよう  
なお姫様だ。

ほんの少し前から垣間見せる彼女の弱い部分に、目を逸らせずに  
いた自分は確かにいた。放つておけないと、そう思っていたことも  
事実だ。

「あんな人間にはなりたくない、ずっとそう思っていたはずな  
に、結局私は骨の髄までアヴィラに染まっているんだわ」

痛々しい声に、思わず手が動いた。

細い、力を込めれば折れてしまいそうなほどに細い腕をに触れる。  
一瞬だけ、シェリスネイアの身体がびくりと震えた。

「月並みな言葉だし、あなたは俺に慰めて欲しいなんて考えて  
ないんだろうけどな。本当に性根が腐っている人間は、自分のやつ  
たことに対する後悔はしない。そして苦しむこともしない」

ウィルザードを見上げてきたシェリスネイアの黒い瞳濡れていた。  
その瞳から一滴でも涙を零さないのは、たぶん彼女の意地なんだろ  
う。

その意地を、崩したいと思つてしまつた。

「つまらないプライドなら捨てた方が楽だぞ。泣ける時には泣いと  
け」

彼女の腕を捕らえた手は離さず、空いた手で頬を撫でた。

かあ、と赤くなつたその顔を見て、失敗したかなとウィルザード  
が内心苦笑する。これは照れたのではなく、どちらかといえば怒り

で頬を染めている。

「あ、あ、あ、あなたなどには死んでも泣き顔なんて見せませんつ  
！ええ、絶対にです！」

屈辱以外の何ものでもありませんわ！」

可愛くない女に逆戻りだ。やっぱり女は分からぬ。  
はあ、とウィルザードがため息を零し、シェリスネイアの腕を放  
す。

「人が親切にしてやつてゐるつていうのに。可愛いのないお姫様です  
ねホント」

「あなたからの親切なんて『いらぬ』と言つていいんです！」

「はいはい。分かつてますよ」

まあ、落ち込んでいるよりは怒つている方がいい。その方がずつ  
と彼女らしい。

なおも怒りながらウィルザードに怒鳴り散らすシェリスネイアを  
軽くあしらつて、ウィルザードは頬が緩むのを感じた。

「リノルアースは思つてはいるほど弱くはないですよ。あなたが  
心配することでもない。すぐに浮上します」

シェリスネイアの部屋について、ウィルザードが別れ際にそう残  
す。

普段通りの丁寧な言葉遣いに、シェリスネイアは少しだけ胸に痛  
みを覚えた。「あんた」から「あなた」に。大きな違いなどそれだ  
けなのに。

「女は須らく強い生き物ですけど　恋は人を弱くさせるものでし  
てよ？」

リノルアースはあの騎士に　自分の兄かもしれない人に、恋を  
している。そんなことはあの場にいた誰もがわかつた。

「そうですか？　俺の説としては逆ですけど？」

ウィルザードが笑いながら振り返る。

その笑みは確信を持つてそれを告げた。

「女は恋をすると強くなる。男なんて敵わないくらいにね」

男はもともと、女に勝てないよう出来ているのかもしません  
けどね、とウエルザードは苦笑する。

「なら私も 恋をすれば強くなれるかしら?」

くす、と微笑みながらシリスネイアは問う。ウイルザードは少し困ったような顔をして、そうでしょうね、と呟いた。

さすがにもう誤魔化すつもりはない。  
認めよう。認めたくはないけれども。

落とされた。もう田舎らしくないくらい。

### 35：だから、たぶん特別になつたのよ？

部屋に着くなり、リノルアースはいつもと変わらず、お茶を淹れて、とルイに命じた。

照れ隠しだろうか なんて考えて、ルイは思わず頬の筋肉が緩む。「あとで、アドル様のところへもう一度行つて来ますね。心配されているでしようから」

茶葉を選びながら、ルイがそう言つと、リノルアースが目を丸くしてじつと見ていた。

「？ 何か？」

「……アドルもてつきり私を探してるんだと思った。部屋で大人しくしてるの？」

「ああ、さすがに双子だなと苦笑しつつ、ルイが説明する。

「俺より先に追いかけようとしてましたけど、姉さんに止められました」

「 それで、あなたはレイに叱られて私を追つてきたつてこと？ リノルアースがじろりとルイを睨みながら問う。反論の余地もない事実に、ルイは思わず黙り込んだ。

「このへタレ」

ふん、とリノルアースがそっぽを向いて吐き捨てる。

「……すみません」

「そんなんじやアヴィラでやつていけないわよ？ もともと王族なんて汚い生き物だらけだし。あれだけの大國ならなおさら」

行くの止めとけば？ と自然な流れでリノルアースがまだ引き止めてくれることが嬉しくて、ルイはにやける顔を懸命に制した。

「それでも、行きますよ。大丈夫です。精神は周囲の人達から鍛え上げられますから」

「……どおいう意味かしら？ それ」

「いえ、その。リノル様のことではなくてですね」

リノルアースに詰め寄られて、思わずルイは後退った。

「どうして私を好きになつたのか教えてくれたら許してあげる」

「……今の流れでどうしてそうなるんですか」

「私が聞きたいから」

きつぱりとした、潔い答えにルイも抵抗できない。少し前まであんなにしおらしくて可愛かったのになあ、と泣きたくなつた。

「……そもそも俺は好きだなんて言われてないのにこれまで追及されるのつて少し不公平って気がしないわけでも」

「何か、言つた？」

「イイエ。何も」

ぶつぶつと文句を呟くとリノルアースに睨まれたので、ルイは素直に降参する。長年生きてきて身に着けた技能とも言えよつ。

「……ルイって、私のこと褒めないわよねえ」

無言で抵抗しようとしているルイをじいっと穴が開くほどに見つめながら、リノルアースがぽつりと呟く。

「何ですか突然」

ルイが蒸らした紅茶をカップに注ぎ、リノルアースに差し出しながら問う。

「だから。あんたつて私のこと褒めないのよ、いつもいつも。口説かれたこともないし。初めて会つた時も」

「騎士として仕えるのにどうして口説く必要があるんですか」

口説きたいなと思つたことはあつても、あくまで主従関係なのだ

からと我慢してきたつていうのに。

「……あんたの前にいた騎士連中は皆口説いてきたけど

「はああああつ！？」

寝耳に水なリノルアースの発言にルイはポットを落としそうになつた。

小さな頃はレイが一人の警護を引き受けたが、一年前 そ

ろそれ三年になるか、アドルバードとレイが剣の誓いを交わしてから、リノルアースを守る騎士が必要になつたのだ。今でこそルイで定着しているが、當時入れ替わりは激しかった。

「綺麗だなんて言葉は当たり前。どいつもこいつも隙あらばつて感じで」

まあ結局は貴族の子息なんだから、淡い夢を見てたのねー、なんてリノルアースがまるで他人事のように語る。

「そ、そ、そんな連中を騎士だなんて思わないでくださいっ！ 騎士道精神をどこかに置いてきたアホです！」

懸命に騎士団の弁護をしながらルイは頭痛で眩暈がしてきた。

「分かつてゐるわよ。だから全員一週間もせずにクビにしてきたんだもの」

ああ、何度も入れ替わっていたのはそういう理由ですか、とルイが納得する。

「でもルイは、会つた時に褒めることもなかつたし、改めて専属の騎士になる時も普通に挨拶したのよねえ」

初めて会つた時は見惚れてて氣の利いたことを言えなかつたんですよ。

なんて言つたらどうするだろう。

苦笑しながらルイはリノルアースの話に耳を傾ける。

「だから、たぶん特別になつたのよ？」

ともすれば聞き逃してしまいそうな そんな言葉だった。

「え、と。はい？」

聞き間違いか何かだろうと、ルイが思わず聞き返すが リノルアースは顔を赤くしてルイから顔を逸らす。

「別に、なんでもない」

その様子にどうやら聞き間違いではないようだな、と嬉しくなつて、ルイは微笑む。

ほんの少し身を乗り出して リノルアースの額にそっと、口づけた。

「なつ」

リノルアースの顔がもつと赤くなつて、ルイを睨みつける。照れ隠しだと分かりきったそれに、ルイはもう怯えない。  
くすくす、と笑いながらルイは立ち上がる。

「アドル様のところへ行つて来ますね」

「つつつ勝手にすればっ！」

リノルアースの怒鳴り声にも思わず頬が緩み、にやけた表情のままで廊下を歩く。冷たい廊下の風は適度にルイの頭を冷やしてくれたが、顔の筋肉は緩んだままだ。

そこにやけた顔が戻らないまま、リノルアースの無事を伝える為にアドルバードの部屋に入ると。

「てつてつめえ！ リノルに手え出してないだろつなああつ！  
？」

リノルアースの実の兄からの鉄拳が待ち構えていた。

背後に何か別のが見える気がするんですが。

冷や汗が背を伝い、ルイは思わず身体を震わせた。リノルアースも連れてくれば良かつたと後悔してももう遅い。

「アアアアアアアドル様！？ 誤解です！ 何もないです！ むしろアドル様だつて姉さんに手え出してるくせにそこは棚上げですか！？」

「それはそれ！ これはこれだろつが！？」

「横暴でしょう！？」

「横暴結構！ シスコンだと笑えば良い！？」

「言つてること滅茶苦茶ですけど！？」

助けを求めて姉の姿を探すが、目が合つても諦めようと合図されるだけだった。

これも予想できたことか、トルイは諦めて三発だけは義兄の鉄拳を受け入れた。

それ以後はそれなりにやり返したことは言つまでもない。

### 36・ギャップか！？ ギャップのせいか！？

「……レイ。ほんつとうに着ないのか？」

「着ません」

レイがアヴィラへ行くことを決意してから、三日が経った。

各国から集まってきた姫君やら王子やらの滞在も後半になり、後は面倒なパーティーが盛りだくさんだ。

「ぜつたいに？」

「絶対にです」

「……どうしても、着ない？」

「着ません」

「どーしても着ない？」

「着ません。しつこいですよ、アドル様」

レイがいささかうんざりしたように答える。

ふて腐れたようなアドルバードの手には、青いドレスが握られていた。数日後にあるパーティーでレイに着てもらおうと思つたのだ。いつもの格好だつてそれはそれでいいんだけど、やつぱりたまには綺麗に着飾つた姿が見たいと思うのは当然の心理なわけで。

「せつかく髪も伸びてきたんだから『ご褒美をつ……』  
結構俺頑張つてるんだから『ご褒美をつ……』」

最後の抵抗とまでにアドルバードが騒ぐと、レイが少し冷たい目で睨んできた。

「アドル様？ 大半の姫君は私が男だと思つているんですよ？ それであなたから遠ざけたといつのに、ここで女とバラしたら意味がなくなるでしょう？」

う、とアドルも言葉に詰まつて肩を落とす。

下手にここで躓いて、どこかの国から縁談を持ち込まれても困るのはアドルバードだ。そつならない為の予防線でもあつたのだから、ここアドルバードが喜々としてレイを女装させるわけにはいかない

い。

「それに今回はあまりアドル様は活躍されていない気もしますが。功労賞はルイのものでしょうし」

リノル様には特別賞をあげても良い気がしますが。そう続いた言葉にアドルバードはますます肩を落とす。それはつまり、俺は褒めるような働きをしてないと……？

「（）褒美が欲しいなら、これから頑張ってください」

くす、と笑う声が聞こえて、アドルバードは猛スピードでレイを見るが、時既に遅し。数少ない笑顔だったるつになあ、と涙を堪える。

（）褒美欲しさに頑張るのはレイの思う壺だと分かっているのに、結局釣られてしまつんだろうなあ、とアドルバードはため息を零す。

「……………」  
で。いつもならそろそろ誰かしりつっこみが入るはずなんだが

いつもなら部屋にいる誰かが早々につつこんでくるべきところで、今日はあまりにも静か過ぎる。

リノルアースやルイは珍しくいいなし、そもそもシェリスネイアはアドルバードの部屋には用がない限りやつてこない。結果、今ここにいるのは暇なウイルザードだけなのだが。

「……………ウイル。何があつたんだ」

ただ静かに黙り込んでぼんやりしているウイルザードを見て、アドルバードが若干怯えたように問いかける。

昔から付き合いがあるが、こんな様子を見たのは一体何年ぶりか。それこそリノルアースに完膚なきまでに振られた日以来だろうか。

無反応のウイルザードを見て、困り果てたアドルバードはレイを

振り返り見る。

レイもなす術がないようで、ただアドルバードを見つめ返すだけだ。

部屋には妙な沈黙が漂い、アドルバードも自分の部屋だといふに居心地悪く感じる。

「……あのさ、何か悩んでるなら微力ながら協力するぞ？」

ぽん、とウイルザードの肩を叩きながらアドルバードが呟く。

「 ウィルザードの口から零れた言葉を聞き取れずに、アドルバードは「ん？」と言いながら耳を寄せる。

「なんつつつつてあんな女なんだよっ！！！ 学習能力がないのか俺は！？ 馬鹿なのか！？ 馬鹿なんだな俺！？」

突然叫んだウイルザードの声に鼓膜が振るえアドルバードは眩暈を起こす。

倒れそうになるアドルバードを慌ててレイが助け、二人はわなわなと震えるウイルザードをただ見つめた。

「ギャップか！？ ギャップのせいいか！？ 確かにまあちよつと可愛いなあとかは思つてしまつたけれども！！ 落ち着け俺！ 本性は魔性の女に違いない！」

ウイルザードの取り乱しように呆気にとられながらも、言葉の端々からウイルザードの身に起きたことを推測し、アドルバードなりに答えを出す。

「つまりおまえ、誰かに惚れたのか？」

アドルバードの指摘に、ウイルザードが奇声を上げる。

「そんでアレだろ？　おまえが取り乱すほどの相手で、しかも最近知り合ったのつていつたらシエ……」

「死にたくなかつたら頼むから黙れ　　！」

物凄い速さでアドルバードはウイルザードに口を塞がれる。

「つまりはシェリスネイア様に惹かれてしまつている自分を肯定できずにいるんですね？」

聞きたくない言葉を聞くかないようにとアドルバードの口を塞いだものの、レイからあつさりと指摘されてウイルザードはなおも奇声を上げる。

暴れだす前にウイルザードから脱出したアドルバードは乱れた服を直しながらため息を零す。

「残念なことにそういう手の話は苦手なんだよなあ」

人様の恋愛」とに口だしするのはどうも、と頬を搔きながら取り乱すウイルザードを眺める。

「……だつたらルイも放つておいてくれませんか」

レイがささやかにそう言うと、アドルバードは目の色を変えて「それとこれは別！」と言い切つた。結局この間は三発までルイが大人しく受け止めて、それ以後は殴り合いになつていた。收拾がつかずにはレイが止めに入つたのは言うまでもない。

「とりあえずウイルの話だ、ウイルの！」

と、アドルバードが話を戻そとしたその時。

「そういう話なら私に任せたまえ！！」

バンっ！　と大きな音をたてて扉が開け放たれる。

馬鹿馬鹿しいくらいに格好つけたボーズで扉の向こうに立つている人物に、不幸な事にアドルバードが覚えがあつた。むしろそんな知り合い一人しかいない。

「なんつでおまえがここにいる！」

礼儀云々はもはや忘れ去つてアドルバードが突如現れた人物を指差す。

浅黒い肌に、真っ黒な髪。南國の人間の特徴を持った男は、いつもの南国の衣装ではなく、北国用にきちんと防寒された服を着ている。

「呼んだ覚えはないぞ！ アルシザス王！！」

アルシザス つい数ヶ月前に、アドルバードがリノルアースに扮して訪問した、記念すべき第一回国目の国だ。

早々に男だとバレたものの、その後も女装してやり過ごすことを条件に騙していたことを許されたが、結果リノルアース姫として誘拐されるわ、国王の思惑絡んだ國の一大事に巻き込まれるわで散々だった。

結果、弱小国のハウゼンランドでは考えられないほどの大国であるアルシザスとの同盟を結ぶことができたわけだが。

「なんだ。カルヴァーと、名前で呼んでくれてかまわないぞ？ 以前のようだ」

「つるさい！ なんで国王のおまえがここにいる！？」

国を放つてこんな所までのこのこと 王子であるアドルバード

とは責任の重さもあまりにも違つ。

「必要だから来たまでだよ。同盟の件もまだ話し合ひをすべきところは多々ある。それに」

もつたいぶつたようなカルヴァーの言葉にアドルバードは久しづりに苛立ちを感じた。

この男と話していると体力が消耗するのはいつものことだ。

「アヴィランテの皇子が来るのだろう？」

それは利用しなければならないからね。  
その言葉はアドルバードの耳に届かない。

アヴィランテ。

最近では聞きなれたその国名に、アドルバードは不安を感じずにはいられなかつた。

### 37・強く、なりたい……

耳を疑つた。

その次には悪い冗談だろ？といつ言葉が浮かんだが、目の前のカルヴァのらしくない真剣な顔を見たら何も言えなくなつた。

何だつて言つんだ、一体。

そんな咳きが零れ、アドルバードは自嘲的に笑つた。

元来、アヴィランテなんて大国が興味を持つような国ではないのだ、ハウゼンランドという国は。

それが最近ではたくさんの国から注目されてしまつてはいる。大陸の華とも言えるリノルアースという存在、ならびにアドルバードの手腕によつて。

野に咲く花のような国から、大輪の華が生まれれば確かに誰もが驚くだろ？つまりはそういうことなのだ。アドルバードもリノルアースも、小さな国で終わるよつた器ではない。

「ま、うちの優秀な諜報部隊だからこそ掴めた情報だがね。実際に国として話が出るのはもう少し後だろ？」

カルヴァの言葉に一瞬だけ安堵するとともに、アドルバードは立ち上がる。

「……父上のところへ上げる。俺一人が抱えるにはあまりにも『テカすぎるからな。その上で俺に一任されるならやるしかないけど』

父であるハウゼンランド王のいる執務室へ向かおうとするアドルバードの後ろを、当然のようにレイがついて行く。

「いらっしゃ。客を置いていくのかね。接待しなさい。賓客だぞ？」

「そこで潰れている奴に相手してもらえ。好きなんだろ？恋愛話アドルバードは沈没しているウイルザードを指差す。

「まあ、好きだがね。君のところの話にかなり興味が……」

「これといって変化なし。以上。いくぞ、レイ」

「はい、とレイが小さく答え、一人はさつと部屋から出て行く。

「……扱いがひどくないかね？」

カルヴァの咳きを聞いている者はいない。ウィルザードを見下ろしたまま、カルヴァはため息を吐き出してソファに深く身を委ねた。

「何なんだ何なんだ何なんだ何なんだ何なんだっ！！！」

怒りを吐き出したい衝動を必死で堪え、アドルバードは早足で執務室へと向かつ。

どこで、何を間違えたといつか。ハウゼンラングは平和で平和としか言いようのない国で、小さな諍いこそあれ、大国がやって来て得るものなんて何一つない。こんな小国のパーティに関わっても得はない。ずっとそう思っていたはずだ。

平穏な清流だった国が濁流へと変わっていく。

アドルバードは唇をかみ締め、俯いたまま歩みは緩めない。

斜め後ろからその様子を見ていたレイの瞳が不安げに揺れた。

握り締められたアドルバードの手のひらからは今にも血が流れできそうで。

それをレイが黙つて見ていられるわけがなかつた。

「アドルバード様」

冷たい空氣。

肌に触れる空氣そのものが刃のように鋭い。

それはもう、条件反射だ。

アドルバードは迷うことなく腰の剣を抜いていた。  
金属がぶつかり合う音が廊下に響き、剣を交えるその人を見てアドルバードは息を呑んだ。

「…………レイ」

その人の名前を呟くアドルバードの唇から漏れた息は安堵か、脱力か、見つめる瞳は動搖していて、レイの青い瞳を直視できなかつた。

「そこまで過敏に殺気に反応するのは、どうかと思いますよ。ハウゼンランドにあなたの敵はいないでしょ？」「

殺氣、と言われて納得する。そんな殺伐としたものにしか反応できないほど、アドルバードは精神的に追い詰められていたのだろう。

「今は、そもそも断言できないだろ」

アドルバードはゆっくりと剣を鞘に収め、レイの顔を見ることができず下を睨むように見つめる。

そんなアドルバードの頬を、温かいレイの手のひらが包み込む。「いたとしても、あなたが剣を抜く必要はない。私がすべて斬ります」

間近のレイの顔は相変わらず美しいとしか言えない。アドルバード以上に血を浴びてきたというのに、彼女には一切血の穢れが見つからない。

何も変わらない。彼女は。

それだというのに、自分は？

彼女に誇れるだけの人間であろうと。  
そう努力してきたけれど。

」

レイ「

「ういう時に結局、彼女に寄りかかるのだ。  
そして彼女にまた手を汚させるのだ。」

情けない。

「強く、なりたい……」

レイが自分の分まで汚れずに済むように。彼女が心を押し殺す必要のないようだ。

大切なこの国が、人が、家族が、傷つくことのないようだ。  
このままいけば、ハウゼンランドは豊かになるかもしれない。  
大国へと変われるかもしれない。けれどそれは 戦いが増えると  
いつことで。

それはつまり、アドルバードの周囲の人々が戦いに巻き込まれて  
いくということだ。

アヴィランテの皇子がやってくる。

それはアドルバードにどうしてそういう世界がハウゼンランドに迫  
つていることの象徴に思えた。

「……何がそんなに不安なんですか？」

優しい声がアドルバードの心に染みた。  
頬に触れる手も、見つめる青い瞳にあるのも、ただただ深い優し  
さだけだ。

「恐れる前に、状況の確認が先でしょ?」 万が一最悪の展開が待っているとしても、今からなら充分に策が練れます。その為にアルシザス王はいらっしゃったんだと思いましたが?」

優しさの中に、諭すような雰囲気が滲む。甘えるな。恐れるな。自分が何を為すべきかを考えろ、と。

殴られるより利くな。

アドルバードは苦笑してレイの手に自分のそれを重ねた。

「……悪かった。もう大丈夫だ」

そう言ってアドルバードが微笑むと、温かな手が離れていく。

「守るよ。何もかも、俺が大切だと思つものはすべて」

この腕は相変わらず非力で、自分の身を守ることすら危ういけれど。守るうとすることで動く何かがあるはずだ。

「共にあります」

レイがはっとするほど綺麗な微笑みを浮かべて、そつと語ってくれることだが、アドルバードにとつてこんなにも心強い。

「行くぞ」

返事なんて確認せずに、アドルバードは再び歩き始める。随分と重荷が軽くなつた。

はい、と凛とした優しい声が聞こえるのはすぐだ。その声が胸に熱く響く。

自分を確かに信頼してくれる人がいるということが、こんなにも心強い。

38・「おのれの王様に手を出したら極刑だよ？」

ハウゼンランド王は温和なことで知られている。

しかしそれだけでは王は務まらないところとも十分に理解している人だった。

その顔を知っているのは恐らく 伴侶である王妃、側近、そして後継者であるアドルバードだけであろう。

執務室の大きな机を前に書類とにらみ合っている父親は、王としての威儀を確かに感じさせるだけの何かがある。王座に座ればそれはなおさらだ。

「 失礼します、父上」

そう断つて、返事を待たずにアドルバードは部屋に入った。国王はちらりとアドルバードを見た後、すぐにまた書類に目を戻した。「」報告があります。そのままお聞きください

王位後継者として接する時は少なくとも親子として会話しない。アドルバードも『国王』の前では駒にすぎない。

国王はアドルバードを一瞥し、目が合つたことを合図にアドルバードはカルヴァーから聞いたことを一つ漏らさず報告した。

「 そうか」

国王の返事はそれだけで、アドルバードも察していたのだろうか、大して驚かない国王に問いかける。

「 ……父上は、知つていらつしゃったんですか

やはり、という言葉はあえて言つことを避けた。

国王 父は、にやりと笑つてアドルバードと向き直る。ずっと

手にしていた書類を机の山の一つへと戻した。

「知らないと思うのかい？ ハウゼンランド王であるこの私が」

ぎし、と父の座る質の良い椅子が軋む。

アドルバードはため息を吐き出して、いいえ、と答える。  
「つかの影も優秀なのでね。三日前にはその情報は掴んでいたよ。  
うちのような国において情報は兵力や財力よりも重要な力だからね  
影、とはハウゼンランドの諜報部隊のことだ。国王のみがその隊  
を動かすことができる。アドルバードですらその諜報員を目にした  
ことはない。

情報は力。小国はいくら努力しても兵力、財力は強くなれない。  
強くなつた時は、民に無理を強いている時だけだ。ならばどうやつ  
て大陸の中で生き残るか。

各国の内情を知ること。

「では、ルイがアヴィランテの王子かもしないといつことは？」  
「随分前にティーケから報告があつた」  
「……知つていて、なぜ放置していたんです？」  
一步誤ればハウゼンランドを潰しかねない大きな秘密を。  
アドルバードは父親を睨みつける。国王の選択として、それは正  
しかつたのか アドルバードには判断できない。  
「あくまで可能性に過ぎないからだよ。アドルバード、もしハウゼ  
ンランドがアヴィランテに対して『王子を保護しています』と言つ  
たところで信用されると思うかね？」

「それは」

無理があるだろ？。

むしろアヴィランテの王が遠い北国の中の名前を覚えているか  
さえ怪しい。

「アヴィランテの王族がハウゼンランドにやつて来るなんてあの頃  
は想像も出来なかつたことだ。おまえの功績だと、ここは手放しで

褒めてやれるだろうな

その一瞬だけ、優しい父親の目になる。

しかしながら今回の婚約者騒動にしろ、以前のアルシザス訪問にしろ

本当にこの父親は息子に試練を与えるのが好きらしい。

「やつて来るのは第一皇子のヘルダム様らしい。どうせおまえの為に開かれるパーティだ。おまえが全て取り仕切るのが筋だろう」

「言つと思いました」

はあ、とため息を隠そともせずにアドルバードは答える。

やつて来る人間が誰か教えてもらえただけでも良しとすべきだろう。

「頑張るんだよ。私も早くアデライードと隠居したいのでね」

ひらひらと手を振つてそこにこやかに笑うのは果たして父親か国王か。王妃の名前を出したあたり父親の面が強いようだが。

「せめて俺が成人するまで我慢してください」

「成人しても所帯はもてそうにないなあ。レイと一体何センチ差があるんだ？」

アドルバードの後ろで一言も話さずに待機していたレイに目を向けて父親が問う。アドルバードは姿勢を崩して躊躇いた。

「ちょっと……！ なんでソレ知ってるだよ！？」

思わず敬語も忘れてアドルバードが父親に詰め寄る。

「私の父が話した以外には考えられませんが」

「正確にはティーケがアデルに、そしてアデルが私にという伝言ゲーム式にだね」

レイと父親の二人に同時に答えられてアドルバードはがっくりと力をなくす。もう王妃を愛称で呼んでいるあたり父親としての顔が高い。むしろ父親として息子をからかっている。

「別に小柄な家系ではないんだけどね。アデルが小柄だからなあ」

「このままかもね？」 とにつこりと父親に言われてアドルバードは蒼白になる。

「いやでも父上は背が高いんだから！ 遺伝的に問題はつ…… て

「あはは、その時は政略結婚かなー。当たり前でしょ。国王になるの」

「いやかに父親は最悪の状況を語る。そのくせせりに『アーテルに

似て可愛いんだからいいじゃないか』まで言い出した。

「レイ以外は絶対に嫌です！！ ていつかその時はリノルにやるよ王位なんてっ！ あいつの方が性に合ってるだろ！？」

「だから別に私は身長なんて気にしませんけど」

「俺は気にする！？」

ぐわっとアドルバードが勢い良く言い返すのでレイも大人しく黙る。

その光景を微笑ましく見守っていた国王は嬉しそうに笑う。

「うん。愛されてるねえ、レイ？」

「恐れ入ります」

さらりとレイが答えるものだからアドルバードが代わりに真っ赤になる。

「そこ返事違うだろ！？ なんで恐れ入りますなんだよ！？」

「レイは別にいいんだけどね。良くなってくれてるしね。まあ、なんだ」

「ほんと笑つたままだつた国王の背後から嫌なオーラを感じてアドルバードは後退つた。背筋に悪寒が。

「ルイはこままだとリノルを嫁にやる気はないからね？ そここの良くな姉の君から釘をしておいてくれるかな？ うちの可愛いお姫様に手え出したら極刑だよ？」

「……公私混同、職権乱用ですが」

レイが静かにそう呟く。怖いもの知らずとはまさこのことだろう。

「お言葉、確かにお預かりしました。心配なくとも手を出せるほどの度胸はありません。それよりも『息にも忠告お願いしたいくらいです』

「ちよつー、レイさん！？」

まさかここでアレを言いますか！？

「あれ？ うちの愚息が何かした？ 婚前交渉は駄目だよ？」

国王の口から漏れる爆弾発言に乙女のようにアドルバードが耳まで顔を真っ赤にして否定する。

「誰がそこまでするかつ！？」

「あ、してないのか。しょうがない息子だな」

「どつちだ！？」

悲鳴のようにアドルバードが叫び、国王も大人しく追撃をやめた。アドルバードは激しい運動をした後のように肩で息をしている。もういいよ、と国王のお許しが出たのでアドルバードは身体を引きずるように王の執務室から出た。

父親相手だというのにえらく体力を消耗する。ビルゼのアホ国王を相手にするのとはまた別の意味合いで。

このまま部屋に戻つてもあのアルシザス王がいるところアドルバードも足は変わらず重かった。

### 39・壊れた人形のよう

部屋に戻ったアドルバードを迎えたのはいつもの騒がしいメンバーだった。もとより部屋にいたカルヴァ、ウィルザードに妹とその騎士が加わっている。

優雅に紅茶を飲む妹の姿が一番最初に目に入つて、アドルバードは思わずため息を吐き出す。

「なんなのその反応は。愛しい妹が会いに来て嬉しくないの！？」

当然目敏いリノルースに見咎められ文句を言われる。

「……自分で愛しいというあたりおまえ相変わらずな」

「あら違うの？」

「違わないけど」

もはや自他共に認めるシスコンだ。否定はしない。

リノルースは返答に若干間があつたせいか、少し不服そうにアドルバードを見下す。

「いいけど別に。どうせアドルはレイが一番だもんねー」

リノルースはふん、とアドルバードで遊ぶことも止めてソファに深く身を沈めた。その手にあるカップに追加の紅茶を注ぐルイの姿を見て、思わずアドルバードは睨みつけてしまつた。

……その視線に気がついたのか、

「アドル様？ 何かあるのでしたら早めにおっしゃつてください。

地味に怖いんですけどその視線」

ルイがおずおずと言い出すと、アドルバードはつかつかと彼に歩み寄つてその腕を捕まえると、引きずりながら（正確にはルイが大人しくついて行つてているのだが、アドルバードの個人的見解としては）部屋の隅に行く。

「おまえ、リノルと同じまでいった？ 庭までとかなんて言こ出せないよな？ 場合によつては刺す」

「刺すつて何ですか。まさか腰から下げるもののじやありませんよね？」

ルイが降参の意を表して両手を挙げながら聞く。

「それも場合によりけり」

アドルバードの目が据わっていたので、ルイはため息を零して正直に答える。

「別に、何もないんですけど」

「んなこと俺が信じるとでも？」

「とりあえず姉さんとアドル様以上のことはしてないですよ」

「そんな風に言えば俺が引き下がるとでも？」

「いや、本當ですつて」

ぼそぼそとそんな会話を続けていると、ふわりとアドルバードの身体が浮いた。

「うわっ！？」

急に足元が床から離れたことにアドルバードが動搖する。顔だけ動かせば、犯人はレイだった。

「いいかげんに大人になつてください。アドル様。馬に蹴られて死にたいんですか？」

呆れたような顔をしてレイがアドルバードを持ち上げたままルイから引き剥がす。

「なつ！ 邪魔するなレイ！ 僕は状況確認をだなつ……」

「アドル様の場合は尋問です。それも意味のない」

「意味ない言うなつ……」

兄として当然のことをしているまでだ、とアドルバードが胸を張ると、レイがため息を零す。

「本当にいつまで経つても変わりませんね」

レイがそう言い残して一度部屋から出る。深い意味はないはずだ。それこそアドルバードも今さつきリノルアースに向かつて似たよう

なことを言つたばかりだ。

けれど、レイからそう言われたといふことがアドルバードには重くのしかかつた。

彼女に相応しい人間になろうと努力しているから余計に。

「……俺つてそんなに変わつてない？ 乳幼児から進化していない？ むしろ猿？」

「ア、アドル様。姉さんはそこまで言つてませんよ？」

先ほどとは打つて変わつて地にめり込むほど落ち込むアドルバードをルイガささやかに慰める。リノルアースは「馬鹿ね」の一言で兄を放置だ。

「シェリーもそろそろ来る頃かしら。そこの馬鹿もいいかげんに立ち直つてくれる？」

そこの馬鹿、はシェリスネイアに惚れてしまつたウイルザードだ。アドルバードが国王へ報告へ行つてゐる間、カルヴァが相手をしていたようだが、余計に可笑しくなつてゐる。

「なら俺は今すぐ帰るつ！」

勢い良く立ち上がり、リノルアースの座るソファの脇を走りぬけようとしたウイルザードはそのままの凄い勢いで転んだ。リノルアースが足をかけたのだ。

「あんたにも居てもらわないと困るのよ。大人しくしてなさい」

「この女狐……っ！」

「こんなに愛らしい狐なんてそうそういうわよ？ その目で見れたことを光栄に思いなさい」

ウイルザードの相変わらずの罵詈雑言もリノルアースの前ではゴニ屑のように散つていいく。

「アドルも、どうせレイはあんたの為にお茶淹れに行つたんだから浮上しなさい」

傍目からはレイがアドルバードを見捨てないことなんて一目瞭然なのだから、恋愛<sup>恋愛</sup>ことでアドルバードが落ち込む姿はまるで道化師だ。

「それで、ここまで勢揃いで何をしでかすつもりかね。美しい姫君？」

ウイルザードに飽きて静かにしていたカルヴァアがリノルアースを見てにやりと笑う。それは軽薄な男の顔ではない。謀略を張り巡らす国王の顔だ。

「もちろん。陛下が兄に持つてきた案件についてですわ。相変わらずお優しいことですね」

「美しいものには、と頭につくがね」

この南国の国王はハウゼンランドがひいてはアドルバードとリノルアース、それにかかる人々がお気に入りだ。曰く、「美しいものは人類の宝」だとか。

「アドルバード王子、失礼いたします。ショリスネイアです」美しい鈴のような声が聞こえ、ゆっくりと扉が開く。扉を開けたのは銀髪の騎士　　レイだ。片手にはトレイにのったティーセットがある。

「揃つたわね。アドル。主役はあんたなんだからこっち来なさい」リノルアースに睨みつけられ、アドルバードはしぶしぶと立ち上がり自分の定位置に座る。その後ろに当然のようにレイがやってきて、アドルバードの前に淹れたての紅茶を置いた。

「説明を」

リノルアースが小さく兄に命じる。どっちが主役なんだか、とアドルバードは苦笑した。

それでも物凄い面子<sup>メンツ</sup>だな、と頭の片隅で笑う。

ハウゼンランドの一つの花、アドルバードとリノルアース。

アヴィランテの大輪、シェリスネイア。

大国アルシザスの国王、カルヴァア。

ネイザス王国の王子、ウィルザード。

実はアヴィランテの王子だったルイ。

その姉のレイ。

カルヴァアが上機嫌なのも偶然に美形が集まつたからだろう。まるで敵無しにも思える人々を前に、アドルバードは胸を張り、口を開く。

俺は、あの椅子に座る父のようであるだろうか。

自ずと感じられる威厳。

王族たる自信。

人を動かす 動かさせる、力。

それがなければ、ここで潰されるだけだ。

「アヴィランテの皇子、ヘルダム様がハウゼンランドにやって来る」

その一言に、驚いたのはシェリスネイアだけだ。

他の人間はもう知っている。だから驚くわけがなかつた。

しかしシェリスネイアの動搖は、他の人間の誰よりも大きく部屋を揺さぶつた。

「ヘルダムが……？」

義母兄だというのに、シェリスネイアは様もつけずにその名を呴く。その顔は心なしか青い。

しばらく沈黙がその部屋を支配し、シェリスネイアの嘲笑がその沈黙を気味悪く破つた。

「最悪な男に目をつけられましたわね、王子。あの男は友好の為にこの国に来たりはしませんわ」

その顔は青いまま。

無理をしてその強気を取り繕つているように ウィルザードには見える。他の人間は気づいているだろか、と思った。気づいてほしい。シェリスネイアの弱さに。そう思つと同時に自分以外が気づかないでほしいとも思う。

「そんなことは重々承知です。アヴィイラがハウゼンランドから得られるものなどない」

アドルバードがいつもの情けないような様子など微塵も感じさせず、しつかりと答える。

シェリスネイアはまだ笑う。  
壊れた人形のように。

「あの男は 私と、この国を潰しに来るんだわ」

## 40・あなたは私のものでしょー!

シェリスネイアの言葉は、アドルバードやリノルアースには簡単には理解し難いものだった。そもそも彼らには異母兄、異母弟がない。ハウゼンランドは一夫多妻制を廃してから随分になる。

兄が、妹を潰す。

そういう国もあるのだと、理解している。けれど頭はついていない。ついていこうとしない。

「この国に来たばかりの頃、刺客に襲われたことがあったでしょう？」言いませんでしたけど、あれはたぶんヘルダムの差し金ですわ。あれは、私を利用することよりも排除することに力を入れているから

シェリスネイアは疲れた笑みを浮かべながら、そう説明した。雪が見たいと、そう言ったシェリスネイアを山まで連れて行つた時の話だ。レイが腕に軽傷を負つた。シェリスネイアほどの人間であれば、襲われる理由が多くありすぎたので深く追求しなかつたことを思い出した。

「まさか」

思わずアドルバードの口からそんな言葉が零れた。

「まさか、でしうね。あなた方にしてみれば、アヴィラは醜い国ですもの。場合によれば、たとえ同じ腹から生まれても争うこともありますわ」

まあ、王の子を一人も授かる妃がそう多くありませんけど、シリスネイアは呟く。その点でシェリスネイアの母は、一時と言えど深い寵愛を受けていたことが伺えた。

「アヴィラの王は人間ではない化け物ですわ。その化け物の子供は、

所詮化け物。アヴィイラという国は人間の皮を被つた化け物の巣窟です。……第一皇子のサジム様も、私を利用しようと、そう考えているから生かしているだけですもの」

実際に王の子で権力を持つのはせいぜい第三皇子くらいまでだ。それより下はあくまで予備の駒に過ぎない。そもそも姫には初めから権力など与えられないのだ。

「ヘルダムはサジム様を妬んでいる。だからサジム様の駒となつた私を始末しようと考えているんでしょう。私は姫の中では良い駒ですから」

前から匂わせていたが、そこでシェリスネイアがサジム派であることが明らかになつた。

「……つまり、姫がハウゼンランドに来たから、ヘルダム様も追つてくるのだと？」

そう問い合わせるアドルバードの喉はからからだつた。

知つていたことだが、本当に王族の世界は汚いものだらけだ。

「刺客を放つても効果がなかつたので、焦つたんでしょう。私を暗殺し、そしてその罪をハウゼンランドに被せる。そうして、最近突出してきた王子のことを押さえつけようとしているんでしょうね」

「ひいては我が国を、かな」

苦笑しながらカルヴァアが呟く。

カルヴァアが治めるアルシザスとの同盟は、アドルバードの力によるものだと大陸の者ならば誰でも耳にしている。アドルバードを潰すことは、そこからアルシザスを潰すきっかけにもなるということだ。

「……悪い、巻き込んだな」

関係なかつたのに、とアドルバードが小さく謝罪した。カルヴァアがハウゼンランドと同盟した理由など、娯楽の一種のようなものだつたのに。

「謝る必要はないだろ。前回は」やうが君を巻き込んだ、今回は  
こやうが巻き込まれた。」これで帳消しではないか」

巻き込まれたことは同盟の件で帳消しだったはずだ、といふ言葉をアドルバードは飲み込んだ。」こは素直に頷いておる。

「謝るのは、私の方です。私がハウゼンランドへ来なければ、この  
よつな事態は起きませんでしたわ」

シェリスネイアが唇を噛み締めて、そう低く呟いた。

そして一瞬沈黙がその場に落ち、小さくシェリスネイアが「申し  
訳ありません」と呟く。沈黙は、誇り高い彼女が覚悟を決めるまで  
に必要な時間だったのだろう。

「あんたが謝る必要がどこにある？　あんたも被害者だろ。が、命  
狙われてるんだろ？　そんな状況で他人気遣うことなんてない」

降ってきた声はどこか怒りを含んでいよいよだつた。

俯いていたシェリスネイアが真っ先に見た先に、その声の主はい  
た。声を聞き間違えなくなるほど、この男と接していたのかとシリ  
スネイアは自分の行動に驚かされた。

「今更しおらしくされたつてこっちの氣が狂つんだよ。あんたはあ  
んたらしく堂々としてろ」

私らしくって？

そう問おうとした口を閉じた。周囲に人がいることなんて忘れて、  
いつかのよつにこの男に弱味を見せるところだつた。

「ウイルの言つことはもつともだな。」この件に関して誰かが責任を  
感じる必要はない。重要なのはどうやってこの危機を乗り越えるか  
だ」

こやうとアドルバードが笑いながらそつ言つ。

それだけのことと、部屋の雰囲気が一気に変わった。陰鬱な風は  
どこにいったのだろう。日の光が部屋全体に差し込んでいるようだ

つた。

「 そしてその為に、あなたの協力は欠かせませんね。シェリスネイア姫？」

優しく微笑むアドルバードに、シェリスネイアは困ったように微笑み返した。

励まされてしまったんだろう。不覚にもあの男に。「私に出来ることならば何も惜しません。」  
協力させていただきますわ」

お願いします、と答えるアドルバードは少し頼もしい。その隣でシェリスネイアと顔を合わせないよう横を見ているウィルザードも。

「 で、何か案はあるか？」

皆に問いかけるようにしつつ、アドルバードの手は後ろに控えているレイに向かっていた。

レイは目だけで答え、一步前に出る。

「 一つだけ、先に危惧すべきことがあります」

真剣なレイの声に、その場の空気も引き締まった気がした。  
ちらりとレイはルイを見て、口を開いた。

「 ルイがアヴィランテの行方不明の皇子だと知られた場合、ルイも暗殺される可能性が」

びく、とリノルアースの身体が震えた。それが傍目に moyく分かつてしまつ。

「 ……まあ、そうでしょうね」

当本人はさほど驚いた様子もなく、そう答える。さりげなく右手がリノルアースの肩に触れていた。心配する必要はないとでも言つたげに。

「けれど、それは逆に武器になるでしょう？　俺に刺客の目が向けばシェリスネイア姫が襲われる危険性も減る。シェリスネイア姫を守るので、俺が応戦するのとでは安全性もかなり違います」

守られるだけの存在にはならないと、暗に言っていた。

騎士として育つたルイとしては、皇子として周囲から守られることは善しとしないだろう。

「それも確かに一理ある。そしてもしあまえに何かがあつた場合、こちらが反撃する材料にもなる」

「『保護していたアヴィランテの皇子が、ヘルダム様の策略によつて殺された』……内輪の争いに巻き込まれた、と？」

レイの言葉を付け足すようにカルヴァアが笑う。

「本当に、君は敵に回したくないな。騎士殿。君の主より冷酷な判断をする」

幼さ故か、人格からか　アドルバードもリノルアースも少し青ざめたままその話を静かに聞いていた。ウィルザードは苦い表情で、シェリスネイアはどこか焦つているようだ。

「どう評価されてもかまいません。あくまで事実の確認です。そう簡単に殺される男ではないと、弟を信じていますから」

「俺としても死ぬつもりはありませんよ。腕一本くらいだったら別にくれてやりますが」

どうしてこう変なところで似てるかな、この姉弟は　　とアドルバードが苦笑する。もつと素直に言葉にすればいいものを。

「ルイ」

怒ったようなリノルアースの声が低く響き、ルイは「はい？」とリノルアースの怒りに気づかずに素直に返事をする。

「腕一本だろうが髪一本だろうがあんたは私のものでしょう！　勝手なことは許さないわよ！」

ルイを見上げながらそつ怒鳴るリノルアースの顔を見て、ルイは思わず笑ってしまった。それがさらに火に油を注ぐ。

「何がおかしいって言うの！？　返事は！？」

「は、はい。申し訳あつませんでしたリノル様

それはつまり、怪我をするなと言いたいんですね？

その意地悪な質問を、ルイは黙つて胸の奥にしまつておいた。

## 41・嫌だとは言つてない！

「　皇子である」とはある意味で切り札でしょ？　命を狙われるなど日常茶飯事ですもの。」のまま秘しておいた方がよろしいんじゃなくて？」

シェリスネイアの凛とした声がその場に沈黙を落とす。  
その中で、兄であるルイと田が合つた。苦しそうな顔で、シェリスネイアを見つめていた。

お兄様、と呼ぶのはまだ先の話になりそうね。

呼んでみたいと、ずっとと思っていたのだけど。

しかし兄である彼は、皇子としてではなく騎士として生きたいと思つてゐるよううで　それは嫌というほどシェリスネイアにも伝わつてくる。

だつて彼は、自分を「姫」としか呼ばない。

「それを、私の口から言わせるためのセリフに思えたのですけど、違いますかしら？」

意地悪そうに微笑み、シェリスネイアはレイに田に向けた。

「あなたが聰明な方で助かります」

レイは優しく微笑んでそう切り替えた。

一枚上手か、とシェリスネイアは苦笑する。

「姉さん、それは……っ！」

「レイ！」

アドルバードとルイが同時に抗議のために声を上げる。

シェリスネイアの目からも、彼女の汚れ役を演じる様は隙がない。

その容姿からも感じる冷たさを、自身でよく知つているのだろう。

「手段を選ぶ余裕がありますか？　手札は限られているんですよ？」

ぐ、と言葉に詰まつたのはアドルバードだった。

ルイは引き下がるつもりはないらしい、珍しく姉に食いかかる。

「俺を信用していると言つたのは姉さんでしょう！ その処置では信用していないと言つているのも同じです！ 俺をそちらへんの腑抜けと同じにしないでください！ 俺はルイ・バウアーです。剣聖の息子ですよ！」

「冷静な判断も出来ない人間の剣は鈍るだけだ」

「俺は冷静です、この上なく！ 何を守るべきか、守らざるべきかも理解している！」

守るべきものさえ分かつていればそれでいい。守るもの為に剣を振るうのが騎士なのだから。

ルイにとつて守るべきはリノルアースのみだ。

…… そのはずだ。

「……この中のどれほどの人間が、両手で数え切れないほど毒を飲ませたことがあるかしら？」

重い沈黙を切り裂く、美しい声が発した言葉はあまりにも毒々しかつた。

シェリスネイアは微笑みを浮かべながら、周囲の人間を見た。  
「耐性がついて並大抵の毒薬では死ぬこともなくなるほど、毒を盛られたことがあって？ 敵といつのは紳士的に剣を振るつてくるだけではありませんのよ？」

シェリスネイアがじっと見つめる先はルイだった。

幼い頃から何度も暗殺されそうになつたシェリスネイアの身体は、毒にも慣れてしまつた。一方ハウゼンランドという平和な国で育つたルイがその毒を口にすれば、いくら鍛えた騎士であろうと一瞬で冥府に下ることもあるだろう。

「アヴィラの人間のやり方は私の方が熟知しています。私が分かつ

ていて協力を申し出ているのですから、余計な口出しあはなさらいでくださいな。王子が狙われる以上、リノルに危険が及ぶこともありますのか？」

だから大人しくリノルアースだけを守つていればいい。

シェリスネイアの目はそう言つていた。

守ろうとする手を払うそのシェリスネイアの行動は、今までの彼女の生き方を表しているようで、切なくて悲しい。

「何も、シェリスネイア様に護衛をつけないとは申していませんが」レイがたまりかねたように口を挟んだ。

周囲の目がレイに再び集中し、レイはため息を零して続けた。

「ウィルザード様、カルヴァ陛下。お二人にシェリスネイア様をお願いしたいのですが」

そう言われるのだろうと予期していたカルヴァはまるで動じずに、ただ頷いた。大きく動搖したのはもちろんウィルザードの方だ。

「んなつ……なんでつ！？」

「他国の王族が側にいることで牽制にもなりますし、ウィルザード様は剣の腕もたつので」

牽制の意味ではウィルザードは大して意味がない。ネイガスの国力はハウゼンランドとそう変わらないものだ。牽制の意味はカルヴァが一身に背負っているとも言える。

「我関せずで傍観しているだけで済むはずがないでしょう？」

事実さつきまで関係のない話だと、ウィルザードは暢気に紅茶を楽しんでいた。

「いやでもその、誤解される可能性も……」

「何のために一人にお願いしていると思つていいんですか。誤解されないように三人で行動していただければいいんです」

とつさに思いついた言い訳もレイにものの見事に切り捨てられた。

「確かに、ウイルが俺と親戚関係なのはこの辺りの王族なら周知だし、カルヴァとは同盟関係が知れ渡ってるな。国賓を親しい友人に

託した、という形が取れるわけだ」

アドルバードが納得して何度も頷く。半分はウイルザードの恋路を協力してやるつもりで、レイの作戦に乗っているのだが。

「嫌だというのなら、陛下だけでかまいませんけど」

ウイルザードが抵抗しているのを見てシェリスネイアが不機嫌そくに申し出る。

「嫌だとは言つてない！」

誰かがフォローを入れるよりも早く、ウイルザードが即答する。その早さにシェリスネイアも目を丸くして驚いた。その表情を見て、頬を赤く染めたウイルザードが顔を逸らす。

「…………青い春ねえ」

語尾にくだらない、と付け加えそうな口調でリノルアースはぼつりと呟いた。幸い当本人である一人には聞こえていない。

「なんだか無性に我が愛しの君に会いたくなつたので、これで失礼する。まったくもつて私だけが寂しい独り身じやないか」

ぶつぶつと文句を言いながらカルヴァは立ち上がり部屋から出て行つてしまつた。

「…………連れて來てたのか」

エヌロア嬢を、とアドルバードは呟きながら走り去つたカルヴァを生暖かい目で見送つた。国王とその有能秘書がいない間、アルシザスの政治は誰がまとめているのか　怖くて聞けない。

「今日はもうお開きね。帰るわ」

リノルアースも飽きたようで、早々に席を立つ。

「そここの馬鹿、シェリーを部屋まで送りなさい」

顔を赤く染めて固まるウイルザードを冷ややかに見つめて、リノルアースがウイルザードの足を蹴る。

「いつて！　おまえなんかに言われなくても分かつてる！」

「あらやだ紳士一。私に対する行動言動その他諸々もビリビリかならないの？」

「おまえに紳士的にしてどうする。精神の無駄遣いだ」

「ま、別にいいけど。気持ち悪いし」

ひらひらと手を振つてリノルアースは部屋から出て行く。  
ふざけるなこっちだって気持ち悪いわ、と言い返しながらシリ  
スネイアとウイルザードも部屋からいなくなり、急に五人も減つた  
部屋は広く感じた。

アドルバードは冷えた紅茶を飲み干して、後片付けをしているレイを見つめた。

「……ホント、おまえの脳内を覗いてみたくなるな」

苦笑しながらそう呟くと、レイが首を傾げてこちらを見ていた。  
そういう仕草が可愛いな　なんて、そんなことを考えている」と  
とされて、こちらは見透かされていそうなのに。  
「無理して汚れ役を買つことはないんだぞ？」

「……性分なので」

その台詞がアドルバードの気遣いなのだと分かるから、レイは素直に答える。

憎しみはすべて自分に。

そうすることで、少しでもアドルバードを守れるのなら。

「誤解されるぞ、そのうち」

理解してくれる人間ばかりだからこそ、彼女の信頼は地に落ちず  
にいるが、普通ならば冷酷非道な人間として嫌われてしまつだろう。

「アドル様が分かっていてくださいれば、それでかいません  
そう言って微笑む彼女の姿は、誇らしげだった。

## 42・お望みなら実践するか?

ほんの少し前を歩くリノルアースの、赤みがかつた金の髪を見つめながら、ルイは自己嫌悪に陥っていた。

よりもよつて、この世で一番大切な人の前で、優先順位を迷つているようなことを言われるなんて。しかもそれはほとんど図星だつた。

たぶん今のルイでは、リノルアースとシェリスネイアが同時に危険な目に遭つていた時、どちらを選ぶべきか悩んでしまう。悩んだ末で、どちらも失うよつた気がした。

選択肢がリノルアースとレイだつたら迷うことなどない。レイはルイの手を借りなければならない状況に陥らないと思つし、そうなつたとしてもリノルアースを優先するように怒るはずだ。そしてリノルアースを助けている間に自力でどうにかしてしまつだろう。

しかしシェリスネイアはリノルアースと同じくらいに 下手するリノルアースよりも、非力な少女だ。そして、実感はないまでも自分の妹で。

妹の為に奔走するアドルバードの姿を見ていたせいだらうか。シェリスネイアを見捨てることは、たぶん出来ない気がしていた。

「……いつまでうじうじ悩んでいるつもり?」

はあ、と重いため息を吐き出し、リノルアースが問う。ルイが俯いていた顔を上げると、リノルアースが振り返つてしまつ

すぐにルイを見ていた。その瞳の強さに押され氣味になる。

「なんのことですか」

「ここは誤魔化してしまおうと、そう答えるとリノルアースはルイを睨んだ。

「分からないと思つてゐるわけ？ この私が？ あんたがショリーと私とで悩んでることくらいお見通しなのよ！」

馬鹿じゃないの、という言葉までついてきそうなそのリノルアースの堂々とした様子に、ルイは思わず笑ってしまう。

「笑わない！ 真剣な話をしようつて時に！」

びし、と指をされてルイも思わず顔を引き締める。

「……大体ね、」

リノルアースの細い指がルイの頬に触れた。冷たいその指に、ルイは反射的に後退つた。

青い瞳がルイの目を射抜く。

その目に囚われて、ルイは動けなかつた。どうしてこの人は、こんなに強いんだろうと、そんな疑問が頭に浮かぶ。

「 悩む必要なんてないでしょ？」

優しい響きのその言葉に、ルイは困惑した。

「 そ怒つてくれれば、素直にリノルアースだけを守りうつと思えるのに。」

「 私だって、あなたかアドルかを天秤にかけられても、即座に決めることがなんて出来ない。家族を想うこととは罪なの？ 違うでしょ？」

？」

そつと触れる冷たい指は、そのままルイの頬を包み込んだ。

じつと見つめてくる瞳は、少しだけ寂しさを帯びていて、たぶんリノルアースも確かな答えなど持っていないのだ。

「……それでもたぶん、俺は彼女を選べないんです」

「どんなに悩んでも、選択の場面で躊躇しても、最終的に選ぶのはリノルアースだ。それだけは確かだと言える。

「その上で、躊躇してしまった自分が嫌なんです。彼女を選ぶことも出来ないのに、迷う。その結果万が一あなたに何かあつたら、どうすればいいんですか？」

一瞬迷ったようにルイは手を伸ばし、導かれるようにリノルアースの頬に触れる。そのまま髪を梳き、その美しい金髪の絹のような肌触りに酔いそうになる。

今度は、リノルアースが困ったように固まった。

ただじっと、見つめ合う二人に妨げなどなく、ルイは自制も利かなくなり　華奢なリノルアースを抱きしめた。

「あなたを失うなんて、考えるだけでも気が狂いそうなのに」

リノルアースはルイの肩越しにただ天井を見つめた。

あやふやな関係のまま凍らせた一人に、それ以上の行為は許されない。そう悟つて、リノルアースは少しだけ後悔した。

「……本当に、不自由な性格よね、あんたって」

苦笑しながらリノルアースは呟くと、分かつていて怒つたような声が耳元で聞こえた。

行き場を失つた手をルイの背中に回し、確かにぬくもりを味わう。苦しいくらいの抱擁に、女慣れしていないことがバレバレで可笑しくなつた。

「私って、そんなに心配されるほどお淑やかだったかしら」

「俺の手を振りほどくことも出来ないくらい、非力でしょう」

「あのね、ルイは男である上に騎士じゃないの」

勝てるわけないでしじう、とリノルアースは怒つた。男と力勝負なんて、リノルアースくらいの年齢の少女では勝敗なんて分かりきつている。

「刺客だつて男ですよ。血を見ただけで怯えるくせに、こんな時ばかり強がるのはあなたの悪い癖です」

今の台詞、あなたのお姉さんみたいよ?

くす、と笑いながら浮かんだ感想は飲み込んだ。

「これでも随分と慣れてきたのよ? 血生臭いことにもね」「慣れなくていいんです。そんなもの」

きっぱりと言い返されてリノルアースはまた苦笑した。今日はい

つも以上に頑なだな、と戦略を練り直す。

「……とつあえず、他の男にはこんな状況許さないから安心しない

誰が通るかも分からぬ廊下に抱き合つたままなんて 本当はルイでも許すわけにはいかないのだが。今日だけはいいかと甘い自分に笑つてしまつ。

「許す許さないでどうにか出来るんですか」

ルイはやはり頑なに、どこか怒つたようにしきり問いかける。

そうね、とリノルアースは咳き ほんの少し身体を離してルイを見上げる。

「お望みなら実践するけど?」

意地悪そうな笑みを浮かべたりノルアースに、いつものルイならば遠慮しますの一言で逃れるはずだった。

「どうぞ、出来るなら」

しかし今日のルイはある意味で普通ではない。そのリノルアースの挑戦を甘んじて受けてしまう。

じゃあ本気で、とリノルアースは細いピンヒールでルイの足を容赦なく踏みつけた。

「いつ…………つー?」

骨まで響くその痛みにルイの腕の力も緩む。その隙にリノルアースはさつと距離をとつた。

「これが他の男なら急所狙うんだけどね。機能不全とかになつたら私としても将来的に困るから足にしたのよ。感謝しなさい」「……女性がそんなこと堂々と言つもんじゃないでしょ?」

痛みを堪えながら、ルイは指摘だけは忘れない。

急所なんて狙われたらたぶん鍛えた男でも膝をつくだろう。女性は足に凶器を隠し持つてる。

「男も女も関係ないのよ。生きるか死ぬかなんて時はなおさらね。生命力で言えばの方が男より圧倒的に強いし」

「ええ、認めますよ。それは」

殺しても死なないだろうなんて感想を、惚れた相手に抱かせるあたりリノルアースが最強たる所以だろうか。

結局やられっぱなししか、ヒルイがため息を吐き出す。足の痛みもだいぶ弱まつた。

この場合、仕返しは。

ルイは手を伸ばし、リノルアースの細い手首を握り締めた。

「…………なによ

「やつぱりか細いですね。これでよくあんな威力が出せるなあ」「いつも拳で殴られるルイはそのリノルアースの華奢な身体の作りに驚かざるを得ない。

「だからなんなの!?

「いや、万が一を考えて、思い残すようなことはない方がいいなあ、

と

手首を掴んでない方の手でリノルアースの顔を持ち上げる。一瞬状況を理解していない瞳が純粋にルイを見つめ返して、ルイの瞳に宿る何かを感じ取ったのか 明らかに瞳が揺れて、抵抗を始めた。「な・に・・をつ! 考えてるの!?

甘い空氣をじうにか破こうとリノルアースが睨みつけながら手を振り払おうとする。

思ったとおりの展開に、ルイは笑いそうになりながら、リノルアースの耳元に唇を寄せる。

「 キス、」

たつた一つの単語で、リノルアースの顔が真っ赤に染まる。

「 ……してもいいですか？」

声が震えた。

攻められると弱いリノルアースをからかうとその代償は大きい。

声で悪ふざけと悟られたルイは急所を攻撃されてその場に崩れた。その屍をさらに踏みつけ、リノルアースは憤慨しながら一人部屋へと戻った。

## 43・現に今隣に一人います

あのアホ国王も護衛役なんじゃないのか。

結局二人きりじゃないか、とそんな愚痴を頭の中で繰り返しながらウィルザードは大人しくシェリスネイアの隣を歩いた。すぐ隣にいるシェリスネイアはリノルアースと比べても華奢で、つい先ほどその口から零れたような凄惨な生き方をしてきたとはとても思えなかつた。

誰にも寄りかからずに生きようとすると彼女が切ない。

「生きにくそうだな」

気がつけばぼつりと零していた。

ただ独りで誰が敵かも定かではない状況で生きていくなんて、こんな少女が選ぶにしては過酷すぎるような気もした。

「それ、私のことかしら?」

くす、と笑みを浮かべながらシェリスネイアはウィルザードを見上げた。

「あなた以外に、ここに誰がいるんです?」

「ここにいる人間とは限らないでしきう。私の目にはあの騎士も随分と捻くれた道を選んでいるように見えますわ」

騎士は一人いますけど、どちらですか。

そんな意地悪も思い浮かんだが素直に胸の奥にしまった。

「彼女にはアドルがいるでしきう。アドルは何があろうと、彼女を疑うことはないでしきうから」

「他人でもそう断言できるのだから、あの二人の関係はある意味で理想形なのかもしれませんわね」

シェリスネイアが窓の向こうの重い雲を見つめながらそつ呟いた。重い雲からは今にも雪が降つてきそうだ。廊下は寒く、冬の気配が濃くなつていくことを肌で感じた。

「あなたも、もう少し人に頼つたらいどうですか」

「ウイルザードはそつと手を伸ばし、無意識にショリスネイアの髪に触れようとしていた。その手を止め、ゆっくりと下ろす。

「頼れるような人間は、アヴィラにいません。どうせあと数年すれば政略結婚でもさせられるんでしょう、せつなれば嫁ぎ先も敵の群れですもの」

だからここで誰かに甘えるなんて嫌なのだと、ショリスネイアの身体は差し伸べられる手を振り払う。

「ルイをアヴィランテに連れて行くんでしょう」

血の繋がった妹だと、今は完全に受け入れることは無理でも、彼はたぶんショリスネイアの味方になるだらう。アヴィラではルイが守るものはショリスネイアしかいない。

「いつかここに戻る人です」

きつぱりとした返事に、ウイルザードは思わず言葉を飲み込んだ。そこまで完璧に割り切つていられるのもすごい。

ショリスネイアはまるで気に入った様子もなく、寒い廊下を静かに歩く。慣れないドレスだというのに、その姿には隙がない。まるでいつも優雅に着こなしているもののように、彼女に溶け込んでいた。「それなら、優しい男のところへ嫁ぐんですね。それくらいしか救いようがない」

思つてもいないことを口にして、ウイルザードは先に歩いていたショリスネイアに追いつく。誰が惚れた女に男を薦めるか。「救いなど求めてませんわ。それにどうせ、政略結婚だと」「このパーティでは腐るほど王子も国王も来ますよ。姫君の量には敵いませんがね。その中に条件に合ひそうなやつもいるでしょう」しかしウイルザードの口は勝手に言葉を続ける。

なんでこんなことを言つているんだか、と苦笑するしかない。

「……近づいてくる男など、皆権力目当てですわ」

「やうじやない男も中にはいるんじゃないですか。物珍しいやつが」

もう自棄だ、とウイルザードは答える。

シエリスネイアの丸い黒い目はじりとウイルザードを見上げて、その顔を伺っている。

「そうかもせんわね。現に今隣に一人いますし」

笑うわけでも、茶化しているわけでもない、平坦な声。

ウイルザードは自分の耳を疑つた。つまりそれは自分もカウントされているということか、それとも。

「ではお部屋までお気をつけて」

気がつけばシエリスネイアの部屋の前で、シエリスネイアは優雅に礼をして部屋の中に入つていつてしまつた。  
お気をつけるのはあんただらう、と素で言いそうになつて自分の手で口を塞ぐ。

顔が熱い。

どうしてあんな流れになつたのだらう、とそんなことを繰り返してウイルザードは唸りながらその場に蹲つた。

「……完全に重症だな」

頭上から声が降つてきて、顔を上げれば本来ならばもとかり――にいたはずのアホ国王だ。

「……その憐れむような目やめてくれませんか」

「む。すまない。無意識に」

「……その発言もかなり失礼なんですが。あんた大国の王じゃなければ殴つてますよ」

一応ウイルザードの頭の中にも自制心という言葉は残つてゐる。

国際問題を作らないだけには脳は機能していた。

「別にかまわないがね。アドルなんぞはぼんぼん怒鳴るわ殴るわ

「それはあいつの特性です」

とりあえずいつまでもシエリスネイアの部屋の前にいるわけには

いかない、とウィルザードはカルヴァをひっぱってその場から去る。シェリスネイアの部屋から離れた、寒い廊下の影で会話は再開された。外に出るには上着が足りなかつた。

「それで、何があつたんだね？ 人生ならぬ恋愛の先輩に相談してみたまえ」

「……アドルの話によるとあんたも一方通行らしいじゃないですか、何先輩面してんですか」

「無論片思ににおいてはスペシャリストだ！！」

「……そこは誇るところなんですかね」

冷たいウィルザードのつっこみにへこむこともなくカルヴァは実際に誇らしげに胸を張つてゐる。

確かにこれは疲れる、とウィルザードはアドルバードがいつか言つていた言葉を思い出していた。

とにかく状況整理もかねてカルヴァにかいづまんで説明した。

「 なんだ。そのまま求婚すれば良かつたではないか」

「ごん。

ウィルザードは力が抜けたように柱に頭をぶつけた。地味に痛い。

「どうしてそういう話になるんですかっ！？」

「そういう話じゃないか」

きつぱりとカルヴァに言い切られて、ウィルザードはシェリスニアとのやり取りを何度も反復した。

「……そうなるのか？」

「そうなるだろ？！」

あまりにも自信満々なカルヴァに毒されたのか、そんな気がしてくるような錯覚に陥る。

しかし最後の、シェリスネイアの平坦な声に、冷静さが取り戻される。

『そりがもしひませんわね。現に今隣に一人いますし  
あれはどういうつもりで言つた言葉なのだろう?  
希望がないと思つには冷たさもなく、希望を持つにも喜びも温か  
さも感じない。

「こうなれば早速求婚を」

「いやいいです。どうせ無理だし」

先急ぐカルヴァを引き止めて、ウィルザードはため息を零す。

「何故だね」

「うちではアヴィランテと釣り合ひが取れませんから。政略結婚になり得ません」

求婚だの言い始める前の話だ。  
ウィルザードはどこかすつきりしたような顔で、少しだけ悲しそうに笑う。

「なら、せめて彼女が安らげるような男を探してやりますよ  
その方が未練が残らなくていい。」

ショリスネイアは彼女の国に相応しい国に嫁ぎ、そして自分はそれなりの国との、それでも自分の国に見合つた国の姫と結婚しなければならないのだろう。

もとより出会つたことすら偶然で奇跡だ。

彼女が彼女を守ってくれる誰かを見つけるまで。

それまではせめて自分が、彼女に振りかかる火の粉を払おう。

アドルバードから呼び出された時はリノルアースが何か告げ口でもしたのだろうかと冷や汗もののルイだつた。

しかしながらそれは杞憂に過ぎず、いつもどおり　といつにはいたわか間抜けだがアドルバードの目的は愚痴といつねのろけだつた。

「おまえの姉をどうにかしてくれ。ホントあのままじゃあいらぬ誤解をされたまんまじやないか。俺の為にと頑張つてくれるのは嬉しいけど、という言葉を飲み込んで、ルイは自分で淹れた紅茶を口に含んだ。渋い。もう少し練習しないとな」と苦笑した。

「だいたいレイは周りが見えていいようで見えていないとかさあ、人づきあいというものを大切にして欲しいというか。俺の為にいろいろ犠牲にしがちでいるというか、手段を選ばないっていうか」「アドル様が止められないものを俺に止めさせようつて方が無理ですよ。姉さんが従うのはアドル様だけです。百歩譲つて父さんか」

溜息を零しながらルイが初めてアドルバードに反論した。いつまでもこの無自覚ののろけを聞いているのはさすがに苦痛だ。

「分かつてるけど、俺の為と言わると引き下がつてしまつ悲しい男心？」

「引き下がつてどうするんですか。それだからいつまで経つても尻に敷かれてるんですよ」

う、とアドルバードが言葉に詰まる。

主導権を握りたい男心はルイも理解できるから、なんとも言えないと。い。

「それにそういう話ならアルシザス王になさればいいでしょう。俺にしないでくださいよ」

「いやあ……あいつに話すといろいろウザいしね」

俺も正直ウザいんですけどね、という言葉は素直に飲み込む。相手は曲がりなりにも王子だ。自分も王子だったんだという事実をつい忘れがちになる。

「結局、こんなこと話せるのおまえくらいしかいないといつか」

「……可愛い妹を盗られてもですか」

意地悪な問い合わせ自覚しながらルイは問う。

長い長い沈黙の後で、アドルバードは納得しているようないいような顔で答えた。

「俺はリノルが幸せならそれでいいんだ。ただ泣かせたらぶん殴る」

「殴り合いなら俺の圧勝ですけど」

「……否定できないのがむかつぐ。負けても殴る。それにたぶんレイにも殴られるだろうな」

ルイは笑えない冗談に顔を歪ませた。アドルバードに何発も殴られるより、レイの渾身の一撃を食らう方がかなりきつい。肉体的にも精神的にもだ。

「泣かせるつもりはありませんけどね」

泣き顔もそれはそれで可愛いんだろうけど、と照れながら笑うルイのセリフはまさにのろけだ。

「ならアヴィラなんて行かなきやいいものを  
呆れたようなアドルバードの言葉に、ルイは苦笑するだけで言い返す言葉が見当たらない。

「たぶん、泣くぞ」

「そう遠くない別れの時に。」

アドルバードの言いたいことは十分に分かつっていた。分かつてい  
るけれど、自分の選んだ道を変えるつもりはなかつた。

「だつて、リノル様は欲張りなんですよ」「だからしようがないです、ヒルイは笑う。

「いつそ姉さんみたいに、こぞとなつたら自分達のことしか考えないような人なら、俺もハウゼンランドから離れたりしませんけど。リノル様はアドル様も、姉さんも幸せにならないと満足できないんでしようから」

アドルバードは何も言わず、ただ苦笑した。

「その為に頑張りすぎないように、俺は簡単な手段に飛びついたんですよ」

アヴィランテという大国をただの手段としてしか見ていないリノルは果たして愚かなのか賢いのか　なんとも言い難い。

「……事情はどうであれ、泣かせた分は殴るからな」「それはこいつらのセリフです。姉さんを泣かせたらその分俺も殴りますよ?」

こいつと笑うルイは明らかに本気だ。

レイが泣くことなんてないだろ、と言おうとして　実際に彼女

が泣いている場面に立ち会つたことがないなと氣づく。

そんな彼女を強いと思つと同時に、もつ少し弱くなつて欲しいと思う。

彼女が弱くあれだけ、自分が強くなりたいと思つ。

アドルバードは唇を噛みしめ、自分の弱さをただ恥じた。

「男同士の話とやらはもうよろしくんですか?」

若干不機嫌なのは、男同士といつてレイを退席させただからだろう。性別を理由にされるのが一番嫌なのだ。

「ああ、まあ……」

本人の田の前で先ほどの話をするくらいなら、少々不機嫌のレイに付き合つ方がましだ、とアドルバードはあえて素知らぬふりをする。

じ、とアドルバードはレイを見つめて、彼女の泣いた場面を記憶の中から探してみる。しかしやはりそんな記憶はなかつた。

「おまえ、泣かないよなあ」

本音が思わず零れて、アドルバードはひと時に自分の手で口を塞いだ。

レイはきょとんとした顔をして、アドルバードの顔を見つめ返した。

「なんですか、突然」

あ、う、えー、とか言いながらどうにか誤魔化せないかとアドルバードは思案する。まさか泣き顔が見てみたいなんて、そんな変態みたいなこと言えるわけがない。

「アドル様？」

レイが問い合わせる体勢になり、アドルバードは逃げられないことを悟つた。両手を上げて降参する。

「小さい頃から一緒にいるのに、おまえが泣いたところ見たことないなって思つただけです！」

本当の本音は最後の砦だ。決して落とすわけにはいかない。

「……そうですか？」

レイは首を傾げて問う。

「少なくとも俺の記憶には存在しない」

「…………そうですか。まあ、泣いている暇なんてありませんでしたし。どこかのお一人がそろつて泣いてるところ、私も一緒に泣いているわけにはいきませんからね」

どこかのお一人が自分と妹のことだとこうことくらい、嫌でも分かつてしまつ。大昔のことだろ、と毒づきながらアドルバードは羞

恥で頬を赤くする。

「それに、騎士となつてからほ、感情を制御することが上手くなりましたから」

さらりと言われてしまつと、アドルバードも何も言えなくなる。彼女の母親が亡くなつた時も、彼女は人前で泣かなかつた。ルイも、そして父であるディーカも。

泣きたかつただらうじて、といつ思想を持つことは彼女に失礼なのだろうか。

「……俺は、俺の騎士に自分の感情に鈍感になれとは言つてないぞ悔しさをその言葉にまとめる。

レイはただ苦笑するだけで、何も言わない。

「泣きたかつたら泣いてくれ。堪えられる方が、俺は辛い。俺の前でくらいは少しでもいいから弱くなつて欲しい。俺は、お前を支えられないほど弱くはないつもりだ」

アドルバードはレイを真っすぐに見つめて、少し苦しげに訴える。何度この騎士は自分の為に涙を飲み込んだんだろ。辛くなかったはずがない。レイはいつもきつい立場にあつた。

「泣きたいと思ったことはもう随分と無いんですけどね

レイが苦笑しながら答える。

そんなわけがないとアドルバードはレイを睨む。その視線だけで意味が伝わったのか　　レイは念を押すように続けた。

「本当に、無いんですよ。私はあなたに嘘は言いません」

あなたに、というところを強めて言つたのはわざとだろ。こうすればアドルバードが何も言えなくなると分かつてやつてるのだ。

「もし私が泣くとしたら、あなたに何かあつた時です

だから、どんな時も無事でいてください。

そんな殺し文句にアドルバードはものの見事に撃墜された。絶対にレイは分かつてやつているのだ。じょなきやこんな攻撃力

の高ニセツフを、Jのタイミングで言わない。

「……魔性の女め」

本当に、手に負えない。

顔を真っ赤にして駆くアドルバードを、レイナが追撃する。

「……あなたにだけですよ?」

44： おおへ、泣かなこよなあ（後書き）

大つ変お待たせしました（土下座）

家のパソコンは壊れますが、ミニノートパソコンを購入したので、  
これからはあまりお待たせする「こと」がないと思います。……。

## 45・俺には俺のお姫様がいるし？

「あら。アドル。ドレスの試着はいいの？」

からかうような妹の声に、アドルバードは眉間に皺をよせて振り返る。

もう目前に迫ったパーティの衣装合せをしていくところだつた。リノルアースがアドルバードの部屋に勝手に入つてることは最早つつこむ氣にもならない。

「な・ん・で！ ドレスの試着が必要になるんだよ！ 今回女装は無しだろ！？」

「いつ何時どんな事態が起きるか分からないじゃない？」

「おまえ何をやらかすつもりだ！？」

首を傾げる可愛らしい仕草も、兄であるアドルバードには効果がない。

リノルアースはにんまりと笑い

「とりあえずは、何も？」

「顔とセリフが一致してない！！ 絶対何か企んでる！」

ぎやあ、と悲鳴を上げながらアドルバードはリノルアースを指さす。

「アドル様、服に皺が出来ますから暴れないでください」

主の心配よりも服の心配か、と嘆きたくなるようなセリフを言つながらアドルバードはレイに上着をはぎ取られる。

「あら、それにするの？」

リノルアースも女の子なわけで、服のことには興味を持つらしい。アドルバードが着ていたのは今までの傾向とは違い、随分と大人びた衣装だつた。黒く長い上着、縁には金が施され、細かな装飾は深紅。惜しむらしいことはこれを着る人間が長身ならば、もっと恰好が良いというところだろうか。しかしあドルバードの赤みがかっ

た金の髪を映えさせる良い服だ。

「一応、主役ですからね。他の方々に嘗められない為にも外見は重要かと」

大陸中から同年代の姫、王子を集めたのだ。ijiでハウゼンランドの王子の価値を決められる。馬鹿にされるようなことだけはあってはならないのだ。

「そうね、いいんじゃないかしら。私とおそろいっていつも似合うけど……今回は止めた方がよさそうだものね」

双子が揃いの衣装を着るとそれは目立つ。しかしどこかで幼さが残る分、今回のようなパーティでは向かないのだ。

「どうせ今回はショリーとおそろい着る予定だし。色や細かな装飾は変えるんだけど、デザインを同じのにするの。私のは出来るから、今急いでシェリーのを作らせてるんだから」

嬉しそうにそう説明するリノルアースは実に生き生きしている。

「そりゃあ……目立つだろうなあ」

大陸で北の姫、南の姫と証される一人が揃いのドレスで並ぶのだと誰もが目を奪われる光景になるだろう。

「一応、私とまったく同じ形のドレスでアドル用のも作ってあるのよ？ 何が起きるか分からないし」

「おまえのじゃ少し小さじからなー……ってだからドレスは着ないし……」

「つかり雰囲気に流されそうになつて、アドルバードは慌てて首を横に振る。

「計画によるじゃない？」

「どうやって俺が女装するような計画が立つんだよ……今回は絶対に駄目。危険なのはシャリスネイア姫とルイ、それに俺なんだぞ。おまえが俺になつてる間に何かあつたらどうする？」

ヘルダム王子の目的はシャリスネイアの暗殺だ。そしてその罪をアドルバードを含めたハウゼンランドに負わせる。しかしその過程でアドルバードが危険な状況に陥ることも十分にありえる。

そうだと分かっていて、リノルアースと入れ替わるなんて冗談じやない。

「……一応、同じ衣装で少し小さめのものも用意してますが？」

レイが控えめにそう言つ。

腕の中にあるアドルバードの上着を持ち上げている様は、つまり同じ服がこの世にもう一つあることを指していた。

「ほら。やっぱりレイは話が分かるわねー」

「レイー！」

黙つているわけにはいかないと、アドルバードが声を荒げる。

「一概に、危険だとは言えないでしょ。パーティ会場で襲われることなんて万が一にもありません。会場にリノル様がいてもらつて、隙を作るといふことも出来るんです。その場合はカルヴァ王やウイルザード様にサポートに入つていただければ……」

「駄目だ！ 何が起きるか分からんのだぞ！？」 アルシザスでは乱闘にだつてなつただろう……

過保護、とリノルアースが呟く。

「あのねえ、もしも、万が一、そういうことが必要になつたら、つていう話よ？ 分かる？ アドル 主役が会場から消えるわけにはいかない。だから私が代わる 臨機応変に対応できるようこつていう対策よ？」

？

「だけど

「だ・け・ど・じ・や・ない！！」

怒ったようなリノルアースの顔が目の前にあり、アドルバードは押し負ける。

「使えるうちは使いなさい！ どうせもう少ししたら使えない手なのよ？」

すい、と間近に迫るリノルアースの顔はびっくりするくらい綺麗だ。自分のそれともわずかに違い出始めている。リノルアースはより女性らしく、アドルバードはより男性らしく。

「可能性の段階でぎやあぎやあ騒ぐんじゃないの。必要になつたときのための準備だつて言つてるでしょ？ が、まったく」

自分の危険も顧みずそつ言い放つリノルアースの方がよっぽど男らしい。アドルバードは苦笑しながら、ありがとう、と呟いた。

その呟きが聞こえたのか リノルアースが満面の笑みを浮かべ、部屋を去る。タイミングを計つたかのようにルイが扉の向こうで待つていて、一人並んで歩く様は寂しくもあり嬉しくもある。

「……俺とリノルって、入れ替わるのはそろそろ無理なのかな？」確認するようにレイに問うと、さりと答えられた。

「まあ、そうでしょうね」

あつさつとした返事にほんの少し嬉しくなる。

「それはつまり、俺の身長が伸びた？」

「身長というより、骨格でしょうね」

確かに少しあは伸びたようですけど、と付け加えられる。最近ではリノルアースと並んでいて少し見下ろせる感じがあつたから、多少は伸びたんだろ？ と気づいていた。レイと比べても大して変わっているような気はしなかつたのだが。

「……そか」

ずっと、ほとんど一緒にだったんだけどな。

嬉しいと同時にそんな感想が浮かんだ。

一日中一緒にいたのはもう随分を昔の話だ。今ではアドルバードが忙しく、食事のときに顔を合わせることすら難しい。こうしてリノルアースが部屋を訪ねて来ない限りは。

「寂しいんですか？」

レイが優しく微笑む。ああ、こつこつ顔は貴重だな、と思いながら頷く。

「寂しいけど、まあ仕方ないだろ。リノルの王子様はもう俺じゃないからさ」

小さな頃から守ってきた妹の王子様はもう別にいる。ならいいかげんに妹離れしなければならないだろ。

「……向こうが兄離れ出来ていないと思いますけどね」

ぼそ、とレイが呟く。アドルバードはあまり上手く聞き取れず、首を傾げて無言で問うが、レイは黙つたままだ。

大したことではないのだろ、とアドルバードもあまり気にしない。

自分よりも背の高いレイを見上げ、アドルバードは笑う。

「俺には俺のお姫様がいるし？」

レイは誰のことかと検討がつかないよう、じつとアドルバードを見つめ返す。

聰い彼女には珍しいが「自分が関わる恋愛」とには、わりと鈍い。アドルバードは苦笑しながら、レイを指さす。

「最も、俺のお姫様は護らなくとも平気かもしけないけどな？」

そこまで言って初めて、レイが自分のことを言つているのだと気づいたのだろう。わずかに頬を赤くして、戸惑つ。

「……お姫様なんて柄じやありません」

その一言はレイのこの場での必死の切り返しだったのだろう。

「ううとこが可愛いよなあ、なんて感想を持ちながらアドルバードは笑う。レイの白く、そして稽古で少しだけ荒れた手を持ち上げて、その手の甲にキスを贈る。

「お姫様だよ　俺にとつてはね」

慣れない行動に、レイが戸惑う様子が少しだけ嬉しい、なんて言

つたら後が怖い。けれどいつも勝てないのでから、たまには優位に立つてもいいだろう。

誰も見たことのない彼女を独占するへりこは。

## 46・静かな嵐の訪れ

氷の結晶が空から舞い降りてくる。

頬に触れればさっと溶けて、そこにいたことをえ忘れてしまつほどに憐い。静かに静かに降りだした雪は徐々に積もり、初めて見るそれを無条件に美しいと思つ。

ほんの少し前ならば知らなかつたであろう小国 ハウゼンラン

ド。

その地に足を踏み入れた南の国の皇子は自分の国とは趣の違う城を見上げて、白い息を吐きだした。

静かな嵐の訪れだつた。

対面したヘルダム皇子は、黒い髪に、濃い肌。瞳の色は濃い緑で  
シェリスネイアより、どこかルイの方が面影があるよつた気が  
したのは気のせいだつたのだろうか。

「初めまして、アドルバード王子。急な訪問で申し訳ない」

にこやかに挨拶するヘルダムからは、悪意らしきものは感じなかつた。少なくとも、今は。

「初めまして、このような鄙びた国によつておいでくださいました。滞在の間、どうぞ我が家と思つておくつろぎ下さい」

形式的な挨拶にはもう嫌というほど慣れた。アドルバードは微笑み返しながら、ヘルダムの笑顔の下にある謀略を見極めよつとした。シェリスネイアからいろいろと聞いてはいたが 現段階での印象では、シェリスネイアの勘違いではないだろつかと思つてしまつほどの好青年だ。

「妹のシェリスネイアもお世話になつてゐるよつで。兄妹そろつて

「迷惑をおかけします」

「いえ、お気になさらず。シェリスネイア姫は私の妹の良き友人になつてくださつていいよつで」

それは真実だ。

アドルバードは顔に出やすい分、あまり嘘はつかないよつにしている。言える範囲で会話を続ければいいだけで、それは慣れれば簡単だつた。

「かの有名なリノルアース姫ですか。姫のお美しさはアヴィラまで聞き及んでいますよ。ぜひ一度お会いしたいものです」

「妹もパーティには出席しますから、機会があればぜひ一度ダンスでも」

何勝手なことを言つているんだと、リノルアースに知られたら怒られそうだが、社交辞令だ。ここは許してもらうしかない。

そしてアドルバードは予定されていた時間内、なんの問題もなくヘルダムとの対面を終えた。

「別に、悪い奴じやなさそつだけどなあ」

一応報告に、とリノルアースの待つ部屋まで歩きながらアドルバードは呟く。

「……今の段階ではなんとも言えませんが、まあ、そつですね」

少し後ろを歩くレイも冷静な判断を下す。

同意を得られたことに安心して、だよなあ、と返す。

シェリスネイアから植えつけられた印象があまりにも強烈過ぎたのだろうか。本人に会つてみて少し拍子抜けだ。

それをさらりと話してみたところ。

「騙されてはいけません」

せつぱりと、そして物凄い形相でショリスネイアに問い合わせられる。

「あの男は外面だけはいいんですから！　油断したら危険ですわ！　あくまでも隙を見せてはいけませんわよ！？」

「は、はい」

アドルバードは勢いに負けて素直に頷く。

綺麗な顔に迫られ、その上に脅迫紛いな勢いで話されればアドルバードは簡単に降服する。

「あらでも、シェリーの印象だけで動いちや駄目よ？　一応は自分としても印象も固めておきなさい。多角的に物事を判断しなきゃ失敗するわ」

リノルアースのもつともなアドバイスにも素直に頷く。

「なに、それは。私の判断が誤っているとでもおっしゃるの！？」

珍しくショリスネイアは頭に血が上っているようだ。声を荒げるのこと自体が珍しいというのに、普通なら食いかからないはずのリノルアースの言葉にも過剰反応する。

「そんなこと言つてないでしょ？　基本中の基本よ。同じ顔しかない人間なんて存在しないんだから。シェリーしか知らない部分と、他の人間しか知りえない部分があるでしょう？」

冷静なリノルアースの言葉を飲み込むと、ショリスネイアも納得したのか黙る。

「レイは？　どう感じた？」

こういう時の判断は一番レイが的確だうとリノルアースがレイを見上げる。

レイは少し考えるように沈黙し　そして口を開く。

「悪い印象はありませんね。あくまで皇子としての挨拶ですから、何とも言えませんが　　とりあえず、敵意は感じませんでした。殺氣も」

そう、とリノルアースが呟き思案する。

そんなリノルアースの前にことりと紅茶が置かれる。続いてショ

リスネイア、アドルバードと 用意したのはルイだ。

立場としてはもうそんな振舞もしなくて良いはずなのに ルイは黙つてリノルアースの後ろに立つ。ちょうどアドルバードの後ろに控えるレイのようだ。

ハウゼンランドにいる限りは、騎士でありたいのだひつ。

「……一度私も会つてみたいもんね、それは」

ここはダンスでもしてやつてくれと言つたことを伝えるべきだろうか、とアドルバードが悩むが、黙つておいた。たぶん怒られるには違いない。

「遠からず、接触はあるでしょ」

レイのセリフにアドルバードは一瞬冷や汗が流れる。まさか密告しますか。

「そう?」

「ええ、あちらも興味があるようでしたので」

さらりと流したレイに、アドルバードはほっと胸を撫で下ろす。さすがに主を売るような真似はしなかったか。

「……リノル様」

少しだけ不満そうに、ルイが口を挟む。危険な目に遭わないという保証がない以上、ルイが心配するのも無理はない。

「何よ。あんたが反対しようが私の意思は変わらないからね?」

ルイを見上げながらそう宣言するリノルアースはいつもどおりといえど、そなただが、口調はどこか優しい。それだけで二人の関係が変化したことを周囲に悟らせている。

「……止めませんよ。ただ、俺の目の届く範囲にいてください」

じかにそつさま、と呟くリスネイアに思わず同意する。

普段自分も周囲を見ていないので周りの目を気にしたりと言えないのが痛いところだが。

「報告も済んだし、さつさと出るか」

居たま再び、アドルバードは頬を搔きながら退出する。

シェリスネイアも共に部屋から出ようと立ち上がる。

「送りましょうか？」

生憎、今はカルヴァーもウイルザードもない。おそらく来る時だけ同行したのだろう。しかしそうなると帰りが一人になってしまふ。そう思つてアドルバードは申し出たのだが。

「お気になさらず。迎えが来てるでしようから」

そう言いながらシェリスネイアが部屋から出ると、しばらく前からそこにはいたのだろう。ウイルザードが壁にもたれながら立つていた。

「……話は済んだか」

ふう、と息を零してウイルザードは自然とシェリスネイアと並ぶ。惚れただのと騒いでいた時は逃げだす勢いだったというのに、大した変わりぶりだ。

「では、また」

柔らかく微笑み、シェリスネイアは優雅にお辞儀して去つていく。その雰囲気も以前とはわずかに違うような気がするのだが。

「……なにがあつたんだか」

二人を見送りながらアドルバードが呟く。

ウイルザードの様子からして想いが実つたといふわけではなさそうだが。

「馬に蹴られますよ」

最近よく言われるそのセリフに、アドルバードは苦笑する。

「別に茶々入れようつてわけじゃないさ。ビrijその国王とは違つて」

「知つてますよ」

間髪入れずにそつ答えるレイに面を食いつ。

ああ、そう、とか歯切れの悪く返し。なんだかレイの顔が見れずアドルバードは顔をそらす。

現実逃避に今度ルイやウイルザードに問い合わせなればな、と考える。特にルイにはたっぷりと吐いてもらおう。

「大して進展はしていないと思いますよ?」

心中を読んだようなレイのセリフに心臓が飛び上がる。

「え?」

「変わったのは、リノル様でしょうね」

一人の雰囲気を思い出し そうかもな、と呟く。

そうなると聞き出すことは難しそうだ。

じりじりせよ、田の前の風が去るまでは ゆっくり話すことも無理だらう。

降り出した雪は徐々に強くなり、ハウゼンランドの冬の始まりを告げていた。

## 47・恋なんて、知らなければ

一生、恋をやめるとはないだろうと心のどこかでずっとやつ思っていた。

恋なんて甘く幸せな言葉を信じられるほど、幸福な環境ではなかつた。

だから困惑してゐる。

まさか、この気持ちが恋だとでも云ひ得?

「降り出したな」

ショリスネイアの隣で歩いていたウィルザードがぽつりと呟く。廊下の窓の向こうを見ている彼につられて、ショリスネイアも視線を移すと、そこには白いふわふわとした塊がしんしんと降り始めていた。

積りそつだな、というウイルザードの声に、ショリスネイアの目が輝く。

外に出て 子供のようにほしゃぎたいという欲求が自然と湧いてくる。アヴィランテに戻れば そして嫁いだ先によつては、もう見ることもなくなるだろう、雪。

そんなショリスネイアの心境を見抜いてだろうか、ウィルザードがす、と手を差し出す。

「少し寄り道しますか？ お姫様」

からかうような、面白がるよつた声に少しだけむ、としながらも、ショリスネイアはその手のひらに自分の手を重ねた。

「少しだけ」

そんなふうに答えたのは素直じやない自分の性格上しかたないこ

とだつた。

はあ、と吐き出す息は白く、すぐに空氣のなかに溶けていく。見上げれば空からは雪が止まることなくゅつくりと地上に落ちてくる。常緑樹はその葉を白くして、足元は徐々に雪が重なり合つていぐ。

わざわざ雪が降つてゐるのに中庭に行く人間はそういうでしょうね、なんてウィルザードは厭味を言いながらも律儀について来てくれる。

「転ぶぞ」

「すらりと積もつた雪の上を歩くショリスネイアの手を、ウィルザードはしつかりと握る。彼の足取りには迷いがなく、すたすたと歩いてくが、ショリスネイアは滑るその上を少し緊張しながら踏みしめる。

「……あなたは、珍しくないのね?」

歩きなれた人間の歩き方に、ショリスネイアは確認するよつと問う。

「ネイガスはハウゼンランドのすぐ近くですよ。まあ、ここほど降りはしませんがね」

馬鹿なことを聞いたな、ヒショリスネイアは苦笑する。分かり切つたことだったのに。

「ここと同じように寒いの?」

南国育ちのショリスネイアは、外を歩き回るのもそれそり限界だ。きちんと防寒していないので、指先がもう冷えている。

「いいえ。ハウゼンランドは山脈があつて、標高が高い分寒いんですよ。うちはここまで冷えはしません。双子なんて冬にいつもに来て暖かいなんていうくらいですからね」

「そう。それじゃあアドルバード王子はアヴィラに来たら本当に茹だつてしまふかもしだせませんわね」

以前にアドルバードがそんなことを言っていたな、と思い出して

シェリスネイアは笑う。アヴィランテは常夏の国だ。

「そりゃきついでしょうよ、アヴィラは」

そう言いながらウイルザードは上着を脱いで、シェリスネイアの肩にかける。

「寒いですよ。戻りますか」

中庭の入口まで、と思っていたといふのに、気がつけば随分と奥まで来ていた。指先が寒さでしびれていぬし、肩もすっかり冷えている。

「結構ですね。あなたが寒いでしょう」

そう言つて上着を返そうとするシェリスネイアの手をウイルザードはやんわりと止める。

「これくらいの寒さなら慣れてますから平気ですよ。あんたを部屋まで送る間くらい、どうってことはありません」

そう言つてウイルザードはまた手を差し伸べる。シェリスネイアが転ばないよう、<sup>11°</sup>

その大きな手に包み込まれることを、とても自然なことのように思ひ始めていた。アヴィランテに戻ればこの手はないといふのに。側にいることが心地いいと思つ。もつ残された時間はわずかなの<sup>11°</sup>。

『あなた』から『あんた』と呼び方が完全に変わっていることに気がついて、嬉しいなんて思う。敬語であつたりなかつたりするのはもう癖なんだろうなど、そう分かるほど最近は一緒にいる。

もしこれが恋だというのなら。  
気がつかないままの方が良かつた。

アヴィラに帰つて待つてるのは国の駒としての政略結婚。

分かつてのことだ。だから別に不満はない。

けれど。

どうせなら、甘い記憶なんてないまま、恋なんて知らないまま、好きでもない男のもとに義務なのだと言い聞かせて嫁ぐ方はずつと、楽だったのに。

「はああああああああああああ

重たいため息は思わず自分が吐き出したのだろうかと、シェリスネイアは現実に引き戻された。

しかしそれは目の前の美少女によるものだとすぐに分かる。珍しい赤みがかった金髪に、青い瞳の少女 リノルアースは実に疲れたように頬杖をついていた。

「ど、どうなさつたの？」

シェリスネイアは見たことのないリノルアースの憔悴ぶりに、少しだけ動搖していた。

リノルアースはちらりと、半眼でシェリスネイアを見る 否、睨んでいた。

「べつにー。もう決まったことだし、文句言いつもりはございません事よ？ 本人の意思だつて固いんだろうしー」

「なんのことをおっしゃってるの？」

自分に用意された部屋に、無断でリノルアースがいることにはもう驚かなくなつてきていた。彼女は神出鬼没だ。

「…………どつかの誰かさんのお兄さんで、ヘタレで押しに弱くて  
なんで騎士なんてやつてるんだろうと疑いたくなる人」

シェリスネイアは言葉に詰まつた。

リノルアースの話す人 ルイを奪うのは紛れもなく自分だ。

「ああ、シェリーを責めてるんじゃなくてね？ あんなヘタレな人  
間のくせに大国の皇子様なんて務まるわけないじゃんとか個人的に  
は思うわけよ？ いつもなら絶対私の言つこと聞いてたくせに今回  
ばっかりは頑なだし」

そのくせにハウゼンランドにいる間はきつちり騎士として振る舞  
つてるし、でも時々なんか突然不意打ちをかましてきたりするし、  
云々。

惚氣ともいえるんじゃないだろうとかというリノルアースの愚痴  
を聞いた結果 シェリスネイアが導き出した答えは実に簡単だつ  
た。

「つまり さみしいのね？ あなた」

団星だつたのだろう。リノルアースは頬を赤く染めながら、ぶつ  
ぶつと抗議する。

「そういうわけじゃ……でも、その、シェリーは今回のパーティ終  
わつたら帰っちゃうじゃない？」

「ええ、もちろん」

「つまりアレも連れて行くわけじゃない？」

「そういうことになりますわね」

今更な問答ではないだろうかと思いながらもシェリスネイアはき  
ちんと答える。

「ああくそつあん時しどけば良かつた……！」

「口が悪いですわよ、リノル。あの時つて？ しどけば良かつたと

はどうこいつとかしら?」

突然騒ぎ出したリノルアースを冷静に観察しながらショリスネイアが問う。

「つっこまないで。頼むから。だつてあいつ帰つたら戻つてこなかつたりしそうだもん。他の奴らから皇子としてどつかのお姫さまと結婚したとか言われたら流されちゃいそうだもん。あーっ! 想像できる自分が怖い……！」

自分の兄にあたる人はどれだけ信用されていないんだとシェリスネイアは苦笑する。

「心配いりませんわ。そういう人じゃなって、本当はリノルは一番知っているんですけど、彼のいない場所で、不安を吐きだしたいだけなのだ。

「分かってるわよ。それにもし万が一、そんな風に流されやが

つたらこの私が全力でつぶしてやる」

大国アヴィランテ相手にも泣き寝入り無しで本気でやつそな彼女にシェリスネイアは頬を引きつらせた。

「あ…………でも吐き出したらすつきりしたわ。ありがと、シェリーー」

ぐつたりとソファにもたねばがらリノルアースは素直にお礼を言う。アドルバードにもこんなことは愚痴れないのだらう。

「どういたしまして」

「それで? シェリーもどうぞ? 吐きだしたいんでしょ?」

「ああ、本当にこの娘は。

どうしてこんな風に悟つてしまふんだらう。

防波堤は簡単に決壊した。

心の奥底で暴れまわっていた感情が一気に押し寄せる。

「 しかた、ないのよ。だって、私には選ぶ権利なんてないんだもの。政略結婚なんて珍しくもないし。でも、だから、恋なんて知らなくてよかつたのに！ 優しくされると嬉しいなんて、差し出される手が嬉しいなんて！ そんなものどうでも良かつたのに！」

もう止められない。

吐き出された感情は間違いなくシェリスネイアの恋心だった。  
「側にいられるのは今だけだつて分かるのに 気がついたら止まらないんだもの。ありのままで私でいられる人なんて今までいなかつたんだもの。叶わないって、分かっているのに ！」  
ありのままの自分を、弱さや強さを、隠さなくていいといふこと  
がこんなにも心地良いなんて知らなかつた。

シェリスネイアの黒曜石の瞳から、透明な雫が流れ落ちる。

「恋なんて、知らなければ良かつたのに 」

そうすれば、不幸を不幸と気がつかないまま、生きて行けた。

47・恋なんて、知らなければ（後書き）

2009年、あけましておめでとうございます。  
本年も頑張って物語を綴つてこいつと思ひますので、どうぞよろしくお付き合くださいませ。

今年が皆様にとって良い年になりますよう。

降り出した雪を窓越しに眺めながらリノルアースはそつと溜め息を吐きだす。頬杖をついたままのその姿は傍目から見ても恥ましい。

「リノル様？」

温かい紅茶を持ってきたルイが心配げに主人の顔を覗き込む。反応しないリノルアースにルイはますます不審げに眉間に皺を寄せ、紅茶のセットを一度テーブルに置いて、リノルアースの頬に手を伸ばす。

「リノル様？」

もう一度、ゆっくりと名前を呼ぶ。優しく頬を撫でれば主人ははつとしたようにルイを見た。至近距離で田と田が合つ。

「ル、ルイ。どうしたの？」

距離感に警戒しながらもリノルアースが作り笑顔を浮かべる。それが本物の笑顔でないことくらい、今まで仕えてきたルイにはすぐ分かつた。

「それはこっちのセリフです。何かありました？」

「別に……」

「嘘がへたですね」

撫でる手を止めず、ルイは頬にかかる髪を耳にかけてやる。最近よくリノルアースが不安げにしていることに、ルイは気づいていた。時折だがこうして甘やかすことも許してくれるようになつた。

「…………恋なんて、知らない方が良かつたと思つ？」

ルイをまっすぐに見てくるリノルアースの田は、ゆらゆらと揺れている。

「リノル様は、そう思いますか」

田をそらすことなく、ルイはすぐにそう返した。ずるいわ、とリノルアースが苦笑する。その言葉にルイが内心でほつとしていることには気づいていないのだろう。

「幸せな恋しか見たことがないから、不幸だなんて思わなかつた。ハウゼンランドは身分に関してそれほど厳しくもないし」

リノルアースはゆっくりとルイの肩に額を預ける。あまり顔を見られたくないのだろうかとルイは頬に触れていた手を頭に移して、優しく撫でた。

「でも、そうじやないとこりだつてあるのよね。いくら好きでも、どうにもできないこともあるのよね。だつたらいつそ 誰かを好きになるなんてこと知らないまま、顔も見たことない相手と結婚する方が楽なのかもしねり」

ああ、あなたが今考えているのは

「ショリスネイア様のことですか

「他人行儀ね。妹なのに」

苦笑する気配に、ルイは少し困惑した。妹として扱うわけにもいかず、邪険にもできない。

「ルイは気づいてた？」

「まあ、気づかないほど鈍感でもないので」

どこの誰かさんと違つて、人並みには。

「…………どうにか、してあげたいな、とか」

いつもより控え目なリノルアースの主張に、思いがけず強く抱きしめたくなる。前回の失敗があるのでさすがに我慢するが。ふわりと包み込むように優しく抱きしめて、耳元で囁く。

「恥づと感こよしたよ」

吐き出してもリノルアースのようにすつきりなんてしなかった。むしろあんな醜態を曝してしまったことの方がショリスネイアとしては痛い。どうしようもないのだと子供のように喰き散らすだけで、結局リノルアースも困らせてしまったようだつた。

自己嫌悪で俯いたままだつたシェリスネイアは顔を上げる。広がる董色のドレス。シンプルなデザインではあるものの、細かな細工が見事だとしかいいようのない一品だった。パーティ用よ、トリノルアースが手すから持つてきたのだ。

リノルアースと対になつてゐるのだと言ひ。

ダンスなんてまともに練習していないけれど。

踊つて欲しいと手を差し出したら、彼はその手をとつてくれるだらうか。

女性からダンスに誘うなんて聞いたこともないけど。一生に一度の恋の甘い思い出として、そんなわざやかな一時が欲しいと思つことくらいは許されるだらう。

『やうと田の前にたくさんの中類を置かれて、アドルバードはげ

つそりとした。

「レ、レイさん？　これはなんですか？」

思わず敬語にもなる。

「分かつてますか、アドル様。パーティまであと二日です。普通の準備はほとんど終わっています」

「それは解答ではないんですけど」

レイは書類の山の一枚を取り、読み上げる。

「イオラス王国第五王子フイリオス様、イオラスはこれから良い交易相手となる国です。きちんと交友関係を築いておいてくださいね。イオラスは織物で有名ですから、そういう話から入ると良いでしょう。あとシエン帝国は東方の国ではかなりの力を持つていますので、要注意です。今後国単位での付き合いが行われる可能性はあまり高くありませんけど、機嫌を損ねると面倒ですので。もちろん近隣諸国の方々にはそれ相応の対応をなさってください」

「一あーとかうなされる様にアドルバードは机に伏せる。

「言つまでもありませんが、アヴィランテのヘルダム様にもご注意を」

ピンと空気が張り詰めるのが分かった。現段階でもアヴィランテからやつてきたシェリスネイアもヘルダムも格別の扱いでもてなししている。

「それで、明日の夕食にお一人を招待してはどうかと壁下から言われておりますが」

「……そのときのセリフを一言一句間違えずに言ってみる」「嫌な予感がしたアドルバードが顔を伏せたままそう言つ。

「『ヘルダム様が要注意なのは分かり切ってるんだから、先に手を打つておくのも賢い手だよねってことで若い者同士で親睦を深めるといいんじゃないかな。』こっちはノータッチって言つてあるしね？　ということでおろしく』……だそうですが」

「よく覚えてたなそんな長くてアホらしいセリフ」

レイが言つからまだましたが、あの父親が口にしてくるといひを

思い浮かべればそのセリフが「冗談まじりに語つてこぬよ」しか思えない。

「急な話だけ……まあ、一応使いを出しておけ。もう少し腹は探りたいところだし」

ヘルダムがショリスネイアと顔を合わせる「こと」が良いかどうかは甚だ疑わしいところではあるが。

そうですね、トレイも当然の「こと」へ賛成する。

その選択が間違つてこるなんて、このときは思ひもせまい。

「夕食に？」

やつてきた侍女は笑顔ではない、と答える。

ふうん、とヘルダムは興味深げに笑う。

「ぜひに、とお返事しておいてください。楽しみにします」

作り笑顔はこれまでの人生で嫌というほどに培われてきたものだ。使いの侍女も疑つた様子はなく、一礼して去つていぐ。

ぐすくすと「う笑いが部屋に満ちる。

窓の向こうは銀世界。降り積もる雪は止むことを忘れたかのように戸つまでも降りそぞぐ。

「それじゃあ、少し早めにゲームを始めるかな。さて、あちらさんはどう出でくるんだか」

曇る窓を手のひらで拭い、静かに降る白い結晶に微笑みかける。

ひどく優しい微笑みだった。

夕食は結局、ハウゼンランドの双子とアヴィランテの兄妹のみの少人数のものとなつた。アルシザスの国王を同席させるのも、ネイガスの王子を招くのも不自然なので却下となつたのだ。

「シェリー。お願ひだから喧嘩売らないでよ？ いつものように猫かぶつてちようだい」

シェリスネイアは早めに部屋にやつて來たので、あとはヘルダムを待つのみとなつた。リノルアースは先ほどから何度も念を押している。

「平気よ。ようは話さなければいいんだもの」

きちんと席についているシェリスネイアの様子はそのセリフを裏切つている。

「全然平気じゃないし……いつそ腹痛とかで逃げる？」

「冗談！ 敵前逃亡なんて絶対にごめんです！」

敵とか言つてるし、と苦笑するアドルバードの側にはレイがいる。食事が始まつた際は入口のあたりに控えてになるが。

「アドル様も、気をつけてくださいね。くれぐれも馬鹿な真似はないように」

「……心配されるほど俺つて信用ないのか？」

言われなくても分かつてゐる、とアドルバードは呟く。

席も、本当は双子とアヴィラ側とで向い合せになる予定だったのが、シェリスネイアの様子を見て男女で向かい合うことになつた。隣なんかに座らせたら拳を振るいそうな勢いだ。

「リノル様も、ルイはいりませんからね。そのあたりを考えて行動してください」

ルイは正体がばれてしまふ可能性も捨てきれないのにこの場にはいない。一田で南国出身だと分かる以上、できる限りヘルダムと顔を合わせることは避けなければというのが全員の見解だつた。

早めに集まつた三人の前には飲み物が運ばれてきた。騒いでいるから喉が渴くだろうという優しさからだろうか。

「あら」「

グラスに注がれている赤い液体を見て、シェリスネイアが困ったように声を上げる。

「どうしました?」

アドルバードが一番先に気がついて問いかけると、シェリスネイアは苦笑して答えた。

「葡萄酒は苦手なんですけれど、言つていませんでしたわね」

葡萄酒というよりはアルコールが苦手なのだろう、それなら、とアドルバードが自分のグラスを持ち上げる。

「俺のと替えますか? まだ口もつけてませんし、ご迷惑でなければ。ただの林檎水ですよ」

「なによ、一人だけお酒じゃないって」

リノルアースが不満そうに問うと、アドルバードが苦笑した。

「腹の探り合いなのにアルコールで頭を鈍らせたくないからさ。まあ、一杯くらいなら平気だし」

いつも頼りにしているレイは背後にいるわけじゃない。念には念を、というわけだ。

「では、お願ひできます?」

シェリスネイアは照れたように笑い、二人はグラスを交換する。不作法ではあるが気にする者はいないのだからいいだろうと、誰も気にしない。

それから数分して、シェリスネイア曰く『敵』であるヘルダムがやって來た。

印象はやはり悪くない。

目と目でリノルアースも合図する。たぶんリノルアースも同じ答えに行き当たつたのだろう。

「三他愛ない会話をして、食事が運ばれ始める。

「アヴィランテの料理とはまるで違いますから、お口に合つかどうか分かりませんが」

「確かに違いますが、こちらの料理もとても美味しいですよ。城のつくりから服装から、まるで違いますからね」

「とても飽きません、とヘルダムは笑う。

「シェリスネイアも、こちらのドレスを着ているんだな。とても似合っている」

突然話をふられたシェリスネイアは一瞬猫のように毛を逆立てそうになる。しかしリノルアースに脇腹をつつかれて、にっこりと微笑む。

「ありがとうございます、ヘルダム様」

兄妹であるとはいえ、アヴィランテでは王子と姫の地位の差は明らかな。ここで大嫌いなヘルダムを『様』をつけたあたりでシェリスネイアは頑張った。

ある意味ではその様子が微笑ましく、アドルバードは笑いながらグラスを傾ける。

「つ！？」

喉が、焼ける。

悲鳴も上げることが叶わず、アドルバードはそのまま椅子から崩れ落ちた。グラスを割らないようにとテーブルに置いたあたりはまだ頭が冷静だつた。

毒が入つた、証拠が消えないよ！」

「アドルバード様っ！？」

悲鳴に近いレイの叫び声がかるうじてアドルバードの意識を繋ぎ止める。

倒れたアドルバードに一番先に駆け寄ったのは、一番遠くにいたはずのレイだつた。

「誰か医師を！ 誰も動かないでください！ 勝手に動いた者は誰であろうとも斬ります！」

物騒だな、という言葉が紡げず、アドルバードはただ唸るだけだ。

「アドルバード様！ 吐いてください…」

レイの叫びは虚しく、アドルバードの意識は徐々に遠のっていく。レイの細い腕にしがみつく強さは一方で増していく。

「アドルバード様！」

泣き声のような、レイの呼び声。

大丈夫、大丈夫だから。

言葉は紡ぐことができず、アドルバードは深い深い思考の底へ沈んでいく。

レイの纏う空気が変わった。

駆け付けた医師にアドルバードを任せると、いつ抜いたのか剣を構えていた。

「レイ！ 駄目よシエリーは違つ……」

「しかし……」

リノルアースの悲鳴に近い叫びにレイの動きも一応は止まる。その声がなければ間違いなくレイの剣はシェリスネイアを斬っていただろう。

「シヨリーは何も入れてなかつた！私が見てたもの！落ち着きなさいレイ・バウアー！主であるアドルの顔に泥を塗るつもり！」

？」

アドルバードの名を出されて完全にレイの動きが止まる。剣をしまい、シヨリスネイアに頭を下げる。

「申し訳ありません。ご無礼を」

あまりにも突然のこととて果然としていたシヨリスネイアは一連のことに反応をできず、いいえ、と答えるだけだった。

「飲み物を運んできた侍女を捕らえなさい！同時に厨房にいた者全員に話を聞け！」

医師からわざかに遅れてやつて来た騎士にレイは堂々と命ずる。レイはアドルバード専属の騎士だが、地位的には騎士団を動かすだけのものがあるのだ。

「俺の仕事がないな、さすが俺の娘と言つべきか」

「あなたの到着を待つていては逃げられます」  
遅れてやつて来た騎士団長である父、ディークに向かつてレイは冷たく言い放つ。  
ディークもレイの采配を信用しているから急いでこなかつたのだろう。

「もういい。殿下のところへ行け」

静かに、強く、そう命じられる。

レイは堪えていた何かが弾けたように、一礼してアドルバードのもとへ走つた。アドルバードは自室へ運ばれた。毒により発熱し、昏睡状態になつてゐるだろう。

その後姿を見送りながら、やつと現状が理解できたかのよつこシ  
エリスネイアが崩れた。

「…………私の、せい」

たぶん、自分ならある程度毒に耐性がある分これほど大事になら  
なかつたかもしれないのに。

あの時、グラスを替えたりしなければ。

す、と大きな手がシェリスネイアの前に差し出される。  
ディークだった。

「お話をいただけますかな？ アヴィラの姫君」

その言葉には、有無を言わせぬ威圧感があった。

## 50・心配はしてるけど、信じてるかい

熱い波にさらわれる。

呼吸するのも難しく、ぽんやりとした意識の中で漂い続ける。

アドル様。

呼び声が曖昧な意識のアドルバードの脳内に響いた。

忘れようもない、愛しい人の声だ。

レイ、と彼女の名前を呼ぼうとするが、肝心の声が出なかつた。

行かないと。彼女の側に行かないと。

レイ。

伸ばした手は虚空を掴んだ。

目が見えない。暗闇の中にただ落ちていく。感覚も徐々に鈍くなつていく。

アドル様。

もう一度声が聞こえた。应えなきや、と焦りだけが広がつていく。  
何度も何度も 呼び声だけは耳にはつきりと届く。落ちていく  
深い闇にアドルバードが飲み込まれないようになると、命綱にでもなつ  
ているかのようだ。

頼むから。

そんな、泣きそうな声

。

「……では、もとはシェリスネイア様のグラスだったのですか」  
はあ、とため息を零しながらディークが頭を抱える。

「つまり、最初はシェリーが狙われたということでしょう、ディーク。  
何度も言ひよひよ、シェリーがグラスに触つたのはアドルに渡す時  
だけよ」

リノルアースが、この国一の剣の腕を持つ男にも恐れずに睨みつける。

「そう睨まんでも信じますよ。あなたたちのことばこんな小さい頃  
から存じ上げているのでね」

嘘を見抜くのもお手の物だ。レイほどではないが。レイは空氣の  
読み方や即座の判断力は全て父親から受け継いだ。

がちや、と扉が開いて一人の騎士が書類をディークに手渡す。  
ディークはその書類をさつと読み、ふう、と深く息を吐き出して、

ソファに沈む。

「姫が狙われたというのは定かではありませんでしたが、  
そうなのかもしませんな。殿下が飲んだ毒は南国に生えている毒  
草から作られたものなのです。ディガリト草といつものらしいの  
ですが」

「……猛毒です。飲んだ量が多ければ死んでしまうわ  
シリスネイアが青ざめたままで、そう呟く。

「幸い殿下が飲んだのは致死量ではありません。しかし南国の毒と  
なるとハウゼンランドの医師でも解毒は難しい。それが命に関わら

なければいいのですが

「……助からないの？」

リノルアースが不安げに問う。ディーアクは救いになるようなことは言つてくれない。そういうところは、やはり親子なのだなと思わされる。

「……グラスを持ってきた侍女からも詳しいことは聞き出せていいのでしょうか？ 犯人なら簡単ですわ。私を殺そうとする者が一番疑わしいのはヘルダムですもの」

震えるような声でシェリスネイアがきっぱりと言つ切る。

ヘルダムはあの後部屋で待機となつた。入口には騎士が護衛とう形で見張つているので逃げ出すことも、証拠隠滅することも不可能だ。

「決めつけるのは良くないんじゃないかしら？ ショリー。ヘルダム様に罪を着せようとしている者の犯行かもしけないんだし？」

「それでも！ 可笑しいではありませんか！ こんなに都合良べ、あの男が来てからこんなことがまた起きるなんて」

ショリスネイアが命を狙われたのは、山へ行つたあの時以来一度もなかつた。ハドルスとルザードによる嫌がらせはあつたが、命には関係ない。

「だから、そう思われるのが目的かもしれないじゃないの。冷静になりなさいな」

椅子にどかりと座つて、頬杖をつくリノルアースは実に偉そうだ。若干不安そうではあるものの、冷静なリノルアースにシェリスネイアが声を荒げる。

「どうしてそんなに冷静なんですかー？ 王子があんな状態だとうのにー！」

しん、と部屋が静まつた。

ひんやりとした空気がリノルアースの周囲に纏わりつく。

「　なに？ 私が心配していないとでも言いたいの？」

リノルアースの声は冷たい。

その青い瞳がまるで氷のような鋭さをもつてショリスネイアを射抜く。

「馬鹿言わないで。正直こっちはあんたなんかの話に付き合ってないで、アドルのところに早く行きたいのよ」

まあ、今行つてもお邪魔でしょうけど、と続けながらリノルアースはため息を吐きだす。今頃はレイがアドルバードについているだろう。

「人のこと血の通つてない人間みたいに言わないでよ。そつちに思いやりがあるつていうなら、くだらない話をきつちりまとめて早く終わらせてくれない？」

苛立ちを露にしたリノルアースの声は重く、ショリスネイアはただ押し黙るしかない。ごめんなさい、と言おつとしてそれすら場違いに感じてしまつてからは、ショリスネイアが紡ぎだせる言葉は少しもなかつた。

「　姫、一度部屋にお戻りください。騎士をつけますので、部屋からお出になりませんよう」

凍りついた空気を溶かしたのはディークの呆れたような声だった。ショリスネイアは力なく頷き、護衛の騎士と共に部屋から出していく。リノルアースはその後姿をちらりとも見なかつた。

「それでは、友人ができませんよ。姫」

諭すような声に、リノルアースは片眉を上げた。

「小言なんていらないわよ。友達なんて必要ないもの。私にはアドルとレイとルイがいればそれでいい」

それこそ小さな頃から何度も聞かされた言葉だった。リノルアースの視野は実際狭く、その限られた世界を守るために彼女は奮闘す

る。

「狭き世界に閉じこもるおつもりですか」  
あからさまにため息を吐かれ、リノルアースはますます機嫌が悪くなる。

「アドルよりは社交的に装えるけど？」本当に信じられる人間がいれば、友達なんて意味ないじゃない」「それだけではいけないこともあります」

そういう言い方、レイみたいだわ 親子なのだから当たり前かとリノルアースは紡いづとした言葉を飲み込んだ。

「王子のもとへ行かれなくてよろしいのですかな

厭味でもなく、ただ急かすように微笑むティーカをちらりと見る。「……私ね、アドルの運の良さはとっても良く知ってるのよ」

もつたいたぶつたようにリノルアースは咳く。頬杖をついて、リノルアースは窓の向こうに視線を投げる。つられてティーカも窓の外を見た。白く靄がかかつたように、細かな雪が降っている。

「だから簡単には死なないわ。心配はしてるけど、信じてるから駆け付けなくても、側にいなくても アドルバードが傷くなることはない。リノルアースの中の何かがそう告げていた、双子故の確信か、どうか。

「それに、今はレイがしがみついてる頃でしょうよ

少し前に走り去ったレイがつきつきりで世話してるところだろう。

彼女も、邪魔されたくないだろう。今、たぶんきっと泣きたいくらいに辛いはずだ。

華奢な少女が、ハウゼンランドーの剣の腕を持つ大男を見上げる。

その瞳は押し負けぬほどに強い力が宿っていた。

「ディーク、話したいことがあるの。他の誰にも内密に」

娘と同じように察しの良い彼は、ただ一度しつかりと頷いた。

## 5.1・信じる信じないはあなたの自由だ

「…………」

小さく声を漏らして、レイは伏せていた顔を上げる。どうやらアドルバードを付きつきりで見ていて、そのまま寝てしまつたようだ。アドルバードが倒れ、日付が変わつた頃だろうか。

呼吸はまだ少し荒く、熱は下がらない。医師がグラスから毒を割り出し、ハウゼンラングにあるものでどうにか解毒剤を作ろうとしているところだ。

アドルバードの額にのせていたタオルを濡らして絞り、もう一度のせる。そんなことばかり何度も何度も繰り返していた。それくらいしか、今のレイには出来なかつた。

部屋は真っ暗だつた。おそらく深夜なのだろう。窓の向こうに寒そうな月が見えた。

水を替えたいのだが、頼めるような侍女はいないだろう。アドルバード付きの侍女は皆、レイと同じく先ほどまでずっと休まず動いていた。だからレイが休むように命じたのだ。

「アドル様、すぐ戻りますね」

眠つている侍女達を起こすのは可哀想だ。幸いにして、わざかだが熱が下がつたようで、レイは自分で水を替えてこよと盥を持つて立ち上がる。

深夜の城は、昼間の騒々しさをどこへ置いてきたのか、ひつそりと静まりかえつてゐる。

ひとつといふ自分の足音がやけに響く。

幽靈でも出てきそうな雰囲気の中、レイはまったく動搖せず、

極力足音をたてないように、だが足早に歩く。

空気が冷たく、吸い込むと肺が冷える。

水を替え、アドルバードの部屋に戻る。と来た時よりも急ぐと

「 誰です」

行く先の角に、人の気配があった。

どれだけ動搖してようと、どれだけ急いでようと、気配に気づかないほどレイは墮ちてはいない。

「こんばんわ」

いつ、と一步出てきたのはアヴィランテの皇子 ヘルダムだ。レイは思わず身構える。両手が塞がつていなければ間違いない。劍に手をかけているところだ。

レイの殺伐とした雰囲気に気づいたのか、ヘルダムは苦笑して、両手を上げる。

「危害を加えるつもりはないから、警戒するのは止めてもらえるかな」

レイは無言のままヘルダムを一瞥し、殺氣を感じないとから警戒を解いた。どうも、という軽い声が耳に残る。

「アヴィランテの皇子ともあらうあなたが、こんなとこでどうなさったのです？」

アドルバードが倒れてから、シェリスネイアもヘルダムも部屋にいたはず。護衛も無しにこんな場所にいるわけがなかつた。ましてこんな深夜に。

「ちょっとね、あなたにプレゼントを

ある意味で表情の読めない笑顔で、ヘルダムは静かにレイに近づく。

水の入った盤の中にぽちゃん、と小さな小瓶が落とされる。緑色

の液体が小瓶の中で揺れていた。

「これは」

レイが何かを問おうとするが、ヘルダムはにっこりと笑って、レイの耳元に口を寄せた。

「信じる信じないはあなたの自由だ。大切な人助けたいなら、それを飲ませるといい」

じゃあね、と最後に囁かれ、ヘルダムは去っていく。

「まつ……」

呼びとめようとしてレイが振り返るが、ヘルダムは振り返らずに手をひらひらと振っていた。

問い合わせても答える気はないのだろうと、レイはアドルバードの部屋まで急いだ。

「夜分に失礼します！　すぐにこの液体の成分を調べてください！」

アドルバードの部屋に盥を置き、そのままレイは城の医務室へ走った。眠っている医師を叩き起して小瓶を突き付ける。

「ど、どうしたのかね。急に」

「説明している暇はありません。すぐに調べてください！ もしかするとアドル様の飲んだ毒の解毒薬かも知れない」

医師は目を見張り、そして小瓶からほんの少しだけ液体をとる。それからは苛立つほどに時間がゆっくりとすすみ グラスに残っていた液体に小瓶の液体を零し、医師はじっとそれを見つめる。そのあとで専門的な検査をして、ほう、と息を吐いた。

「どこで手に入れたんだね？ 確かにこれは解毒薬だ。アガイランテでしか手に入らないはずだが」

その言葉を聞くなりレイは小瓶を医師からむしり取る。

「説明は出来ません。アドル様に飲ませてきます」

おい、といづ医師の質問やらを全て無視してレイは走り出した。

彼女の主のもとへ。

「アドル様」

息を切らしながらレイは小瓶をアドルバードの口元にあてがい、傾ける。しかし熱に喘ぐアドルバードがそれを飲み込むことは叶わず、液体が口から零れていぐ。

レイはこれ以上薬を無駄にしないことすぐに止め、一瞬の迷いもなく小瓶の中の液体を、一気に口に含んだ。零さないよう細心の注意を払いながらアドルバードの唇に自分のそれを重ねる。

苦しげにアドルバードが息を漏らす。じく、と喉が鳴ったのを確認して、レイは唇を離した。

すぐに効果は確認できるはずもないが 心なしか荒かつた呼吸は規則的になつてゐる。

ほ、と安堵の息を吐き出し、そつとアドルバードの髪を撫でる。

「………… 良かった」

アドル様、と呟く。

不意に目頭が熱くなつて、動搖した。

瞳からそれが零れ落ちる様を見るのは嫌で、レイはアドルバードの上にうつ伏せる。

おまえ、泣かないよなあ。

そんなことをアドルバードは言つていた。

確かにそうだ。最近では泣くことなんてなかつた。昔からそうだ。どんなに辛いことがあっても別に平氣だつた。耐えられた。でも。

「あなたに、なにかあつたら」

泣くかもしれない、なんて。

あの時は冗談だつたけど。

生温かい何かが頬を濡らす。随分と久し振りな感覚にレイは戸惑うしかなかつた。泣くことを耐えることは出来るけど、涙を止める術は知らない。

声を上げて泣くなんてことも出来ずに、レイはただ静かに泣いた。張り詰めていたものが一気に溢れていく。

今だけは泣く自分を許すしかなかつた。

「　　レイ？」

聞き間違えるはずもない人の声。

つつ伏せていた顔を上げて、レイは声の主の顔を見る。

「アドル、様？」

アドルバードはああ、と小さく応え、レイを見て 田を見開く。  
「おまえ、なんで泣いて」

動くのもまだ辛いだろうに、アドルバードは慌てた様子でレイの頬に触れる。まだ熱をもつた掌に、レイは少しだけ甘えたくなつた。

「馬鹿な質問しないでください」

自分の頬に触れるアドルバードの手に自分のそれを重ねて、レイは苦笑する。

「あなたに、何かあつたからに決まってるでしょう」

アドルバードは虚を突かれたように田を丸くし、そして「ごめん」と呟く。

「そういえば俺毒飲んだ？ どれくらい経った？」

「確かに飲みました。飲んだ田の深夜ですよ。もう田付は変わったでしようけど」

そつか、とアドルバードが安心したように微笑む。

「まさかあんな大がかりなパーティの前にぶつ倒れて全部中止なんてなつたら最悪だし」

相當な金がさらに必要になるだら。弱小国のハウゼンランドには痛い話だ。

「自分の身よりお金の心配ですか」

呆れたように笑うレイをアドルバードは黙つて見上げる。

彼女の頬を濡らしていた零はいつの間にか渴いていた。その頬に

確かに跡が残つていいだけだ。  
その跡を優しく撫でる。

「……なんですか？」

くすぐったいのか、少し身を引きながらレイが問いかけてくる。  
いや、と咳きかけ アドルバードはじつとレイを見つめた。

「キス、したいな、なんて

黙日？」

いつになく良い雰囲気に流されて欲望を口にする。

「黙日です」

しかしきつぱりと拒否されてアドルバードは少しへこんだ。レイ  
はタオルを絞つてアドルバードの額から流れた汗を拭う。

「今はちゃんと休んでください。まだ熱があるんですから」

まあ、看病されるという立場も悪くないかとアドルバードは大人  
しくベットに沈む。

すぐにまた睡魔がやってきて、瞼が重くなる。優しいレイの手が  
髪を撫でて、心地良いな、なんて思う。

「今日はもう、しましたからね」

それが何のことなのか、夢の中へ旅立つアドルバードには分から  
なかつた。

## 52・私が正しいと思つた方を

夜半に田を覚ましたアドルバードはそのまままた眠りについた。正確には寝かしつけられた。他でもない彼の騎士であるレイに心配させてしまつたせめてもの償いだとアドルバードも大人しく従つた。

眠るアドルバードを見つめて、レイは淡く微笑む。

油断できるほどの余裕もなく、レイは眠つたアドルバードの傍らでその寝顔を見つめ続けた。まだ熱の残るアドルバードの額に冷たいタオルをのせる。

漆黒の闇に光が差し込む。月が地平線の彼方へと消え、太陽が顔を出す準備が始める、そんな早朝だ。

レイは静かに立ち上がり、扉へと向かう。

「　　レイ？」

物音で起きたのだろうか、アドルバードがまだ夢の中にいるような、ぼんやりとした目でレイを見つめていた。ほとんど寝ぼけているんだろうな、と思いながらレイは主に向かつて微笑む。

「すぐに戻ります。まだ起きるには早いですよ」

アドルバードはああ、と唸るようにうなづいて、おたベットに横になつた。

変なところで勘がいいな、とレイは苦笑しながら今度こそアドルバードの部屋から出ていく。

廊下のひんやりとした空氣に身が引き締まるような気がした。ひとつひとつ自分の足音だけが響き、レイはしばらく歩いて立ち止まつた。自然と腰に下げて立つて、剣に触れる。

「ああ、やっぱり来たか」

そう言つて笑うのは アヴィランテの皇子、ヘルダムだ。

解毒薬をレイに渡したときとなんら変わらぬ姿で、あの時会つた場所に同じように立つている。

「なんとなく、居そうな気がしたので」

レイが答えると、ヘルダムは満足げに笑う。この男の仮面はまさしくこの笑顔なのだろう。

「王子様は大丈夫だった？　と聞く必要もないか。無事じゃないならあなたはここに来ないだろうじ」

「あなたを完全に信じてすぐにアドル様に飲ませるような愚は犯しません」

さっぱりとしたレイの言葉に、賢明だねとヘルダムは笑みを浮かべて呟く。

「ならば剣から手を離してもいいんじゃないかな。俺は王子を殺すつもりはないよ。今も以前も、そしてこれからも」

あまりにも断定的なセリフに、レイは戸惑う。

ヘルダムは壁にもたれたまま、レイの反応を待つていた。彼には武器がない レイは剣からそっと手を離した。

「どうも、と言つておこうかな。それで、あなたは何が知りたくてここに来た？」

レイを見るヘルダムの目は底知れぬ闇のようになつて、笑つていてもどこか嘘くわく感じるのはその目のせいだらう。

「あなたの目的は何ですか？」

「Jの流れでいけばアドルバード暗殺を口論んだのはヘルダムではないということになる。もちろん、一度こちらを信用させておいて後に裏切るという可能性もあるが、一度手間になる。狙いがアドル

バードだったのなら、わざわざ解毒薬をレイに渡す必要はない。そのまま死ぬまで待てばいい。

狙つたのがシェリスネイアだった、という可能性はどう足搔いても消えない。シェリスネイアを狙つたが、的が外れた。そう考えることは可能だ。しかし少なくともアドルバードの敵ではないレイにしてみればそれだけで十分だ。万が一シェリスネイアの暗殺を計画していようと、その火の粉がアドルバードに降りかからないのなら問題ない。

「シェリスネイアから聞いているんじゃないかな。彼女を殺そつとしているのは俺だと」

飄々とした顔でヘルダムは答える。

「あなたの答えを求めているのであって、シェリスネイア様の言葉を聞きたいのではありません」

簡単に誤魔化されるレイではない。隙を『えないうつ』、間髪入れずに言い返す。

レイから見れば、シェリスネイアの考えは偏つている。それはアヴィランテの人間はすべて悪だと考へていても感じるほどに彼女はアヴィラを嫌悪している。

「あなたはどちらの言葉を信じる？」

「私が正しいと思つた方を」

レイが即答すると、ヘルダムは笑みを深めた。それは仮面ではない、素直な笑顔だ。しかしそれでいて人を見透かすような笑顔だった。

「あなたのような人と話していると心地いい。シェリスネイアも懷いただらうね」

答えるに困るセリフに、レイはただ黙つた。その反応も面白いのか、ヘルダムは目を細める。

「主に伝える伝えないはあなたに任せよう。ただ俺が言えるのは、俺はシェリスネイアを殺さないということだけだ」

きつぱりと言い切られた言葉に、レイは偽りは感じなかつた。

「　　レイ？」

アドルバードの部屋に戻ろうと廊下を歩くレイを呼びとめる者がいた。鈴の音のように軽やかで、美しい声。

振り返ればそこには朝日を浴びて立つリノルアースがいた。赤みがかつた金の髪がきらきらと輝いている。

「リノル様。どうなさったんです、こんな朝早く」

ようやく太陽は昇つたが、動き出しているのはせいぜい使用人くらいだろう。貴族や王族は朝の遅い生き物だ。

「目が覚めたから……レイがこんなところにいることは、アドルはもう大丈夫なのね？」

ええ、とレイが微笑む。アドルバードが意識を戻したのは深夜だったのでリノルアースに伝えに行くのは朝にしようと思っていたのだ。

「これからアドル様の部屋へ？」

ならご一緒にしようか、とレイが言うとリノルアースはただ頷いた。アドルバードが目を覚ました今、リノルアースが悩むことはないと思うのだが、つい先ほどまで一緒にいた人物を思い出してレイはリノルアースの表情をうかがう。もしかしたら、彼女なりに何か掴んだのかもしねりない。

「何か、ありました？」

静かに問うと、リノルアースは困ったように微笑む。

「隠し事できないわね、レイには」

ぴた、とリノルアースは立ち止まる。気がつけばアドルバードの部屋の前まで来ていた。

レイが扉を開け、リノルアースは当然のように先に部屋へ入る。

奥の寝台で横になつているアドルバードはまだ眠つてゐるよつだ。  
そのアドルバードをちらりと見て、リノルアースはソファに座る。

「カードを見せ合いましょう、レイ。どうやつて解毒薬を手に入れ  
たのかしら?」

不敵に微笑むリノルアースの前にレイは腰を下ろす。  
主が目を覚ますまで、まだ十分な猶予があるだろつ。  
ふう、と息を吐いてレイはリノルアースと向き合つた。二人とも  
目が合うと、一瞬だけ微笑む。

「どうぞ?」

リノルアースに促され、レイは口を開く。  
いくら相手がリノルアースだとしても手札のすべてをすぐには明  
かさない。今ここで語るのは、リノルアースが問うたことだけ。  
それ以上は リノルアースの出方次第だ。

「 王子の、意識が戻つた?」

シェリスネイアにその知らせが届いたのは朝、目覚めてすぐだつ  
た。

ほ、と安堵の息を吐く。

「そう、良かつた……」

そう呟くシェリスネイアの大きな瞳から、ぽたりと一滴の涙が落  
ちる。

落ちた雪にほんの少しだけ驚いて、シェリスネイアは染みの出来たドレスを見つめた。

「 良かつた」

もう一度呟かれた言葉はどこか空々しい。

水滴は頬を伝い、もう一つ染みを増やした。

涙の理由は、本人しか知る術がない。

「なんといふかまあ、存外に　いや、予想通りしぶといな君は」  
鬱陶しいくらいに晴れやかな笑顔でカルヴァーがお見舞いという大義名分を掲げてアドルバードの部屋にやつてくる。

「しぶとい言うな。ていうかうるさいから出でけ。病人を労れ」「病人じゃないだろう。毒を飲んだだけだ」

「だけとか言うな」

こつちは死にかけたんだよ、とアドルバードが唸る。カルヴァーは顔色の良くなつたアドルバードを見てにこにこと笑つている。

「だけじゃないか。しょっちゅうある」

「そつちとここを一緒にするなよ。そんな殺伐としたことしょっちゅう起きてたまるか」

アルシザスといい、アヴィランテといい、南国では毒はそんなに身近なものなのか。そんなにスリリングな生活を送つてゐるのかこの連中は。

「確かにここはのんびりとしていて実に良いな。老後の生活として理想的だ」

「十代の若人が現段階で住んでる国を老後とか言うな。悪かつたな田舎で」

「いやいや、実に素敵だとも」

にこにこと機嫌よさそうに笑うカルヴァーにうんざりしながら、アドルバードはため息を吐く。

「そんな調子で明日のパーティは大丈夫なのかね？　主役だらう、一応」

アドルバードはもう毒に苦しんでいるわけでもないといつのに、レイのお許しが出づにベットに縛り付けられている。

「うーん……もう熱はないんだけどなあ」

心配症というか、過保護だからなあ、と惚氣のよつた声が漏れる。

「あのアヴィラの姫君に剣を向けたというじゃないか。相変わらず騎士殿は君のことになると周りが見えなくなるな」

「……………そんなことしたのかあいつ」

「……………聞いてないぞ、とアドルバードは頭を抱えながら唸る。

「姫君の嫌疑はリノルアース姫が晴らしたようだがね。正直疑わしいとは思うよ、私は」

「何言い出すんだよ、突然」

にこやかな表情が、冷徹な王の顔に変わる。アドルバードが不審げに眉を顰めた。シェリスネイアが人に毒を盛るような人間には見えない。否、そう思いたくないだけなのか。

「覚えておくといい。南の人間は皆汚い。己の利益の為にしか動かんよ。リノルアース姫も、親しい友人だから思わずかばつたのだろうが」

「そんな浅はかな女に見えますかしら？」

カルヴァアの真剣な声を遮ったのは、美しい歌声のようなリノルアースの声だった。

扉に背を預け、不敵に微笑む。その傍らにはルイがしっかりと立っていた。

「リノル」

アドルバードが妹の名を呼ぶ。リノルアースはゆっくりとベッドに近づき、ちらりと部屋の中を見回す。

「……………レイは？」

突然部屋にやつて来た理由はそれだったのだろう、アドルバードは苦笑しながら「いないよ」と答えた。カルヴァアがやつて来ている時は、何を密告されるか分かつたものじゃないのでレイは退出させている。

「どうせ近くで暇つぶしてるんでしょ。ルイ、探ってきて」

「急用なのか？」

リノルアースのことだから、ただの暇つぶしに来たのだろうと思つていたのだが。アドルバードは首を傾げながら問う。同様にカルヴァもリノルアースを見た。

「まあね」

リノルアースはアドルバードをちらりとも見ずに、ただそれだけ答えた。

ルイが部屋から出て、少し廊下を歩くとすぐに姉の後ろ姿を見つけた。リノルアースの言つていたとおりかと笑いながら足を速める。

「やっぱり、貴女の主には伝えていないんだ？」

面白がるような声。ルイにはその声の主に覚えはない。

「……あなたには関係のないことでは？」

レイの返答は冷静だ。しかしここか緊張している様子に、ルイは警戒心を強めた。あの姉が警戒するほどの人間なんて、ハウゼンランドにいたどうか？

「どうかな。俺が味方になればそちらとしては願つてもないことなんじゃないかな？」

「それを決めるのは早計というものでしょ。それにしたつて、どうやって護衛の目を逃れてここまで来ているんです？ タイミング良く、私が一人になる頃を狙つて」

「さあ、どうやってだと思う？ 運命か何かじゃないかな？」

声をかけるか否か考えて ルイは結局立ち聞きしているような形に留まってしまった。人目を避けるように廊下の角で話している二人から、ルイの姿は見えない。

「誤魔化すのはいいかげんにしていただけませんか。ハウゼンランドに来た目的は何なんです？」

「聞いてばかりだな、貴女は。完全に味方についたとも思えない人間に手の内を見せるほど愚かじやないよ、俺は」

どちらも一步も引かないその会話は、どれほど続いたのだろうか。会話の中から、レイが話している相手を探ろうとする。

一体誰と話しているのか。

ほんの一瞬、気を緩めたその時だった。

「誰だつ！？」

レイの殺氣がルイに押し寄せる。ルイが反射的に抜いた剣は、レイが斬りかかったその瞬間に痺れるほどの衝撃を受けた。

「ルイっ！？」

驚いたレイからは研ぎ澄まされた雰囲気が消え、剣が收められる。ほつと安堵の息を吐きながら、まだこの姉には敵わないかな、と思つた。

「おまえ、何をして」

問い詰めるような声が途切れる。レイの色白な顔が、いつもよりも白い。否、青いと言うべきか。

「曲者はそちらのお知り合いだったのかな？ 問題ないならこっちは構わないけど」

角から顔を出した青年は、南国の人間特有の濃い肌に黒い髪。そんな特徴の人間は今ハウゼンランドに数人しかいないだろう。そしてその中でレイが警戒し、緊張を強いられるのも限られる アルシザス王・カルヴァ、そしてアヴィランテの皇子ヘルダム。

ルイが知らないのは、後者でしかない。

「これは面白いものを見つけたなあ。ねえ、貴方はハウゼンランドの人間なのかな？」

探るような眼に、ルイは背筋が凍る思いがした。レイの顔色が悪いのはたぶん同じ理由だ。

ルイは、会つてはいけない人間に会つてしまつたのだ。

リノルアースはそわそわと扉を見る。

どうせレイのことだ、アドルバードから命じられて部屋を出していくのだとしても、異変があればすぐ駆けつけることのできる距離にいるのだろうと思っていた。それだというのに、迎えに行つたレイも戻つてくる様子がない。

何かあつたのだろうか。

嫌な予感が胸をよぎる。

「遅いわね」

わずかな不安がそのまま声に出た。

すぐに戻つてくるだろ、と事情を知らないアドルバードはのんきなものだ。事情を知らせなかつたのはもちろんリノルアースとレイなのだが。

「顔色が悪いな、リノルアース姫。可憐な顔が曇つてしまつては太陽が蔭るようなものだよ？」

いつもどおりのカルヴァーの口調だが、そう語る顔は真剣そのものだった。

そうよね、あなたは南の人間だものね。

リノルアースは苦笑して、手の甲に贈られるキスを受取る。

「生憎、太陽は私ではありませんよ？」

「何を言うのか、そんなに輝かしいのに」

「そういう口説き文句は本当に惚れてる方になさつたりどう？」

「しているが効果がないのだ」

まったく何が悪いのだろうな、とカルヴァーは真剣に悩む様子が可笑しい。

につこりと微笑みがらリノルアースは呆れた様子でこちらを見て

いる兄を見る。

この国を統べる太陽は私じゃない。  
眞の太陽は、いつだって輝きを失わないから。

## 54： あの人は、私の全てです

「 彼は、私の弟です」

す、とレイがルイの前に立つ。ルイより背が高い為に全てを隠すことはできないが……一種の牽制なのだろう。

「へえ？ 隨分と似ていね」

ヘルダムの探るような目は相変わらずだ。狙いを定める獣のような鋭さがどこか感じられた。

下手に嘘をついても見破られるだろ？ レイは直感的にそう思つた。

「白と、黒ですかね」

それでも誤魔化すように話題を逸らす。

「砂漠の民の言葉だつたかな？ なるほど、面白い名付け方だねえ」明かすべきか、明かさざるべきか 平静を装いながらもレイは考えていた。未だにヘルダムの狙いは掴めていない。シェリスナイアの命なのか、アドルバードの命なのか、それともまるで別のものなのか。

「拾つた犬猫につけそうな名前だよねえ」

くすり、と笑う目が笑つていなかつた。背筋に冷たい何かが這つた感覚が気味悪い。ルイは思わず一步後退つた。

「 どこまで、知つてるんです？」

静かに問うレイの声がやけに響く。

隠すことはもう叶わないと、ルイも本能で悟つていた。

「たぶん、ほとんど かな？ だてに長く生きていられないしね？」

君達には負けないくらいには、と笑うヘルダムは若く見えるものの、二十四歳くらいだったはず。レイが立ち向かうにも経験が足りなかつた。

「……ルイ、先に戻りなさい。アドル様にヘルダム様が来ることを伝えるように」

せめて心構えを作る余裕くらいは必要だらう、とレイが小さく命じる。ヘルダムは聞こえたその声を流し、ただ目を細めて傍観するだけだ。

「え、姉上……!?」

敵かもしれない男を、という顔でルイは姉を見る。しかし揺るがないレイの瞳に大人しく頷く。今部屋にはアドルバードとカルヴァ、そしてリノルアースがいる。たとえ乱闘が始まつてどちらが有利なはず。

ルイは一礼してその場を去る。

わずかな沈黙の後、レイはじっとヘルダムを見た。

「先に、言つておきます。我が主を傷つけるとあれば誰であれ容赦はしません。そして」

一瞬言葉に詰まつた後で、レイは睨むようにヘルダムを見た。

「あれは私の弟です。この国一の男の息子であることもお忘れなく。何かあればそれ相応に」

静かな そう、とても静かな殺意にヘルダムは微笑む。

「それは、脅しのつもりかな？」

「いいえ。念を押しているだけです」

脅しにならないということくらい、レイにも分かる。いくらヘルダムが腕の立つ人としても、ここで命を奪うことはそう難しくないだろう。しかしその後を考えれば、そんなこと実行することはできない。大国を前にハウゼンランドは無力に等しい。

それに、もし ヘルダムがルイの真実をあの一瞬で探り当てた

としたら、その時はハウゼンランドが罪を負う可能性も捨て切れない。

「いいね、貴女のその性格は清々しくて。貴女がそこまでするほどの人なのかな、あの王子は」

レイは部屋に向かつて歩き始める。返事がないことを気にする様子もなく、ヘルダムも後ろをついてきた。

「　　あの人は、私の全てです」

振り返ることもなく、レイは呟く。

その答えにヘルダムは何も言わずに、ただ優しく微笑んだ。

「　　なんでそんなことになつてるんだ？」

慌てて戻ってきたルイにヘルダムの訪問を告げられて、アドルバードは青ざめる。

「アドルの解毒薬をヘルダム様からいただいたからでしょー？　まだ接触してきているのは初耳だけぞ」

リノルアースがため息を吐きだしながら答える。

「俺はその事実すら知らん！」

おいでけぼりか！　とアドルバードは怒りながら机を叩く。

「え、え、と、ですね。姉上はたぶんアドル様の身の安全を考えて、何も言わなかつたんじゃないかなー、と弟の俺は推測するんですが」「そんなことは俺でも分かるわ！　弟だからってデカイ顔するなむかつく……」

俺がいつデカイ顔したつていうんですか、と泣きじとを言つるイリノルアースはじつと見る。

「それじゃあ、あんたのことはバレたと思つていいのかしら？」

レイに隠し事をされていたアドルバードは怒りのあまり使い物にならないようだ。リノルアースはそんな兄を放つて、その場を整える。ヘルダムが来る前に整理しておかなければ。

「おそらく、気づいていると思います。立ち聞きした内容からいつでも、完全に敵というわけでもなさそうですが」

「自分に益があると思えば形だけでも味方となるだろう」

カルヴァがいつになく真剣な顔で咳く。

「レイは一人で探ろうとしていたわけね、ホントあの人には驚かれるわ……」

「だからなんて全部一人で抱え込もうとするかなあ俺はそんなに頼りないのかそれは身長のせいかチビだからなのかレイの奴いつもいつもいつも勝手に動いて勝手に解決してたり助かるんだけどそれってどうよっていうかあ！」

「そこのチビうるさい」

ぶつぶつとアドルバードが愚痴つているのに嫌気がさしてリノルアースが手ごろなクッショוןを元に向つて投げる。

「おまえの方がチビだろ！？」

「私が言つてるのは心の方よ心の！ チビで狭くて最悪ねえーーー！」

「なにおうー？」

そこらへんにしてくださいよ、といつもレイの制止も聞かずに双子は言い争いを始める。レイはそんなことのために猶予をくれたわけではないだろうに。

わずかな間激しい言い争いが続いたあと、リノルアースがこほんとわざとらしく咳払いする。

「まあ、しかたないわね。アドルのためにここにでも一つ一つ教えておいてあげましょ」

本当はレイがいる場で、と思つていたのだけれど。そう前置きしてリノルアースは続ける。

ふざけていた雰囲気がどこにいったのだろう リノルアースが静かに目を閉じ、その青い瞳がまた姿を現した時には部屋

はしんと静まり返っていた。

リノルアースの脣がゆっくりと動く。

アドルバードは耳を疑つた。

「アドルに毒を盛ったのはショリーよ」

嘘だらけ、という言葉はリノルアースの静かな瞳が言葉にさせなかつた。

「分かるわね？ 少なくともショリーは敵なの。 このことをよーく考えて、ヘルダムを見極めるのね」

カルヴァはやはりな、と小さく呟いていた。

アドルバードは言葉に詰まって、そして近くにいたルイを見た。彼も知らされていなかつた 知らせたくなかつたのだろう、リノルアースは 青ざめた顔で、ただ茫然と立ち尽くしていた。

「アドル様、戻りました」

レイのその綺麗な声が耳に届くまで、アドルバードの世界は止ま

つていた。

ゆつくつと開く扉の向いにまなみ銀髪の騎士と  
んで立っていた。

南国の皇子が並

## 55・王座を手に入れる。そのためには？

ヘルダムが部屋にやつて来て、妙な沈黙が部屋を支配する。レイがすつとアドルバードのもとへと戻り、耳元で「大丈夫ですか？」と静かに問う。

心配するな、という意味で一度頷く。

「そちらはアルシザス王、カルヴァ様かな？　こうしてお会いするのは初めてですね？」

緊張するハウゼンランド側のことなど気にならないのか、ヘルダムがにこやかにカルヴァに挨拶する。

「ああ、お会いできて光榮だ。ヘルダム皇子」

カルヴァも外交面のままで握手を交わしている。

ヘルダムは笑顔を崩さないまま、いいなあ、と呟く。

「やはり貴方は人を集めの何かがあるんですかね。アドルバード王子。魅力的な人がたくさんいる」

褒めているのか、そうではないのか　図りかねてアドルバードはただ苦笑する。

「俺の力ではありませんよ」

「いや、たぶん引き寄せる力があるんでしきつ」

きつぱりと言い切られてアドルバードは言葉に詰まる。にっこりと笑うヘルダムに早くも押され気味だ。

「　　とある、国の話です」

静かにヘルダムが口を開いた。

笑顔の仮面は張り付いたまま、その表情の奥は読み取れない。ア

ドルバードはただ黙つて話を聞くことにした。リノルアースも今のところは口を挟むつもりはないらしい。

「国はとてもとても大きかつた。王様にはたくさんの息子と娘がいた。どれも違う女に生ませた子供で、お互いに兄弟だなんて意識はなかつた。王様は次から次へと若い妻を迎えて、子供は増えていく一方だつた」

淡々と語られるその話がアヴィランテのことであることは容易に分かつた。

「息子が八人まで増えたところで、生まれた息子はどんどん変死するようになつた。一人は病氣で、一人は落馬で、一人また一人と実際は他の息子の後ろ盾が暗殺しているなど、暗黙の了解で知られていた。そのうち男の子が生まれた場合は密かに逃亡させたりしているようだつた」

ヘルダムはその時に一瞬ルイを見たようで、リノルアースやアドルバードの肝は冷えた。しかしヘルダムはそのまま語り続ける。

「おのずと子供たちの中で権力は一番最初の息子に集中した。彼は権力を駆使して生まれてくる男の子を殺し、女の子は駒として生かした。成長するにつれその独裁はひどくなり、もはや裏で動かす力は王様も超えていた。国はどんどん腐敗していった。他の息子も黙つているわけではなかつた。しかし力ない者は叩き潰されるだけだつた。そこで、一番目の息子は考えた」

ぎし、とヘルダムが深くソファに沈む。  
その深い緑色の瞳がアドルバードを捕らえた。

「従順な　または興味のない風に裝つて、徐々に周囲から埋めて  
しまおう、とね」

現在アヴィランテ内の勢力は第一皇子サジム派と、表面下で動くヘルダム派がある。サジム本人もヘルダムを中心に据えようとする動きには気づいているだろうが、本人が動いているという確たる証拠は掴んでいないはずだ。気づかれないようにしか、ヘルダムは動いていない。

「……それが、あなたの本音ですか。ヘルダム皇子？」

アドルバードは静かに口を開いた。

「　王座を手に入れる。そのために？」

続いた問いに、ヘルダムは笑つた。

「アヴィランテを浄化するために、かな」

随分と偉そうな大義名分だけど、と付け加えられる。だけどこれがヘルダムの本心なのだろうと、アドルバードは本能で悟っていた。「外国勢力を味方につけるにも、うちでは力不足だと思いますけどね。アルシザスはともかく」

「アルシザスを味方につけようと考えればこちらが最短ルートだった、と言えばいいかな。将来成長するであろう国でもあるしね」

アルシザスが目的だった、と隠さずに言つあたりがいつそ清々しい。

「そもそもシェリスネイアがこの国に足を踏み入れなければ、俺も来ることはなかつたけれどね」

ぴく、とその言葉に反応したのはルイだった。しかし口を開くことなく、黙り込む。

「シェリスネイア様を、殺すおつもりですか」  
弟の中に浮かんだ疑問を、レイが口にした。

まさか、と笑うヘルダムは相変わらず心の内が読めないが、一番接觸しているレイとしては偽りはないのだろうと感じた。

「以前にも言わなかつたかな？ 僕は誰も殺す気はないよ。無益に血を流すのは本意じやない。あの子を殺そうとしているのは俺じゃないしね」

シェリスネイアが暗殺の危機にあるといふことを隠すつもりはないらしい。

リノルアースがふうん、と呴く。しばらく無言で観察していくが、そもそもそろそろ終わりのようだ。

「では、誰がシェリーを殺そうっていうの？」

「それが貴女の地なのかな。麗しのリノルアース姫。君の兄君はシェリスネイアに殺されかかつたんだと思うけど？」

その言葉にアドルバードヒルイの表情が固まる。上手い切り返しにカルヴァヤリノルアースは面白そうに微笑んだ。

「そこまで知つていらっしゃるの。そうよね？ その節は解毒薬をどうもありがとうございました。……けどそれとこれは別よ。実行したのは確かにあの子だけ、裏で操つてる人間がいるんだから」違うかしら？ と小首を傾げて問うリノルアースの姿は實に可愛らしい。

「シェリスネイアはサジム派だよ」

答えるヘルダムの声は驚くほどに平坦だ。

ただ張り付いた笑顔だけがそのまで、それがある意味で不気味にも思えた。

「彼女は、サジムの駒だからね。そうしなければ彼女の母親が生きていい。彼女が王子に毒を盛ったのもあちらから指示があつたからだろう。そして俺に罪をなすりつけるなり、俺も後で殺そうと考えていたのかも知れない」

それは、あの美しい少女からは想像できない言葉だった。ここに

「……なぜ？」

ルイが静かに問う。それは少し意味の掴めない問いだ。なぜシェリスネイアはサジムの駒なのか。なぜ母は生きていけなくなるのか。なぜ彼女は毒を盛ったのか。その全てが含まれているようで、その全てが関係のない言葉のようだった。

ヘルダムの深緑の瞳と、ルイの緑色の瞳がぶつかった。

「彼女の母は狂っている。その上病んでしまった。もし声高に俺の味方につければ、彼女の母はサジムに簡単に殺されてしまうよ。あんなのでも、一応親だからね。彼女にも肉親の情はある。親を守らうとするなら、俺にはつけない」

「……本心では、ないと？」

ヘルダムの言葉に、ルイの表情が見る見るうちに曇っていく。問い合わせる声さえいつもの彼ではないようだった。

「優しい子だからね、本心ではないだろう。ハウゼンラングへ来たのも、あわよくば彼女を味方につけようと思ったからだ。あの子の利用価値は高い。だからサジムもある程度自由にさせているし、今まで生かしてきた」

じ、とヘルダムの瞳がルイを観察するように見つめる。

リノルアースはその瞳に少し動搖し、誤魔化そうと口を開きかけた。

「妹を、救いたいと思うのなら俺につくことだね。ヴィルハザード」しかしリノルアースの言葉はヘルダムの声に遮られる。

「ヴィルハザード。」

聞いたことのない名に、ルイの瞳が揺れた。

ヘルダムはにっこりと微笑みながらルイの顔を見つめた。

君の本当

「アヴィランテ帝国第九皇子、ヴィルハザード。  
の名だろ？ ルイ・バウアー」

## 56・この世で一番綺麗な宝を手に入れる為に

ヴィルハザード。

それが、ルイの本当の名前。

初めて聞いたその響きに、リノルアースは言い表せない違和感を覚えた。

先ほど紡ぎだそうとした言葉はどこかへ飛んで行ってしまった。何を言えばいいのか分からずに、リノルアースはただルイを見上げる。

一瞬揺らいだ瞳は、今はただまっすぐにヘルダムを見ている。

「俺の名前はルイ・バウアーです。それだけで十分だ」

はつきりとしたその声に、ヘルダムは驚いたように目を丸くする。すぐには大きく笑い始めた。

「欲がないな。皇子に戻れば手に入るものはたくさんあるだろ?」「皇子として、アヴィランテには行きます。だけど俺が自分の名と認めるのは一つだけです。それ以外はただの記号でしかない」

ふうん、とヘルダムは微笑む。その瞳はしっかりとルイを捕えていて、他は何も見えていないようだ。

「敵になるというなら、殺すよ?」

明らかに不利な状況で、ヘルダムは不安なんてものは微塵も感じさせずにそう言い放つ。

「敵にはなりません。俺は、アヴィランテの皇子という肩書が欲しいだけですから。条件さえ合づのならあなたの駒にもなりますよ」「肩書、ね。なんの為にそんなものが必要なのかな」

これほど強い力を持つ地位はそうないだろう。たとえアヴィラン

テでは皇子であっても下に言いづけられる程度のものだとしても、他国にはそれなりに使えるものだ。

ルイはちらりとリノルアースを見た。

目が合つてリノルアースは思わず赤くなる。

「」の世で一番綺麗な宝を手に入れる為に

二人の様子を見て何かを悟つたのか、ヘルダムは満足そうに頷く。  
「悪くないね。そういう青臭いのも。安心するといいよ北国の麗しい姫。彼にある程度働いてもらつたら君のもとに帰そつ」  
「べ、別に、と口ごもりながらリノルアースは赤くなる。

「話はまとまつたと考えていいのかな、アドルバード王子？」  
ずっと黙つて観察していたアドルバードはため息をこぼして、一度頷く。

「俺には決定権はあるようでないので。敵でないのが分かつたから十分ですよ」

その様子を見てヘルダムはくすくすと笑う。

「思いがけない駒も手に入つたし、こちらとしても十分だなあ。ここでアルシザスと同盟でも組めればなおいいんですけど

ちらりとヘルダムはカルヴァアを見る。カルヴァアは冷ややかな笑顔を浮かべて、ヘルダムを見る。

「あなたが王座に座つたその時には、考えましょう。今の腐つたアヴィランテと繋がつても我が國には益がない」

想像していたとおりの回答だったのだろう、ヘルダムはため息を吐きだしながらも頷いた。

「貴方も南の人間ですね」

そう呟きながらヘルダムは立ち上がる。

「シェリスネイアを頼みます。あの子を死なせるわけにはいかない。サジムはそろそろ本気で動き出すでしょうから」「なぜ、シェリスネイア様が狙われるんです？」

部屋から出ようと扉へと向かうヘルダムに、レイが問いかける。

ヘルダムはゆっくりと振り返り、そして笑顔のない真剣な表情で答えた。

「使えない駒は必要ない　俺を殺せないシェリスネイアはもう用無しということだよ。まして彼女は自由を知つてしまつたからね。これから国に戻つても使いにくくなるだけだ。その彼女に残された使い道は、国際問題の種になることくらいだ」

ハウゼンランドにいる間に、何者かに殺される。

それはつまりシェリスネイアを預かつてゐるハウゼンランドの責任になる。そしてもしその罪をハウゼンランドの人間に着せられてしまつたら　。

「守つてやつて」

そう言い残してヘルダムは静かに部屋から出ていく。

その後ろ姿を部屋に残つた者達はただ黙つて見つめていた。

降り始めた雪を、シェリスネイアは見上げながらただその場に立ち尽くす。

冬の庭は物悲しい。すべての植物は静かな眠りにつき、降り積もる雪に白く染められていく。

手をのばして触れた雪は一瞬で消えていく。

つい先ほどになつて部屋から出ることが許された。王子はもう起き上がれるほどに回復したらしく、パーティには支障ないだらう。

「……ヘルダム、でしうね」

シェリスネイアが盛つた毒はそう簡単に解毒できるものではない。決心が搖らいで毒の量が少なくなつてしまつたことも要因の一つ

かもしだれないが　こんなに早く回復したのは、間違いなく解毒薬がアドルバードの手に渡ったからだ。

ほつとしたような、残念なような、苛立ちのような　複雑で汚い心がシェリスネイアの中で溢れ出す。

サジムには失敗が伝わつただろつ。

たぶん、ハウゼンランドにいる間に殺される。

その方がいい。もうこの手を汚したくない。」のまま生かされても、シェリスネイアはどんどん汚れていくだけだ。

さあ殺せばいい。

こんなにも無防備でいるんだから。

降り積もる雪の中に倒れて、そのまま真白に染められて　そうして果てられたなら、なんて美しい死に様だらう。

「　何、してるんです？」

呆れたような声に、シェリスネイアの肩が震えた。  
振り返ればきつちり厚着してあるウイルザードが立つていた。

「あ、あなたこそ……」

動搖するシェリスネイアの側までウイルザードはつかつかと歩み寄る。そして片手に持っていた厚手のマントをふわりとシェリスネイアにかける。

長いこと立ち尽くしていたせいで冷えた身体はその一枚で随分と温まる。

「俺は一応あなたの護衛を任されてるんですけどね。まったく、南の人間がそんな甘い防寒で　風邪ひくでしょう」

確かにシェリスネイアはドレスに上着を一枚着ただけだ。

シェリスネイアを探していた、というより外にいることはすぐにな分かったようだ。その証拠にウイルザードはシェリスネイアの為のマントを持っていたし、自分も完璧に防寒している。

「雪なんて、そんなにいいもんですかね」

わざわざ見に来るほど、とウィルザードが呆れたように笑う。

「いつも見ている人には、なんてないものかもしれませんけど」

ショリスネイアは舞う雪に手を伸ばし、触れてはまた消える雪を見て微笑む。

「私は、好きです。白く、美しく、潔い。静かに積もり、そして自然と溶けていく。こんな風に生きられたら、幸せだろうと」

ショリスネイアのか細い手を、ウィルザードの大きな手が包み込む。

「…………？」

ショリスネイアが不思議そうにウィルザードを見上げる。ウィルザードはただ真剣な顔で、ショリスネイアを見下ろしていた。

「雪のように、一瞬で消えていく命が幸せだと思ひほど、あなたは不幸なのか」

ショリスネイアは何も言えなかつた。

ただウィルザードの瞳に吸い込まれるように、目が離せなかつた。

残念だつたな、とウィルザードが意地悪そうに微笑む。だがその瞳はどうか寂しげだ。

「あなたは雪になれないよ。触れても消えない。それが何よりの証  
拠だ」

## 57・けれど願わくば

「ヘルダム様」

アヴィランテから連れて来た従者の一人が静かに一つの手紙を差し出してくる。その従者はアヴィランテにいる仲間との連絡を任せていたはず。

何があつた、と問うのは避け、ヘルダムは黙つて手紙を受け取つた。

手紙の内容はさう長くない。

ヘルダムは一瞬だけ目を見開き、そして小さく吐息を零す。

渡された時と同じように静かに封筒の中にしまい、そしてそのまま暖炉へと放り投げた。

ぱちぱちと音をたて、手紙は簡単に灰になった。

その手紙が燃え尽きるまで、ヘルダムは黙つたまま見つめていた。

優しいあの子は、たぶん泣くだろう。

鏡に映る自分の姿を見て、ショリスネイアは一つ決意する。

董色のシンプルなドレスはショリスネイアの美しさを引き立て、装飾品はそれぞれ主を飾ることに誇りを持っているかのように輝きを放つ。北国のハウゼンランドに合わせて結いあげた髪には白い薔薇が咲き誇っている。

アヴィランテでは見たこともないような自分の姿に、ショリスニアは苦笑した。

衣装も、生活も、城の形も　　何もかもが違ひこの国とも、もうすぐお別れだ。

初めての恋も、ここでお別れ。

鏡に手をつき、ショリスネイアは微笑む。

「私は　幸せだったわね」

たとえこのまま死きる命でも、幸せだと思える瞬間は幾度もあった。そしてそのほとんどはこの国に来てから与えられた。

散るのならこの国で散りたかったけれど　　それは大事な友人に迷惑がかかる。それは許せない。

「ショリスネイア様、ウィルザード様がいらしました」

今日のエスコートを申し出てくれたウィルザードに、ショリスニアは素直に甘えた。その為に迎えに来てくれたのだろう。もう夕暮れだ。太陽は西の彼方へと沈み、パーティが始める。あちらこちらの姫君が己を最高に着飾つて来る。

けれどその中でも一番美しいのはショリスネイアだろう。もしくは　このドレスと対になるドレスを着た北国の姫君か。

「お待たせしましたかしら？」

迎えに来たウィルザードに微笑むと、一瞬遅れてから「いや」と返ってきた。

綺麗だの一言くらい言えばいいのに、と苦笑しながらショリスニアは差し出されたウィルザードの手をとる。たぶん迷いなくそんなことを言つ人ならばこんなに惹かれなかつただろう。

雪のよつよ、潔く消えててしまいたい。

けれど願わくば　この人の心の中には永久に消えぬ雪の結晶となりますよつよ。

「結局　こうなるのか」

朝早くに妹に起こされたアドルバードは、眠氣も吹き飛ぶ己の完璧な姿を見て愕然とする。

「仕方ないでしょ。リノルが危険かもしれないなら、念を入れた方がいいわ。私のフリして側にいてくれれば安心だし」

そう胸を張つて言い返すリノルアースは黒い衣装に、金の縁取り、真紅の装飾を施した男物の服を着ている。そう、本来ならばアドルバードが着るはずだったものとまるつきり同じ、リノルアースのサイズに合わせたものだ。多少の身長差は踵の高い靴でカバーされてしまった。

対するアドルバードはリノルアースの着るはずだった　シェリスネイアと揃いのドレスを着ている。薄紅色のドレスはシンプルだが、着る人間の美しさを十分に引き立てる。髪を飾る赤い薔薇がドレスの質素さをフォローしていた。真冬のハウゼンランドで生花を髪に飾ること自体が贅沢だろう。

「シェリーには白い薔薇を贈ったの。黒い髪に映えるでしょうねえ」「ここにこと楽しそうに笑うリノルアースからは、上手く感情が読

み取れない。

随分とシエリスネイアを気遣つてはいるようだが、本来の彼女ならば千倍返しするに等しい相手だ。リノルアースのもとからルイを奪い、兄のアドルバードには毒を盛ったのだから。

「 気に入つてゐよな、おまえ」

シエリスネイア姫のこと、と口にしなくとも双子の妹には分かる。「ええ、まあ。似た境遇だしね。……似てるけど、私よりずっと可哀想だわ。本人がそんな同情求めてないから言わないけど」

それより、ヒリノルアースが眞面目な顔でアドルバードを睨む。

「計画！ 一言一句違えずに覚えているんでしようね！？ 私がレイを借りていくんだからフォローはないと想いなさいよ！？」

何を隠そう朝早く起こされたのは昨日の夜のうちにリノルアースとレイによつて話し合われた内容を頭に叩き込むためだ。おかげでもう夕暮れになる今も眠い。

「計画つてほどでもないだる……なんせ親玉は遠い南の空の下だし」「手下は山ほど潜んでるでしょーがつ！！」

それも国としてはどうなんだらう、と思いながらアドルバードは乱れたドレスの裾を直す。

「分かつてゐ。守るよ。おまえの数少ない友達だもんな」

アドルバードは微笑みながらリノルアースの頭を撫でる。

「 ……その格好で言われてもときめかないわ」

残念ね、と言いながらもリノルアースの頬は心なしか少し赤い。照れ隠しかとアドルバードは苦笑する。

「それに、ヘルダム皇子からも言われてるからな」

昨日、静かに「守つてやつて」と言い残したヘルダムの姿を思い出してアドルバードは付け足す。

「そうね……ヘルダム皇子の方がルイよりよっぽどお兄さんらしかつたわね」

「半分血は繋がってるんだから、兄だろ」

兄ではないようなリノルアースのセリフをアドルバードはやんわりと注意する。

「本心はあまり分からない人だけど、悪人でないのは確かね」リノルアースの確信めいたセリフに、アドルバードは首を傾げる。その仕草は女装している状態だと本当に可愛らしいものだ。

「妙に言い切るな」

「似てたからね」

何に？ というアドルバードの問いをリノルアースはさらりと無視した。

「守つてやつて」という言つたあの瞬間の顔は、リノルアースのよく知る兄の顔だった。

「ほん、とリノルアースはわざとらしい咳払いをして、『アドルバード』の仮面の準備をする。

「では、行きましょうか？ お兄様？」

そう言つて手を差し出すのはリノルアースだ。アドルバードは一瞬だけきょとんとした顔になり、次の瞬間には不敵に微笑み返す。

「エスコートお願いしましょう。お姫様？」



## 58・あの子は少し特別でね

ハウゼンランドの双子の王子と姫が会場に入った瞬間に、周囲がざわめく。

王子にエスコートされる姫は可憐で愛らしく、シンプルな薄紅色のドレスがその美しさを少しも邪魔しない。真紅の薔薇が赤みがかった金の髪を飾り立てていた。

王子は黒い上着は金の縁取りが施され、赤い装飾がやはり彼の髪色をより映えさせていた。

よもやその一人の性別が逆だとは誰も思つまい。

リノルアースが扮したアドルバードは本物よりも数倍愛想よく姫君達に笑顔を振りまいては黄色い歓声を浴びている。

「おいら。俺の印象が悪くなるだろうが。俺は軽い男じゃないぞ」ぼそぼそとリノルアースが扮したアドルバードが抗議する。しかしそう言いながらも顔は笑顔だ。

「つるさいわね。少しくらいサービスしても罰は当たらないわよ。でもこれ気分いいわ。普段人を目の敵にしてるお姫様方が見事に騙されときやあきやあ」

笑顔で手を振るリノルアースが言つてることは腹黒い。頼むからその姿で問題は起こすなよとアドルバードは心から祈るのみだ。

「御機嫌よう、北国の王子と姫君」

につこりと笑いながらヘルダムが挨拶にやつて来る。

「ご機嫌麗しく、ヘルダム皇子」

微笑み返す偽リノルアースに、ヘルダムが一瞬固まる。そしてちらりと偽アドルバードを見た。

リノルアース

「何か？」

につこりと笑いながら偽アドルバードが答える。

「……心臓に悪いから、そういうことは事前に申告して欲しいなあ。

気持ち悪いくらいにそつくりだ」

「気持ち悪いとは心外ですね」

リノルアースが笑顔のまま答える。内心ではかなり怒ってるかも  
しない。

「知り合いには分かりやすいかもしないよ、騎士の配置が逆だ」  
直すんだね、と注意を受けて、偽アドルバードの隣にルイ、偽リ  
ノルアースの隣にレイが立っていたことに気がつく。

「あ、ついいつもの癖で」

ルイがわたわたと慌て始めるが　リノルアースは平然としてア  
ドルバードと向き合つ。

「どうせだから、一緒に踊ろうか？　リノル」

突然リノルと呼ばれたアドルバードは硬直し、そのまま引きずら  
れるようにダンスする人の中に連れて行かれる。

一応女装して他国にまで潜入したアドルバードは女の方でも踊れ  
る。しかしリノルアースは　。

「え、ちょ、おまえ平気なのか？」

こそそと耳打ちしながらアドルバードはリノルアースと向き合  
う。

「誰だと思ってんの？」

不敵に微笑む『自分』に冷や汗が流れながら、アドルバードはリ  
ノルアースのリードでダンスを始めた。

「あら。双子でダンスしていらっしゃるのね」  
少し遅れてやって来たシェリスネイアの隣には当然のようにウイ  
ルザードがいた。

騎士二人とヘルダムのところに一直線にやつてきたシェリスネイアだが、周囲の注目は双子の比ではない。漆黒の髪に白い薔薇は映えていた。ドレスは細かな装飾がリノルアースとは異なるが、大まかにデザインは一緒だ。二人並んだ姿は見ものだらう。

「いつも最初のダンスはそうですよ。お二人はダンスは？」

レイがさらりと流しながらそう問いかける。

遠目で見ている分には本物にしか見えない双子に、今はフォローする必要はない。

「……え、ええ。まあ。その、私、ダンスは苦手で。今の曲は速くて無理そうですね」

苦笑しながらショーリスネイアはダンスしている紳士淑女を見る。「足踏まれるのも嫌だしな」

からかうようなウイルザードをキッと下から睨みつけながら「そこまで下手じゃありませんわ」とショーリスネイアが言つ。

「あなたは、どちらで踊るのかしり?」

ショーリスネイアがレイを見上げて問つ。

「どちらも踊りますが　　今夜はあくまで護衛ですから」  
レイが苦笑しながら答える。しかし周囲の姫君の中にはレイを狙うかのように熱い視線を送つてゐる。

「残念ですわね。主に何も知らない姫君達が」

くす、と笑いながらショーリスネイアは周囲の姫君を窺い見る。アドルバードの為とは言え、奉制にレイは男であるように振る舞つたままだ。

「あらショリー。踊らないの?」

「こやかに微笑みながらダンスを終えたリノルアース（に扮したアドルバード）が近寄つて来る。

「お、踊りますわ、もちろん」

笑う偽リノルアースは暗に「苦手なの?」とからかつていよいよ

だ。負けず嫌いのシェリスネイアが踊ると言いだすのが分かり切つてゐるように。

「まあ、このくらいの速さだったら大丈夫だろ」

半ば呆れたようにウィルザードがシェリスネイアに手を差し出す。

「踊つていただけますか？」

物語の王子様のようにウィルザードが微笑む。

シェリスネイアは一瞬硬直し 赤く染まつた頬を誤魔化すことも忘れて、ウィルザードの手に自分のそれを重ねる。

「お、踊つて差し上げますわ」

初々しい二人を見送つて、アドルバードとリノルアースが休憩に入る。隙を見て誘つてくる王子を偽リノルアースはにこやかに笑いながら断つている。

「その格好はシェリスネイアの為だらう？」

微笑みながらヘルダムはアドルバードに問う。

「まあ、いざという時にこつちよりは戦力になりますから」

こつち、とアドルバードの格好をしたリノルアースを指す。

「…………できれば、目を離さないようにして」

真剣な表情でヘルダムはアドルバードを見る。その深い緑色の目に射抜かれたように、アドルバードは動けなかつた。

「なぜですか？」

レイが不審げに問いかけると、ヘルダムはいつもの笑顔を忘れたように静かに呴ぐ。

「……シェリスネイアの、母が亡くなつた」

突然のその言葉は、あまりにもあつさりしていて、現実味がなかつた。

「シェリスネイアを縛りつけていた枷が消える。サジムは本当にあの子を殺すだろ？」

母という存在がなければ、シェリスネイアはサジム派につくことはなかつたかもしれない。ヘルダムについたかもしれないし、どちらにもつかなかつたかもしれない。そのことをサジムも分かっている。

「 隨分と、気にかけてますね？」

一番最初にルイが口を開いた。

賑やかなパーティの会場で、これらの会話は目立つものではない。もとより周囲を気にして声は小さめになつている。

「アヴィランテの王族は、家族の意識が低いと聞きましたが？」

続けて問うルイに、ヘルダムは苦笑した。

「俺にとって、あの子は少し特別でね」

そう言いながらヘルダムはウイルザードと一緒に踊るシェリスニアを見る。

その瞳はとても優しい。その奥にある感情を、ルイもよく知つている。ハウゼンランドではよく見る瞳だ。

家族を想う、優しい目。

## 59・それでも あなたに出会えて良かった

最初は、ただの勘違いだつた。

もう随分と昔だ。

十年前のことだろうか。

「お兄様っ！？」

アヴィランテの王宮の、東の宮にある小さな庭だつた。散歩して  
いたヘルダムの後ろから、そんな声が聞こえた。

振り返つた先には 愛らしい五歳くらいの女の子がいた。黒い  
髪は艶やかで、黒く大きな瞳が印象的だつた。一目で将来は美しい  
女性になるだろうと分かるような、そんな女の子だ。

着ている服は上等なもので、ヘルダムはたぶん半分血の繋がつた  
妹だろうと思つた。

「お兄様！？ お兄様なのでしょう！？ お母様がいつもおっしゃ  
つていました！ お兄様は綺麗な緑色の目をしていたって！」

少女は嬉しそうにヘルダムを見上げて、はしゃぐようにそう言つ  
ていた。

「お母様がずっと悲しそうにしていたから、だからシェリスネイア  
はお兄様を探していたんですね！ ここまで遠くにきたのは初めてで、  
だからお兄様を見つけられたんですね！」

勢いに押されそうにならぬがらも、ヘルダムは彼女の探す『お兄  
様』が自分ではないと悟つていた。自分には同じ母を持つ兄弟はい  
ない。アヴィランテでは同じ母を持たない限り兄妹の意識は生まれ  
にくい。

そしてショリスネイアという名にも覚えがあつた。

最近父のお気に入りだという姫君の名と一緒にだ。確か、この子の  
母親は上に皇子も産んでいたはず その皇子が生きているか死ん

でいるかは覚えていないが。

「シェリスネイア、だね？」

ヘルダムはシェリスネイアと目線を合わせるようにしゃがんだ。  
「はい！ 私の名前はシェリスネイアです！ お母様がつけてくださいました！」

はきはきとした、元気な子だな、とヘルダムは優しく微笑んだ。  
「ごめんね。俺は君の探してるお兄さんじゃないよ。僕の名前はヘルダム。お兄さんとは違う名前だろう？」

シェリスネイアに分かるように、優しく説明するとシェリスネイアの顔はどんどん曇つていった。

「お兄様じゃ、ないの？」

がつかりした顔は、先ほどまで嬉々として笑っていたから余計に悲しそうだ。

「半分はお兄様かなあ。俺のお母様と君のお母様は違うからね」慰めるようにシェリスネイアの頭を撫でる。

「シェリスネイアにはお兄様がいたって、お母様がずっと悲しそうにおっしゃるの。お兄様がいればって、ずっと、おっしゃってるの。だからシェリスネイアが探してあげようって……」

大きな瞳に涙を溜めながらそう言うシェリスネイアを見て、一人前に兄のような気がしてきた。

アヴィランテという国でなければ、もつと卑く、兄としてこの子と出会えていただろう。

「じゃあ、手伝つてあげるよ。一人で探そう？」

この小さな女の子の涙を止めたくて、ヘルダムはそう微笑んだ。大きな瞳がなお大きく見開かれ、やがて満面の笑顔になつた。

たぶん、お兄様と呼ばれたあの瞬間に、ヘルダムはシェリスネイアの兄になつていたのだ。

どうにか一曲踊ってきたシェリスネイアは、一瞬嬉しそうに微笑み、そのあとすぐにその笑顔は翳つた。

「どうした？」

「 ウィルザードはシェリスネイアをダンスの輪から連れ出し、注目する王子達を牽制するかのように影を作った。

「なんでも……少し、疲れただけです」

それが嘘だというのはすぐに見抜けたが、ここで注目を浴びるシェリスネイアを尋問するのは難しそうだ。

それならとウィルザードはバルコニーに出る。シェリスネイアも手をひかれ大人しくついて来た。寒いが人目は避けられる。

「…………どうした？」

もう一度シェリスネイアを見下ろして問う。

「疲れただけだと、申しませんでした？」

「 独りにしてください

さらない？」

話すのも億劫だと聞いたげにシェリスネイアは無理に笑う。

共に踊っている間はとても楽しそうに笑っていたと思うのだが、女は本当によく分からぬ、とウィルザードはため息を吐きだす。

「俺が、あなたの望むように動くと思うか？」

どうにか言えた言葉は甘さの欠片もない。いつもいつも憎まれ口ばかりになってしまふのは習性なのか、と苦笑する

「 思いませんわ。あなたは本当に、いつも私の予想にないことばかりなんですもの」

だからこそ、惹かれたのだろうけど。シェリスネイアは心の中でひつそりと呟く。

「 なら、できない相談だ」

こんなシェリスネイアを独りになんて出来ない

　　ウィルザード

の本能がそう告げていた。

「そうでしょうね、ヒョーリスネイアが夢げに笑う。

「そう言って吐き出す息は白い。雪こそ降っていないものの、いつ振り出しても可笑しくないほど气温は低い。」

「風邪をひいてしまう。そう思つと反射的に身体は動いていた。上着を脱いでヒョーリスネイアに着せようと そう動いた腕を、そつとヒョーリスネイアが止める。」

「あなたに出会わなければ、決意がこんなに揺らぐことはなかつたでしょ?」

何のことだらう、とウィルザードはヒョーリスネイアを見下ろした。ヒョーリスネイアは寄りかかるようにウィルザードに寄り添い、淡く微笑む。その黒曜石の瞳が濡れているように見えるのは、錯覚なのだろうか。

『どうした』と同じ質問を紡じうとした、その唇に柔らかい何かが重なる。田の前に数センチの差もない距離に、美しい顔があった。

重なり合つたのはほんの一瞬だった。  
けれどウィルザードには長く長く感じた一瞬だった。

「それでも あなたに出来て良かつた」

ぬくもりが去つたあと、切ない田にウィルザードは射抜かれた。言葉を紡じうとしても、驚きと衝撃で何も出てこなかつた。悲しげに笑うヒョーリスネイアの顔だけが田に映る。

「ありがとう、ウィルザード」

そう言つて微笑みながら、ヒョーリスネイアは「さよなら」と続ける。

さつと身をひるがえす、そのヒョーリスネイアを捕まえようと手を

伸ばした。行かせてはいけない、彼女を独りにしてはいけない、そんな本能がウイルザードの中で警鐘を鳴らす。

「 ショリスネイア！！」

叫びはショリスネイアをつなぎ止める楔とはならず、彼女は逃げるようバルコニーから去っていく。捕らえようと伸ばしたウイルザードの手がその場に残したのは、ショリスネイアの髪に飾られた白い薔薇一輪のみだ。

ショリスネイア、と叫んだ声が耳に残る。

もう、思い残すことなんてない。  
もう十分だ。

十分に私は幸せだった。

## 60・俺が言つべきことですか

涙が零れ落ちないように、シェリスネイアは顔を上げて走った。華奢な靴ではそう速くも走れないが、それでも全速力で走った。今ウイルザードに捕まつてしまつたら、搖らいだ決心が崩れてしまふかも知れない。

一緒に踊れた。

甘い恋だと思い出にもできる。

幸せだ。

心残りは、もうないと思えるほどに。

唇を噛みしめてシェリスネイアはパーティ会場から抜け出る。人目がない場所に そう思いながら走つた。パーティから抜け出す人間はまだそつ多くない。会場から出てしまえばもう人気はないに等しかつた。

「 そんなに慌てて、どこに行くの？ ショリー」

凜とした声がシェリスネイアの身体を止める。まるでそう約束していたかのように、リノルアースが壁にもたれて立つていた。

「 ……リノル、どう、して」

シェリスネイアが驚いて目を丸くする。

リノルアースはどこか頼もしい様子でにっこりと笑う。

「あの馬鹿が何かしたのかしら？ それとも 何か企んでるの？」

図星をつかれて、シェリスネイアは困惑した。咄嗟に誤魔化すだけの余裕が今は無い。

「そ、れは」

「これはこれはシェリスネイア姫。お待ちしておりましたよ

何か紡ごうとしたシェリスネイアの言葉を遮り、下品な笑みを浮かべた男が暗闇か姿を現す。

「おやおや。ヘルダムを連れてくるように指示があつたはずですがね？　しうがない方だ。まあ、そちらの姫でも十分に価値は」

「彼女に手を出したら、私が許しませんわ！」

リノルアース眺めにやりと笑つた男に、シェリスネイアは毅然と言い返す。

「私がここへ来たのは　あなたを始末する為よ」

シェリスネイアがリノルアースをかばうように立ち、懐から短剣を取り出し、その切つ先を男に向ける。

アドルバードに毒を盛つたことは失敗し　そしてサジムの遣いから、密書が届いた。

曰く、パーティの喧騒に紛れてヘルダムを誘い出せと。  
そこでヘルダムが殺されるだろうといつことくらい、シェリスニアにはすぐに理解できた。

彼は私を嫌つてゐるだろう。

幼い頃、あんなに良くしてくれた相手に向つて牙をむいているのだから。自分と、自分の母の保身のために。

この平和な国に、争いを持ち込ませたりしない。  
ここでの穏やかな日々を、侵したりしたくない。

なら私は罪を負おう。そして故郷でサジムに殺されることにならうとも。

「噛みつくところですか。の方に」

ひんやりとした声がシェリスネイアの背筋を凍らせた。

だがもう引き返せない。ヘルダムを殺す手助けをすることも

この双子を傷つけることも、もうシェリスネイアには無理だ。

「これから、サジム様に飼われていたつもりはありませんわ」

「あなたの母君がどうなつても良いのですか？」

びく、とシェリスネイアの握る短剣が震えた。シェリスネイアはもうその母がこの世にいないことを知らないのだ。

「シェリー……いや、シェリスネイア姫」

背後の声を聞いて、シェリスネイアが驚いて振り向く。

『シェリー』と呼んだ声は間違いなくノルアースだったのに、

『シェリスネイア姫』と言った声はアドルバードのもので。

振り返った先にいたのは、凛々しく笑うノルアース　いや、

アドルバードだろう。

「……アドルバード、王子？」

確かめるように声をかけると、アドルバードは少し照れたようにな笑う。

「不本意ながら。ヒーロー登場のよじにかつて良くなくて申し訳ないです」

そう言いながらアドルバードはシェリスネイアを背ににかばう。その背中は思いのほかたくましく、頼もしい。ドレスの中に隠していった剣を出し、アドルバードはリノルアースの姿のまま男と向き合う。

「まあ、あなたのヒーローは俺じゃないので、勘弁してください」

くすりとアドルバードは笑う。

「あなたの出番も、まだでしょう」

シェリスネイアを背ににかばっているアドルバードの言葉に、返すように静かな声が聞こえた。その瞬間に、目の前の男が低く唸つて

倒れる。

月夜に、鮮血が静かに散る。

「…………レイ。美味しいところを持つてくな」

「ぶす、と不貞腐れたようにアドルバードが呟くと、倒れた男の向こうから銀髪の騎士が現れる。

「私はあなたの騎士として当然のこととしたまでですよ?」

「そうです。それにそんな恰好で真正面から挑むのは無謀ですよ、

アドル様」

そう言いながら姿を現したのは、ルイだ。偽物のリノルアースの側にいたのはルイだから、最初から潜んでいたのだろう。

「怪我は、ないみたいね?」

優しい声が聞こえ、シェリスネイアは来た道を振り返る。アドルバードの姿をしたリノルアースが、微笑んでいた。かつらをつけたままだから、一人を見分けるのは声と表情のみだ。

「リノル……」

無事で良かったわ、とリノルアースは微笑みながら、シェリスニアに歩み寄る。そのリノルアースの後ろにはウィルザードがいて、胸がちくりと痛んだ。

ウィルザードはシェリスネイアを見つめて、何も言わない。

「…………シェリー、あのね」

リノルアースはシェリスネイアの手をとり、じっと見つめてきた。その瞳はとても深く澄んだ青だ。故郷の空の色に、海の色にも似てる。

リノルアースが紡いだとした言葉が、シェリスネイアとウィルザード以外には分かったんだろう。しんと静まりかえって、リノルアースが俯く。

「あなたの

「リノルアース様」

リノルアースの言葉を、ルイが遮った。

「俺の口から、言います」

あなたが負う必要はない、ルイがリノルアースに優しく微笑む。

「これは、俺が言つべきことですから」

この場にヘルダムはいない。それならば 母の死を伝えるのは

兄である自分の役目だらうと、ルイは笑う。

強がり、トリノルアースが呟いた。シェリスネイアの手を離さなかつたのは、彼女なりの優しさだったのかもしない。

「……何が」

あつたという。そう問おうとした声は、ルイの優しく厳しい声に遮られる。

「シェリスネイア」

初めて、ルイは兄として口を開いた。

名前を呼ばれて、自然と緊張した。目の前のルイはハウゼンランドの騎士としてではなく シェリスネイアの兄として立っていた。

「母上が、亡くなつた」

その声に、シェリスネイアは深く突き落とされた。

## 61・たつた一人、妹と思えた存在だからね

かくん、と膝が折れてシェリスネイアはその場に座り込んだ。

「う、そ」

リノルアースはまだ手を握つていってくれる。そのぬくもりが優しいのに、どこか辛い。力が抜けて、もう立ちあがることも叶わないような気がする。

ルイはシェリスネイアを労しげに見つめながら、何も言わない。

「嘘、でしよう！？　だつて、そんな！」

ルイを見上げることもできず、シェリスネイアは地面を睨むようにして叫んだ。

「嘘ではないよ、シェリスネイア」

シェリスネイアの言葉を否定したのは、優しく厳しい声だった。姿の見えなかつたヘルダムが、真剣な表情でシェリスネイアに歩み寄る。

「嘘ではないんだ。嘘であるなら幸せなんだろうけどね」

ヘルダムはリノルアースの手からシェリスネイアの手を取る。その大きな掌に、シェリスネイアは懐かしさを覚えた。

「表向きは病死と伝わってるけど　それが怪しいことくらいは分かるね？」

優しい優しいヘルダムの声に、渴いていたはずの涙が溢れそうになる。

彼はいつも、シェリスネイアに優しい。

「……どうして、そうなんですか。いつもいつも！　私はあなたを裏切つて、サジムについていたのに！」

地に向かつてそう叫びながら、シェリスネイアは縋りつくようにヘルダムの手を握り締める。握り返してくれるそのぬくもりが余計に痛い。

「それが、正しい選択だと俺も思つたからかな。シェリスネイア、

俺は、君がこうして生きていてくれて嬉しいんだ。たとえ俺の敵となっていたとしても

ヘルダムは片膝をつき、シェリスネイアと田線を合わせる。もう堪え切れないほど涙が黒曜石の瞳に溜まっていた。

「たった一人、妹と思えた存在だからね」

溜まつた涙はその言葉で溢れ出した。

困ったな、とヘルダムは笑いながらウィルザードを振り返る。するりと手は離れ、シェリスネイアはその手を追うよつに顔を上げる。

「慰めるのは、俺の役目じゃないと思うんだけどなあ」

そう言つた先は明らかにウィルザードで、シェリスネイアは顔が紅潮するのが分かつた。何を言い出すのだとヘルダムに掴みかからりたくなる。

「　　ウィルザード様。そのまま、姫を連れて行つていただけますか。アドルバード様、主役がいつまでも場を離れているわけにもいかないでしょ」

ひんやりとしたレイの声に、シェリスネイアはびくりと怯えた。その場の空気の変化に気づいたウィルザードはさつとシェリスネイアのところへ駆け寄り、その華奢な手を掴む。

「加勢は必要かな？」

ヘルダムが微笑みながら問う。レイは振り返りもせず、剣に手をかけながら「いいえ」と答えた。

「いつまでもパーティの注目株が消えているわけにはいかないでしょ。皆様はお戻りください」

レイの冷静な判断に、誰もが頷いた。

「　　姉さん、いけますね？」

「誰に言つてる？」

レイが笑いながらレイと目を合わせる。

その緊迫した空氣に、シェリスネイアは敵が潜んでいることを悟る。そして自分がウイルザードや他の人に連れられて、安全な場へ逃れようとしていることも。

「アドルバード様、会場ではカルヴァ陛下を見つけて、出来るだけそばにいてください」

それはどちらの『アドルバード』に向けた言葉なのだろうかおそらく両方なんだろうな、とシェリスネイアは思う。

「……リノルアース姫は具合が悪いので部屋に下がった、つてことにしといてくれ」

周囲に注意しながらその場から立ち去るうとしていた王族メンバーに、本来の主役であるはずのアドルバードが言い放つ。

「……いいわよ。別に絶対必要な存在ではないもんね」

アドルバードの姿をしたままのリノルアースはそう簡単に請け負う。アドルバードは苦笑して「任せた」と妹の肩を叩いてレイのもとへ戻る。

「何を考えて 戻つてください、危険です」

レイが本気で怒りながらアドルバードを睨む。

いつもならそこで引き下がるであろうアドルバードも、睨み返しながら剣を握りなおす。周囲の敵は姿を現さないものの、すぐにでも襲いかかってくるだろう。

「冗談。惚れた女を危険な場所に残して引き下がれって？ 無理な話だ」

邪魔だな、と言いながらアドルバードは髪を取りて投げ捨てる。ドレスもいつそ引き裂いてしまいたいところだが それはさすがにリノルアースに怒られるだろう。アドルバード用に作ったものとはいえ、新品なのだ。

「あなたを守るのが私の仕事なんですから、当然です」

「ああ、そうだよな！ おまえはいつもいつもそればっかりだよな！ 嬉しいけど、俺のことも少しは考えろよ。おまえが危ない目に遭つてゐるのに、俺だけ安全な場所でのんびりダンスか！？ 冗談じ

やない！」

そのアドルバードの叫び声を皮切りに、周囲に潜んでいたであろう敵が一斉に姿を現した。何人かは抜け出した四人に付いていったらうが 会場の警備は万全だし、その短い道中に襲つたとして多数人ならヘルダムとウイルザードでどうにかなるだろ。」「だからそれが私の仕事で、使命でしょう。それなのに守る対象がわざわざ危険な状況に飛び込んでくるなんて、人の苦労を増やして何が楽しいんですか、アドル様」

口調こそは穏やかだが口数が多い分、レイもけつこう怒っている。その証拠に言いながら容赦なく向かってくる敵を斬り伏せている。「誰も楽しんでなんかないだろ！ おまえが戦うつていうなら、俺も一緒に戦うつて言つてるだけで！ いつも俺第一に自分の危険を顧みないのをやめろつて言つてるんだよ！」

アドルバードも怒りを敵にぶつけてるので、いつもより手加減していない。

痴話喧嘩なら余所でやつてくださいよ、と呴きながら容赦なく敵を倒していく。

「そういう性分なので」「だつたらその性分直せ！」

一人、また一人とアドルバードとレイは喧嘩しながら倒していく。十数人いたはずの敵は、アドルバードとレイが言い争つている間にほとんどが地に伏せている。

「こんな女が嫌なら今からでも探してたらどうです？ ちょうど大勢いらっしゃっていますし」

そう言いながらレイが斬つたの最後だつた。  
ルイはどこからか縄を持ち出して斬り伏せられ屍と化した男たちを縛りあげていく。

「なんでそななるんだよ！ 僕は他の女なんてどうでもいいって！ まだ気が高ぶつているんだろ。アドルバードはレイと向き合いながらそう叫んで そのあとでしまったと顔を真っ赤に染めた。」

レイはくす、と笑つて剣を收める。

「なら、悪い女にひつかかつたと諦めてください」

レイの笑顔に何もかも負けた気がしてアドルバードは唸りながら、ぐしゃぐしゃと頭を搔く。

「悪い女なんかじやないよ、おまえは！」

ただそれだけは訂正して、アドルバードは悔しさを誤魔化した。

逃げる者を見逃してくれるほど、敵方も優しくはない。

会場へ戻る四人は予想通り敵に襲われたが、ウィルザードとヘルダムの力量を軽く見ていたのだろうか、現れた敵はわずか三人だ。ほとんどを任せてしまつたなと苦笑しつつ、ウィルザードは背にシェリスネイアをかばつて剣を抜く。残つた人間の実力を考えれば心配は無用だろう。

「リノル、多少は自衛できるだろ。シェリスネイアと物陰に隠れてる」

ウィルザードとヘルダムで壁を作りながら、ウィルザードが指示する。リノルアースは形だけ腰に下げていた剣を抜き、シェリスネイアを背にかばつた。

「多少とは失礼ね。小さい頃私に負けたこともあるくせに」「うるさい」

リノルアースは幼い頃はアドルバードと同じように剣の稽古を受けていた。十二歳になつた頃にやめたが、そこらへんの姫と比べれば異常だろう。

「シェリスネイア、目を瞑つてるといい。すぐに終わる」

そちらの姫もね、とヘルダムは優しく笑い、敵へと剣を向ける。リノルアースは「馬鹿にしないで」と剣を構える。人が斬られる場面には、もう何度も出くわした。人が、斬り殺される場面にも。その時の断末魔さえまだ覚えている。

だからといって恐れはしない。今日の前で剣を握る二人はどちらかと言えばシェリスネイアを守るために剣を振るうのだろうがそのおまけに守られる自分としても、自分のために振られる剣に違ひはない。

ヘルダムの振るう剣には迷いがなかつた。冷酷なアヴィラの皇子らしく、致命傷になると分かつていてもそのまま剣を振り下ろす。

ウィルザードの剣はアドルバードに似ていた。たぶん、リノルアースやシリスネイアの前で人を殺すことには躊躇いがあるのだろう。決着は確かにすぐについた。

ウィルザードとヘルダムがそれぞれ一人を斬り伏せ、最後の一人に剣を向ける。

「くつ……」

すでに勝敗は決した。敵の男は唇を噛み、ヘルダムを睨みつけた。「サジムの差し金か。悪いがこの命、簡単にくれてやるわけにはいかないのでね」

ちやき、と剣を構えなおすと、男は一步後退った。

「俺は、雇われただけだ！」

「だから見逃すとでも？ 言つておくが金で動く人間を雇い直すつもりはないよ？」

金の切れ目が縁の切れ目だからね、とヘルダムは冷たい微笑みを浮かべて、続ける。

「つく人間を間違えたね。アヴィランテの王座に座るのは俺だ」完全に戦意を喪失している男に、ヘルダムは剣を振り上げる。

「つ！ やめろ！」

キンッと甲高い音が響いた。

ヘルダムが振り下ろした剣を、ウィルザードが防いだのだ。

最悪の情景を思い浮かべていたリノルアースとシリスネイアは、真っ青な顔でほっと息を吐きだした。

「……ここで、邪魔する？」

「もう敵意はないだろ？ この男を殺す必要はない。捕らえればいい話だ」

ウィルザードとヘルダムは睨みあいながら低く話す。今のヘルダムの目には、シリスネイアに向ける愛情の欠片も見当たらない。「甘いよ、その程度じゃ。敵は排除する。そうしなければ殺されるのはこちらだ」

「馬鹿を言つた。ここはハウゼンランドだ。この地に立つ以上、こ

の国に従え

真剣な表情のウィルザードとしばしにらみ合つて、ヘルダムはため息を零して剣をおさめた。

ウィルザードも一つ息を吐き出し、手頃な布で男の手首を足首を縛つた。そう時間を置かずに警護の騎士が来るだろつ。

「ああ、ご無事でしたか」

ルイが剣を手に握つたまま駆けてくる。その少し後ろには何やら不機嫌そうなアドルバードと、いつもと変わらぬレイがいた。

「先に行かせた意味はなかつたですね。こちらに来たのは三人だけですか？」

ちらりと倒れている男たちを見てルイがウィルザードに問う。

「ああ。残るよりは安全だつたろうよ。もう終わったのか？」

「どこかの一人が頑張つてくれましたからね」

はあ、とため息を吐きながらルイはアドルバードとレイを見る。レイは向こうに残してきた騎士を呼んで、後始末を任せつづりのようだ。

「お怪我は？」

ルイがリノルアースのもとに駆け寄り、優しく微笑みながら問う。

「ないわ」

リノルアースも柔らかく微笑み返す。その一人を少し羨ましげに眺めていると、脇から手を引かれる。

「何もお熱い一人と一緒にいることないだろ」

呆れたような声に、少し泣きたくなつた。結局自分の覚悟なんてなんの意味もなかつた。守られて、ただ立ち尽くしていただけだ。それが情けなくて、口惜しくて、ウィルザードの顔を見れずにただシェリスネイアは俯いた。

どうした、と問おうとウィルザードが口を開くと

「まったく、良いところのお姫さんや、いやがにこんなことに晒やがつて。ひとつと戻れ」

騎士を何人か引き連れ、騎士団長であるディーアクが犬を追い払うかのように王族連中にじつし、と散らし始める。

「父上」

レイが突然現れたディーアクに呆れながら、報告をと近寄る。そばにきた娘を見下ろしながら、ディーアクは同じように早く行けと田で言つ。

「おまえもだ。王子の護衛だらうが」

実の娘さえ追い払う父に、周囲は苦笑しながら立ち去り始める。

「他言無用ですよ」

レイは一言父に言い残して、アドルバードと共にその場を去る。その手にはアドルバードが投げ捨てたはずの髪まである。ディーアクは苦笑しながら、王城で暴れた輩共の後始末を引き受けた。

すべては未来ある若者のために。

「アドル様」

先を歩くアドルバードの手を掴み、レイは引き留める。

「なんだよ。まだ何か」「

「ありませんが、その姿のまま戻られるつもりですか?」

え? とアドルバードは自分の格好を見下ろす。ドレスは少し汚れてしまつたが、砂や草は払つた。今からリノルアースと着替えるにも時間がないから、女装を続けるのも仕方ない。

そう言おうとしてレイを見て、その手に赤みがかつた金の髪の髪があることに気づく。

「あつ!」

咄嗟に頭に触れば髪は短い。それどころか髪に飾つていた赤い薔

薇までどこかにやつてしまつた。

「……気づいてなかつたでしょ。私が結い直しますから、一度部屋に

レイが呆れたようにため息を零して、アドルバードの頭にとりあえず髪を乗せて手で梳ぐ。部屋に行くまでに誰かに見られてもいいよつにだろ。」

不用意に近づいた甘い香りにときめいてしまつた。赤く染まつた頬を隠すように、アドルバードは俯いた。

## 63： 踊って、いただけますか？

目立たないようこそぞれぞれ時間差で会場に床ると、やはりそれぞれ注目度は高い。シェリスネイアは群がつて来るだらう王子を避けるために、それはある意味で言い訳だった。 ウィルザードの側から離れないようにその腕をとる。

「シェリスネイア」

周囲の田線にうんざりしながらため息を零していると、頭上から声が落ちてくる。

未だに慣れない、ウィルザードが自分を呼ぶ声。

「……一応周囲の田もあるのですから、呼び捨ては困るのですけど？」

照れ隠しにそう指摘すると、言われるまで気づかなかつたのだろう。 ウィルザードが「ああ」と手で口を隠す。

「なら、人の目が気にならないここに？」

女慣れしてない男のセリフじゃないわ、とシェリスネイアは赤くなつてしまふ頬を隠すようにウィルザードから顔を背ける。

「ここできなお話かしら？」

「俺としてはかまいませんけど、さつきあんたが俺に――」

きやあ、と悲鳴を上げそになりますながらウィルザードの上着を強く握ると、ウィルザードはその先を言つつもりなどなかつたのだろう。悪戯が成功したときの子供のよつに無邪気に笑う。

「それじゃあ」

行きましょうか？ と形だけは紳士的にウィルザードが会場を抜けだそうとする。

ざわ、と周囲の空気が変わった。

入口を見れば、銀髪の騎士にエスコートされて入場するリノルア

ース 否、アドルバードの姿がある。

二人の姿を詩人はなんと表現するのだろうか。

相反する色のように思える金と銀は、並び立つことでお互いをより一層輝かせていた。

その中身を忘れて、思わず魅入つてみると、その二人はやつくりと近づいてきた。

「御機嫌よう、ウィルザード。女嫌いはいつ治つたのかしら？ さつきまでいなかつたんだから、またすぐことんずらなんて『冗談やめてよ？』

についこつと微笑みながら、アドルバードはリノルアースの姿でそう言つ。

違うと分かつてゐるのに、ぞぞぞ、と鳥肌がたつた。

「き、氣色悪いからやめてくれ。頼む。本氣で」

髪を結い直し、新しい薔薇を飾りつけたアドルバードは間違いなく見た目はリノルアースそのものだ。

「俺の可愛い妹に氣色悪いなんて、あんまり口が過ぎるぞ剣の鍛にするぞウイル？」

あはは、と顔だけは笑いながらアドルバードに扮するリノルアースがルイと共にやつてきた。

「……面と向かつて可愛い妹とか、俺言わないし」

ぽつりと本物のアドルバードが咳くと、につこつと笑つたままのリノルアースが無言で威圧してくる。

「シェリスネイア姫は注目の的なんだから、会場からあんまり連れ出さないでくれる？ さつきからダンスを申し込みたい紳士は大勢いるみたいだしね？」

そう言いながらリノルアースはシェリスネイアに手を差し出す。

「とりあえず、まずは一曲どうですか？」

に、と笑うリノルアースと目が合つたシェリスネイアは、つられて笑う。

「足を踏んでも怒らないかしら？」

「 わあ、どうでしょうね？」

くすぐすと笑いながら少女達は手をとる。中身を知らなければきちんと男女に見えるから不思議だ。

「 どうせなんだからさ、レイと踊つたら、じゃないと今にまたダンスの申し込みが殺到するよ？」

すれ違いざまにリノルアースはアドルバードの耳元で囁く。

「 ……踊つたらって」

性別がまるで逆なんですけど。

しかし周囲を見れば確かに今か今かとチャンスを窺つている王子達の姿が田に入る。今は隣にレイがいるから奉制になつていて、それもいつまでもつか。

「 どうします？」

レイが静かに問つてくる。リノルアースの囁きもレイには聞こえていたのだらう。

いや、出来れば逆の立場だと嬉しいんだけど いつもおうどして逆の場合を想像する。自分より背の高いレイとダンスを やはり絵にならず、ため息を吐く。

するとレイはアドルバードの前に跪き、その手を取つて口づけを落とす。

「 踊つて、いただけますか？ 姫」

きやあ、という黄色い声が聞こえたのは気のせいではないだらう。レイは姫君からの注目を集めていたのだから、この行為はまさに少女の夢の具現だ。

くそ、と完敗したことを悔しく思いながらレイの手をとる。

「 いつかおまえの身長を越して、同じことしてやる」

ゆづくらスロー・テンポな曲に身をまかせながら、ぽつりと呟く。レイはくすりと笑いながら完璧なリードをしてみせた。

「 楽しみにしていますよ」

「……あれですかね、俺はダンスはおあずけですか」  
楽しそうに踊るリノルアースとシェリスネイアを見ながらルイが悲しそうに咳く。

「それは、無理だろ。あの格好だし」

ウィルザードが可哀想な生き物を見るように、控え目に咳く。  
リノルアースはアドルバードの格好のままだ。さすがに今踊りつとすれば、見た目は男同士になつてしまつ。

「まあ、いいんですけどね……」

はあ、とため息を吐き出してルイが肩を落とす。

「心残りを作つていくのは、お勧めしないけどね」

突然隣に立つていたヘルダムに、ルイは飛び上り声を上げそうになつた。咄嗟に口を両手で塞いで堪える。

「お、驚かさないでくださいよっ！」

「気付かなかつたのはそつちだらうこ……君は、俺達と共にアヴィランテへ行くんだらう？」

呆れながらヘルダムはルイに問う。

ルイは一瞬困つたような顔になり そして真剣な面持ちで頷く。

「それが、最善でしようから」

「なら、やり残したことはない方がいいと思つけど」

それはリノルアースと踊つてこいということだらうか、とルイはまたちらりとリノルアースとシェリスネイアを見た。

「……いいんです。いずれ、戻つて来るんですから」

それまで楽しみにとつておくのも悪くはない。

ふう、とヘルダムはため息を吐き出して、ルイを見つめる。

「実際ね、心底信用できる人間はそう多くないんだ」

どの人間に、どんな裏があるかまでは把握できない。たとえば信頼していた人間が裏切ることもありえる。それがアヴィランテだと、ヘルダムは苦笑する。

「敵はまだアヴィラで胡坐をかいている。働いてもううよ？」

我が弟」

弟、と呼ばれたことに驚きながら、ルイは笑う。

「こき使われることには、慣れていますよ」

予想外の返答だったのだろうか、ヘルダムは驚いたように目を丸くした。そしてちらりとリノルアースを見て、納得したように笑う。

「なるほど」

そう呟いたあと、顔を見合せて兄弟でひそかに笑い合つた。

ほんの少しの、寂しさに似た雰囲気を残して、パーティは表面上何事もなく終わつた。パーティの裏側で大国の皇子皇女の命が狙われたなんて、ほとんどの参加者は知る由もない。

中には酒を飲む王子連中もいるようだが、場所と食料だけは提供してハウゼンランドの王子ことアドルバードは参加を辞退した。淑やかな王女様方は大人しく部屋へと戻つたようだ。明日からは帰国ラツシューが待つている。

その中にはもちろん、アヴィランテから来たシェリスネイアとヘルダムが含まれていた。遠方の国であるから帰国も早いのは当然だ。その二人とともに、ルイもハウゼンランドを去る。

「 こんなところか」

ふう、とため息を吐き出してルイは荷物をまとめた。暇を見て実家には戻り、荷物は用意してきた。今は騎士団にある自分の部屋で出立の準備をしていた。

死んだ母への挨拶もすませた。父と姉はどうせ別れの場にいるだろう。いなくてもそれはそれで構わない。

持つていくものはそれほどない。ただの騎士から皇子へと変貌する過程で必要なものはそれほどないだろう。

「 .....ルイ」

声をかけられ、ルイは顔を上げた。

扉を開けたまま そこに立っていたのはリノルアースだ。パーティで着ていた薄紅のドレスのままだ。髪は結わずに下ろされていた。

数時間前まで、その姿でいたのはアドルバードだ。声がわずかに低めだったのはわざとだったのだろうか。

「騙されませんよ、リノルアース様」

からかうつもりだつたのだろう。アドルバードのふりをするなんて、こちらに失礼だ。いくらなんでも惚れた相手を間違えることなんてない。

くす、とリノルアースは笑つてルイの傍に寄つて来る。

「こんな所に来て 怒られますよ」

夜に、騎士団の宿舎にリノルアースが来たなど 騎士団長である父に知られた日には説教が待つているだろう。

「怒られるのはルイだもの」

私じゃないわ、とリノルアースは笑いながらルイの隣に立つ。こうして並ぶと、リノルアースは本当に華奢だ。ルイが長身のせいもあるのだろうが 随分と小さい。強く抱きしめたら壊れてしまうんじゃないだろうか。

「飲みには参加しないの？」

今頃騎士団の連中も飲んで馬鹿騒ぎをしている頃だ。ルイも依然に何度も参加したことがある。騎士団の人間がいつも通りいればリノルアースはここまで入れないだろう。

「準備がありましたからね」

これです、と荷物を指してルイは笑う。

「……仲間に、さよならも言わずに行くつもり？」

リノルアースはまとめられた荷物を見つめながら問い合わせる。ルイがもとはアヴィランテの皇子で、そして明日アヴィランテへ発つことを 騎士団の人間は知らない。知っているのは騒動に巻き込まれた人間だけだ。

「どうせ、戻りますから」

言えばおそらく無理やり酒の肴にされるだろう。明け方まで飲みに付き合わされるのはごめんだ。

「 その時には、立場が違うわ」

「違ひません。何も」

リノルアースの静かな咳きをルイはすぐに否定する。素早い否定

にリノルアースは少し驚いたようだ。

らしくないな、とルイは笑う。今夜のリノルアースは言葉に力がない。

不安、なのだろうか。不安に、思ってくれるのだろうか。自分といふ存在が一時とはいえ無くなることを。

「俺はどこにいても、ルイ・バウアーです。これだけは何度でも誓います。必ず、あなたのもとへ戻ります。リノルアース様」

そつと小さな手を持ち上げて、その指先に口づける。

窓から差し込む月明かりだけが憎い演出だ。それはまるで物語のワンシーンのようで、絵画のように美しい光景だった。

リノルアースはじつとルイを見つめ、そして口を開く。

「前に……言ったわよね？」五年。いえ、三年よ

その凛とした声に、ルイは顔を上げた。

ルイがリノルアースの顔を見つめると、そこにはいつも通りの強い眼差しがあった。

「三年しか、待てないんだから。いくらなんでもそれ以上お父様達が黙っていてくれるとは思えないし、どうせなら若くて綺麗なうちに結婚したいし」

リノルアースの小さな手がルイの手を握り締める。そのぬくもりがいとおしくてルイは頬の筋肉が緩んだ。

そんな未来を描いてくれているのか、と。

姫は十五歳で結婚することもある。五年後は嫁き遅れとも言われるかもしれないし、リノルアースほどの美貌のものなら三年後でも婚約しないのは異常と言われるだろう。それでもたぶん、何歳でも花嫁衣裳のリノルアースは綺麗だろうな」とルイは思わず想像して微笑む。

「だから、さっさと問題を片付けて、早く帰ってきてなさい」

はい、と考えるよりも先に答えは出た。

噛みしめるようにその言葉を胸の中で反芻し、そしてしつかりと頷く。

「はい。リノルアース様」

そう誓つて、もう一度リノルアースの手に口づける。今度は手の甲に。

「……それで、何か感想はないの？」

リノルアースが不貞腐れたように咳く。

ルイが首を傾げて「何がですか？」と言つと、足を踏まれた。

「ドレス！ あんたの為だけに着たのよ！？ 綺麗だとか見惚れただとかとにかくなんか気の利いたこと言えないこの口は！？」

足を踏んだ上にリノルアースはルイの頬を千切れんばかりに引っ張つた。

「いはいっ！ いはいれすりのるひやまつ！」

「うるさい！ 当然の報いよ！ 鬱陶しい口説き文句は『めんだけどたまには褒めたつていいでしようが！』」

これでもかとルイの頬を引っ張り そしてぱつと放す。痛む頬を撫でながらルイは抗議すべきか否か考え やめた。

「……正確には、このドレスを着たリノル様を見たのって俺だけになるんですね」

各国の王子が見惚れていたのはアドルバードで、本物のリノルアースではない。

「そうよ？」

「 最高の贅沢ですね、あなたを独占できるなんて  
大陸の花とも謳われるその人を、トルイは微笑む。真正面から褒められたリノルアースは顔を真つ赤にして黙り込んだ。

「リノル様？」

褒めたのに、トルイがリノルアースの顔を覗き込もうとすると今

度は鉄拳が飛んできた。

「な、なんですかつ！？」

「あ、あんたね！ タチが悪いのよ！ 自覚がないからなお悪い！」  
どうして怒鳴られるのが分からぬままのルイはどうにか飛び出していくるリノルアースの鉄拳をかわし、ついにその手を掴む。

捕まつたりノルアースはバランスを崩してルイの胸に倒れこんだ。そのままリノルアースとルイは倒れこみ 結果的にはリノルアースがルイを押し倒したような形になつた。

「いたた」

ルイは背中を打ちつけ、小さく呻く。一方リノルアースはルイをクッショング代わりにしたおかげで無傷だ。

大丈夫ですか、と問いかげよつとしたルイの視界が金色に染まつた。

それは赤みがかつた、綺麗な金色だ。ルイが何度も目で追つてきた色。

言葉は喉の奥に飲み込まれた。ルイが言葉を紡ぐ前に、その唇に柔らかい何かが重なる。

「 つ！」

見開いた目に映るのは綺麗な顔だけだ。  
状況を把握している間に、ぬくもりは去つた。

リノルアースはルイの上に乗つたままその顔を見下ろす。

「浮氣したら、ただじや済まないと思いなさい」

そう言い残してリノルアースはさつさと部屋から去つて行つた。まるで嵐のようだ。

ルイは混乱した脳を整理して 天井を見上げたまま、唇から去つたぬくもりを思い出して赤くなる。  
こんな。

「 やり逃げじゃないですか」



脱いでしまつのは少しもつたいない気がして シュリスネイアはパーティに着たドレスのまま、ぼんやりと夜が更けるのを待っていた。

朝になれば、明日になれば ここの国ともお別れだ。あの騒々しい双子とも、それに付き添う美しい騎士にも。そして、初めての恋とも。

もう、一度を会つことはないだろう。彼と自分は、似ていても住んでいる世界が違う。

きゅ、と唇をかみしめて涙を堪えた。

浮かんでくる欲望を握りつぶすように手を瞑つた。

これではいけない。

こままではあの汚れた国に帰れない。

ふう、とため息を吐き出してシェリスネイアは立ち上がる。突然部屋から出ようと歩きだした主人を見てあわてた侍女に「散歩よ」と笑って部屋から出た。

廊下は部屋の中よりもずっと気温が低い。南国育ちのシュリスネイアには刺すような寒さが、今はちゅうど良かつた。それくらいの方が余計なことを考えなくて済む。

窓の向こうは故郷とはまるで違つ世界が広がつている。振り積もる雪が夜の世界を白く浮かび上がらせていた。

「雪のように」

跡形もなく消えてしまえたら 何度そう願つただりつ。  
なのにあの双子は見事にシェリスネイアの計画を潰してしまった。  
その上、シェリスネイアの罪を見てみぬふりをしている。  
故郷に戻ればあるのは身内同士の醜い戦争だけ。

そしてたぶんシェリスネイアはヘルダムとルイに守られて、大切  
にされて サジムから隔離されるだろう。しかしサジムも裏切り  
者を許すような人間ではない。しばらくは安心できない日々が続く  
だろうなとシェリスネイアは苦笑した。

「シェリスネイア」

突然聞こえた声に、シェリスネイアはびくりと震えた。  
いつまで経つてもその声に名を呼ばれるのは慣れない。他の誰と  
も違う、ほんの少し特別な感じの響き。

「……何してるんだ、こんな場所で」

慌てたように駆けよつてくるのは シェリスネイアが一番会い  
たくて会いたくなかった人だ。

「少し、散歩をしていただけですわ。あなたこそこんな時間に、ど  
ちらに行かれるつもりなのかしら？」 ウィルザード  
もうパーティは終わつた。あとはそれぞれ余韻に浸つていい」と  
だろう。

「散歩ねえ……それにしたつてまだ着替えてなかつたのか」  
風邪ひくぞ、とウィルザードは慣れた様子で上着をシェリスネイ  
アの肩にかける。断るタイミングを逃して シェリスネイアは頬  
を赤く染めながらそのぬくもりに包まつた。

「こんなドレスを着るのも今日で最後ですもの。少し、もつたいな  
くて」

アヴィランテとはまるで作りの違うドレスに最初は戸惑つたものの、慣れるとその美しさには年頃の乙女同様、心躍るものがある。

「まあ、確かにもつたいないか」

ウイルザードが柔らかく微笑みながら、シヨリスネイアを見つめる。

その視線にいたたまれなくてシヨリスネイアは視線を床に落とした。そんなシヨリスネイアをじっと見つめて ウィルザードは口を開いた。

「……アヴィラには、キスが挨拶なんて習慣はないよな」

その声にシヨリスネイアの肩がびくりと震えた。むしろそんな習慣があるので北の方で それも挨拶程度は頬にキスと決まっている。

あのあと、どうにか追及から逃れたといふのに、こんなといふで捕まってしまうなんて。

「あのキスの意味、聞いてもいいか？」

最後だつたから。

それで最後にするつもりだつたから。

下手すれば死ぬかもしれない賭けだつたから。

淡い恋の名残が欲しかった。

何もないままこの想いを枯らしてしまるのは、どこか寂しかったから。

シヨリスネイアは床を見つめたまま、熱くなる頬をこの冷たい空気が冷やしてくれないだろうかと願つた。

「理由なんて、聞いてどうなさるおつもり？」

口調だけは弱々しくならないように虚勢を張つた。いつもどおり

の自分を演じなくてはすぐに足もとから崩れてしまいそうだった。

「どうせ、もう会うことはないでしょう？」

自嘲的に笑うシェリスネイアの顔は、ウィルザードには見えない。ウィルザードは手を伸ばし シェリスネイアの小さな手を掴む。シェリスネイアの視界でその二つは繋がっていた。

何の用だとシェリスネイアが顔をあげると、ウィルザードは苦笑した。

「まあ、聞かなくても分かるけどな」

繋がれていない手がシェリスネイアの頬に触れた。壊れものを触るような優しいそのぬくもりに、シェリスネイアは縋りつきたくなる。

「俺が好きだろ？ シェリスネイア」

なんて傲慢で、なんて不敵な笑みだろ。

何故か涙があふれてきて、シェリスネイアの黒い瞳が濡れた。

「だが、あなたなんて

否定しようとしたのに、ウィルザードはまるで本気にしてくれない。

「好きだろ？」

続けられた同じ問いに、シェリスネイアの涙腺は崩壊した。

頬に触れる手が優しくその涙を拭い、それでも止まらない涙を唇が掬いとった。目元におりる優しいキスに、シェリスネイアは酔うように目を閉じる。

唇におりたぬくもりを、シェリスネイアは拒まなかつた。

誰も来ない寒い廊下で、ウィルザードに抱きしめられながらシリスネイアはどうにか泣きやんだ。

誰かに見られたらなんていう心配は、どうにつけか吹き飛んでしまっていた。

「ネイガスに来ないか。国王妃でもないし、もしかすると公爵あたりになるかもしないけど。今までのよつた暮らしはさせられないし、アヴィラよりずっと寒いけど」

ウィルザードが優しく髪を撫でながらそんなことを呟く。

「争いとか、そういうことのまるでない暮らしをしよう。どこかの領地にでも引っ込んで子供を育てて、晴れた日にはのんびりと日向ぼっこなんかして、雪が降つたら手をつないで散歩したりそういうありきたりで幸せな」

なんて贅沢な夢だらう そう思えばショリスネイアの瞳にはまた涙が溢れてくる。

サジムがいる限り、そんな生活は送れないだらう。しかしあいつか、そう遠くない未来にヘルダムが王座に座る時が来たら 叶うだろうか。そんなささやかで贅沢な夢が。

否、たぶんあの双子なら叶うのだらう。

「叶えてみせると」

ただ自分の大切な人達が最高に幸せな未来を手に入れるために大國さえも動かす彼らならば。

いつか、とショリスネイアは呟く。

「いつか アヴィラの情勢が整つて、その時の国王陛下からのお許しがあつたなら」

微笑むシェリスネイアと見て、ウィルザードは困ったように笑う。

「そう長くはないでしょう。それまでにあなたは少しでも私が嫁げ

るような、大きな男になつていってくださいな

「難しい注文だな」

苦笑しながら、ウイルザードはシェリスネイアの額に口づけを落

とす。

たぶん 叶わないほど贅沢な夢ではないはずだ。

空はよく晴れていた。見上げれば冬独特の薄い青が広がっている。

まだ人が起きだすには早い時間に、アヴィランテへと向かう者達はハウゼンランドを発つことになった。遅くまで騒いでいた王子王女、一部の騎士達はまだ夢の中にあることだろう。

「この国での短くも充実した日々のこと 私は生涯忘れませんわ。改めて言わせてくださいな。ありがとう、リノル。アドルバード王子」

思わず見惚れてしまいそうなほど綺麗な笑顔でシェリスネイアは感謝を述べた。

「いつかまた来ればいいわ。歓迎するわよ？」

リノルアースが悪戯そうに笑うと、シェリスネイアもつられて微笑み返す。

「そうね、今度は厄介事がないときに」

それでのんびりしましよう、とシェリスネイアはくすくすと笑う。まったくなどといったげにリノルアースもアドルバードも顔を見合わせた。

「厄介事を持ってきたのはどこのどこのよ、もう……。国に戻つたら大変だらうけど、元氣で」

それはリノルアースとしては不器用ながらも最高に優しい言葉だった。シェリスネイアも分かっているのだろう、リノルアースに微笑み返した。

「シェリスネイア」

行くよ、とヘルダムが声をかける。後ろ髪を引かれるようにシェリスネイアはウィルザードを見つめ 淡く微笑んだ。

「待つて、いて良いんでしょう?」

あなたを。

シェリスネイアの言葉に、ウィルザードは少し照れながら一度頷く。

「……今のところ、シェリスネイアをネイガスに行かせるつもりはないからね?」

ヘルダムが背筋が凍るような笑顔で低くウィルザードに囁く。当面の敵はこの人か、とウィルザードは苦笑しながら腹を括った。

「では、俺も行きますね」

ルイがアドルバードやレイに簡単に挨拶を述べ、一人とも驚くほどにあっさりと見送った。やはりディークは見送りに来ていない。

「……リノルアース様」

最後にルイはリノルアースの前で止まる。

リノルアースは俯いて、ルイの顔を見ないようこじしているようだつた。先ほどから一度も目が合っていない。

昨夜の襲撃に近いキスのせいか、それとも別れが辛いのか。

どちらにしてもルイが遠慮する理由ではない。奪われたままどうのも男として問題だろう。

「リノル様」

優しくリノルアースの頬に手を伸ばしながらもう一度名前を呼ぶ。びく、とリノルアースが怯えたように震えた。

どうしてこの人はこういうときに、こんな可愛くなるかな、とルイは苦笑した。これは拳一発では済まされないことになりそうだ。

それでもここで引き下がるつもりはない。

「仕返しです」

半ば強引にリノルアースの顎を上げ 青い瞳と皿が合ひ。そのまま反論を聞かずに唇を重ねた。

「んなつ！」

アドルバードの声が聞こえたが、途中で途切れた。おそらくレイに口を塞がれているに違いない。邪魔に来ないのもレイがアドルバードを止めているからだろう。

心中で姉に感謝を述べつつ ゆっくり十秒数えて、離れた。

「 フルイ！！」

リノルアースが顔を真っ赤にして手を振り上げるが、それを大人しく食らう必要はないだろうと受け止める。アドルバードあたりからは一、三発殴られる覚悟はあるが。

「やられたからやり返したまでですよ。うちの家の教えの一つですから」

リノルアースは怒っているのか激しい照れ隠しなのか分からぬ顔でルイを下から睨んだ。

「この屈辱は三倍にして返してやる」

不吉なセリフだなあ、トルイは内心で汗を流しながら平静を装つた。

「どうぞ？ 同じ手段なら喜んで受けますが？」

「あんたを喜ばせるもんですか！ あらゆる手段を駆使してあんたの評判を地の底まで落としてやるから…」

「あー……それはアヴィラの問題が片付いてからにしてもうれますか。一応俺ハウゼンラングの後ろ盾があつてこそアヴィラに戻れるんで」

そこが一つの『ルイ』の価値である。

「当たり前でしょ。そこまで馬鹿じゃないわ。問題片付いても縁談なんてこないよに悪い噂をたっぷりと流してやる」

理解があるあたりはリノルアースだな、と思いながらルイは後半のセリフをきちんと理解して微笑む。

「……何笑ってるのよ」

リノルアースの頬はまだ赤く、下から睨まれてもあまり迫力がない。

「いえ。約束、忘れないでくださいね？」

平手を受けたまま握っていたリノルアースの手を持ち上げて、ルイはその指先に口づける。

「つ……もうっ！　いいかげんにとっと行きなさい！」

照れた顔をこれ以上見られたくないのだろう、リノルアースはルイを突き飛ばしてヘルダムやシェリスネイアのもとへ追いやる。

ぐすぐすと笑いながらシェリスネイアの隣に立つと、呆れたような声が下から聞こえた。

「……お熱いことですわね。お兄様？」

兄と呼ばれたことに少しまだ慣れないが ルイは兄の顔でシェリスネイアの頭を撫でた。

「お互い様、でしょ」

敬語がまだ抜けないのは大目に見てもらおう。これからいくらいも直す時間はある。

シェリスネイアは照れたのか黙り込む。本当にそういうところはリノルアースと似ているな、とルイは微笑んだ。

「そろそろ出発してもいいかな？」

待ちくたびれたようなヘルダムの声が合図になつて、馬車に乗り込み始める。

ルイは一度だけ振り返つてリノルアースに微笑んだ。泣き出しそうな顔を無理やり笑顔に変えて、リノルアースに、いとおしさが込み上げてくる。

戻ります、必ずあなたのもとに。

心の中でそう確かに誓い 馬車の中へと入る。

馬車が動き出し見えなくなるその時まで ルイとシェリスネイアは小さな窓の向こうの愛しい人を見つめ続けた。

「てつめえふざけんなルイ ！！ 人の目の前で妹の唇奪つていくなああああーー 待てこの野郎一発ぶん殴つてやるーー！」

もういいだろ？とレイがアドルバードの拘束をとくと、もう小さくなつた馬車に向かつてアドルバードはせんざん罵詈雑言を吐いた。

賑やかで騒々しい、切ない別れの朝になつた。



## 67・あなたがいたからJAN

それからほどなく　ハウゼンラングはいつも通りの、静かで平穏な日々が続いた。

遠いアヴィランテの国王の崩御の知らせとともに、王座を巡る内戦についての噂が流れついたのは、冬も終わり春を迎えた頃となつた。

高齢のアヴィランテ王の崩御と同時に第一皇子サジムが即位することになり、それに反旗を翻したのがヘルダムによる一派だ。国王の崩御自体も高齢による老衰となつてゐるようだが、毒殺という噂さえ流れていた。

結局数か月たつてもアヴィランテの王座は空のまま、内戦が激化しているという。

ルイやショリスネイアから便りはない。もちろんヘルダムからも、王の『影』の情報によれば、現在はどうやら状況はヘルダムに有利らしいということだけ。国内の勢力に加え、外国からの協力を得たヘルダムの勝利はもはや目前にあるらしい。物騒な話の中に、北の小さな国にいた第九皇子ヴィルハザードの帰還はすっかり小さな話題となつていた。

「リノルアース様、お手紙が」

そう言いながら侍女に渡される手紙のほとんどは、一度か二度会つたことがある程度の王子からの求婚だ。いつもはその手紙の束を

受け取らずに暖炉に放り込むのだが 最近では宛名の字を確認することにしている。万が一、侍女さえも見落として『彼』からの手紙があるのでないかと。

しかしそんな淡い期待はいつも裏切られる。

「……燃やして」

ふう、と一度ため息を零してリノルアースは一枚も手紙を残すことなく手紙の束を侍女に渡す。束はそのまま炎の一部となつた。

分かつてはいたことだが、ルイがいなくなつてからリノルアースはすっかり大人しくなつた。ルイの今置かれている状況を考えれば気が気じゃないのだろう。

「……俺、なんか今回地味だなあ」

まるで噂通りの淑やかなお姫様のようになつてゐるリノルアースを遠目に見て、アドルバードはぽつりと呟いた。

「そうでもないですよ」

隣を歩いていたレイは即座に否定していく。その自信はいったいどこから、とアドルバードは苦笑した。

「アドル様には、たぶん人を惹きつける何かがあるんでしょう。今回のこと、あなたがいなければ違う方向に進んでいたかもしれませんい」

「違う方向？」

ほとんど状況に流されるままに問題解決まで進んだアドルバードにしてみれば、随分と過大評価されているように感じる。

「ええ。例えば シエリスネイア様はおそらくもつと危険な目に遭つていたでしょうし、場合によれば命を落としていたでしょ。ヘルダム様がハウゼンランドに来ることもなかつたかもしれない。そもそも、アドル様がアルシザスと同盟を結んだという功績があつ

たから」レ、シエリスネイア様がこの国にやつてきたわけですから、  
レイはどこか励ますようにどこか柔らかく微笑んで続けた。

「あなたがいたから」レ、起きた出来事なんですよ。全部  
そう言わればそうなのだろう そうでないとしても、レイに  
言われると無条件に嬉しいと思つてしまふのだ。

窓の向こうのよく晴れた空を見つめて、遠い南国に思いを馳せる。

「早く、帰つて来るといいな」

誰の「」ととは言わなかつた。

レイも誰とは聞かずに、「そうですね」とだけ答える。

「帰つてきたり一発殴らないといけないしな」

「……まだ根に持つてるんですか」

しつこいですね、とレイが呆れたように言つ。この件に関しては  
レイにも妨害されたので少しばかり恨んでいる。

田の前で妹の唇が奪われて、しかも今現在悲しませたまま放置し  
ているのだ。

「当然の報復だろ」

ふん、とそっぽを向いてアドルバードはすたすたと歩を速めた。  
とりあえずレイが帰つて来るまでに筋力をつけておこうと心に決  
める。やつ返されるのはまつぶらだ。

それから、さらになに数か月

。

「リノル様っ！」

侍女の一人が慌てた様子で部屋に駆けよって来た。  
ちょうどリノルースの部屋にいたアドルバードとレイも驚いて  
駆け込んできた侍女に注目する。

その手には、一通の手紙があつた。

「……」

リノルースの青い瞳が期待に輝く。  
どこかほつとしたようにアドルバードは微笑んだ。

「

待ちに待つた知らせは、ようやくその手に届いた。

「……燃やして」

リノルースは一読すると、侍女にそう言つて手渡した。

「え、リノル様？」

侍女がきょとんとした顔で慌ててリノルースに問う。いつもは忠実に暖炉に放り込むはずの動作がさっぱりだ。

「リノル？ それレイからの手紙じゃ」

「そうよ。どこぞの大馬鹿者からの手紙よ」

侍女が一向に動かないのを見て、リノルースは手紙を奪いとり、自ら暖炉に放り込んだ。

「……何か、危険なことでも？」

迂闊に他人に知られてはいけないようなことでも書いてあつたのか、とレイが真剣な顔で問い合わせてくる。

「いいえ。まったく。全然」

「では」

なぜ、とその場にいた者全員の疑問をレイが口にしようとするが、リノルアースは憤慨し始めた。

「だってあの馬鹿、自分のことを顧みずこいつらの心配ばかり！　しまいには姑のような小言ばっかりよ！？　こいつらがどれだけ心配したと思ってんのよ！」

あまりにもリノルアースらしい理由に全員が呆れる。

「手紙を書く暇があるくらいならひととこと事件片付けのよ馬鹿！」

そう返事に書いてやる、とリノルアースは机に向かう。元気を取り戻したらしい様子にアドルバードはほつと安堵し、邪魔にならないように部屋から出た。

『必ず、戻ります』

手紙の最後はそう締めくくられていた。  
嬉しさを誤魔化す為の行動だったなんて、たぶんアドルバードとレイにはお見通しなのだろ？

アヴィランテは育つた場所とはまるで違つて、いつも生暖かい風が頬を撫でた。その風の中に鉄鏑のような匂いが混じつていることに慣れてしまつて、自分の吐き気を感じる。

この手が何度も血に濡れようと、ためらつことなくただ目の前の敵を斬り続けた。

それがいつか望む未来を手に入れる事になるだろうと信じているから。

「思つた以上の働きをしてくれるね、『ヴィルハザード』

殺伐とした空氣の中でヘルダムは笑いながら話しかけてくる。未だに慣れない『ヴィルハザード』という名前に反応が鈍くなるばかりだ。

「……褒め言葉として受け取つておきますよ、兄上」

ヘルダムを兄と呼ぶことには随分と慣れた。兄弟であるといふことを強調する必要がある分、それは欠かすことの出来ない事柄だった。たとえば些細なものなのだとても。

「平和ボケした国で育つたわりに剣の腕は確かだ。君の養父に感謝しておくべきなのかな」

「ハウゼンランドを馬鹿にするのはやめてください。父はある国で一番強い人だつたんですよ」

馬鹿にしているわけじゃないよ、とヘルダムは笑う。平和であることを求めている彼にとってハウゼンランドはある意味で理想なのかもしれない。

「かれこれ半年経つか。待たせたね」

ヘルダムはいつもの通りの笑顔を少しも崩さずに立ち上がる。

剣を片手に、振りかえり仰ぐのはアヴィランテの王宮だ。王都のほとんどがヘルダムの手に落ちた今、王宮にどう攻め入るべきか考えていたのであって。

「何をするつもりです？」

策もなしに王宮へ入ればいくら優勢であろうとも状況は一気に転がる。城攻めは難しいなんてことは大昔の人間でも分かつてることだ。

「総大将を叩くんだよ。これ以上内戦を長引かせるわけにはいかない」

ルイはぎり、と歯ぎしりして立ちあがり、ヘルダムの胸倉をつかむ。

「馬鹿なこと言わないでください！ 無策で行って勝てると思つてるんですか！ 万が一あなたを無くしたら つ！」

「無駄に考えるよりも、行動が重要だ。見ればわかるだろう？ 民も兵も内戦で疲れ切つてゐる。これ以上長引けば民が減る一方だ。策を考えている間に國から人がいなくなつてしまつ。民あつてこそその國だ。違うのか？」

確かにほとんど休まることのない戦いの連續で、兵は疲れているし、内戦の中にさらされ続けている民に活氣はない。

戦は長引けば長引くほど民に苦痛を強いる。それを分かつてゐるヘルダムは良き王になれるのだろう。

しかし。

「……あなたの口から、そんな綺麗事を聞かされるとは思つてませんでしたよ」

ハウゼンランデにいる王子ならばまだしも。

そんな言葉が思わずルイの口から零れて、ヘルダムと顔を見合せて笑う。

「伝染つちゃつたかな。可愛い王子様のお人好しが」

それがまるで嫌なことではないかのよつて、ヘルダムはくすくすと笑う。

「全軍の指揮は將軍に任せる。東の裏門から侵入、陽動して。俺とヴィルハザーードが正門から堂々と侵入するから」  
にこやかな表情のまま告げられたその無謀な作戦に、周囲はどよめいた。

「いくらなんでも危険です！ セメてもう少し護衛をつけるべきだ！」

「正門からなんて……！ 狹われに行くようなものですぞ！」  
誰もが異を唱える中、ルイだけは黙つてヘルダムを見た。

彼にはなぜか、心の底からの自信があつた。

下手に人数を増やした方が目立つ。王宮の抜け道を通つて行くから侵入さえできれば問題ない。淡々と、そして笑顔を崩さずに語るヘルダムに周囲も徐々に納得し始めた。

「行くぞ。これでアヴィランテは生まれ変わる」

正門からの侵入は驚くほどあつさり上手くいった。

それもヘルダムの考え方通りだったのだろうか　そんなことを考えながらルイは静かに彼の背中を守る。

「お兄様」

人の姿を気にしながら進んでいくなか、美しい声が耳に入る。

驚いたのはルイだけではなかった。ヘルダムも硬直し、突然現れ

た少女の姿に目を丸くする。

「シェリスネイア！ 何をしてるんだこんなところで！」

物陰から姿を現したのは大陸の華と謳われる美少女 シェリスネイアだ。内戦が始まつてからというもの、シェリスネイアは安全な地方に送つたはずだった。他の姫は後宮に閉じ込められたままだが。

「こちらの道は駄目ですね。案内します」

「シェリスネイア」

動搖しているヘルダムに代わつてルイが静かに問つと、艶やかな微笑みが返つてくる。

「私、王宮の中は熟知してますわよ？ 小さい頃から誰かさんを探しまわつていましたので」

有無を言わせないシェリスネイアの表情に、ヘルダムも黙り込む。ルイは遠い北国の主を思い出した。

全てが終わつたら、手紙を出そつ。  
たぶんすぐには帰れないけれど。

「 来たか」

しんと静まり返つたその部屋には、王座に座る青年がいるだけだつた。

王座のすぐ後ろにあつた隠し扉から出てきた人間に、青年 サジムは少しも驚くことなく、振りかえることもなかつた。

シェリスネイアは怯えたように一步後退つた。

かちや、と腰の剣に触れてルイが一步前に出た。この男を殺すことで全てが終わるなら、自分が血に塗ることは問題ではない。

「ルイ」

しかし肩を掴まれ、後ろにやられる。

今まで『ヴィルハザード』と呼んできたヘルダムは、この場になつてルイの名前を口にした。肩越しに振りかえるヘルダムはぞつとするほど無表情で、その右手には剣があった。

「これは、俺が被るべき罪だ」

そう言つてヘルダムはサジムの前に立つた。

持ち上げられた剣がサジムの首筋に狙いをつける。

「やはり、おまえだけは思い通りにならないな」

サジムは何か可笑しそうに笑いながら、ヘルダムを見上げた。剣を抜く様子も立ち上がる様子もない。

遠くで戦いの音が聞こえた。裏門から侵入した仲間と城にいた兵との戦いだろう。

「シェリスネイア、見ない方がいい」

ルイがシェリスネイアを背に隠そうとして 拒まれた。

「あなたがたが犯す罪から、私だけ目をそらすつもりはありませんわ。私も共に負います」

凛とした言葉を聞いてサジムが笑う。

「殺すなら殺せばいい。しかしアヴィランテは何も変わらない。お前たちの中に同じ血が流れ続ける限り、アヴィランテが浄化される時など訪れはしない」

サジムは自嘲的な、退廃的な微笑を浮かべてヘルダムを見上げた。不吉な予言のような言葉に、ヘルダムは少しも動搖していなかつた。

「血のみが全てを示すわけではない。血の縁を上回る出会いもある」

そう冷静に言い返しながらヘルダムは剣を振り上げた。覚悟を決めたようにサジムは口元に微笑を残したまま目を閉じる。

シェリスネイアは背けそうになる自分を無理に抑えつけて目を見

開いた。これからのは罪から、少しも田をやむをなじよつ。

振り上げられた剣が、サジムを斬った。

赤い血がヘルダムの身体を染めた。

「……そうこいつ出会いが、あなたにはなかつたのだろうね」

少しだけ寂しそうな咳きだけを残して、ヘルダムは静かになつた  
兄を見た。  
外で繰り広げられる戦いの音が、どこかひどく遠いところに感じ  
た。

そこは花に溢れるところだった。

内戦は終結し、アヴィランテは徐々に変わりつつある。

ルイは心配をかけただろうと、一段落がついたことを伝える為にもリノルースに手紙を送つたが『手紙を書く暇があるなら一分一秒でも早く帰れるようにキリキリ働け』とだけ書かれた返事が戻ってきた。そんな言葉も照れ隠しだと分かるようになつてしているので、それだけで思わず微笑んでしまった。

「思い出し笑いですか？」

隣を歩くシェリスネイアが微笑みながら問いかけてくる。

「少し、リノル様のことを」

「お手紙がきていたではありませんか。お元気かしら？」

「……だと思います」

戦が終わって、昔の感覚が戻つてしまつてゐるのだろうか。直そうと思つてゐるのにも関わらず時々敬語が出てきてしまつ。

「なんですか、それ」

「一文しか書いてなかつたから」

答えるとシェリスネイアはふ、と笑う。彼女らしいですわね、といつ呟きに、ルイはただ頷いた。

「……いじですわ」

シェリスネイアが一つの墓石の前に立ち止まつた。

龍愛の深い妃なれば大きな廟でも造られるのかもしない。しかしシェリスネイアの母、ルイの生みの母は、質素ともいえる小さな墓石だった。その墓石を囲うように花が咲いているのはシェリスネイアによる采配なのだろうか。

「」の小さな石の下に、会うこともなかつた母が眠つてゐる。

「……母上」

「」呼ぶのが正しいのだろう、素直にそう思つた。

自分を産んでくれた人だといつのに、こうして墓石を前にしても肉親の情はこれといって湧いてこなかつた。

しかしこの地に眠る人は、死ぬその時まで自分の帰りを待つていたのだろう。

「ただいま、戻りました」

墓石をそつと撫でながらそう呟く。

養母といい生母といい つぐづく母親には早く死なれる運命なのだろうかと苦笑しつつ、用意していた花束をそつと地に置いた。

「どうか、安らかに」

それ以上長くいる理由はなかつた。

それだけ言うとルイは立ち上がってシェリスネイアを見る。妹は少しだけ悲しそうに笑いながら隣に並んだ。

一人はゆっくりと歩きながらその場を去つた。

おそらくもうこの地に来ることはないだろうと心の隅で思いながら。

時は瞬く間に流れて消えた。

ルイはアヴィランテの情勢を整える為に奔走し、ヘルダムは新王としてやるべきことがやまほどあつた。シェリスネイアはその二人

を影ながら支える日々が幾月も続いた。

対してアドルバードは相変わらずあちこちの国々を訪問し、次期国王としての経験を重ねていた。レイはその傍らに常にあり、リノルアースはそんな兄をからかいながらも支えることで時は過ぎ去った。

寂しさが忙しさで紛れるほど。

離れている時はそう短くなく。

愛しさだけは時と同様に積み重なつていった。

ハウゼンランドの冬の始まりはただただ穏やかだ。

雪の気配をほんのりと感じさせる冷たい風が頬を撫でる。

花や草木はしんと静まり返つて次に訪れる遠い春を待ちわびて眠りにつき、温室の中で大事に育てられた花だけが季節を知らず咲き誇っていた。

「 よう、久しぶりだな」

長い黒髪を結いあげ リノルアースから贈られたドレスに身を包むシェリスネイアに気安く声をかけるのはネイガスの王子だ。

「お久しぶりですね、本当に」

厭味たっぷりにつっこりと微笑みながらシェリスネイアは振り返る。ウイルザードの頬がひく、と引き攣つた。

「随分と待たされましたわ。兄は納得させることができたのかしら？」

兄馬鹿ぶりではヘルダムはアドルバードにも引けを取らなかつた。ルイと言えば好きなようにすればいいの一言で、主に説得しなければならなかつたのは大国アヴィランテの国王陛下だ。

「どうにか納得したんじゃないかな。手紙はそっちにいつただろ?」

「ええ、もちろん頂きましたけれども。今の今までほつたらかしに

されていたわけですし

「俺の苦労も考えてほしいところなんですねけどね？ お姫様」

小国のネイガスが大国アヴィランテの まして大陸で知れ渡るほどの中姫を手に入れるにはどれほどのか、それはシエリスニアでも分かる。

ただ少しくらいの意地悪は許されるだろう。それだけ待たされたのだから。

「分かっているつもりですわよ？ ウィルザード」

そう微笑みながら少し背伸びをしてウィルザードの頬にキスを贈る。

久し振りのキスに頬を赤く染める未来の夫を見てシエリスニアは幸せそうに微笑んだ。その笑顔に、かつて感じた仄暗さも憂いもなかった。

赤みがかつた金の髪を纖細に結いあげ、真っ赤なドレスに身を包む。青い瞳は澄んだ空の色で、白い肌は新雪のように瑞々しい。

誰もが目を奪われる美しい姫君がそこにいた。

今日行われるパーティの主役の一人だつた。

「リノルアース様」

低い声がその名前を呼ぶ。

しかしリノルアースは振り返りもせずに窓に向こうの景色を睨むように見つめていた。

「……リノルアース様」

今度はもつと近くで声が聞こえた。

もう何度も何度も空耳じゃないかと思うほど、思い返した声だ。ふわりと後ろから包み込まれる。力強い腕は、幻ではなかつた。

「ただいま帰りました」

耳元で聞こえた生の声に思わず泣きそうになつた。

「遅い。待ちくたびれたわ」

涙をこらえて精一杯に憎まれ口を叩く。ふ、と笑う気配が懐かしくてないとおしかつた。

腕の中で振り返りながら、待ちわびた人の顔を見る。最後に会つた時よりも少し大人びていたが、何一つ記憶と違いはなかつた。

「…………ルイ」

頬に触れながら名前を呼ぶと、嬉しそうにルイは微笑んだ。

「綺麗になりましたね、リノル様」

「…………当たり前でしょう、何年経つたと思つてるの」

少女らしい丸み帯びた身体はどちらかと言えばしなやかになりもう十分に大人の女性といえるようになった。

「覚悟しておきなさい、アドルが一発殴るつて言つてたから」

「…………まだ根にもつてるんですか？ しつこいなあ」  
くすくすと笑いながらルイは自分の頬に触れるリノルアースの小さな手を包みこむ。

これからは、と呴くと、リノルアースが見上げてくる。指を絡ませて、額と額をくつつける。

「ずっとお傍に、リノル様」

ハウゼンランドの双子は、十八歳となつた。

長い銀の髪を結わずに背に流している女性を見つけて、ヘルダムは片手を上げる。

ヘルダムに気がついた女性は青いドレスの裾を持ち上げて優雅に礼をする。遠目にその姿を見ている人々の誰もが目を奪われるほどに美しい女性だ。

「久しぶりだね、シリリア領主殿」

「お久しぶりで」ございます、アヴィランテ国王陛下。領地を授かる名誉を頂きながら、ご挨拶にあがらなかつた非礼をお許しください」「丁寧な口調は相変わらずで、しかしその奥底には芯の強さを感じさせた。彼女が守るべきものの為ならば一国の王に剣を向けることも厭わない人間だということは知つていて。

ヘルダムは鷹揚に笑いながら「いいんだよ」と答える。

「あれはもともとヴィルハザードの為の領地だつたんだ。彼を十六年間保護してくれた貴女にはそれ相応の礼を尽くさないとね。国も安定したし、ヴィルハザードにはもつと良い領地を与えた。そもそも、シリリアは大して良い地ではないんだ」

本当は貴女の父君にあげたかったんだけどね、とヘルダムが苦笑すると、つられて女性も笑う。本来アヴィランテの皇子であるヴィルハザードを保護していたことに対する恩賞は、当然のごとくその養父に与えられる予定だった。しかしその当本人は「そんなもんいらん。やるなら娘にやつてくれ。俺には必要ない」とあつさりと辞退してしまったのだ。

「アヴィランテとしては大した土地ではないが 貴女には良き力となつただろう? 名目だけの領地としてもね」

実際ハウゼンランドに住む人間にアヴィランテの領地は管理出来ない。それを分かつていてヘルダムは領地管理の為の役人まで派遣している。報告は一応送られてくるが、いちいち指示を出すような

「ことないような、何もない地だ。

そんな土地の領主でも、ハウゼンランドでは絶大な力となる。そちらへんの一貴族よりも上かもしねりない。

「婚約おめでとう、バウアー嬢」

「ありがとうございます」

ふわりと微笑む彼女を、もはや男と見間違えるものはいないだろう。

もとから美しい人ではあつたが、どこか女性らしさが以前よりも増しているような気がした。

「それで、そろそろ始まる時間だとと思うけど……主役はどこに行つたんだい？」

この場はハウゼンランドの双子の誕生日を祝う席だ。リノルアースは先ほど会場で見たが、兄の方はどこにもいない。挨拶もまだなんだけどね、とヘルダムが困ったように笑うと、レイは苦笑する。

「今頃、痛みを堪えてベットの上で暴れているのではないでしょうか」

「痛み？」

ヘルダムが首を傾げる。レイはただ真面目な顔で「はい」と頷く。「お会いすれば分かりますよ。では私は主役を迎えて行きますので」

そう言うとレイは踵を返し、背筋をぴんと伸ばして歩いて行く。その姿に何人の男性が目を奪われているか、本人は気付いているのだろうか。

その背中を見送りながら、ヘルダムは懐かしむようにハウゼンランドを初めて訪れた冬を思い出す。

窓の向こうから雪の気配は感じない。澄み渡った空がどこまでも広がっている。今夜はたぶん綺麗な星空が見えるだろう。故郷のアヴィランテほど強くない日差しはただ人々に優しい。

それはまるで、何かの祝福のように。

「いつ……たたたたたたたたたつ……」

レイがアドルバードの部屋に入ると、彼女の主は膝をついて床に蹲っていた。

しかしアドルバードは怪我をしているわけではなく、病にかかっているわけでもない。

「……当たらずとも遠からず、ですか」

ふう、と呆れたようにため息を吐き出してレイはアドルバードのもとへ歩み寄る。アドルバードは足をさすりながらレイを見上げた。

「何か言つたか？」

「いいえ。特には。アドル様、『衣裳が汚れてしましますよ』

そう言いながらレイはそつと手を差し伸べる。

昔なら迷いなくとつた手を「大丈夫だ」という一言で断る。十八歳にもなつて女の手を借りて立ち上がるといつのは アドルバードの無駄なプライドが許さない。

「もう始まりますから、移動したいのですが 大丈夫ですか？」

「だ、大丈夫だつ！ 痛みなんてのは根性でどうにかなる！」

きつとレイを睨みあげ、アドルバードは痛みに顔をしかめながら立ち上がる。

濃紺の上着に金の縁取りの施された衣装は、アドルバードの赤みがかつた金髪をより美しく演出した。青いドレスのレイと並べば、まるで初めから揃えたかのように隙のない美が完成した。

「……やつと、か」

そう呟くアドルバードの身長は、レイよりも少し高い。急激に伸びた身長は身体中に成長痛をもたらしたが、その痛みすらアドルバードには誇らしき。

「そうですね、随分待たされました」

「そうだな、待たせた」

悪い、と苦笑して、二人は手を重ねる。ゆっくりとレイをエスコートしながらアドルバードは会場へ向かう。背が伸び始めた頃は歩調を合わせるということも知らなかつたから、レイは少し足早になつていた。けれどもうそんなヘマはしない。

入口には美しく着飾つたリノルアースが待つていた。

「遅いわ、アドル」

「悪い」

苦笑しながらリノルアースの手をとつた。双子の誕生日なのだ、入場はリノルアースと共にしなければならない。

名残惜しく思いながらもしばしの間レイと別れる。レイはやんわりと微笑みながら優雅に一礼した。

「十八歳、おめでとうございます。アドルバード様、リノルアース様」

それは淑女の礼ではなく、騎士の礼だつた。胸に手を当て腰を折るレイに双子は目を丸くしながら、顔を見合せて微笑む。ドレス姿でも、その方が彼女らしいと思つてしまつたことに笑うしかない。レイはそのまま、先に会場へ行つてしまつた。

華やかな音楽が流れ始める。

双子が一步足を踏み入れれば、割れんばかりの拍手が起きた。

誰もがリノルアースの姿に見惚れ、アドルバードの姿に魅了されていた。

紳士はどうやってリノルアースをダンスの輪に連れ出すか考え、淑女はアドルバードから誘いはないものかとそわそわしている。

「人気だねえ、王子様もお姫様も」

くすくすと笑うヘルダムの隣でレイはただ冷静にアドルバードを見つめた。その隣に立つレイは少しばかり苛立つているようだ。そ

のルイにもまた淑女からの期待の視線が集まっていることに、本人は気付きもしない。レイとしてはルイとヘルダムが良い牽制になつてくれているので余計な誘いを断らずに済んでいる。

「何で婚約発表が最後の最後なんですか。男どもが気安く触つてるし」

「……手の甲の挨拶くらい寛容になれ。しばらく会わない間に随分器の小さい男になつたな」

ぶつぶつと怨念のように呴いているルイに呆れてレイはため息を吐き出す。このパーティの最後のダンスで踊った相手が、婚約者に選ばれる。それがハウゼンランドの昔からのやり方だ。だからこうしてレイも大人しく待つているのだ。

「久しぶりなんですから、余裕だつてなくなりますよ。……予想以上に綺麗になつてたし」

数年ぶりの再会だが、弟は変わつていらないらしいとレイは微笑む。双子は社交辞令の為のダンスが延々と続き、それが終われば挨拶へと行く。その様子を見ているだけであつといつ間に時は過ぎた。

### 最後のダンスの音楽が始まる。

誰もが王子と姫を見ていた。リノルアースの周囲には紳士の群れが集まっている。そんな群れを搔き分けてルイはリノルアースに手を差し出していた。

アドルバードは淑女達の期待の眼差しを背に受けながら、迷うことなく一人の女性のもとへと向かつた。

いつだつたか、言いたかつたセリフだ。

あの時はアドルバードがドレスを着ていて、レイは騎士服だった。  
それが今とは別の意味で絵になっていた。

アドルバードは青いドレスの女性の前に跪き、祈るように声を出す。

「 踊つていただけますか？ お姫様」

見上げた彼女は、嬉しそうに微笑んでいた。

## 70・それはまるで、向かの祝福のみみこ（後書き）

長い間、「愛読ありがとう」やることました。

これで「可憐な王子の騒がしい恋の嵐」は完結となります。

思えば長い付き合いでした。

勝手に動き出すし勝手に流れを変えるし、とても書きにくく奴らの集まりでしたが、それすら楽しんで書いていたのだと思います。ここまで自分の生み出したキャラ達が動いてくれる話も他にありませんでした。

最後はずっとと考えていたとおりの最後になりました。

可憐な王子様は可憐とは言えなくなり（笑）  
でもたぶんこれからもいろいろな面倒」と云々に巻き込まれることでしょつ。

今後、連載という形での続編は予定しておりません。

「可憐な王子シリーズ」といえなくなりましたし（笑）  
短編などで番外編を書くことはあると思こますので、どうぞそのときはまたお会いできる嬉しこです。

最後に。

ここまで読んでくださった方々、応援のお言葉を下さった方に最大の感謝を込めて。  
ありがとうございました。

青柳朔

追記

連載はしません、と宣言させていただいて約一年が経過しました。皆さまの続編希望の声もあり、かつ彼らがまた暴れ始めたこともあります。勝手ながら前言を撤回させていただきます。

可憐な王子シリーズ、続きます。

願わくばこれからも皆さまを楽しませるいじめの物語でありますように。

月 青柳朔

2010年3

【人気投票記念小説】君と肩を並べるまで（一）（前書き）

本編は完結しておりますが、サイトでやっていた人気投票記念の小説です。

（ちなみに一位はレイです）

## 【人気投票記念小説】君と肩を並べるまで（1）

長い間見下ろしていた青い瞳が、少しずつ少しずつ近づいてくる度に、少なからず動搖していた。

幼さの残っていた顔立ちはどんどん逞しくなり、少年らしさは徐々に消えていく。その代わりに掌は大きくなり、骨ばってきたような気がする。少年と青年の狭間にいるその人は、この一年と少しで急激な成長を始めた。身長はまだまだ伸びるに違いない。

たぶん、私が見上げるよつになるのもやう遠くない未来なのだろう。

「アドル様、起きてください」

レイは寝台の上で寝がえりを打つ主の肩を揺らしながら声をかける。

昨晩遅くまで書類とにらみ合いでいたことを知っている分、少し可哀想な気もするのだがこれも仕事のうちと心を鬼にする。

「んー……」

開けられたカーテンから差し込む光に眩しそうに目を細め、青い瞳がレイを捕らえた。

「……もう、朝？」

まだ半分くらい夢の世界に浸っているのだろう、ぼんやりとした声に幼さが残っていてレイは思わず微笑んだ。

「朝です。起きてください、アドル様」

うん、と唸りながら布団の中から手が伸びてくる。以前より逞し

くなつたその手をレイは追うように見ていると、肩に届くほどまで伸びた銀の髪にさらりと触れてきた。いつもなら一つに束ねてい

「世間で、面倒で困ったままだったことを今やいきこ出す。」

まだ寝てねは良かっただのに……おまえも俺にはあつて何近くまで起きてたんだから

「仕事、ですか。田が覚めたなら着替えてください。アドル様」

レイはアヒルバーにて動搖を憚られぬよに平静を装へ、さりげなく距離を置いた。

「服は？」

「……」他の場所に用意してありますよ。朝食を用意させますね。寝台の上で座りながらアドルバードはじつとレイを見ていた。その視線に気づきながらもレイは無視して部屋から出て行く。

「…………、駆逐艦にしてからなんて、いつのじやなかつたかなあ…………」

アドルバードは髪をかき上げてぼつりと呟く。

やの密接なアライの歴史は聞いていない。

アドルバードの身長が急に伸び始めてからだらうか、時々レイが  
どきりとするよつな仕草を見せるよつになつたのは。  
ふう、とレイはため息を吐き出してレイは少し寝坊した主のため  
に朝食の準備を頼む。

アヴィランテの姫やら王子に巻き込まれたごたごたを片付けて以来、アドルバードに課せられる仕事は増えた。国王もアドルバード

を後継者として本格的に育てることにしたのだらう。

弟であるルイは未だに遠い南国、アヴィランテで尽力している。長く続くかと思われた内戦は予想よりも短く、現在はヘルダムを国王として新体制を整えている真つ最中だ。

ヘルダムが国王となつたことで、新たに領地と領主を選び直された。その中に何故かレイの名前まであつた。

曰く、「弟であるヴィルハザードを保護してくれた一族に対するそれ相応の返礼」であるらしいが、その真意は定かではない。かくしてレイは北国の一騎士に過ぎなかつたはずが、南国アヴィランテの女領主という地位を得た。

その影響はそれなりに大きい。十五歳から今まで静かだつた求婚の声は最近増え始めている。もちろんアドルバードの専属の騎士であるレイの結婚にはアドルバードの許可が必要となるし、アドルバードが自分以外の男で許可を出すはずもない。おかげで十五歳の時よりは断りやすくて助かつていてる。

国際的なハウゼンランドの地位は徐々に高くなり、弱小国という呼び名はそろそろ似つかわしくなくなることだらう。大陸でもそれなりに知られた国となつた。

「アドル様、ご用意できましたよ」

寝室の扉を開けて声をかけると、アドルバードは既に着替えて待つていた。赤みがかつた金の髪はきらきらと輝き、濃紺の上着はその髪を映えさせていた。身長は今165cmほどだらうか。並ぶとレイは随分と目線が近くなつたなと思つ。

「おまえは？」

「もう既に頂きました」

「……どれだけ寝てないんだよ」

昨夜 というよりも今日の早朝までアドルバードの仕事を手伝つていたレイは、今まで眠つていたアドルバードよりも早く起きて彼を起こしに来ている。必然的に睡眠時間はアドルバードよりも短

い。

「慣れますから平氣ですよ？」

「慣れるなよ……肌荒れるぞ」

寝起きで頬に触れてきたのはその確認だったのか、とレイは納得しながら苦笑する。

「……あまりそういったところは気にしていませんから」

「綺麗なんだから少しばかり形だけ

もつたまない、という咳きに少しくすぐったくなりながら形だけ「はい」と答えておく。肌荒れを気にするような性格なら初めから騎士になんてならないといつこと、このままいつにならう。

「どうう？」

朝食をとるアドルバードの給仕をしながら、ちらちらとこちらを見てくるアドルバードの視線に気づいてレイはため息を零す。

「……………」

見ていることに気づかれているとは思つていなかつたのだろうか、アドルバードは慌てて平静を装つが、完全に失敗している。

「い、いや、その……………また面倒なこととか起きてないかな、って」

「面倒なこととは？」

首を傾げてレイが問いかえすと、アドルバードはもじもじと口籠りながら視線が泳ぐ。

「ほら、その。求婚とか。最近増えてきてるみたいだつたし。断るなら俺の名前を勝手に出していくんだからな」

ああ、とレイは合点して頷く。

「今はあつませんよ。もちろん普通に断るのが難しいのならアドル様の名をお借りすることもあるでしょうが」

「……………実際、いつたい何件あつた？」

「こちらの様子を窺うようなアドルバードの言葉にレイは思わずおかしくなりながら笑うのを堪えた。

「どこから數えればいいのか知りませんが、少なくとも最近では十数件はきますね。父が教えていないものの中にはあるでしょうか

ら、もう少し多いかもせんけど

レイの回答に、アドルバードはあからさまにむつとしてパンを勢いよく干切る。行儀が悪いですよ、とやんわりと注意してレイはくすくすと笑う。

「あと七〇三……っ！」

パンを握りつぶさん勢いでアドルバードは唸る。すぐ傍にいるレイにもそれは聞こえているのだが、本人としてはそんなことを気にしている余裕はないらしい。

こういうところは以前からまるで変わらないな、とレイは嬉しくなりながらアドルバードを見つめる。

小さな頃から見守り続けてきた男の子は、こんなにも大きくなってしまった。自分の背中を追いかけてきた頃の記憶もあるだけ、その背中が大きくなつていいくのは嬉しくもあり切なくもある。

たつた二歳、年長なだけなのに、とレイは苦笑する。

『小さい』時期が長すぎたのだろうか、もしかしたら自分が甘やかし過ぎたのかもしれない。おそらくアドルバードがアルシザスに行き、自分で成長する機会がなければこんな状況にもならなかつた。想いを殺したまま、アドルバードに良い縁談を持ちかけただろう。その覚悟があつたのは事実だ。

『覚悟しておいてね？　逃がさないから』

アルシザスでリノルアースに言われた言葉を思い出す。

もしかしたらこうなることまで彼女の中で組みこまれた計画だつたのだろうか。だとすれば相当な策士だとしか言いようがない。

大事に大事に守っている間は、レイはアドルバードへの想いを告げようとは思わなかつただろう。けれど主は間違いなくレイの手を離れ、無理難題を解決し始めている。もちろんそれらには手を貸してきたが、アドルバードの力はたぶんレイでは補いようのないものだ。

人を惹きつけ、人を動かす。

もう騎士として隣にいなくとも大丈夫だと思えるほどにアドルバードは成長している。

これからは、おそらく

「逃げられそうには、ないですね」

くすくすと笑いながらレイは呟く。  
アドルバードは不思議そうに首をかしげてレイを見上げていた。

## 【人気投票記念小説】君と肩を並べるまで（2）

幼い頃から続いていた関係が恋になつた瞬間があつたとすれば、やはりあの時だったのだろう。

レイ、何かあつたのか？ 最近なんか変だぞ。

隠し通せていると思っていたところにきた、アドルバードの問いはレイをかなり動搖させた。それでも幼いアドルバードに自分の問題を話すわけにはいかないと一瞬にして表情を作る。

「何もありませんよ」

わずかに微笑んで答えると、アドルバードは納得していなにようだった。む、とした顔でさりげに距離を詰めてくる。

「誤魔化すなよ、騙されないからな。いつたい何年おまえと一緒にいると思つてる？」

ああ。

いつの間にこの人は、こんなにも成長していたのだろう。自分の作り出す仮面は誰にも見破れないと思つていた。平静を装えば誰もが納得すると思つていた。言葉を重ねて誤魔化すのは得意

だ。

こんな、一番弱り切つてている時に、どうしてこの人にはそれがバレてしまつたんだろう。

『レイ、覚悟はしておけ。これ以上求婚を断り続けるのは難しいかもしれない』

難しい表情で父はそう言つた。何件も持ち上がりつた縁談を父は娘を思つて潰してくれた。しかし弱小貴族のバウアーハにはあまりあるほどの家からの求婚を断り続けるには理由がいる。

それがないレイには、もうこれ以上逃げるのは難しかつた。

だから何も言わずに頷いた。好きでもない男に嫁ぐことには嫌悪感があるし、何より嫁げば剣を握り続けることは出来なくなるだろう。それはレイにとつては生きがいを失うことに等しかつた。

何がいけないというのだろう。

ただ私は私のままで、今までと同じようにアドル様やリノル様と共にいたいだけなのに。

彼らの傍らにいて、彼らの成長を手助けしたいだけなのに。

そのささやかなようで贅沢な願いは到底叶えられるものではないといふことも、賢いレイは知つていた。

あとどれくらいの間、こうしていられるだろう。そんな考えに囚われながらアドルバードに仕えていた。

まだ十三歳のアドルバードは真つ直ぐにレイを見ていた。

もう誤魔化すことなんて出来ないことくらいは、簡単に察せるくらいに強い瞳でこちらを見るアドルバードに、目頭が熱くなつた。

「……アドル様」

呴いた声はまるで自分のものではないみたいに艶めかしい。

湧き出る感情は数多あり、かつ複雑だった。しかしその複雑な感情はすべてアドルバードという存在で繋ぎあわされる。

傍にいたい。共にありたい。この一生を、この人の傍で終えたい。いとおしくていとおしくてたまらなかつた。

王妃なんて大それた地位は望まないから、だからどうが。

この一生をこの人に捧げることをお許しください。

この人のために生きて、この人を守るために剣をふるい、この身を盾にすることをお許しください。

許しを乞うのはただ一人でいい。

自分の中で覚悟が決まった瞬間に、レイは自分の長い銀髪を握り締め、間髪入れずに抜いた剣で斬りおとしていた。

幼い頃よく真似て遊んでいた。

騎士がたつた一人に仕えると、剣の誓いをたてるシーンが頭の中を駆け巡る。

「この身をもつて、あなたをお守りします」

アドルバードの前に跪き、恭しく剣を掲げる。この剣の重みがなくなれば誓いは受け入れられる。もし消えなければ　　その時は覚悟を決めて、短髪の女でもかまわないという男のもとへ嫁ごう。

「アドルバード様」

自然とそう口にしていた。アドルバードは茫然として立ちつくしていた。

アドルバードは知らないだろ。剣を受け取られるまで、どれほどレイが緊張していたかを。剣の重みが消えた瞬間に、どれほどほつとしたかを。

多くは望まない。この命が尽きるその瞬間まで、傍にいられればいい。

「……」  
「う、思っていたはずなのに。いつたいいつからこんなにも欲深くなつたのだろう。

「レイ」

昔を思い起にじてみると、鈴の昔のように爽らしく声がレイの名前を呼んだ。

はつと現実に引き戻されれば、目の前にはリノルアースが不貞腐れたように立つている。

「もう。珍しいわね、ほんやりしちゃつて」

すみません、と謝りながら自分でもらしくないと思ひ。アドルバードは今頃他国の大使と会談している頃だ。送り迎えだけで良いと言わされたので傍を離れたところ、リノルアースに捕まつたのだ。

「別にいいのよ。レイはたまにそいやつてボーツとした方がいいわ」「少し、昔のことを思い出して……」

苦笑しながら咳くと、リノルアースが目を輝かせて問い詰める。

「あら、昔つていつのこと?」

以前ならからかう対象だったルイがいなくなつて暇なのだろう、リノルアースの目はレイを逃がしてくれそうにない。

「剣の誓いをたてた時のことです」

さらりと答えると、張り合いがなくてつまらなかつたのかリノルアースがふうん、と咳く。

「あの頃は大変だつたんでしょ? ディークが言つてたけど、実は剣の誓いをたてたのと同じ日にルザードからも暗に求婚をほのめかされたつて言つてたし」

「それは初耳ですね」

「どうせ剣の誓いを優先して断ることになつたから、話すまでもないと思つたんじゃない？　あいつは本気でレイが好きだつたのねえ」

ルザードの想いが真剣なものであつたのはそれこそ数年前から気づいていた。だから今さら驚くほどのことでもなかつた。

「結局、アドルとルザードが仲悪かつたのつてレイを取り合つていたのが原因だものねえ」

それも初耳だな、と思いながらレイは紅茶を飲む。

アドルとルザードはそれこそ小さな頃から仲が悪かつた。性格が合わないのだろうと思っていたのだが、原因は自分だつたのか。

「…………となると、アドル様は」

そんなんに昔から、恋心を抱いていたということになるのだろうか？「アドルなんてちっちゃい時からレイ一筋じやない。知らなかつたの？」

知らなかつたわけではない、小さな頃　それこそ物心つく前から異常なほどに懐かれていたから、好意は抱かれていることくらいは知つっていた。

「……正直、年下の子供に懐かれている程度の認識しかありませんでしたね」

「あら、じゃあレイつてアドルに惚れたのはつい最近なの？」

思ひがけぬ方向に話が転がり始めレイは逃げ道を探すが、リノル

アースの目は獲物を捕らえた猛禽類の目よりも鋭く光つている。

「……自覚したのは、それこそ誓いをたてた時で」

追撃はあるだろうかと警戒していると、予想外にもリノルアースは紅茶を優雅に飲みながらふうん、と呟く。

ほつと胸を撫で下ろしていると、ちょうどアドルバードを迎えて行く時間になつていた。

「時間ですので、失礼しますね、リノル様」

リノルアースは微笑みながらどうぞ、と言つ。アドルバードと同じ青い瞳が真っ直ぐにレイを見つめてきたので、レイは首を傾げて

「何か？」と問う。

「ううん。ただ、やっぱアドルは全面的に負けてるんだなあつて  
「負けてる？」

リノルアースは頬杖をつきながら艶やかに微笑んだ。誰もがため息について見惚れてしまいそうな美しい笑顔だ。

「先に惚れた方が負けって言ひでしょ？ アドルはずつと前からレイが好きだったんだから、これはもう一生勝てないわね」  
どう返せばいいのか分からず、レイははあ、と呟いて部屋から退出した。

アドルバードといつ存在がなければ生きていけないと、そう思えるほどになつた感情を持つてしてでも、まだこの勝負に勝つているのだろうか？

## 【人気投票記念小説】君と肩を並べるまで（3）

「レイ」

アドルバードが講義を受けているはずの部屋まで急ぐと、少し前からアドルバードがやってきた。

「……アドル様」

「珍しいな。おまえが遅れるなんて。先生まで驚いてた」  
おかげで少し長引いたんだぞ、ヒアドルバードは笑う。いつも講義が終わる時間ぴったりに迎えに行くせいだろ？

「リノル様に捕まってしまいまして」

ここはリノルアースを言い訳に使わせてもらおうと苦笑すると、アドルバードは何の疑いもなく「だろうな」と笑った。

「大変かもしれないけど、付き合つてやつて。あいつもレイがいなくなつて寂しいだろうからさ」

そう言つアドルバードの顔はしつかりと『お兄ちゃん』だ。

それが少し微笑ましくてレイはアドルバードの横顔を見つめる。

「……何？」

アドルバードはその視線に気づいたのか、少し照れたようにレイを見上げながら問う。

「あ、いえ……てっきりルイのことは反対するのかと思つていたので」

あつさりとこのシスコンが妹をルイに渡すとは思つていなかつただけに、二人の仲を容認するようなセリフには少しばかり驚かされる。

「前にも言つただろ。リノルが本氣でルイを好きなら、俺が反対なんかしても無駄だよ。どこの馬の骨にやるよりはルイにやつた方がましだと思うし。やっぱリノル元気ないからさ、早く帰つてくる。

てくれた方がいい」

それに、とアドルバードが呟いてから少し黙りこんで俯いた。急にアドルバードが立ち止まつたので、レイも合わせて止まる。

「アドル様？」

レイが不思議そうに問うと、心なしか頬の赤いアドルバードはレイを直視できずに呟いた。

「あいつからしても、同じだろ？しね」

その言葉の意味することを考えて　レイは納得した。  
可愛い妹を渡す相手の、姉をもう一受けたのだから　まあ痛み分けになるのだろうか。

「……ルイはアドル様ほどシスコンではありませんけど」

「それはおまえが気づいてないだけだろ！？　あれもそこそこやばいレベルだよ！　あいつの初恋はおまえだぞ！？」

「それを言つならリノル様の初恋も私になりますが」

「それはそれ！」

姉弟の間で初恋のことを笑話として話せるだけの関係になつてゐるから、ルイにはもはやレイに対する恋情は欠片も残つていないのである。確かに普通の姉弟よりは親しいと思つてゐるが　それは血の繋がりの無さを補つためのもののように思つていたし、もともと家族の結束は強い一家だ。

「どちらにせよ、ルイは私がどこに嫁いだうが異論は挿まないと想いますが」

「……いつも思うけど、レイってルイのこと信頼してるよな」

会話が少し違う方へと流れたことに首を傾げつつ「はい」と素直に頷く。

「しつかりした弟ですからね。昔から」

「……しつかりしてるか？」

アドルバードが不審げに問うてくる。レイは苦笑しながら「しますよ」と答えた。

「少なくとも小さい頃あなたやリノル様が脱走して私を困らせていましたよ」と答えた。

「少なくとも小さい頃あなたやリノル様が脱走して私を困らせていましたよ」と答えた。

る間、レイは大人しく家中で待っていましたからね。昔からビビ  
らかといつとアドル様達の方が手のかかる弟妹のよつなもので  
懐かしげに昔を思い出しながら話していると、アドルバードの機  
嫌が明らかに悪くなっていた。空気の変化に気づいてレイは言葉を  
途中で切る。

「…………アドル様?」

「どうかしましたか、と問おうとするが、アドルバードは仏頂面の  
ままですたすたと歩き始める。

「俺は、今も昔もおまえの弟なんかじゃない」

後を追おうとしたレイの足がぴたりと止まる。アドルバードはそ  
んなことおかまいなしにそのまま歩いて行ってしまう。その拳はぎ  
ゅっと握りしめられていて、痛そうだった。

やつてしまつた、と思いつからでは遅い。

レイは口元を手で押さえ、歩き去つて行くアドルバードの背中を  
見つめるしか出来なかつた。

弟だなんて、思つていない。今はもう。

それでもアドルバードの機嫌を損ねた原因が分かつてしまつと、  
レイは一歩も動けなかつた。傷つけたことは確かだつた。

「…………やつちやた、つて顔ね」

廊下で立ちつくしてくるレイのところに、呆れ顔でリノルアース  
がやつて來た。

「アドルが私のところに來たわよ。むつれつ面で。おおまかなこと  
は聞いたけど、レイはそんなに落ち込むことじやないんじやないの

？」

レイの隣に並び、窓の向こうを見ながらリノルアースが問う。

「アドル様を傷つけたのは事実で……」

「傷つくほうが可笑しいじやないの。レイとアドルはまだ恋人でもないのに。怒る権利はまだアドルには無いのよ？ 大体、昔の話じゃないの」

ま、他の男に比べられたのが嫌だつたつていうのもあるかもしねないけど？ リノルアースはレイを見上げながら意地悪そうに笑う。「余裕ないのよ、レイにはまた求婚がたくさん来てるし。早く身長が伸びないかつて内心で焦つてるんでしきうね。変な条件つけたのは自分のクセに」

これ以上のペースで身長が伸びても辛いだけだろうに、とレイは苦笑する。急激に伸びた身長はもれなく成長痛をもたらした。今でも時々のたうちまわるほど痛がつていてるくせに、それでもアドルバードが目指す身長にはまだ届いていない。

「アドル様が私を一途に見ていてくれた間、私は『弟』としてしか見てなかつたんですね」

レイは窓の向こうの青空を見つめながら咳く。

アドルバードがレイに恋している間、レイは手のかかる弟としてしかアドルバードを見てていなかつた。その事実がアドルバードの小さな頃からの恋を否定してしまつたような気がする。

「恋の始まりなんて、深く考える必要はあるの？」

落ち込んでいるレイの隣でリノルアースは呆れたように咳く。レイはリノルアースを見つめてただ黙る。リノルアースはどこか大人びた表情で続けた。

「大切なのは今でしょ？ 恋した期間なんて、今の思いの深さには関係ないんじゃないの？」

いつも諭すのは自分の役割だけれど、ヒレイは苦笑する。恋愛にかけてはリノルアースに勝てるわけがないのだ。

「……アドル様は？」

「部屋から追いだしたから、今頃中庭あたりでいじけてるんじゃないかしら？」

そして部屋から追いだした後でわざわざフオローレンレイを探してくれたのだろつ。

レイはくすりと笑いながら「ありがとうございます」と頭を下げて踵を返す。

「アドル様？」

中庭に行くと、アドルバードの姿は見つかなかつた。どうにいのだろつと歩きまわり 薔薇の垣根に囲われた芝生に寝そべりながら空を見上げている主を見つける。

「……服が汚れますよ、アドル様」

第一声がこんなことになつてしまつのは、過去からの習性なのだろつか。レイはアドルバードを見下ろしながら声をかける。しかしアドルバードはレイから顔を背けるように横を見る。完全に不貞腐れているようだとレイは呆れながら苦笑する。

「こiddoな言葉を呟くして弁解しても、この主には無意味だらう。

ならば。

「……何故そんなに捻くれてるのか知りませんが、こんな女が嫌なら約束は忘れてくださいて構いませんよ」

自分でも予想以上に平坦な声が出た。

ぴくりと、アドルバードの表情が固まる。

「けれどその場合、アドルバード様の騎士を続けるつもりはありますから、どうぞ誓いにそつて私を殺してください」

すつとアドルバードの横に跪いて撫でるように囁く。

アドルバードと結ばれて　自分が王妃になるのではないなら。他の女がその場所にいるのをどこよりも近くで見せつけられるくらいならば。剣の誓いを破った罪人として、アドルバードに斬られる方がいい。明確に口にしていないものの、レイが言つたのはそういうことだった。

どれも嘘ではない。

以前ならばアドルバードがどんな女性と結婚しても、傍で守れるのならそれでいいと思つていた。けれど今はもう無理だ。

「ふざつ……けるな！..」

アドルバードは勢いよく起き上がり、レイの手首を掴んで叫ぶ。  
「誰がおまえを手放すか！　おまえはどうか知らないけどなー！　こ  
っちはずっと前からおまえだけ見てきたんだよー！　それを今さら  
やつと手に入るかもしけないって時に諦めるわけあるか馬鹿！..」

予想通りの展開に、レイは苦笑した。

こうすればアドルバードなら怒るだろうと思つた。怒つて、こう言つてくれるだろうと。

しかしレイの上体は後ろへと崩れた。アドルバードの肩越しに綺麗な青空が見えて、そこで初めてアドルバードに押し倒されたのだ

と気づく。

「アド

眩こうとした主の名前は、唇を塞がれることによって声にはならなかつた。



## 【人気投票記念小説】君と肩を並べるまで（4）

呼吸が、上手く出来ない。

以前より重くなったアドルバードを押しのけることはたやすいことではなく、またすぐに反応する余裕もなかつた。恋愛面での不意打ちにはいつも弱い。

「…………んっ！」

唇がわずかに離れた隙に息を吸う。耳に届くのはお互いの吐息だけだ。

青い瞳と間近で田が合い、心臓が一度大きく波打つた。青い瞳が再び田を閉じようとしていることに気づき、渾身の力でアドルバードを突き飛ばした。

ふざけんな。

羞恥の後に湧き上がったのは純粋な怒りだった。

身長を気にして、くだらないプライドを守ろうとして、何年もこちらを待たせているのはどこの中だ。それでもそれがこの人の願いならと主従関係で満足しようとしているところに。

それなのに。

「…………最悪です、アドルバード様」

怒鳴り声としたのにも関わらず、一瞬にしてその心も冷めた。

悪かった、悪かったとは思つてはいる。けれどこんな不意打ちのようになされるのは心外だ。そんなに安い女だとでも思つてはいるのだろうか。

弟なんて思つてはいるわけじゃない。思えるわけがない。好きだと伝えたわけでもない。けれど、想いは確かに伝わつてはいると思

つていた。

しかしアドルバードは「こちらの想いを疑つた。

「こちらの想いを家族への愛情と同じなのだと、アドルバードは思つたといつことだ。

胸が苦しくなつて、言葉に詰まる。これ以上この場にいるのも耐えがたく、静かに踵を返す。アドルバードは言い返すこともなく、突き飛ばされたまま茫然と見上げたまだつた。

「 休暇をください」

アドルバードのもとから去つたその足で、国王陛下の執務室へと向かつた。許可を得て部屋に入つてから一番にそう言つた。部屋には偶然父であるティーケがいる。国王陛下はきょとんとした顔でこちらを見ていた。

「 ……突然だねえ、レイ？ でも休暇の許可は馬鹿息子にもりつべきじゃないのかい？」

君の主は私ではなく馬鹿息子のはずだよね？ とかからかうよつて、どこか諭すように微笑む。

「 その馬鹿息子様からは許可が下りないような気がしましたので。国王陛下の権限で休暇を頂きたいのです」

馬鹿息子という言葉をそつくりそのまま、せつぱりと即答すると国王は面白そうに笑つた。

「 どうしてそこまで必要なんだい？」

「 貞操の危機を感じるので」

至極真面目な顔で即答すると、国王陛下は年も考えずに大爆笑し

た。

「いいよ、許可しよう。どうせだから好きなだけ休むといい

「ありがとうござります」

レイは綺麗にお辞儀をする。

「殿下も持つた方だな。あれでも年頃なんだし」

くつくつと笑いを殺そうと努力しながら父が呟く。娘が身の危険を訴えているというのに笑うところだろうか。

「レイのおかげで忍耐力が培われたねえ」

父と一緒に國王陛下まで笑い始める始末だ。これでこの国は大丈夫なのだろうかと疑問に思うところではある。

面白がる大人達は放置して退出しようと扉へと向かうと開ける前に扉は勝手に開いた。

「笑い」とではないでしょーう…！」

そう怒鳴りながら入ってきたんは王妃であるアテライードだつた。双子の母親とは思えないほど王妃様は若々しい。髪はいつまでも艶やかで、もともと童顔なのかとてももうすぐ四十歳になるとは思えない。

「女の子を襲うような子供に育てた覚えはなかつたのに！　あなたがあんまりアドルをいじめるから性格が歪んでしまつたのではないの！？　しかもそれを『ディーケと一緒に笑うなんて何事ですか！？』

鬼の剣幕で怒鳴る王妃を前に父も國王陛下も小さくなる。やはりこの國の男は女性に勝てないのだろうかとぼんやりと考えてみると、腕をつんつん、とつつかれる。

「悪い方向にいっちゃつた？」

そこには可憐な姫君が少しだけ申し訳なさそうに立つていた。王妃を連れて來たのも彼女だろう。

「いいえ、本気の喧嘩ではありませんから」

少なくとも、私は。

「そう？……なら、いいんだけど」

あまり納得していなさそなリノルアースの髪を優しく撫でながら

ら、王妃の説教が始まった部屋から逃げ出す。

「お茶でもどうですか？ リノル様。温室でゆっくり」

リノルアースは少し悩むようなそぶりを見せ やんわりと微笑 んだ。

「いいわよ、レイも一緒にね」

もちろん、レイは答えながらリノルアースと共に花の咲き乱れ

る温室へと向かう。

怒りはある。

それと同じく、悲しさもある。

けれどその感情で想いを見失つまび、自分は愚かではなかつた。

紅茶を飲みながらも、リノルアースはまだ窺いつゝレイを見て いる。

自分のせいで喧嘩させてしまったという罪悪感があるのかもしれない、そんなことを気にする必要はないのに。怒りも悲しみも同じだけあるのに、頭は冷静だつた。適確に原因を突き止めようと働いている。

「今まで、あまりにも近過ぎたんですよ」

やつ切り出すと、リノルアースがきょとんとした顔でこちらを見た。

「近過ぎたから、相手の想いに深く悩むこともなかつたんでしょう。どうせ傍にいるのだから、と」

「……アドルのこと？」

リノルアースの青い瞳がレイを真っ直ぐに見詰めてくる。レイは苦笑して「私のことでもありますよ」と呟いた。

「プライベートと仕事の区別がなかつた。一日の大半傍にいたのに「でもそれは、私とレイだつて同じでしょう?」

「いいえ、異性として節度が保たれる程度には距離がありましたよ」緊急時の他にレイがリノルアースの寝室に入ることはなかつたし、着替えの時は当然別室で待機していた。入浴の際は危険な時でない限り送り迎えさえしていなかつた。

「レイとアドルに節度がなかつたということではないと思うけど?」

「それはそうですが 私が悪かつたんでしょうね、その点は」レイは腰から下げる剣に触れながら苦笑する。幼少の頃よりこの国で一番の剣士に育てられ、男にも負けないほど自分の腕を鍛え上げた。

「守る立場だから、油断していたんです。守られる立場の人間が何を考えているかも、分かつてはいるようではなかつた。私がアドル様に負けるわけがないという意識もどこかにあつたのでしょうか」一対一で、普通に剣で競うのであれば今でもアドルバードに負けることはないだろう。しかしそれだけでは片付かない感情が自分の中にあることをすつかり忘れていた。

「……そういうことは、アルシザスで学習したんじゃなかつたの?」同じようなことがあつたはずよね、と呆れたようにリノルアースが呟いた。痛い言葉にレイは苦笑するしかない。

「学んだと思っていたんですけどね」

幼い頃を知つていると厄介だ。小さな子供が大人の男になつたといふことに気づくのがどうしても遅れてしまう。

「しばらく、距離を置いた方が良いと思います。家も随分と放置しましたままでし」

ティーカップをかちん、と置いてレイは決心を口にする。

リノルアースはそんなレイをじつと見つめたまま頬杖をしてため息を吐く。

「そうね」

それがいいのかもね、呟いた声はどこか遠い。

父は相変わらず多忙で、同じように自分も家に帰る余裕はない。出来た弟は出来る限り家に戻つていろいろしてくれていたようだが

その弟も今は遠い異国の空の下だ。使用人に任せきりというわけにもいかないだろう。

「会えない時間が想いを募らせるつていうしね……本当かどうかは定かじやないけど」

リノルアースの吐く言葉の後半はほとんど彼女の不安を声にしたものだったのだろう。

会えない辛さは、たぶんきっと彼女が良く知っている。

## 【人気投票記念小説】君と肩を並べるまで（5）

「まあ！ お嬢様！？」

馬で一人屋敷に戻ると、古参の使用人の中年の女性が驚いたように声を上げる。

「あらあらまあ！ どうなさつたんです！？ 珍しいこともあるものですねえ！ 坊ちゃんはよくお帰りになつていらしたんですけど、お嬢様がお帰りになつたのはいつたいどれくらいぶりでしょうねえ！！！」

「こちらが口を挟む余裕もないくらいにおしゃべりなその女性は、それこそレイヤルイが小さな頃からこの家で働いてくれている人だ。『今夜は御馳走にしましょうね。お嬢様のお好きなものにしますから』

大変な歓迎ぶりに、実家だと言つのに少し気が引けた。普段あまり帰つて来なかつたことを改めて申し訳なく思う。

「ただいま、久しぶりだな、マーサ」

「あら、覚えていてくださつたんですねえ。城でのお勤めが忙しくて私の名前などすっかり忘れたものと思つておりましたよ」

懐かしい小言に苦笑しながら、レイは上着を脱いでマーサに預ける。

「それにしてもよく王子がお休みをくださいましたね？」

ぎく、として思わず身体が固まる。小さな頃からレイを知つているマーサはその一瞬の変化を見逃さなかつた。

「もしかして……無断欠勤ですか！？ いけませんよ！ お仕事はきちんとですね！」

「いや、無断ではない。国王陛下からお休みはいただいたから

「お嬢様がお仕えしているのは陛下ではなく王子でしょう？」

正論を返されて思わず言葉に詰まる。

「……旦那様のお話だと婚約も間近とのことでしたけど。何かあります？」

「この間に婚約じとのこの話がこひりまで残っているんだと呆れつつ、レイはマーサから逃げるみつて壁へと向かう。マーサがそんなレイを逃すわけもなく、ぴたりと後ろをついてくる。「困りますわお嬢様！」このマーサはお嬢様の花嫁姿を楽しみに生きておりますの……」

そんな孫の結婚を待ちわびる祖母のよくなことを言わなくて。レイは呆れながら立ち止まり、そして振り返る。身長の低いマーサはレイが見下ろさなければ田が合わない。

「じばらくアドル様とは距離を置きます。もし来訪があつても取り次がなによ」

「まあ……倦怠期ですか？」

「……恋人でもないのにじうじてそんな単語が出てくるんですか」

溜息を吐き出しながらレイが呟くと、マーサは笑いながら「冗談ですよ」といふ。

「でも、何かお悩みならマーサにも言つてくれさいね？」

優しい笑顔にレイも思わず微笑む。母が死んでからは、マーサが母親代わりだったと言つても過言ではないだろう。

「……傍に居すぎたから、少し離れるだけです」

「左様ですか」

マーサはこいつと笑つてその場を去つていく。小さな背中なのに、どうしてこんなにも頼りがいのある姿なのだろうは不思議に思つた。

「ふざけるな！ どうして俺に断りもなくレイに休暇なんて……！」

城内のどこを探しても見つからない騎士を探すアドルバードに、リノルアースがそつと真実を教えるとアドルバードは父の執務室へ殴りこみへ行つた。

「だつてレイが欲しつていうから」

「だつてじやないでしょ！……」

「娘は貞操の危機にあると言つていたんですけどどうこいつですかね、殿下？ どこまでやつたんですか」

「どこまでもやってない……」

突き飛ばされなければ、そのまま突っ走ったかもしれないけれども……！ というか突っ走つてた自信はあるけど！

内心ではかなり焦りながらアドルバードは凶悪な中年男一人に食いかかる。

「俺はレイにまだ話すことが……！」

「……女性を押し倒して、何を話すのかしら？ アドルバード」

ひんやりとした声に、アドルバードの身体が硬直する。その人はいつもならここにはいるはずもなく、そしてその声は明らかに怒っている……！

「は、母上……？」

「そんな子供に育てた覚えはありませんよ、アドルバード。女性には優しくとあれほど言い聞かせて来たのに……！ 最近大きくなつてきたからって態度まで大きくなつてはいけませんよ……！」

助けを求めようと妹を見るが、リノルアースは頑張れとアイコンタクトするだけで助け舟は出してくれそうにない。

「いや、これは俺とレイの問題で……」

「恋人でもない女性を押し倒すことは確かに問題ですね？」

「あう、とアドルバードは言葉に詰まる。

いつもは穏やかな母親の目が笑っていない。

「確かにね、アドル。時に恋は強引な手段も必要かもしれないけれ

ど？ それも女の子としてはときめくポイントではあるんだけれども？ 今回ばかりはレイを怒らせたんだもの、間違いだつたのよ」 「う、はい、ええ、とかとりあえず相槌を打ちながらアドルバードはその場に自主正座する。

確かに レイが怒るなんてどれくらいぶりだろ？ 怒らせた。

その事実もまたアドルバードには重い。

「…………でも、弟扱いはないだろ？」

むす、と思いだしてアドルバードは膨れる。しかも実の弟以下と言われたのだ。おまえは俺のことが好きだつたんじゃないのかよ、と愚痴も零したくなる。

「馬鹿アドル」

アドルバードの呴きを聞いていたのだろうか 突然リノルアースが呴いた。

「なんでだよ！ 悪いのは俺だけか！？」

「レイも悪いわよ、ええもちろんレイも悪いわ！ でも謝りに行つたのにあんたが膨れて、レイを不安にさせて、しかも押し倒したなんてあんたは最低よ！！」

我慢できなくなつたのか、言い返すリノルアースの迫力はこの場の誰よりも凄まじい。

「不安にだつてなるでしょうが！ 明確な言葉もないのに求婚は増えるわあんたはチビのまんまだわ！ しかも別に深い意味もないセリフにあんたは激怒するし！！」

「チ、チビのまんまではない！ ちゃんと成長してるよこれでも！」

！」

「黙りなさいこのへタレ！ 身長なんて気にして馬鹿じゃないの！？」

「どうせ伸びるもんは伸びるし伸びないもんは伸びないのよ！」

正座しているアドルバードの前で仁王立ちになつて説教を始めるリノルアースに、大人達は全員傍観者になることを決めたようだ。アドルバードも言い返しているようだが、明らかにリノルアースが優勢だつた。

「しばらくレイとは離れて良く考えなさい！ 今回はプライベートと仕事の切り替えが出来なかつたことが敗因！ あんたが自分で主従を続けることにしたんだから、そこらへんはちゃんと守りなさいよ！」

ふん、と言つだけ言つてリノルアースはどかどかと行儀悪く歩きながら部屋から出て行つた。

もはや茫然としてその姿を見送るアドルバードを見て、国王陛下はにっこりと笑つて決断する。

「 ことで、しばらくレイはお休みね？」

家に戻ると、平穏な どこか物足りない生活が続いた。

自室で本を読み、母の墓へ行つたり、片づけをしようとしてマーサに怒られたり この家にいるときは必ず父かルイか 母がいた。使用者はいるものの、家族の単位で一人きりでいると、随分と大きな家に感じられた。大した屋敷でもないというのに。

「お嬢様、お客様ですよ」

部屋にいたマーサがそうレイを呼びにきた時も、アドルバードとは取り次ぐなど言つてある以上なんの警戒もなく客間へと向かつた。

「 久しぶりだな」

そこにはいる人を見て、レイは目を丸くする。

「……ルザード、様？ どうなさつたのですか」

「城への出入りは禁止されているが、おまえに近づくなとは言われていないからな。こちらに帰っていると聞いて会いにきただけだ」シリスネイアの一件での処罰ではそのとおりだ。そんなこともあつたな、とレイは懐かしくなった。

「……まだ、あんな男がいいのか」

少し躊躇つた後に零れた言葉に、レイは思わず苦笑した。あんな男、が指すのは間違いなくアドルバードなのだろう。

「まだも何も。私にはアドルバード様だけですが」「相変わらずだな」

「ええ」

レイの答えに顔を顰めるルザードを前に、当本人は平然と微笑む。「アレのどこがいいんだか」

不貞腐れたルザードの言葉にレイはなお微笑む。反発し合つわりに、ルザードとアドルバードはどこか似ている。

「どこが、なんて。人を愛するのに明確な理由が必要ですか？」ルザードはそう微笑むレイを見つめて　ふう、とため息を零した。

「……ずるずる引きずるのももつ飽きた」

低く咳く言葉は、どこか覚悟を決めた人のそれで。

真つ直ぐにレイを見つめる瞳は、以前のよつな軽薄は雰囲気はない。根は眞面目な人なのだと知っていたから、レイはこれといつて驚くこともなかつた。

「俺は、おまえが好きだつたよ。レイ・バウアー」

どこか悲しげに、切なげにルザードは咳く。本当に、という小さな咳きはレイの耳に届くことはなかつた。

「……知つていましたよ

だらうな、とルザードは苦笑する。すつ、と立ち上がりながらレイの傍へと歩み寄る。

「その警戒心のなさ、少し直した方がいいぞ」

そう言うのが先か否か。

柔らかい唇が、レイの額を掠める。

「 っ！」

反射的に身を引いたレイを、ルザードは少し悲しげに、どこか悪戯に成功した子供のように笑う。

「これで最後だ。これくらい許されるだろ？」

そう呟く顔は泣きだしそうな子供のようにも見える。レイは咄嗟に何も言えないまま、部屋から出て行くルザードの背中を見つめるだけだった。

【人気投票記念小説】君と肩を並べるまで（6）

「どこに行くつもりかしら？ アドル？」

ひんやりと背筋が凍りそうな妹の声に、アドルバードは思わず立ち止まる。

「いや、ちょっと散歩に……」

自分でも目が泳いでいるのが分かつた。これでは最強の妹に気づかれないのでがない。

「……散歩？ へえ？ それにしても随分荷物があるような気がするんだけど？」

「す、少し遠くまで行こうかなあとですね」

「それは散歩？ 行き先はバウアー家かしら？」

リノルアースにしては直球すぎる質問にアドルバードは硬直した。そしてまずいと思つた時にはもう遅い。

「アドル？ レイとは距離を置くように言つたわよね？ 言つひと聞けない子は嫌いよ？」

明らかに妹が言つ言葉じゃないだろ？と思いつつ、アドルバードは抗議すべく振り返つてリノルアースを見下ろす。

「そんなこと言つてももう一か月以上経つぞー？ いいかげん会いたくなるだろ？ やが！」

主に俺が。そんな心の声までは声にしない。

リノルアースはじつと兄の顔を見上げ、そして聞こえるか聞こえないか微妙なくらいの小さな声で呟いた。

「……まだ、たつた一ヶ月じゃないの」

その小さな呟きは確かにアドルバードの耳に届いた。

切ないような悲しいようなその呟きに、アドルバードは胸が締め付けられるような気持ちになつた。

そうか。……そうだよな。

おまえは、いつたいどれほど会えていないのだろう。どれほど声が聞けていないんだろう。会いたいからと会える距離に、その人はいない。

「 悪い」

ぎゅ、とリノルースを抱きよせて呟く。間違いなく今の自分は無神経だった。

まだ一ヶ月。そう言えるほどに、リノルースは彼を待ち続けているのだ。今までも、そしてこれからも。

「……アドルが謝ることではないと思つけど」

「 うん、でも『ごめん』

背が伸びた自分の腕の中で、リノルースは不安になるほど華奢だ。優しく髪を撫でてやると、リノルースは珍しく甘えるようにすり寄つてくる。

愛しい人が傍にいないことがこんなにも苦しいなんて。

そんなこと、今までまるで知らなかつた。

しばらく休暇をくれと言つたものの。

レイはどれほどこの状態を続ければいいのか分からなかつた。

もう一ヶ月以上が経つている。自分としては一、二週間で戻るつもりだったのに、一週間経つた頃にリノルアースから帰還拒否の手紙が送られてきた。

『アドルのために、しばらくそつしてなさい』

そう書かれた手紙は、つまりはレイのためでもあるのだろう。しかしその『しばらく』がどれほどのか、困り果てている。

怒りなんてもうどこかへ行つてしまつた。今はむしろただ会いたい。傍にいたい。そんな願望だけが身体の中で悲鳴を上げている。

「……駄目だな、本当に」

苦笑まじりに咳いて、窓の向こうを見る。

まるでもう彼の存在が身体の一部みたいだ。無いと苦しい。呼吸も上手く出来ない。声が聞きたい。あの綺麗な赤みがかつた金の髪に触れたい。欲は際限なく湧き出て、自分の心を締め付けるように渦巻いている。

これが、弟への感情なわけありますか。

これが恋であると、以前のレイならば迷いなく断言することは難しかつたかもしれない。だってこれが初めて持つ感情だから。比較するものが無いから、間違いなく恋心であると決めつけるには経験が足りなすぎる。

でも、今はもう自信を持つて言えるだろう。

例えばこれが主従関係の延長線上の想いなら。これが家族愛の派生であるのなら。

会えないという、ただそれだけでこんなに胸が苦しくなるわけがないのだ。

傍にいないという、ただそれだけで、泣きそうになることがあるなんて。そんなことを、知らなかつたのだから。

「お嬢様、お届け物ですよ」

マーサがノックをしつつ、大きな荷物を抱えて部屋に入ってきた。

「荷物？」

「ええ、リノルアース姫からですね」

添えられてたメッセージカードの差出人の名を見ながらマーサが答える。

「リノル様が？ いつたい何を……」

送られてきた箱は全部で三つほどある。その中の一番大きな箱を開けて、レイは絶句した。

「あらまあ！ なんて素敵なものでしょーー！」

マーサが嬉しそうに頬を赤く染めて歓喜の声を上げる。箱の中にはそれは美しい 深紅のドレスが入っていた。裾には透かしが施されていて、中にある紫色の布が透けるようになっている。透かしの模様は薔薇のようだ。触るだけでも高級品だと分かるそれに、レイは冷や汗を流した。

今まで、確かにドレスを着る機会は何度もあった。騎士になる前は夜会に出ることもあつたし、騎士になつてからも時折ドレスを着た。

しかしレイの好みはシンプルなもので、色合いはいつも緑や青といった地味なものだつた。それでもレイの銀髪を充分に際立たせるものだったので、注目の度合いは強かつた。赤やピンクなんて色はレイが苦手とする色だ。嫌いというわけではない。ただ自分には似合わないだろうという意識が強いだけで。

「あら、こちらは靴と、髪飾りですよー！ なんて素敵な贈り物でしょーねえー！」

そう言つてマーサがとり出した靴も髪飾りも、ドレスに合わせた逸品なのだろう。下手をすればバウアー家の年の収入の三分の一は吹き飛ぶ。

「な、何を考えて！」

どうにか冷静さを戻したレイは、添えられていたカードを開く。綺麗な字はまさしくリノルアースのものだ。

『王子の婚約者として、これを着て城へ来る』こと

その下にはあと一ヶ月後の日付が記されていた。

「何を企んでいるんだい、愛娘？」

まるで秘密の作戦を企てているような声に、リノルアースがふふ、と笑う。

「逃げられなによつにしてるの」

「何となく予想はついているけど、何がだい？」

顔をあげてリノルアースを見た父につこりと極上の笑みを向けながら、リノルアースは呟く。

「綺麗な綺麗な、月の姫を」

逃がさないと、もう宣言はすんでいるけれどね。

## 【人気投票記念小説】君と肩を並べるまで（7）

リノルアースが策略を巡らせる中 アドルバードは誰の陰謀か、他国訪問の仕事が入り、近隣の国へと旅立つた。護衛にとつけられたのはディークだ。精神的な意味で重苦しいことこの上ない。

「なんですか、殿下。氣力がありませんな」

「長いこと補充してないから。……詳しく述べておむなよ」

つつこまれるとさすがに恥ずかしい。あまりにも会えないから、元気がないなんて 本人の耳にでも入つたら憤死できる。

「そのわりには、あまり愚痴を聞いていない気がしますがね」

「……リノルはもつと長いこと我慢してるので、俺がぎやあぎやあ騒げるかよ」

ぼそ、と呟くと、ディークは目を細める。

「良い兄君ですね」

「システムって言いたいなら言え。遠まわしなのがなんか余計にむかつくな」

「厭味で言つたつもりはないんですがね。素直に成長なさつて嬉しい限りです。うちの娘はあんなんだし、息子もあんなんですし」

「人とも少し腹黒いところがあるからな、とアドルバードは言いながらディークを見る。口ではそう言いながらディークがレイトイを心から愛していることを知っている。あの姉弟が素直と言える性格ではないのは確かだが、ディークとしてはそんなことは問題ではないはずだ。

「リノルアース様もアレですから、素直なのは殿下だけですね」

「……ちょっと複雑な気分になるな、それ」

素直と言われながら、同時に単純なのだと言われている気がしてくるのは何故だろうか。

「良いことですよ、それでバランスがとれているんでショウカラ」

くすくすと笑いながら「ディークは畜生。褒められてくるとこりて良いのだろう たぶん。

「娘を頼みますよ、アドルバード様。アレは家内が残した忘れ形見なんですね」

今までアドルバードとレイの関係を茶化してばかりだったディークからは予想も出来ない言葉だった。思わず言葉を失って、ディークを見上げる。身長も随分伸びたといつのこと、ディークの背を越せる田は遠そうだ。

「……幸せにするつて、確約はできないけど」

ディークの言葉をようやく理解した脳を働かせて、アドルバードは咳く。

「それでも、俺はレイを不幸にはさせたくない。俺が出来る限りのことは何でもしたいって思うよ」

慎重に選ばれた言葉にて、ディークは田を締めた。

「それで、いいんですよ」

他国の訪問は一週間と少しで終わった。

最近では王子としての仕事も増えている。外交にも慣れたもので、着実にアドルバードは周囲が認めるほどのハウゼンランドの『後継者』になっている。

「あー……帰つたらすぐには何かパーティがあるんだっけ？ めんどくさいなあ」

馬車の中ではせせながら窓の向こうを見つめる。

時期的にパーティやら夜会の多いシーズンだ。貴族連中は張り切つて社交界に乗り出す。それはもちろん城でも例外ではなく、たまにはこうしてパーティを開くこともあるのだ。

「まあ、それも殿下の務めですからな」

「分かつてるよ……レイみたいなこと言つな」

会いたくなるだろ、という言葉は飲み込んだ。親子だからだろうか、アドルバードの言葉に対する反応がやつぱり似ている。

城に戻るとすぐに着替えさせられた。

パーティが始まるまではや秒読み状態で、リノルアースは珍しく青いドレスを着て準備するアドルバードを待っていた。リノルアースが着るドレスはいつも薄紅か、赤か 暖色系の色を好む。もちろん青いドレスでも充分に可愛らしいのだが、どうしたものかとアドルバードは少し心配になつた。

たぶん、本人に聞いても「なんでもないわ。気分よ氣分」とさらりとかわされるだけだろう。

用意されていた臍脂の上下を着て、リノルアースと並ぶ。また少し背が伸びたのだろうか。ヒールを履いているはずのリノルアースが随分と小さい。最近節々が痛いのは成長痛のせいだと言われたので、身長は確実に伸びているはずだ。あまり実感はないけれど。

「……ふうん。牛乳の効果はあつたのかしら」

アドルバードをまじまじと見つめてリノルアースが呟く。

「おまえな。他に何か言葉はないのか。なんどよりによつてソレなんだ」

「背の高いアドルってなんか生意気だわ。小さいままで良かつたのに」

不吉なことを言つなよ、とアドルバードは呟きつつ、華奢な妹の

手を取る。

二人並んで会場まで行くと、それは人々の注目を集めた。特に背の伸びたアドルバードは貴族の令嬢達から熱い視線を浴びることになつて、ようやくリノルアースの苦労を知ることになる。なるほど、惚れてもいな相手から熱烈なアピールをもらつてもあんまり嬉しくない。

一曲リノルアースと踊つた後で、不機嫌そうな妹を不思議に思つて問いただす。

「どうしたんだよ、おまえこいついう場では作り笑いを欠かさないくせに」

「どういうイメージなの、それ。……まったく、来いつて言つたのに、遅刻かしら」

後半はアドルバードにはまるで理解できない咳きだつた。誰のこじだらうと首を傾げるしかない。リノルアースは不機嫌そうにしたまま「まさかすっぽかすつもりかしら」と苛立ちながら咳く。

「おい、いつたい何の話」

アドルバードがさらに問い詰めようとしたその時だつた。

ざわ、と周囲の空気がざわめく。

どうしたものかと顔を上げ、周囲の注目を集めている先に目を向けて 息を呑んだ。

まだ長いとは言えない銀の髪を綺麗に結いあげ、目を奪われるほどに鮮やかな深紅のドレスを着た長身の女性が、少し息を切らした様子でそこにいた。

ドレスと同じ深紅の髪飾りは銀の髪を温かみある色へと変えていた。白い肌に深紅の色が映えている。情熱的な赤なのに、何故か彼女が身に纏うと朝焼けのような優しさと胸を打つ神々しい印象を持つ。

見間違えるはずがない。

どんな姿をしていても、どれほどの間合っていなくとも。自分が、彼女を人混みの中で見つけられないわけがない。

「　　レイ」

感嘆のため息とともに呟かれた名前は、ひどく懐かしくて甘い響きだった。

## 【人気投票記念小説】君と肩を並べるまで（8）

周囲の田など気にせずに、気がつけば駆けだしていた。

一人残されたリノルアースは苦笑しつつ兄の背中を見送った。

会いたかった会いたかった会いたかった会いたかった！

彼女の周囲に集まり始めた男達が邪魔で仕方ない。触るなど大声で叫びたいけれど、身体はそれよりも正直に彼女のもとへと急いだ。大きな会場をこの時ほど恨めしく思ったことはない。

彼女は少し会場を見回して、そしてすぐにこちらと目があつた。その瞬間に照れたように、嬉しそうに微笑むものだから相変わらず始末に悪い。

「失礼」

ダンスに連れ出そうと集まる男の群れの中からすっと抜け出す。ドレスの裾がふわりと揺れて綺麗だ。

「レイ！」

それほど長い距離ではなかつたはずなのに、千里も走つたような気がした。

アドル様、とその唇が名前を呴く前に、強引に引き寄せた。

「っ！」

腕の中の彼女が息を呑む。

周囲が騒がしいことなんて気にならない。騒ぎたければ騒げばいい。

「アド、アドル様！」

慌てたように腕の中でレイがもがく。

そんなささやかな抵抗すら許さないと強く抱きしめていると、レイも觀念したように力を抜いた。

「……移動しましょう、それに、顔を見せてください」

そう諭されるように言われて、そう言えば顔はあまり見ていないかつたな、とようやくレイを解放する。周囲から集まる視線が痛いくらいだが、それはもう無視しよう。

「エスコートの仕方もお忘れですか？」アドルバード様？  
何なら私がエスコートしますけど。

レイが苦笑しながらそう言う。見惚れていたなんて、そんな正直に言つことも出来なくて誤魔化すように恭しく それこそ花嫁を連れ出すように、病める時も健やかなる時も一緒になんて誓いに行くように そつと手を差し出す。

一人が会場から堂々と抜け出したその後で大きな騒ぎとなつたことは言つまでもない。

近くの部屋まで移動し バルコニーに出ると、少し冷たい風が頬を撫でた。

「寒くないか？ 上着貸そうか？」

ドレスはどうも寒そうに見えて仕方ない。実際に着てみるとそうじゃないといつことは分かるけれども。

「平気ですよ。……久しぶりにコルセットで締め付けられているので少々辛いところですが」

「……どこかに座った方がいい？」

コルセットで締め付けられている苦しみを充分に知るだけに、レイに対する気遣いも増えるというものだ。

「大丈夫です。お久しぶりです、アドルバード様」

ふわりと微笑みながらそう言つレイに、また抱きしめたい衝動に駆られて必死で堪える。

「久しぶり。……それと、ごめん、かな」

「それは いらっしゃい、ですね。お互い様なので水に流しましょう？」

喧嘩別れしたことなどないので、お互に「ぎこちないのは仕方ないだろ?」。レイの方から出された提案に、アドルバードも素直に飲む。そもそもお互いにもう怒りなんてないから喧嘩なんて続ける意味がない。

「これだけ会わなかつたのつて、初めて　かな」

物心つく前からレイは傍にいた。小さな頃から彼女がいないと手に負えないほどに泣き喚くことが多かつたらしいので、数日と置かずにつれていた。

「アルシザスの誘拐事件以来ですね。あの時は今よりずっと短い期間でしたけど」

「……懐かしいな。会いたかつたけど、少し冷静にもなれたかも」傍にいることが当たり前過ぎて見えなくなっていたものが確かにあつた。離れたことで見つけられた想いもあつた。

たぶん　リノルアースが伝えたかったのは、そういうことなのだろう。

「そう、ですね。再確認できました」

苦笑しながら眩くレイを見下ろしながら、アドルバードが意地悪げに笑う。

「　何を?」

「……気づいていらっしゃるよつなので、言いません」

レイは照れたように顔を逸らす。ズルイ逃げ方だなあ、と苦笑しながら、今まで気づかなかつた田線の違いに気づく。

「……あれ?」

慣れないドレスを着ているせいで、レイは踵の低い靴を履いている。実際の身長に限りなく近い状態なのだろう。

「どうしました?」

じつと見つめていると、レイが不思議そうにこちらを見る。お互に真つ直ぐに見つめあって、いつもはない違和感に気づいた。

「……もしかして、俺、レイのこと抜いた?」

「……そのようですね」

レイも驚いているのか、呆然として呟く。本当にわずかな差だか、レイを見下ろしている。肩のラインはほとんど差がないようだから

たぶん一、二センチくらいの差なのだろうが。

「あ、じゃあこれからこいつでもキスでき

思わず本音が零れると、レイが冷ややかな目で睨んできた。思わ

ず本音の途切れる。

「……ご不満ですか、レイさん」

「そりやつて女心が理解できないから今回のようなことになるんですけどよ。いつでもってなんですかいつでもって。そんなに安いものですか。そうですか。そんなに安い女ですか。ええ別にかまいませんけど私は」

「ええええええいや、違う。違うから……全然そういう意味じゃないから!! た、ただ今までよりも少しやりやすくなるなあってそれだけで!!」

「やりやすいですか。へえ」

「ああああああの! 誤解してません! ? なんか激しく誤解してません! ?」

心なしか一步距離が開いた気がするんすけれども……慌てて弁解をしているとレイは呆れたように笑う。

「……また喧嘩しても仕方ありませんね」

どうやら本格的に機嫌を損ねずに済んだようだ、ほつと安堵する。逃がさないようとにレイの腕を掴み引き寄せるが、困惑したように見つめられた。そういう顔をされるといふこと弱いので気づかないふりをした。

「別に安いとかそういうんじゃないから。……ただ主従だったのが恋人だって大声で言えるようになれたのが嬉しいってこと」

「……アドル様が妙なことにこだわらなければもっと早くにこいつなつていたんだと思いますけど」

「そこは言わない約束……」

こつまでも根に持たれ続けるんだろうかとアドルバードは肩を落

とす。まだあまりない身長差で、こうして密着していくと相当近い。そんなことに今さら気づいて動搖した。

「……後悔は、しませんか？」

レイは腕の中で静かに呟いた。

「後悔？ なんで？」

「ハウゼンランドは一夫多妻制ではありませんよ。私を選んでしまつたらそれきりです。本当に、本当に、私でいいんですか？」  
レイの声は、今ならまだ戻れると言っているようだ。戻つてほしいと彼女は思つていいのだろうか。

「何度も言わせる。俺はおまえ以外はいらない」

「ずつとずつと昔から それこそ彼女がこちらを向いてくれる前から、ただ一人を見て来たのに。それを今さらになつて、やつと手に入つたその時になつて手放すなんてありえない。

「俺は今までずっとおまえ一人つて決めていたんだぞ。それが今さら覆ると思うか？」

抱きしめる腕に力を込めるとい、レイは安堵したように息を吐いた。

「覆さないでください。これからも」

まだ少し怯えたように背中に腕を回るレイがいとおしかった。  
身分の差を彼女でも不安に思つただろうか。剣だけでは戦えない  
ような場所にまで連れ出すから。

「……約束する」

ぎゅ、と強く抱きしめて、こちらの体温も想いも何もかも こうして触れ合う肌から云わればいいのにと思う。

それからどれほどの時が経つただろう。

かつてこれほどまでに甘い時間が一人の間に流れたことはあっただろうか。いや、あるわけがない。

「…………レイ」

小さく名前を呼ぶと、レイは顔を上げてなんですか、と答える。

「えー……と。その…………」

「なんですか」

口籠もるアドルバードに苛立つたのか呆れたのか、レイはまた同じ問い合わせを繰り返す。

「…………その…………キス、してもいい?」

沈黙が重い。

しかしながらついによつやっと、恋人同士になつたのだからもちろんアドルバードとしてはそういう欲も湧いてくるわけで。加えてここ数か月も会えない日々が続いたのでレイ欠乏症はかなり末期だ。

ふう、とレイが呆れたようにため息を吐く。アドルバードはその反応にびっくり、と呟えた。レイを怒らせることに關しては今回のことで完全にトラウマだ。

「アドル様」

「は、はいっ！？」

す、とレイの手がアドルバードの頬まで伸びてくる。ひんやりとしたその手のぬくもりに、あまり長いこと外に居すぎただろうかと思つた。

「ここは、確認をとるといいではないと思こますけど？」

そのセリフが最後まで言われるか否か 少なくとも、その言葉にアドルバードは言葉を返せなかつた。

唇に重なる熱に、一瞬だけ驚かされる。そしてすぐにそれを認識すると、放さないようにとレイの頭を支える。冷たい唇が熱を帯び、お互いが同じ温度になるまで　『初めて』の恋人としてのキスは甘く甘く脳髄を刺激した。

かくして王子の十八歳の誕生日を前に、ハウゼンラントではその恋人のことで騒ぎになつた。

それが王子の騎士であり、アヴィランテの女領主になつた人であると噂が広がるまで、そう長い時間はかからなかつた。

【人気投票記念小説】君と肩を並べるまで（∞）（後書き）

これで人気投票記念の小説も終了です！！

今のところその他の番外編を書く予定はありませんが、いつかリノルメインの本編完結後の話は書きたいなーと田舎論んでおります（笑）

ご愛読ありがとうございました。

ご感想など、一言でもいただけると幸いです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8060d/>

---

可憐な王子の騒がしい恋の嵐

2011年5月8日14時10分発行